

本田窯跡・千本崎城跡

2024

鳥根県教育委員会

序

本書は、島根県教育委員会が国土交通省中国地方整備局浜田河川国道事務所から委託を受けて、令和4（2022）年度から令和5（2023）年度に実施した一級河川江の川直轄河川改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の成果をまとめたものです。

本書で報告する本田窯跡と千本崎城跡は、江津市松川町に位置しています。本田窯跡は、明治から昭和にかけて操業された石見焼の窯跡とその作業場跡です。調査では石見焼の陶土を得るための大規模な施設が検出され、近代の石見焼窯場での作業の一端があきらかになりました。また、千本崎城跡の調査では中世に遡る古墓の可能性がうかがわれる遺物が出土しました。

本書が、この地域の歴史を解明していくための基礎資料として広く活用されることを願っております

最後になりましたが、発掘調査および本書の作成にあたりご協力をいただきました江津市太田・八神地区の方々をはじめ、国土交通省中国地方整備局浜田河川国道事務所ならびに関係の皆様には厚くお礼申し上げます。

令和6年3月

島根県教育委員会

教育長 野津 建二

例 言

1. 本書は国土交通省中国地方整備局浜田河川国道事務所から委託を受けて、鳥根県教育委員会が令和4・5年度に実施した一級河川江の川直轄河川改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の成果である。
2. 本報告書の事業年度及び発掘調査対象遺跡は下記のとおりである。

令和4年度 発掘調査 本田窯跡（江津市松川町170-2ほか）2,490㎡
千本崎城跡（江津市松川町584-7ほか）690㎡

令和5年度 発掘調査 桜谷田鉦跡（江津市松川町170ほか）この内、本田窯跡210㎡
整理等作業・報告書作成 本田窯跡・千本崎城跡
3. 発掘調査は、鳥根県教育庁埋蔵文化財調査センターが実施し、令和4年度は阿部賢治・鈴木七奈・林 健亮が、令和5年度は阿部賢治・稲田陽介・神柱靖彦が担当した。
4. 発掘調査作業（安全管理、発掘作業員の雇用、機械による掘削、測量など）については、次の機関に委託した。

令和4年度 株式会社大畑建設（益田市大谷町）
令和5年度 トーフエンジニアリング株式会社（出雲市萩村町）
5. 発掘調査および報告書作成にあたっては、次の方々から御指導をいただいた（五十音順、肩書は当時）。

高屋茂雄（鳥根県立八雲立つ風土記の丘所長）、中村唯史（鳥根県立三瓶自然館企画情報調整幹）
6. 発掘調査および報告書作成に際しては、次の方々、関係機関から御協力、御助言をいただいた（順不同、所属・肩書は当時）。

角田徳幸（雲南市教育委員会）、榎原博英（浜田市教育委員会）、佐藤亞聖（滋賀県立大学教授）、
盆子原俊成（江津市教育委員会）、持田直人（江津市教育委員会）、松平地域コミュニティ交流センター、江津市事業推進課
7. 出土鉄器の保存処理は次の機関に委託した。

令和5年度 財団法人大阪市文化財保存協会
8. 本書に掲載した遺構・遺物の写真は阿部・稲田・神柱・鈴木・林が撮影した。また、掲載した遺構図・遺物実測図の作成・浄書は各調査員などがおこなったほか、出土遺物の分類・鑑定などは埋蔵文化財調査センター、文化財課世界遺産室・古代文化センター、古代出雲歴史博物館職員の協力を得た。
9. 本書は第3章第3・6節、第5章第2・3節を阿部が、それ以外を林が執筆した。編集は埋蔵文化財調査センター職員の協力を得て林がおこなった。
10. 本書に掲載した遺物および実測図・写真などの資料は、鳥根県教育庁埋蔵文化財調査センター（鳥根県松江市打出町33番地）にて保管している。
11. 本書の編集にあたっては、DTP方式を採用した。

凡 例

- 1 本書で示す方位は座標北を使用し、座標値は世界測地系（平面直角座標第Ⅲ系）にもとづく。
- 2 本書で示す標高値はメートル表記である。標高値は東京湾平均海面（T.P.）値を使用した。
- 3 本書で使用した第2図は国土交通省浜田河川国道事務所が作成した事業個所図を、第3・161図は同計画平面図1/1,000を、第6図は国土調査5万分の1都道府県土地分類基本調査地形分類図（温泉津、江津・浜田、川本・大朝）を、第7図は国土地理院の1/25,000地図（江津、浅利、都野津、川戸）を、第171図は江津市都市計画図14、1/2,500を使用して作成したものである。
- 4 本書に記載する土層は『新版 標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所 色票監修）にしたがって記載した。
- 5 本書で使用した遺構略記号は以下のとおりである。
SB：建物跡 SD：溝状遺構 SK：土坑 SX：性格不明遺構 P：柱穴
- 6 本書で使用した挿図の縮尺は基本的に以下の縮尺としている。
遺構配置図 1/120・1/160・1/200・1/300・1/500
遺構実測図 1/40・1/60
遺物実測図 陶器・磁器・土器・窯道具類・瓦類：1/4・1/6・1/8、石製品：1/4・1/8
金属器：1/4、古銭1/1
- 7 石見焼の年代観・産地等については下記の文献を参考にした。
 - ・島根県古代文化センター2017『近世・近代の石見焼の研究』
- 8 石見焼窯場での道具や施設、作業の名称については下記の文献を参考にした。
 - ・石見陶器工業協同組合2000『伝統工芸品「石見焼」手引書』
 - ・江津市文化財研究会1993『石見潟』第十三号
- 9 陶磁器については下記の文献を参考にした。
 - ・成瀬晃司1997「江戸遺跡出土資料による陶磁器・皿の変遷-文様・銘款を中心に-」『東京大学校内遺跡調査研究年報1 1996年度』
 - ・瀬戸市文化振興財団2021『文明開花とせとやき-近代前期の瀬戸窯と美濃窯-』
 - ・瀬戸市文化振興財団2022『戦時下のせとやき-近代後期の瀬戸窯と美濃窯-』
 - ・渡辺芳郎2011「窯跡資料からわかること-近世薩摩焼の焼成技術-」『やきものづくりの考古学-鹿児島県の縄文土器から薩摩焼まで-』鹿児島大学総合研究博物館
 - ・土岐津町誌編纂委員会1999『土岐津町誌 史料編』
- 10 註は各節ごとに連番を振り、節末に配置した。

本文目次

第1章	調査の経過	
第1節	調査に至る経緯	1
第2節	発掘調査の経過	4
第3節	調査体制	9
第2章	遺跡の位置と環境	
第1節	地理的環境	10
第2節	歴史的環境	11
第3章	本田窯跡の発掘調査	
第1節	調査の方法	17
第2節	基本層序	19
第3節	1区の調査の成果	19
第4節	2区の調査の成果	51
第5節	3区の調査の成果	117
第6節	4区の調査の成果	124
第7節	5区の調査の成果	132
第8節	6区の調査の成果	135
第9節	小結	162
第4章	千本崎城跡の発掘調査	
第1節	調査の方法	167
第2節	過去の調査	171
第3節	基本層序	171
第4節	調査の成果	171
第5章	総括	
第1節	本田窯跡の名称・聞き取り内容について	175
第2節	検出遺構からみる本田窯跡の変遷	177
第3節	本田窯跡の陶器について	182
第4節	千本崎城跡の調査成果	192

挿図目次

第1図	本田窯跡・千本崎城跡の位置	1
第2図	江の川水系河川整備計画にもとづく事業個所	2
第3図	試掘トレンチの位置と想定される遺跡の範囲	4
第4図	試掘トレンチ土層	5
第5図	試掘トレンチ出土遺物	6
第6図	遺跡周辺の地形分類	10
第7図	本田窯跡・千本崎城跡と周辺の遺跡	12
第8図	本田窯跡の調査区配置	18
第9図	1区1面土層断面図	21
第10図	1区1面遺構配置図	22
第11図	SB01実測図	23
第12図	SB01土層断面図	24
第13図	SB01・SK01出土遺物実測図	24
第14図	SB06実測図	25
第15図	SB06出土遺物実測図	25
第16図	SK02・SK04実測図	26
第17図	SK02・SK04出土遺物実測図	26
第18図	1区2面SX07実測図	26
第19図	1区1面出土遺物実測図(1)	27
第20図	1区1面出土遺物実測図(2)	28
第21図	1区2面遺構配置図	30
第22図	1区2面土層断面図(1)	31
第23図	1区2面土層断面図(2)	32
第24図	SB03実測図	34
第25図	SB03出土遺物実測図	34
第26図	1区2面土層断面図(3)	35
第27図	SB02実測図	36
第28図	SX03実測図	37
第29図	1号炉実測図	37
第30図	SB02出土遺物実測図	38
第31図	SB05実測図	39
第32図	SB05出土遺物実測図	40
第33図	SX02実測図	41
第34図	SX02およびSX02下出土遺物実測図(1)	41
第35図	SX02下出土遺物実測図(2)	42
第36図	SX02下出土遺物実測図(3)	43
第37図	1区2面下遺構配置図	44
第38図	1区2面石垣実測図	45
第39図	1区2面下石垣実測図	45
第40図	石垣1外周出土遺物実測図	46
第41図	石垣2外周出土遺物実測図	47
第42図	1区2面出土遺物実測図(1)	48
第43図	1区2面出土遺物実測図(2)	49
第44図	1区出土金属器実測図	50
第45図	2区拡張1トレンチ南壁土層断面図	51
第46図	2区中央トレンチ土層断面図	52
第47図	2区拡張2(南壁)土層断面図	53

第 48 図	2 区拡張 2 (北壁) 土層断面図	54
第 49 図	2 区 1 面遺構配置図	55
第 50 図	SB04 実測図	56
第 51 図	SB04 周辺の遺構実測図	57
第 52 図	SB04 出土遺物実測図	57
第 53 図	2 号倉実測図	58
第 54 図	拡張 1 出土遺物実測図	58
第 55 図	拡張 2 出土遺物実測図 (1)	59
第 56 図	拡張 2 出土遺物実測図 (2)	60
第 57 図	2 区 2 面遺構配置図	62
第 58 図	白色粘土列周辺出土遺物実測図	63
第 59 図	南水竈施設西側の遺構実測図	64
第 60 図	2 区南中央トレンチ付近遺構実測図	65
第 61 図	P8 出土遺物実測図	66
第 62 図	コンクリート基礎 1 実測図	66
第 63 図	コンクリート基礎実測図	67
第 64 図	SX01 実測図	68
第 65 図	SX01 出土陶器実測図	69
第 66 図	SX01 出土盛鉢実測図	70
第 67 図	SX01 出土焼台実測図	71
第 68 図	コンクリート水路・集水升実測図	72
第 69 図	コンクリート水路・集水升周辺出土遺物実測図	73
第 70 図	南水竈施設土層図	74
第 71 図	南水竈中央立立面図	75
第 72 図	南水竈南東立立面図	75
第 73 図	南水竈北・南西立立面図	76
第 74 図	南水竈排水升土層堆積状況	77
第 75 図	南水竈排水升立立面図	78
第 76 図	南水竈施設出土遺物実測図	80
第 77 図	2 区 2 面地形測量図	81
第 78 図	2 区 3 面遺構配置図	83
第 79 図	2 区南コンクリート基礎 2 実測図	84
第 80 図	2 面下包含層出土遺物実測図 (1)	85
第 81 図	2 面下包含層出土遺物実測図 (2)	86
第 82 図	SB07 実測図	87
第 83 図	SB07 出土遺物実測図	88
第 84 図	南窯垣 1 ~ 4 実測図	89
第 85 図	二次造成土出土遺物実測図	90
第 86 図	一次造成土出土遺物実測図 (1)	92
第 87 図	一次造成土出土遺物実測図 (2)	94
第 88 図	北水竈施設実測図	95
第 89 図	北水竈施設排水升実測図 (1)	96
第 90 図	北水竈施設排水升実測図 (2)	97
第 91 図	2 区 4 面遺構配置図	98
第 92 図	2 区北土層断面図	99
第 93 図	石垣実測図	100
第 94 図	石垣下出土遺物実測図	101
第 95 図	SK40 実測図	102
第 96 図	SK40 出土遺物実測図 (1)	103
第 97 図	SK40 出土遺物実測図 (2)	103

第 98 図	SB08 と南水竈周辺の遺構実測図	104
第 99 図	2 区南 SK42 遺物出土状況実測図	105
第 100 図	SD13・SK41・43 出土遺物実測図	105
第 101 図	SK41・42 出土レンガ実測図	106
第 102 図	2 区 4 面地形測量図	107
第 103 図	2 区出土遺物実測図 (1)	108
第 104 図	2 区出土遺物実測図 (2)	109
第 105 図	2 区出土遺物実測図 (3)	110
第 106 図	2 区出土遺物実測図 (4)	111
第 107 図	2 区出土甕実測図	112
第 108 図	2 区出土瓦実測図	114
第 109 図	2 区出土金属器・木製品実測図	115
第 110 図	3 区遺構配置図	117
第 111 図	3 区西壁土層断面図	118
第 112 図	3 区北壁土層断面図	119
第 113 図	3 区平坦面実測図	120
第 114 図	3 区出土陶器実測図	121
第 115 図	3 区出土窯道具類実測図	122
第 116 図	3 区磁器・ガラス製品・瓦類実測図	123
第 117 図	4 区全体図	125
第 118 図	登窯平面図	126
第 119 図	登窯立面図・断面図	127
第 120 図	登窯平面図・土層断面図	128
第 121 図	登窯焼成室立面図	128
第 122 図	8 号炉実測図	129
第 123 図	4 区出土金属器実測図	129
第 124 図	4 区出土遺物実測図	130
第 125 図	5 区遺物出土状況・土層断面図	132
第 126 図	5 区実測図	133
第 127 図	5 区出土遺物実測図	134
第 128 図	6 区トレンチ 1 北壁土層断面図	135
第 129 図	6 区 1 面遺構配置図	136
第 130 図	SB04 新旧実測図	137
第 131 図	SB04 出土遺物実測図	138
第 132 図	コンクリート基礎実測図	139
第 133 図	基礎実測図	139
第 134 図	水竈施設土層断面図	140
第 135 図	水竈施設実測図	141
第 136 図	水竈施設 11 出土遺物実測図	142
第 137 図	水竈施設 13 出土遺物実測図	143
第 138 図	水竈施設 13 にもなう溜枳壘出土遺物実測図	144
第 139 図	SK50・52・53 実測図	145
第 140 図	SK50～53 出土遺物実測図	146
第 141 図	SK52 出土遺物実測図	147
第 142 図	道路 (南側) 実測図	148
第 143 図	道路 (北側) 実測図	149
第 144 図	土管列出土遺物実測図	150
第 145 図	石垣 7・コンクリート水路実測図	151
第 146 図	1・6・2 区 1 面遺構配置図	152
第 147 図	6 区 2 面遺構配置図	153

第 148 図	SB07 実測図	154
第 149 図	SK51 実測図	154
第 150 図	石垣 2 実測図	155
第 151 図	石垣 5 (南側) 実測図	155
第 152 図	石垣 5 (北側) 実測図	156
第 153 図	石垣 5・6、道路およびその下層出土遺物実測図	157
第 154 図	6 区包含層出土遺物実測図 (1)	159
第 155 図	6 区包含層出土遺物実測図 (2)	160
第 156 図	6 区包含層出土遺物実測図 (3)	161
第 157 図	6 区包含層出土瓦実測図 (1)	163
第 158 図	6 区包含層出土瓦実測図 (2)	164
第 159 図	6 区包含層出土土管実測図	165
第 160 図	6 区包含層出土金属器実測図	165
第 161 図	1 区・6 区・2 区 2 面遺構配置図	166
第 162 図	千本崎城跡調査前地形測量図	168
第 163 図	土層堆積状況	169
第 164 図	遺構配置図	170
第 165 図	SK01 実測図	171
第 166 図	出土遺物実測図 (1)	172
第 167 図	出土遺物実測図 (2)	173
第 168 図	古銭実測図	174
第 169 図	本田窯跡製品一覧	183
第 170 図	本田窯跡窯道具一覧	186
第 171 図	本田窯跡出土甕の変遷	189
第 172 図	太田地区の石塔および関係遺跡位置図	192
第 173 図	城の首の墓塔群燈籠実測図	193
第 174 図	城の首の墓塔群石塔類実測図	193

表目次

第 1 表	文化財保護法にもとづく提出書類	3
第 2 表	本田窯跡の遺構の消長	177
第 3 表	甕寸法	182
第 4 表	壺寸法	182
第 5 表	摺鉢寸法	184
第 6 表	焼台 (貼付足) 寸法	187
第 7 表	焼台 (切込足) 寸法	187
第 8 表	本田窯跡の遺構の消長と出土甕の相関	189
第 9 表	試掘調査出土遺物観察表	198
第 10 表	本田窯跡出土遺物観察表	198
第 11 表	千本崎城跡出土土師器・陶磁器・ガラス・石材観察表	212
第 12 表	千本崎城跡出土古銭観察表	212

本文中写真目次

写真 1	城の首の墓塔群近景	194
写真 2	城の首の墓塔群 宝篋印塔屋根・相輪	194
写真 3	城の首の墓塔群 宝篋印塔相輪	194
写真 4	千本崎地藏堂層塔 (仮移転後の状況)	195

写真図版目次

- 図版 1 本田窯跡全景(空撮)
本田窯跡全景(空撮 北から)
- 図版 2 試掘調査出土遺物
- 図版 3 1区 1面 SB01 全景(南から)
SB01H・F 土層(北から)、b・b' 土層(北から)
SK01 半截(南東から)、完掘状況(東から)
- 図版 4 1区 SK02 土層断面・完掘状況(北東から)
1区 SX07 土層断面(東から)
SB06 近景(北から)
SK03 半截状況(東から)
SK04 完掘状況(東から)
SB06 全景(北西から)
SB06 東側(北西から)
- 図版 5 1区 東壁土層堆積状況(西から)
SB03 全景(南西から)
1区 2面遺構全景(南から)
北壁土層堆積状況(南から)
SB02 土層状況(南東から)
- 図版 6 1区 SB02 完掘状況(南から)
SX03(北東から)
1区 P1・2 半截状況・完掘状況(南から)
1号炉検出状況(南から)
1号炉土層断面(南から)
SB05 完掘状況(南から・西から)
- 図版 7 1区 SB05 焼台(北西から)
SX02 検出状況(北から)
1区 2面石垣完掘状況(東から)
SX02 瓦出土状況(北から)
2面石垣土層堆積状況(南から)
完掘状況(北から)
- 図版 8 1区 2面下石垣完掘状況(西から・南から)
1区 2面完掘状況(西から)
2面下石垣完掘状況(南東から)
- 図版 9 1区 SB01・SK01 出土遺物
1区 SK02・04 出土遺物
1区 1面出土磁器・陶器・土製品
1区 SB06 出土土管
- 図版 10 1区 1面出土陶器・窯道具・土管等
- 図版 11 1区 陶器甕
1区 陶器・窯道具
- 図版 12 1区 SB02 出土遺物
- 1区 SB02 出土遺物
- 1区 SX02 出土遺物
- 図版 13 1区 SB05 出土遺物
1区 SB05 出土遺物
- 図版 14 1区 SX02 出土瓦(1)
- 図版 15 1区 SX02 出土瓦(2)
- 1区 石垣1外周出土磁器・陶器
- 図版 16 1区 石垣1外周出土窯道具・瓦(1)
1区 石垣2外周出土瓦(2)
- 図版 17 1区 陶器・窯道具
- 図版 18 1区 窯道具・陶器・丸瓦
- 図版 19 1区 石製品・五輪塔火輪
1区 金属製品
- 図版 20 2区 調査前近景(南から)
中央トレンチ(南から)
SB04 土層断面
外側の遺構(北西から)
中央トレンチ拡張1(南から)
SB04 完掘状況(南から)
2号炉土層断面(東から)
2号炉完掘状況(南東から)
- 図版 21 2区 3号炉検出状況(南から)
完掘状況(北から)
2区 コンクリート基礎1土層断面(南西
から・東から)
南水簸施設西側 P3・P5 土層断面(東から)
コンクリート基礎1 検出状況(北から)
- 図版 22 2区 SX01 土層断面(西から)
SX01 全景(北西から)
2区 コンクリート水路(南から)
土層(東から)
拡張2 白色粘土列(北西から)
南水簸施設土層断面中央升(東から)
北升(西から)
- 図版 23 2区 南水簸南東升土層(南から)
北升排水槽土層(北から)
2区 南水簸施設近景(南東から)
北升完掘状況(西から)
南西升埋壘土層断面(南から)
北升埋壘完掘(西から)

- 南水廠施設南側土層断面(西から)
- 図版 24 2区 南水廠施設完掘状況(西から)
2区 拡張2コンクリート基礎2(南東から・東から)
拡張1コンクリート基礎検出状況(北から)
- 図版 25 2区 SB07 近景(南西から)
SB07とSX04(東から)
2区 SB07 地覆石近景・土層断面(南から)
SB07完掘状況(南から)
SB07雨落ち溝土層(南から)
SK47土層断面(東から)
- 図版 26 2区 一次造成窯垣(北西から・南東から)
2区 二次造成窯垣(拡張2)(東から・北東から)
二次造成窯垣(拡張1)(東から)
窯垣裏込め(西から)
2面完掘状況(南から)
- 図版 27 2区 北水廠施設南升
北升土層断面(東から)
2区 北水廠施設下層土層断面(東から)
北水廠施設排水升土層断面(東から)
北升完掘(西から)
- 図版 28 2区 北水廠施設南升完掘
排水升検出状況(北から)
2区 北石垣遺物出土状況(北から)
土層断面(西から)
北水廠施設南升付近完掘状況(南から・南東から)
- 北石垣近景(東から)
- 図版 29 2区 SB08完掘状況(南から)
2区 SK40遺物出土状況(北から)
SK41・42検出状況(北から)
SK40遺物出土状況(西から)
完掘状況(西から)
- 図版 30 2区 拡張1南壁(北から)
拡張2南壁(北東から)
2区 完掘状況近景(南から)
北水廠施設作業風景(北西から)
- 図版 31 2区 SB04出土陶器・ガラス瓶
2区 拡張1・2出土陶器・窯道具
- 図版 32 2区 拡張2出土盛鉢
白色粘土列出土陶器・盛鉢
- 図版 33 2区 白色粘土列出土瓦
P8出土陶器・窯道具、コンクリート基礎
SX01出土陶器
- 図版 34 2区 SX01出土盛鉢・窯道具
- 図版 35 2区 コンクリート水路出土陶器・窯道具
- 図版 36 2区 南水廠施設出土陶器・窯道具・石臼
コンクリート水路出土土管
2面下包含層出土陶器(1)
- 図版 37 2区 2面下包含層出土陶器(2)
- 図版 38 2区 2面下包含層出土窯道具
2区 SB07出土陶器・窯道具・レンガ
- 図版 39 2区 二次造成土出土陶器・窯道具
一次造成土出土窯滓
- 図版 40 2区 一次造成土出土陶器・窯道具(1)
ガラス瓶
- 図版 41 2区 一次造成土出土陶器・窯道具(2)
- 図版 42 2区 石垣下出土陶器・盛鉢
SK40出土陶器(1)・盛鉢
- 図版 43 2区 SK40出土陶器(2)・窯道具・レンガ
2区 SD13・SK41・42出土陶器・窯道具(1)
- 図版 44 2区 SK42出土窯道具(2)
2区 SK41・42出土レンガ
- 図版 45 2区 陶器(1)
- 図版 46 2区 陶器(2)
2区 陶器(3)
- 図版 47 2区 窯道具
2区 大甕
- 図版 48 2区 瓦・陶器(4)・金属器
- 図版 49 2区 SB04出土分銅
2区 木製品
- 図版 50 3区 調査前近景(東から・南東から)
3区 西壁土層堆積状況(東から)
- 図版 51 3区 石垣土層断面(西から)
3区 石垣完掘状況(南東から)
石垣に付着する粘土(南西から)
石垣(北列:南から)
- 図版 52 3区 陶器
- 図版 53 3区 陶器、窯道具、溶着した陶器と焼台
ガラス瓶
- 図版 54 3区 磁器、ガラス製品、瓦、不明陶製品
4区 鉄釘、かんざし、石臼
- 図版 55 4区 登窯調査前前景(南東から)
近景(南東から)
4区 登窯完掘状況(南から)
登窯調査前近景(東から)
焼成室内部(第6室、東から)
- 図版 56 4区 登窯下層土層堆積状況(東から)

- 4区 完掘状況(南西から)
- 図版 57 4区 陶器・竈道具(1)
- 4区 瓦・竈道具(2)
- 5区 瓦・竈道具
- 図版 58 5区 調査前近景(東・西から)
- 調査を断念した東半部の状況(東から)
- 土層堆積状況(西から)
- 5区 最深部の状況・完掘状況(西から)
- 図版 59 5区 陶器・竈道具
- 6区 SB04 出土竈道具・パイアル他
- コンクリート基礎、道路下出土火立
- 図版 60 6区 市道除去状況(北から)
- SB07 検出状況(北から)
- 6区 石垣 6 検出状況(東から)
- 土層堆積状況(南から)、石垣 7(東から)
- SB04 検出状況(南から、北東から)
- 図版 61 6区 SB04 北施設(北から)
- SB07 土層断面(北から)
- 6区 コンクリート基礎(東から)
- SK50 半截(北東から)
- SB07 検出状況(北西から)
- SB07 完掘状況(北東から)
- コンクリート基礎(南から)
- SK50 完掘状況(北東から)
- 図版 62 6区 水竈施設断面(東から、左より水竈
- 11・12・13)
- 6区 水竈 13 半截(東から)
- 水竈 13 溜枳(北東から)
- 水竈 11 半截状況(東から)
- SK52 検出状況(南東から)
- 図版 63 6区 SK51 半截・完掘状況(東から)
- 6区 石垣 5 南側(東から)
- 土管列半截状況(南東から)
- 6区最終遺構面(北東から)
- 図版 64 6区 SK51 土層断面(東から)
- SK53 半截状況(東から)
- 6区 SK53 半截・完掘状況(東から)
- SK51 完掘状況(東から)
- SK53 完掘状況(東から)
- 水竈 13 検出状況(東から)
- 水竈 11 検出状況(北西から)
- 図版 65 6区 水竈 11・13 出土磁器・陶器・瓦
- 竈道具・土管・金属器
- 図版 66 6区 SK50～52 出土磁器・陶器・瓦
- 竈道具
- 図版 67 6区 水竈 11 出土罫子・陶器・竈道具
- 石製品・土管列出土土管
- 6区 石垣 5～7 道路およびその下層出土
- 陶器・竈道具
- 図版 68 6区 石垣 5 道路・その下層出土瓦類
- 6区 石垣 6・7 道路・その下層出土陶器
- 図版 69 6区 包含層出土陶器(1)
- 6区 包含層出土陶器(2)
- 図版 70 6区 包含層出土陶器(3)・竈道具(1)・
- 瓦(1)
- 図版 71 6区 包含層出土陶器(4)・竈道具(2)・
- 瓦(2)
- 図版 72 6区 包含層出土瓦(3)
- 6区 包含層出土着瓦
- 図版 73 6区 包含層出土土管・金属器
- 2区 出土大甕
- 図版 74 千本崎城跡調査前近景(東から)
- T4～T6 間セクション土層堆積状況(北西
- から)
- 図版 75 T3～T5 間セクション土層堆積状況(西か
- ら)
- SK01 土層堆積状況(南西から)
- T1～T2 間セクション土層堆積状況(南西
- から)
- 図版 76 SK01 完掘状況面(南西から)
- 調査区西側完掘状況(北東から)
- 千本崎城跡調査後近景(東から)
- 調査区西側完掘状況(南西から)
- 図版 77 千本崎城跡全景(西から)
- 千本崎城跡空撮(北西から：仲程下方が調
- 査区。森原遺跡群をみる)
- 図版 78 調査区東側出土遺物(罫子・ガラス瓶・石塔)
- 調査区西側出土遺物(土師器小皿・古銭・
- 古銭X線画像)
- 図版 79 調査区西側出土越前焼片口鉢・甕(1)
- 調査区西側出土越前焼片口鉢・甕(2)

第1章 調査の経過

第1節 調査に至る経緯

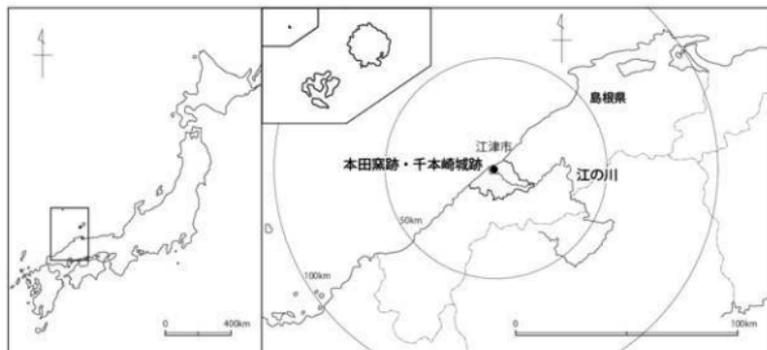
1. 事業計画の概要

一級河川江の川は、広島県北広島町の阿佐山（標高1,218m）を源流として、中国山地を縦断して島根県江津市で日本海に注ぐ中国地方最大の河川である。広島県三次市で3つの支流を集め広大な盆地を形成するが、中・下流域は山間の狭隘部を流れるため大雨が降ると水位が一気に跳ね上がり常に洪水の危険をはらんでいる。これまでも幾度とない洪水が記録され、流域では多くの被害を受けてきた。こうした状況から1953（昭和28）年から直轄河川改修事業が開始され、1966（昭和41）年には「江の川水系工事実施基本計画」が策定された。この計画により、1974（昭和49）年に完成した土師ダムなど治水対策が進められていたが、1972（昭和47）年7月には三次盆地を中心に大きな水害が発生し未曾有の被害を出した。この水害を契機に1973（昭和48）年には基本計画が改訂され、新たな計画高水流量にもとづく治水対策が進められることになった。2007（平成19）年には「江の川水系河川整備基本方針」が策定され、2016（平成28）年には向こう20～30年間の治水事業計画として「江の川水系河川整備計画」が整備された。これらの計画にもとづき築堤の構築や水防事業が進められてきたが、2018（平成30）年と2020（令和2）年に立て続けに江の川が氾濫したことから、国土交通省中国地方整備局浜田河川国道事務所（以下国交省浜田河川事務所という）では江の川流域治水推進室を新たに設け、計画を前倒して対策事業が進められることとなった。

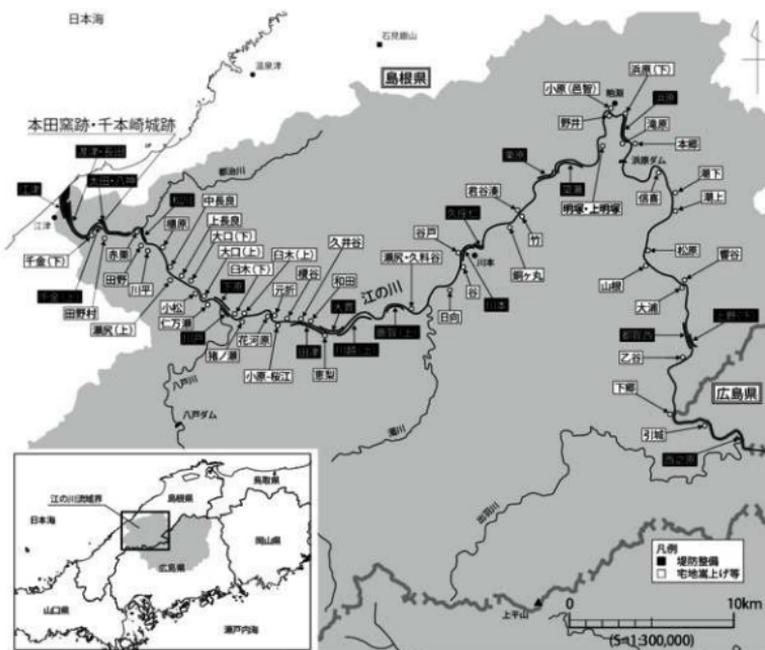
本田窯跡・千本崎城跡の所在する江津市松川町太田地区は江の川下流にあたり、現堤防高の不足を解消し、洪水による氾濫防止を目的とした堤防整備が計画されている（第2図）。

2. 埋蔵文化財保護部局への照会と調整

平成26年7月、国交省浜田河川事務所から江津市教育委員会に、江の川直轄河川改修事業予定地内（八神地区）の埋蔵文化財等の有無について照会され、それ以後、国交省浜田河川事務所、江



第1図 本田窯跡・千本崎城跡の位置



第2図 江の川水系河川整備計画にもとづく事業個所（平成28年2月時点の計画段階）

津江市教育委員会、鳥根県教育委員会の間で埋蔵文化財の取扱いについて協議された。発掘調査は平成28年度に津江市教育委員会による八神上ノ原Ⅱ遺跡を最初に、平成29年度からは鳥根県教育委員会による発掘調査が開始され、この年には森原神田川遺跡、田淵遺跡の発掘調査がおこなわれた。

太田地区に関しては、平成27年11月26日付け国中整浜管第72号で国交省浜田河川事務所から埋蔵文化財の有無について照会があったが、すでに津江市教育委員会が一部試掘調査を実施していたことから、平成28年1月7日付け鳥教文財第782号で改めて県から津江市教育委員会に照会し、平成28年1月20日付け江教社第471号で回答があった。この回答には、太田地区水田部の試掘結果が含まれていたが、この試掘調査は人力による掘削だったため、深度が造成土中に止まり下層の状況が不明だった。このため、平成28年1月26日付け鳥教文財第818号で太田地区水田部について改めて試掘が必要なこと、周知の埋蔵文化財包蔵地（千本崎城跡）が所在することが回答された。この間の経緯については報告書2（鳥根県2020）で詳しく説明している。

埋蔵文化財調査センターでは平成29年10月16日から太田地区の水田部で試掘確認調査（第3図H29T-1～4）を実施した。この調査では遺構・遺物は検出されず遺跡はないという判断をしていたが、東側の丘陵上には千本崎城跡が周知の埋蔵文化財包蔵地として知られ、同様に石丸焼の窯跡（後に本田窯跡として調査される本遺跡）についても一部が工事区域内に含まれることが判明した。本田窯跡・千本崎城跡の取り扱いについては、国交省浜田河川事務所や津江市教育委員会と協議を重ねながら調整が進められた。文化財保護法にもとづく提出書類は第1表にまとめている。

第1表 文化財保護法にもとづく提出書類

埋蔵文化財発露の通知(法第94条)									
文書番号/日付	種類及び名称	所在地	土地所有者	面積(m ²)	原因	提出者	期間	報告文書番号/日付	主な報告事項
国中整営第134号 令和4年3月3日	生産遺跡 本田窯跡	江津市松川町 170-2番	国土交通省	2,490	河川改修	国土交通省浜田 河川国道事務所	令和5年4月1日～ 令和7年3月31日	高教文財第78号 の133号 令和4年 5月10日	発掘調査
国中整営第133号 令和4年3月3日	埋蔵跡 千本崎跡	江津市松川町 584-7番	国土交通省	690	河川改修	国土交通省浜田 河川国道事務所	令和5年4月1日～ 令和7年3月31日	高教文財第78号 の134号 令和4年 5月10日	発掘調査
遺跡発露の発見通知(法第97条)									
文書番号/日付	種類及び名称	所在地	土地所有者	面積(m ²)	原因	提出者	期間	報告文書番号/日付	主な報告事項
国中整営第198号 令和5年2月24日	生産遺跡 板谷跡	江津市松川町 171番	国土交通省	700	河川改修	国土交通省浜田 河川国道事務所	令和5年4月1日～ 令和7年3月31日	高教文財第25号 の9号 令和5年3 月3日	発掘調査
埋蔵文化財発露の報告(法第99条)									
文書番号/日付	種類及び名称	所在地	面積(m ²)	原因	報告者	担当者	期間		
高教財第77号 令和4年4月21日	生産遺跡 本田窯跡	江津市松川町 170-2番	2,490	河川改修	鳥根県教育庁埋蔵文化財調査センター所長	藤本七寿	令和4年5月9日～ 令和4年10月30日	高教文財第78号 の133号 令和4年 5月10日	発掘調査
高教財第352号 令和4年10月5日	埋蔵跡 千本崎跡	江津市松川町太田 584-7番	690	河川改修	鳥根県教育庁埋蔵文化財調査センター所長	藤本七寿	令和4年11月1日～ 令和4年12月23日	高教文財第78号 の134号 令和4年 5月10日	発掘調査
高教財第15号 令和5年5月7日	生産遺跡 板谷跡	江津市松川町 171番	700	河川改修	鳥根県教育庁埋蔵文化財調査センター所長	嶋田國介	令和5年5月29日～ 令和5年11月31日	高教文財第25号 の9号 令和5年3 月3日	発掘調査
埋蔵文化財の発見通知(法第100条第2項)									
遺跡名	文書番号/日付	物件名	出土地	発見者	土地所有者	報告場所			
本田窯跡	国中整営第134号 令和4年3月3日	陶器類・瓦葺・瓦葺・金属器・石製品・土製・漆器・銅器・瓦葺など計158箱	江津市松川町 170-2番	鳥根県教育委員会教育員 野津律二	国土交通省	高教文財第78号 の133号 令和4年 5月10日	発掘調査		
千本崎跡	国中整営第133号 令和4年3月3日	陶器・土製品・石製品・銅器 計20点	江津市松川町太田 584-7番	鳥根県教育委員会教育員 野津律二	国土交通省	高教文財第78号 の134号 令和4年 5月10日	発掘調査		
掘り出し物									
文書番号/日付	遺跡名	調査期間	面積(m ²)	提出者	提出先				
高教文財第582号 6 令和4年12月15日	本田窯跡	令和4年6月22日～ 令和4年11月18日	2,490	鳥根県教育委員会教育員 野津律二	国土交通省浜田河川国道事務所				
高教文財第582号 8 令和5年1月13日	千本崎跡	令和4年11月30日～ 令和4年12月27日	690	鳥根県教育委員会教育員 野津律二	国土交通省浜田河川国道事務所				

3. 遺跡の名称について

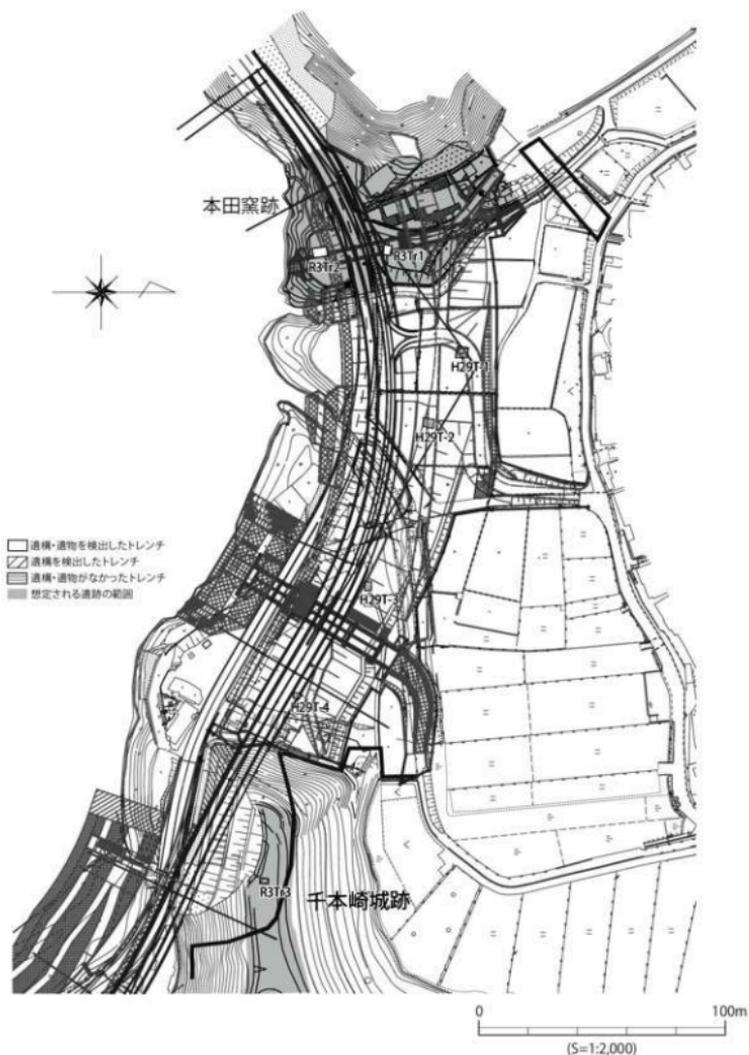
本田窯跡の位置は周知の埋蔵文化財蔵地として令和3年11月の段階でD111花田窯跡、D112西川窯跡、D113有田窯跡、D114野沢窯跡、D115湊窯跡、D116佐々木窯跡、D117井上窯跡、D118本田窯跡が重なっているほか、遺跡番号のない福宮窯跡も同位置とされた。これらは一つの石見焼窯跡に対し判明している操業者毎に別の遺跡名で登録されたため、古代文化センター2017で整理され、遺跡としては1カ所の窯跡を指すことが判明した。国交省浜田河川事務所との取り扱い協議の中で、当初は「太田地区の石見焼窯跡」と呼び、令和3年度からはD111花田窯跡と仮称して取り扱いを協議してきたが、発掘調査に必要な文化財保護法にもとづく届け出をおこなうために遺跡名の確定が急がれた。そのため令和3年11～12月に鳥根県教育委員会文化財課と江津市教育委員会社会教育課の間で検討され、D118本田窯跡として扱うという一応の決着をみた。これを受け、令和4年1月以降は文化財保護法にもとづく提出書類および国交省浜田河川事務所との協議でも本田窯跡の名称で取り扱った。

ところが、本田窯跡の発掘調査中だった令和4年8月に本田窯跡1区の下層にたたら跡が存在することがあきらかになった。遺跡地図上は本田窯跡の西約300mにD92桜谷鉦跡が存在するが、この場所には金銅児社などが存在するのみで、桜谷鉦跡の本体の所在は未確認だった。絵図等の再検討から本田窯跡下層で発見されたたたら跡が桜谷鉦跡だった可能性が高まったことから、再び県文化財課と江津市教育委員会の間で遺跡名の検討がおこなわれた。その結果、本田窯跡はD118のままとし、下層で発見された遺構をD343桜谷鉦跡として新たに埋蔵文化財蔵地として登録する。D92で登録されていた遺跡については桜谷鉦金銅児社に名称変更することとなった。

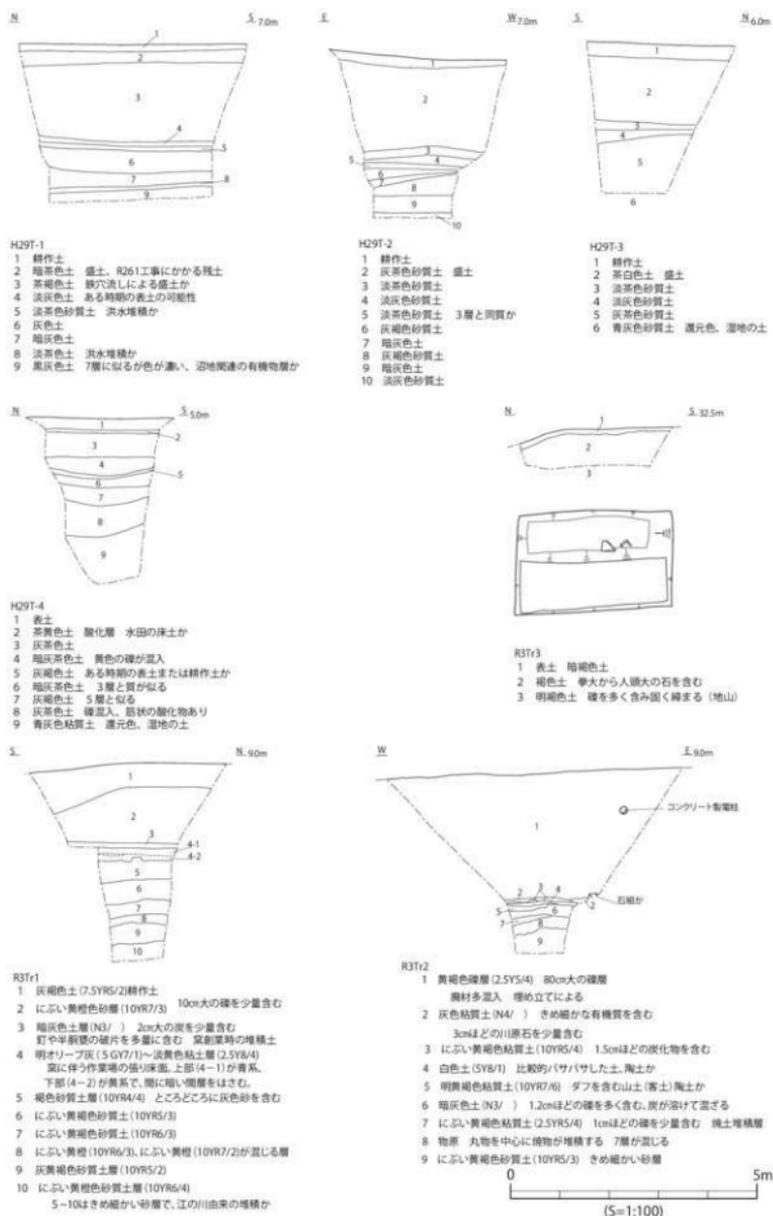
第2節 発掘調査の経過

1. 試掘確認調査

平成29年度に太田地区水田部で実施した試掘確認調査では遺構・遺物は確認されなかったが、



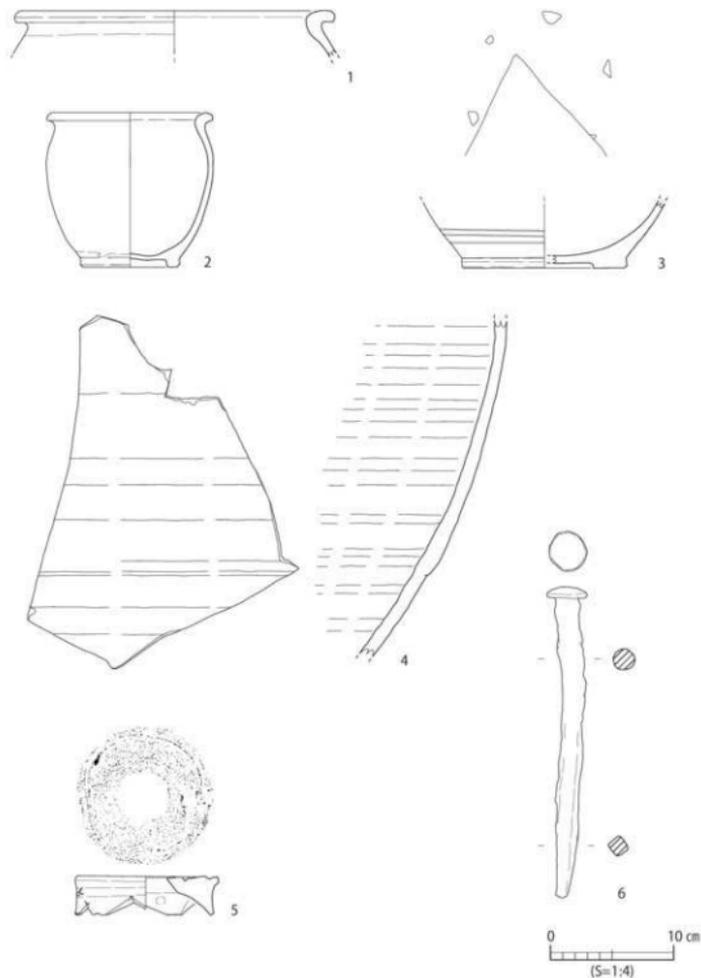
第3図 試掘トレンチの位置と想定される遺跡の範囲



第4図 試掘トレンチ層

その両側の丘陵部には周知の埋蔵文化財包蔵地（本田窯跡・千本崎城跡）があることから、令和3年11月15～17日に両遺跡の広がりを確認するために試掘確認調査を実施した（第3図）。

太田地区西側（本田窯跡周辺）では、江の川を見下ろす国道脇の空き地（R3Tr1）および市道脇の畑地（R3Tr2）にトレンチを設定した。太田地区西側の試掘ではいずれも石見焼の破片や窯道具、鉄釘などが出土（第4図）し、本田窯跡の物原や作業場が広がっていることが確認された。また、太田地区東側の丘陵部に設定したR3Tr3でも地形の改変が認められ、山城の堀切の存在が想定され



第5図 試掘トレンチ出土遺物

た。以上のことから、本田窯跡および千本崎城跡の遺跡の広がりを想定（第3図）し、調査範囲を設定した。太田地区西側の本田窯跡では約2,490㎡、太田地区東側の千本崎城跡では約690㎡が工事計画範囲に含まれ、令和4年度に発掘調査を実施することとなった。

2. 発掘作業

令和4年度は、令和2年から続く新型コロナウイルス感染症対策のため、朝・昼2回の体温測定をはじめ、休憩所の消毒、作業中以外のマスク着用などの感染防止策を実施しながら発掘作業をおこなった。

当初、5月初旬から現地での掘削を始める予定で5月23日に起工測量をおこなっていたが、発掘調査にともなう土壌汚染防止法の手続きが遅れたために着手を延期した。現地調査は6月22日の表土掘削（2区）から開始し、その後、順次1区・3区の調査を進めた。なお、この年は心配された梅雨末期の異常出水はなく、現地調査は順調に推移した。

7月26日に下層の状況を確認するため、1区中程にトレンチを設定し掘削したところ、地表下約1mから炭や鉄滓を検出した。その後、この炭や鉄滓に関係する遺構は1区のほか全面に展開することが判明し、たたら跡の遺構が存在したことが事実となった。想定外のたたら跡の発見だったため年度内に現地調査を終えることは不可能と判断し、急速国交省浜田河川事務所とその取り扱いを協議した。その結果、令和4年度の調査は本田窯跡部分にとどめ、たたら跡の遺構については次年度に調査を送ることとなった。

本田窯跡の登窯は、大部分が工事予定地外に延びているが、登窯本体のうち調査区にかかった1房分について発掘調査を実施し、8月18日に3D測量を、あわせて遺跡全体のドローンによる空撮を実施した。この日は、榊原博英氏（浜田市教育委員会）、東森晋・間野大丞（県文化財課）から作業場の機能や出土遺物について助言を得ている。また、10月11日には中村唯史氏（島根県立三辺自然館）により地質や石垣の石材、洪水堆積などについて調査指導を受けた。調査も終盤に差し掛かった10月20日には空中写真撮影を実施した。なお、1区下層に残るたたら跡の広がりについては、11月8日には角田徳幸・松尾充晶（古代文化センター）が来訪し、本田窯跡2区下層から出土した鉄滓が水流による堆積で、排滓場などの原位置ではないことを確認した。

11月10日には本田窯跡2区で発掘支援業務の実技講習会をおこなっている。

11月12日に埋蔵文化財調査センターが江津市教育委員会と共催で開催した「いにしえ倶楽部出前講座」（会場：江津市役所）で、本田窯跡の調査状況についても紹介した。さらに、11月19日には地元向けに現地を公開した。地元住民を中心に約20名が訪れ、調査の状況を見学した。

現地調査は予定よりやや遅れ、11月18日に水篭施設床面のコンクリートを破砕し、埋置されていた石見焼甕の取り上げを最後に現地での作業を終了する。同日午後完了検査を実施した。

千本崎城跡は当初は令和4年10月初旬から現地調査に着手する計画だったが、調査地の伐採作業が11月末までかかったことから、調査前の地形測量に着手できたのが11月25日となり、11月30日に起工測量を実施する。12月1日から表土掘削を開始した。現地が急斜面であったことから、転落防止措置や落石等の崩落防止措置などの安全対策を実施しながら掘り進めた。

調査中の12月13日には江津市教育委員会の益子原・持田両氏が訪れ調査状況を視察したほか、12月21日には高屋茂雄氏（島根県立八雲立つ風土記の丘）により中世山城に関する調査指導を受けた。

12月22日に調査後の測量を終え現地での作業を終了した。12月26日にラジコンヘリによる空中写真撮影をおこない、12月27日に完了検査をおこなった。

令和5年度は、本田窯跡の下層で発見された桜谷鉦跡の発掘調査をおこなった。桜谷鉦跡は多くの文献や絵図が残されるなど非常に重要な遺跡であることから、遺跡中ほどを横断する市道の取り扱いを検討していた。その結果、国交省浜田河川事務所が市道の迂回路を設置することになり、市道部分についても発掘調査が可能となった。前年度に未調査だった市道部分についても本田窯跡の遺構が残存していることから、その部分の調査を桜谷鉦跡に先行して実施した。

令和5年6月12日に埋蔵文化財調査センター調査員が立ち会って市道および住宅擁壁の撤去工事を開始する。すぐに本田窯跡に関わる可能性のある白色粘土層を検出する。6月14日には後に水施設だったことが判明するコンクリート壁が出土した。市道および擁壁の撤去工事は6月15日に終了し、6月21日に起工測量を実施する。翌6月22日から本田窯跡6区として発掘調査を開始した。

令和5年度調査は6区とした部分の調査を実施した。この部分は市道によってバックされていたこともあり、遺構の残りがきわめて良好で、数条にわたる石列・石垣、水施設やそれにとまう埋め糞や暗渠など多くの遺構を検出した。

8月3日にはインターンシップを受け入れ、学生3名が発掘調査業務を体験した。8月26日には概ね本田窯跡の部分の発掘調査を終え、引き続き桜谷鉦跡の調査をおこなった。なお、令和5年度の調査では江津市教育委員会持田直人が埋蔵文化財基礎研修実技講座Ⅱの研修として現地調査に参加した。

3. 整理作業

令和4年度は発掘調査と並行して現場事務所で遺物の洗浄等をおこなった。調査終了後は12～3月まで埋蔵文化財調査センターで注記・分類・接合などの作業を進める一方、平行して遺構図面・写真の整理と出土遺物の実測をおこなった。この間の令和5年3月15日には教育庁文化財課世界遺産室による石見銀山遺跡テーマ別研究のために来県した佐藤亞聖氏（滋賀県立大学）に、千本崎城跡出土の石塔片と千本崎地蔵堂層塔について指導を受けた。

本報告書は令和5年度に実施した6区を含め、林・阿部が担当して作業をおこなった。令和4年度調査分については4～7月に出土遺物の実測作業を中心に作業を進め、6～8月には本田窯跡6区部分の現地調査をおこなっているが整理作業は平行して継続し、6～10月には浄書作業を、11月に出土遺物の写真撮影をおこなった。

発掘調査・整理作業にあたっては、全国的に感染が拡大した新型コロナウイルス感染症対策のため、様々な感染防止措置を実施しながらの作業となった。新型コロナウイルス感染症が感染症法上の第5類に移行した5月8日以降もマスクの着用やドアノブ等の消毒など、必要な対策を継続しながら整理作業を続けた。

第3節 調査体制

発掘調査・報告書作成は次の体制でおこなった。

調査主体 島根県教育委員会

令和4年度

事務局 教育庁文化財課

課長 中島正顕、文化財グループGL 田中明子

管理指導スタッフ調整監 原田敏照

埋蔵文化財調査センター

所長 熱田貴保、総務課長 坂根祐二

高速道路調査推進スタッフ調整監 池淵俊一、管理課長 深田 浩

調査担当者 調査第一課長 林 健亮、同主任主事 鈴木七奈

会計年度任用職員調査員 阿部賢治、同調査補助員 幸村康子、原 英誉

令和5年度

事務局 教育庁文化財課

課長 村上かおる、課長補佐 田中明子、管理指導スタッフ調整監 原田敏照

埋蔵文化財調査センター

所長 熱田貴保、総務課長 坂本孝良

高速道路調査推進スタッフ調整監 間野大丞、管理課長 深田 浩

調査担当者 調査第一課主幹 神柱靖彦、同 稲田陽介

会計年度任用職員調査員 阿部賢治、同調査補助員 幸村康子

報告書担当者 調査第一課長 林 健亮

会計年度任用職員調査員 阿部賢治、同調査補助員 大田晴美

【引用・参考文献】

島根県教育委員会 2020『森原神田川遺跡大津地区』

島根県古代文化センター 2017『近世・近代の石見焼の研究』

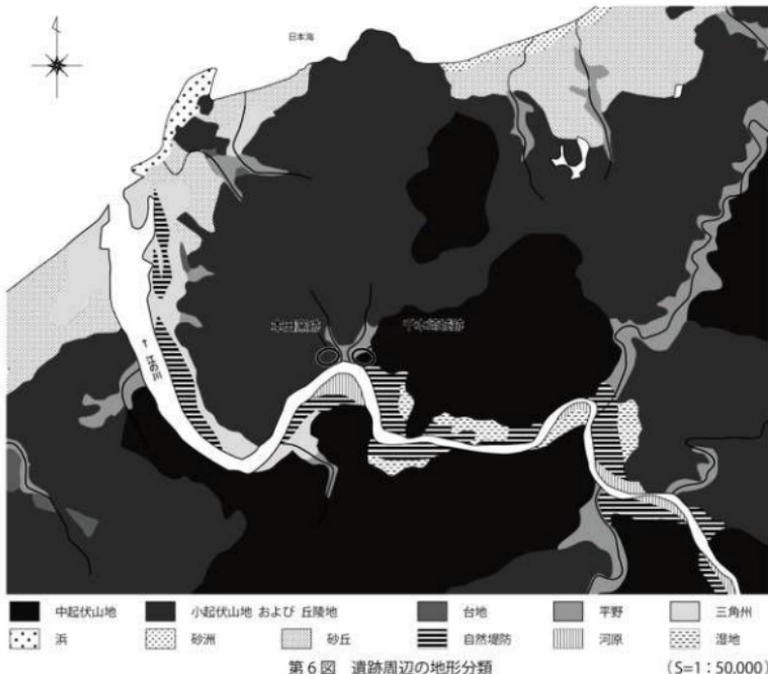
第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

本田窯跡・千本崎城跡は、鳥根県江津市松川町太田に所在する。中国地方最大の河川である江の川の河口から約4km遡った右岸に位置する。遺跡の周囲は山塊に囲まれ、江の川にそそぐ小河川によって形成された低地と、江の川を見下ろす丘陵斜面に立地している（第6図）。現状では低地は田畑に利用され、住宅は山際に立地し、斜面は森林となっている。自然堤防は江の川の流路に平行して発達しているが本田窯跡付近の標高は8mほどしかなく、集中豪雨の際には自然堤防を越流し低地に河川堆積物が流れ込むことがある。

江の川は広島県北広島町の阿佐山に源を発し三次市、邑南町、美郷町、川本町、江津市などを経て日本海に注ぐ一級河川である。幹川流路延長194km、流域面積3,900km²を誇り、全国的にも珍しい先行河川という特徴をもつ。新生代第三紀末葉に起こった地盤隆起によって現在の中国山地が形成された際、江の川は隆起よりも速いスピードで下刻浸食を続けたため、結果として中国山地を断ち切って日本海へと流れ出る長大な水系が誕生した。流域の大部分が山間の狭隘部にあたり、上流の西城川や馬洗川などが合流する三次盆地を除いて広大な平野は存在しない。

江の川は、上流部が可愛川と呼ばれるほか、『皇国地誌』には郷川と記され、近年まで江川と表



記される場合もあったが、昭和41年に一級河川となり、それ以後は江の川が正式名称とされている。

第2節 歴史的環境

江の川は広島県北部の中国山地に源を発し、三次盆地を経て中国山地脊梁部を貫流して日本海に注ぐ。上流域にあたる広島県側では複数の支流が合流する三次盆地が形成され、低丘陵上に集落や大規模な古墳群など数多くの遺跡が密集する。一方、中・下流域では、山間の峡谷化した流域の両岸に形成された小規模な河岸段丘や自然堤防上に遺跡が孤立的に点在するところに特徴があり、現状で大規模な集落遺跡や古墳は、多くは知られていない。

1. 旧石器・縄文時代

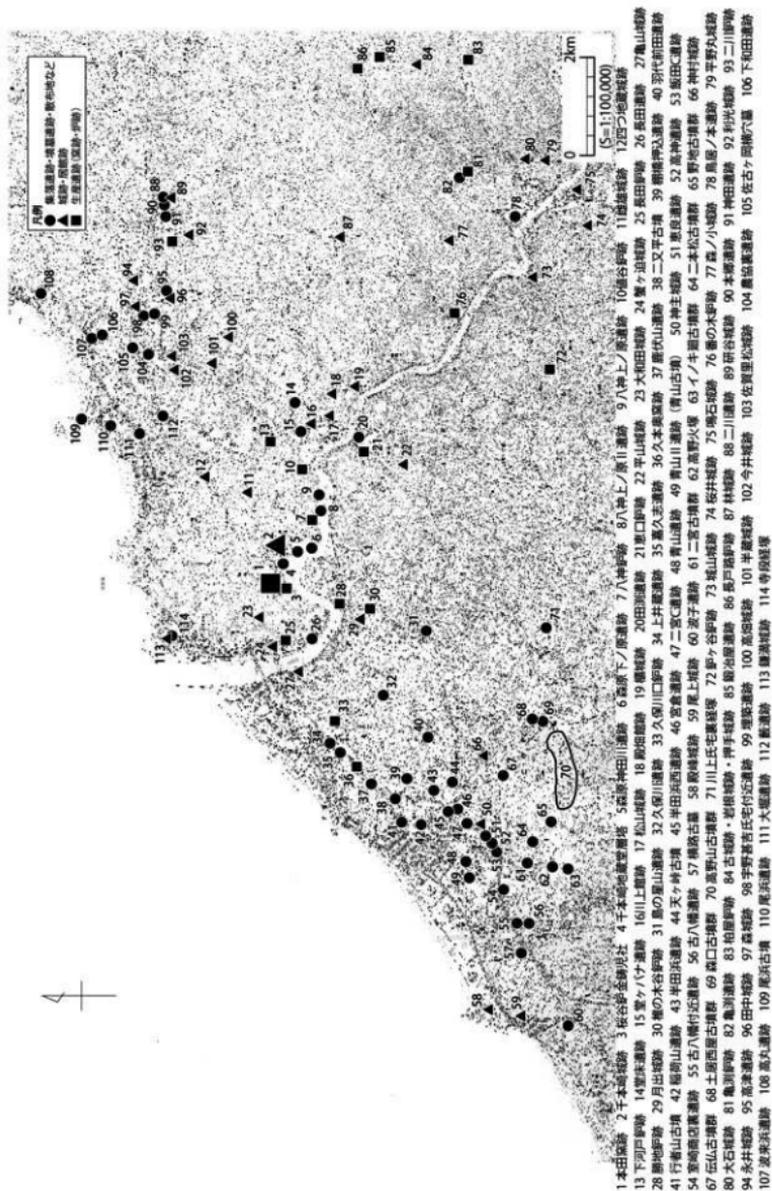
江の川流域において旧石器時代の遺跡は現在のところ確認されていない。縄文時代の遺跡は海浜部に多く、後期以降は内陸部にもみられるようになる。波子遺跡(60)では縄文時代中期の土器がまとまって出土しており、いわゆる「波子式」の標式遺跡となっている。中流域の沖丈遺跡、築瀬遺跡、都橋遺跡などでは、縄文時代後期から晩期の土器が多く出土しており、この時期に江の川流域の人口が増加した可能性が考えられる。とくに沖丈遺跡では多くの磨製石斧未成品が出土し、中国地方ではじめて縄文時代の磨製石斧製作地であることがあきらかとなった。森原神田川遺跡(5)下ノ原地区では突帯文期のイネの栽培が示唆される。森原下ノ原遺跡(6)でも多量の磨製石斧未成品が出土し、磨製石斧製作地だったことがあきらかになった。

2. 弥生時代

弥生時代前期は、埋築遺跡(99)、沖丈遺跡で遺構が確認されているが、その他の遺跡ではいずれも包含層からわずかに土器が出土する程度である。埋築遺跡でも溝状遺構が検出されているにとどまり、遺物はほとんどが包含層からの出土で出土量も少ない。一方、沖丈遺跡では配石墓群が確認され、緑色凝灰岩製管玉などが出土している。中期になると、古八幡付近遺跡(55)で環濠をともなう明確な集落が形成され、広島県備後北部地域の塩町式土器や瀬戸内地方で出土の多い銅形土製品が出土しており、江の川を介した交流の一端を示している。また、波来浜遺跡(107)では、貼石をもつ墳丘墓が確認され、中期後半以降に中国山地から山陰地方に展開する四隅突出型墳丘墓につながるのと指摘もある。後期になると遺構・遺物ともに増加し、高津遺跡(95)、宮倉遺跡(46)、半田浜西遺跡(45)、二宮C遺跡(47)、沖丈遺跡などで竪穴建物や掘立柱建物が検出され、各地で集落が形成されたことがわかる。とくに沖丈遺跡では多くの竪穴建物とともに鉄製品が出土し、鉄器製作がおこなわれていたことが指摘されている。その他、八神上ノ原Ⅱ遺跡(8)でもこの時期の土器が多く出土し、付近に集落が存在した可能性が考えられる。森原下ノ原遺跡(6)では弥生時代前期前半の遺物が出土したほか後期の竪穴建物が発見され、古墳時代に続く継続的な集落だったことがあきらかになりつつある。

3. 古墳時代

古墳時代前期は高津遺跡(95)や八神上ノ原Ⅱ遺跡(8)で比較的多くの土器が出土しているものの、明確な集落の検出例はない。中期になると高津遺跡(95)や二宮C遺跡(47)で竪穴建物や掘立柱建



第7図 本田遺跡・千本城跡と周辺の遺跡

物が検出され、後期にも高津遺跡(95)や半田浜西遺跡(45)、堂庭遺跡などで集落や畑が確認されている。高津遺跡(95)では水場や大溝など祭祀遺構が確認され、弥生時代終末期から古墳時代後期にかけて断続的に祭祀がおこなわれていたと考えられる。また、森原神田川遺跡(5)では祭祀関連遺物が出土した。

森原下ノ原遺跡(6)では外来系の土器の出土や破鏡、石釧など特徴的な遺物が出土している。墳墓としては明確な前・中期の古墳は確認されておらず、行者山古墳(41)が前期から中期にかけての箱式石棺をもつ墳墓と考えられている程度である。一方で、後期以降は30基ほどの群集墳である高野山古墳群(70)や圭頭大刀や牛歯などが出土した青山古墳(49)、古八幡付近遺跡(55)などで横穴式石室をもつ古墳があり、佐古ヶ岡横穴墓(105)などの横穴墓も確認されている。

4. 古代

律令期には全国的に駅路が整備されるなかで山陰道が設けられた。一定の距離ごとに駅家が設置され、江の川下流域付近には樟道駅、江東駅、江西駅があったとされるが、本田窟跡・千本崎城跡周辺でこれらの古代道や駅家の遺構が発掘調査によって検出された例はまだない。

波来浜遺跡(107)では古代の須恵器が数百点出土するほか、古墓から石帯が出土しており近隣に役人が居住したことが想定される。その他、古八幡付近遺跡(55)やカミヤ遺跡、飯田C遺跡(53)、恵良遺跡(51)、八神上ノ原遺跡(9)などでも竪穴建物や掘立柱建物、土師器、須恵器が確認され、各地で集落あるいは公的機関が存在したと考えられる。また、江の川河口に近い渡津町では江東駅の存在が推定されており、長田遺跡(26)で土師器や須恵器が出土している。

特徴的な出土遺物としては、宮倉遺跡(46)で石見国分寺跡と同文の軒平瓦、半田浜西遺跡(45)では奈良三彩や越州窯青磁、高津遺跡(95)で「郡」ヘラ描き須恵器、古八幡付近遺跡(55)では統一新羅土器が出土している。

5. 中世

中世前期の様相は資料が乏しく不明な点が多い。しかし、この頃すでに江の川を利用した水運が盛んであったようで、遠く広島県三次市周辺まで往来していたという。下流域の田淵遺跡(20)や八神上ノ原遺跡(9)では、12～13世紀を中心とする掘立柱建物や小鍛冶炉が確認され、その一端がうかがえる。また、森原下ノ原遺跡(6)・森原神田川遺跡(5)では非常に多くの中世の遺物が出土した。中でも完形で出土した灰被天目や県内最多の出土となった甲冑の小札、建物に使用される飾り金具の存在は、館や川湊に関わる施設の存在をうかがわせるきわめて重要な発見となった。その他、沿岸部を中心に半田浜西遺跡(45)、墨書土器が出土した宮倉遺跡(46)、中世前期の建物群と中世後期の貿易陶磁器が出土した古八幡付近遺跡(55)、掘立柱建物から備前系播鉢や防長系の鉢が出土した二宮C遺跡(47)、製鉄がおこなわれた可能性がある羽代前田遺跡(40)等の集落遺跡が確認されている。

中世後半、南北朝時代の動乱の際には、当時の地頭であった中原氏をはじめ石見の諸将の多くが南朝方として参戦し、たびたび北朝方と争っていたという。本田窟跡・千本崎城跡から約4km江の川を遡ったところに位置する松山城跡(17)は南北朝期に築城されたと伝えられており、建武3年(1336)に北朝方の攻撃を受け、翌4年にも城付近で戦闘がおこなわれたといわれる。松山城か

ら上津井川を隔てた南側には、松山城に相対するように櫓城跡(19)が知られる。千本崎城跡から江の川を挟んだ対岸には千本崎城と同様に都野氏に関わる伝承を伝える月出城跡(29)が知られるがその実態は判明していない。一方、都野氏に関わる城跡の発掘調査としては江津市二宮町の神主城跡(50)がある。この調査では都野氏との関わりを直接示す資料は得られなかったものの、15世紀頃と思われる備前焼甕や壱根式鉄鎌が出土している。また、『萩藩閩録(121)』に収められる貞和5年(1336)の「田村盛泰軍忠状」には「石見国宇屋賀浜合戦」が記されるが、敬川河口に近い古八幡付近遺跡(55)からは中世の遺物が出土している。

博多の商人神屋寿貞が大永7年(1527)に石見銀山(大田市大森町)を再発見して以降、銀山は中国地方支配のための焦点となり大内氏、毛利氏、尼子氏ら戦国大名に加え、石見地方の各領主たちの領地争いも交えた争奪戦となる。松山城下の市村では、「石州中郡川上市」などの市が存在したらしく、これらを中心とした江の川下流域もこの戦いに巻き込まれたといわれる。

本田窯跡・千本崎城跡が位置する江津市松川町太田地区には多くの石塔が残されていた。千本崎城跡南側の江の川岸には千本崎地蔵堂層塔(4)がある。花崗岩製の七層層塔で、相輪の一部まで残されている。なお、千本崎地蔵堂層塔(4)は周囲の石造物とともに江の川河川改修事業にともなって令和5年度に仮転移している。また、千本崎城跡の西側斜面には城の首の墓塔群と呼ばれる宝篋印塔・燈籠の集積がある。宝篋印塔の一部はデイサイト～流紋岩製と考えられ16世紀代に遡る可能性がある。太田集落の背後の斜面には下ノ原の墓塔群と呼ばれる宝篋印塔・五輪塔の集積が点々と知られていた。下ノ原の墓塔群は急傾斜地にあったことから、現在は太田地区共同墓地の一角に移転されている。

6. 近世

慶長五年(1600)、関ヶ原の戦いに勝利した徳川家康は石見国の7ヶ村に禁令を發布した。江戸時代に入ると石見銀山を中心とした地域は幕府領となる。江の川右岸の一部が浜田藩領となるが、替地により幕府領に復し幕末まで継続した。全国各地の幕府領では奉行や代官により盛んに新田開発がおこなわれ、森原神田川遺跡(5)大津地区や森原下ノ原遺跡(6)の水田や畑、水路はまさにそうした新田開発の様相を示すものと考えられる。

江戸時代中期から明治時代にかけて恵口鉦跡(21)、備谷鉦跡(10)など鉄銑を中心としたたたら製鉄が盛んになる。原料となる砂鉄は水運によって運ばれ、薪炭の供給も周辺の森林資源により豊富にあったと考えられる。恵口鉦は浜田藩の御手鉦であった高丸鉦が安永元年(1772)に恵口御手鉦所として転移されたもので、砂鉄は江の川の水運で運ばれたと言われる。本田窯跡下層遺構との関係が深い桜谷鉦は『金屋子録起抄』を記した石田初右衛門春律もその経営に関わっており、本田窯跡から北に100mほどのところには巨石を使用した石垣に囲まれた石田家(波植屋)の跡が残されている。また、本田窯跡西側にそびえる丘陵の西斜面には桜谷鉦金鑄児社(3)がある。

那賀郡太田村(現江津市松川町)の庄屋、石田初右衛門春律は、文化14十四年(1817)に地誌『角郷経石見八重葎』を著している。石見各地の地名の由来などを記し、石田春律の地元である太田村についても詳しく記されている。それによれば、千本崎の地名の由来は南西からの強風対策として千本の松を植えたことに由来し、千本崎之城に津野氏(『皇国地誌』では都野氏)が住んだとする。また、自ら経営に関わった桜谷鉦について鉄山を稼ぐと記すほか、『金屋子録起抄』には絵図をまじえて

詳しく記している。太田地区に残される石造物の銘や『金屋子縁起抄』の記載から、桜谷鉾は川本の渡利家によって享保十九年(1734)に操業が始まったとされ、1892年まで続いたといわれる。

7. 江の川の舟運と交通

江の川では古くから横渡舟(渡し舟)だけでなく、上流域から河口を結ぶ舟運が盛んにおこなわれ、川湊が各地に存在した。『海東諸国紀』にみえる「石見州桜井津土屋修理大夫朝臣賢宗」は、桜井庄河川港(江津市桜江町船津か)を出港地としているほか、田淵遺跡(20)の調査でも貿易陶磁など遠方から運び込まれた遺物が多く出土し、中世の活発な河川交通を物語っている。一方、近世に入ると江の川中下流域の右岸が幕府領となったことから、流域の各地に川舟番所(口番所)が置かれ舟運が管理されたほか、上流域の広島藩では津留統制が敷かれ、藩をまたぐ移動が制限された。しかし、江の川河口の郷津湊は江の川流域のたたら製鉄の盛行にともなって木炭・木材・鉄・鉄・米・塩・海産物などの一大集積地として栄え、当時の江の川舟運の繁栄ぶりがうかがわれる。郷津湊を含む郷田村は江の川左岸に位置しているながら幕府領に含まれていた。

明治2年に津留統制が解かれると江の川は自由往来となり、舟運への参入がさらに急増した。明治20年代には800艘を超える荷舟が稼働したとされる。このように活発におこなわれた江の川の舟運だったが、大正9年に水力発電を目的とした鳴瀬堰堤が完成すると上流部での舟運が中断した。さらに、三江北線が昭和5年に石見江津～川戸間で、昭和12年には浜原まで開通し、交通の中心は次第に陸上交通へと移っていく。昭和に入って以降は、電源開発にともなうダム建設や道路整備も進展していったことから、江の川の舟運は急速に衰退していくことになる。

『皇国地誌』に残る「太田村村誌」よれば、太田村は「南方郷川に面ス、運輸便ニシテ薪乏シク産炭ナシ」、郷川は「清流緩ニシテ舟筏通ス、秋分ヨリ春分ノ間上流ノ村落ニ於テ砂鉄灌採ノ為メ濁ル」などとあり、舟運が盛んだったために炭を生産しなかったことのほか、冬期間は上流で砂鉄採取がおこなわれていたことを記す。物産として「鉄、質美ナリ、平年凡老萬五千貫目ヲ製シ阪地ヘ輸送ス」とある一方、「鉦稼ヲ以テ業トスル者僅ニ六戸」で、「瓦油等アリト雖モ僅少ニシテ地方ニ於テ消費シ他ヘ輸出セス」とあり、少量の瓦生産がおこなわれていたことを記す⁽¹⁾。また、太田地区周辺の村道は東西に通っており、南に向かう道がないことから、明治初期には江の川沿いを通る大きな道はなかったと思われ、舟運か山を越える道が八神から渡津方面を結んでいたと考えられる。

現在、広島市と江津市を結ぶ国道261号は昭和38年に国道に昇格した道路で、この内、江津市渡津町から江の川右岸に沿って川本方面に続く路線は、川下(現川本町川下)江津線を拡幅改修したものされる。江津因原間については昭和46年から調査・工事が開始され、昭和47年に江津～谷住郷間が一旦開通したが、同年7月豪雨で被災し改補修がおこなわれた。この豪雨による被害は甚大で、国道本体だけでなく周辺にも多くの爪痕を残している。国道261号は昭和53年に川本町因原までが完工した。

【註】

- (1) 『皇国地誌』に残る「太田村村誌」については江津市誌編纂委員会1982『江津市誌』別冊による。文中にみえる「瓦油」は、他にほとんど見られない用例となっている。中国地方では施輪赤瓦を油瓦と呼ぶことが知られており、これを指すか。熱田真保2023「石見地方東部における近世・近代の瓦の生産と流通」『近世近代の交通と地域社会経済』島根県古

代文化センター

【引用・参考文献】

- 石見地方未刊資料刊行会 1999『角部経石見八重津』
- 邑智町教育委員会 2001『沖文遺跡』
- 角田徳幸 2014『たたら吹製鉄の成立と展開』清文堂出版株式会社
- 江津市 1973『波来浜遺跡発掘調査報告書』
- 江津市教育委員会 1993『宮倉遺跡』
- 江津市教育委員会 2002a『江津の地名』
- 江津市教育委員会 2002b『埋築遺跡』
- 江津市教育委員会 2003『青山古墳』
- 江津市教育委員会 2004『堂庭遺跡』
- 江津市教育委員会 2005『高津遺跡』
- 江津市教育委員会 2008『カミヤ遺跡・羽代前田遺跡』
- 江津市教育委員会 2018a『八神上ノ原遺跡・森原上ノ原遺跡』
- 江津市教育委員会 2018b『八神上ノ原Ⅱ遺跡』
- 江津市教育委員会・浜田市教育委員会 1988『大平山遺跡群調査報告書』
- 江津市誌編纂委員会 1982『江津市誌』
- 島根県教育委員会 1995『一般国道9号江津道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書1』
- 島根県教育委員会 1997『喜久志遺跡・飯田C遺跡・古八幡付近遺跡』
- 島根県教育委員会 2000『神主城跡・室崎商店裏遺跡・古八幡付近遺跡・横路古墳』
- 島根県教育委員会 2001『恵良遺跡・堂々炭窯跡・上条遺跡・水戸(三戸)神社跡(上条古壇)・立女遺跡』
- 島根県教育委員会 2020『森原神田川遺跡大津地区』
- 島根県教育委員会 2021『森原神田川遺跡下ノ原地区』
- 島根県教育委員会 2022a『森原下ノ原遺跡1～3区 1. 古代～近世編』
- 島根県教育委員会 2022b『森原下ノ原遺跡1～3区 2. 縄文～古墳時代編』
- 島根県教育委員会 2023『森原下ノ原遺跡4区』
- 平田正典 1992『佛教石造物 江津市』(有)黒潮社
- 平凡社 1975『島根県の地名』
- 柳浦俊一 1984『石見における群集墳の一例—江津市千田町高野山古墳群の分布調査—』『島根考古学会誌』第1集 島根考古学会

第3章 本田窯跡の発掘調査

第1節 調査の方法

1. 発掘調査区の立地

調査対象地は、江の川右岸に流れ込む小河川(西川)によってできた小さな段丘上に位置する。遺跡の中心は標高約7mの平坦面にあり、西側の丘陵斜面に連房式登窯が残る。調査前は市道に面した宅地のほか、庭や畑地として利用していた(第8図)。

2. 発掘調査区とグリッドの設定

令和4年度の調査対象地はその中ほどを国道261号とそれに直交して接続する市道が横断しており、それらによって分断された調査地を1～5区に分けた(第8図)。各調査区が狭小になったことからグリッドは設定しなかった。

令和5年度には桜谷鉾跡の発掘調査にともなって本田窯跡を横断する市道を撤去し、その下層も調査できることとなった。この部分を6区とし、桜谷鉾跡の調査に先行して発掘調査を実施した。

各調査区の調査対象面積は1区580㎡、2区780㎡、3区960㎡、4区60㎡、5区110㎡、6区210㎡とした。

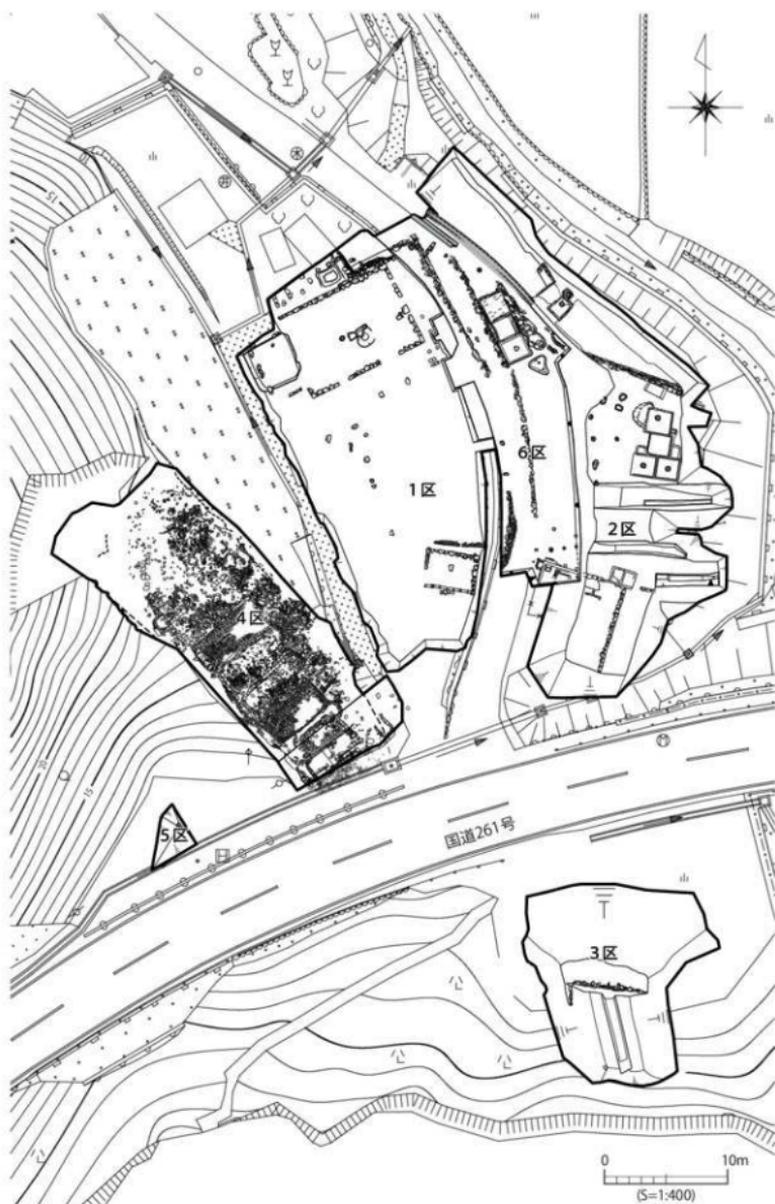
3. 調査の方法

令和4年度の調査地は国道261号・市道・河川に接していることから、それぞれ2m程度の控えを設け、法面の保護に配慮した。さらに2区では調査区内に電柱とカーブミラーが残され、それらについても倒壊することのないよう十分な控え残して掘削範囲を設定した。また、江の川に面した3区では掘削深度がかなり深くなることが予想されたことから、調査区壁は十分な勾配を確保し、地表から2m下方にステップを設けて壁面の崩壊防止に努めた。

表土掘削は重機によりおこない、その後には包含層掘削と遺構検出を繰り返しおこなった。包含層の掘削時は主として鍬・ツルハシを使用し、出土する遺物の粗密に応じて草刈りや移植ゴテを適宜使用した。遺構検出はジョレン・草刈り・移植ゴテを使用した。遺構の掘削に際しては、土層観察用ベルトを設定するか半載し、土層観察をおこないながら掘り下げた。土層断面については、分層が可能なものは写真撮影後に断面図を作成し、単層のものについては土色を記録したうえで掘削した。遺構から出土した遺物は、必要に応じて出土状況を記録し取り上げた。

現地調査は令和4年5月23日に起工測量検査を経て実際の掘削作業は6月22日から実施し、11月26日に現地での作業を終了した。調査対象面積は2,490㎡だったが、道路や河川に面した場所の控えの確保や、電柱・カーブミラーを始め撤去できない埋設設備等による掘削不能箇所が多数あった。さらに予期せぬアース線の発見による掘削中止箇所も生じたことによって、調査可能面積は大幅に減少し、令和4年度の発掘面積は約930㎡にとどまった。

令和5年度の調査は、市道及び市道に沿って設置されていた擁壁の撤去工事が国交省浜田河川事務所によって実施され、その工事立会中の遺物採取から始まった。令和5年6月21日に起工測量を実施し、翌日から路盤下層の掘削を開始した。調査対象面積は650㎡で、このうち本田窯跡部分に



第8図 本田窯跡の調査区配置 (1:400)

については8月24日に終了した。結果的に総発掘調査面積は1,140㎡となった。

4. 記録の作成と整理作業

遺物の出土位置は層位ごとに調査区単位で選別して取り上げ、必要に応じて遺跡調査システムを使用して座標を記録した。遺構の平面図・断面図は遺跡調査システムを用いて測量し、出力後補正をおこなうことを基本とした。石垣等の実測は3D測量も活用した。遺構や遺物の出土状況などの写真撮影はデジタルカメラを使用し、必要に応じて6×7版フィルム(モノクロネガ・カラーポジフィルム)カメラによる撮影をおこなった。また、調査終盤に行ったラジコンヘリによる空中写真撮影は6×6版フィルム(モノクロネガ・カラーポジフィルム)カメラを使用した。

出土遺物の整理は、調査区ごとに一括して分類・整理を行い、各遺構・種別ごとの代表的な遺物を実測・撮影した。出土遺物はほぼ全てが近现代のものだったため、調査中から出土遺物を選別し、全量を取り上げていない。このため、数量・重量も計測しなかった。

報告書作成はDTP方式を採用し、遺物・遺構の図面をデジタルトレースしたうえでレイアウトをおこなった。遺構・遺物写真はデジタルカメラで撮影し、階調、コントラストの調整をおこなって掲載した。また、空撮などフィルムによる画像はスキャンし、デジタルデータに変換して使用した。

第2節 基本層序

本田窯跡の調査区は、国道261号や市道等によって分断され、各調査区で土層が大きく変わるため、堆積状況の詳細は各調査区ごとに記すこととし、本節では概略のみを説明する。

本田窯跡が位置する場所は、北流してきた江の川が西に大きく流路を変える攻撃面にあたり、水害の影響を受けやすい場所となっている。このため地表下1～2mは洪水に由来する砂層が厚く堆積している。陶器・瓦・ガラスなどが含まれる場所があり、昭和47年の豪雨災害に関わると考えられ、特に2・3区で厚く堆積する整地土層については、聞き取りにより、昭和47年夏に発生した水害の残土を片付けたという情報を得た。それより下層には本田窯跡に関わる粘土面が数面あり、その間に砂層が混じる。また、本田窯跡1区下層では桜谷鉦跡に関わるとみられる炭層などを検出した。本田窯跡としての最下層面より下は山際に近い1・4区では礫層が、川に近い2・3区では砂層となる。2区の砂層中には鉄滓を含む層が見え、1区下層の桜谷鉦跡に関わるものと想像されたが、本田窯跡2区下層で出土する鉄滓は角が取れた小さなもので、流されてきたものと思われる。

江の川に近い3区では本田窯跡関連の土層以下に遺物をほとんど含まない砂層が続き、江の川の水面以下も砂層が続くと思われる。この砂層は、江の川による堆積や水害の痕跡と思われ、ほとんど遺物を含まない。

第3節 1区の調査の成果

1. 第1面の層序

1区では、調査以前は宅地であり、その住宅基礎を除去すると重なるように古いコンクリート製の基礎が現れた。この基礎は周辺に陶器片や窯道具を含むことから本田窯跡に関連する建物跡と考えられたことから、それらが建つ面を第1面とした。第1面の埋土は薄い粘土層や褐色土層が互層となっている。第1面の下層には砂利層があり、その下面、標高約9m付近から礎石群が検出され、

建物があることが確認できた。この面を第2面として調査をおこなった。第2面より下層には本窯造成にともなう礫層が堆積し、その下の標高8m付近から炭層の検出があった。炭層およびその下層からは鉄滓が出土し、後の桜谷鉾跡の発見につながっている。

第1面の堆積層は上部の建物基礎撤去にともなって大半を削平しており、部分的に残存する状況であった。第9・10図の南側が比較的残りが良く、黄褐色土(2・17層)層を基盤とし、その上に薄い砂層(1層)や粘土層(14～16層)が堆積する。この粘土層は作業時に排出された陶土が溜まったものと思われる。同様な粘土堆積層は2区において顕著にみえるが、1区でも使われなくなった陶土の一部は敷地内に広げたようである。この黄褐色土(2層)を基盤にして1面の建物群を建てている。7層および8層はSB01の基礎に関わる掘り込みと思われ、コンクリート基礎を設置する前に浅く溝を掘って礫石を充填している。4層および5層の掘り込みはSX07の基礎に関わる掘り込みと思われる。

この第1面の基盤層である黄褐色土の下に白色粘土層(10層)が薄く1区全体を覆っており、これが2面の貼床土と思われる。この貼床土の下は砂土と2cm大の礫を混ぜた砂質土(11層)であり、こちらも1区全体を覆っている。この11層の下は砂土に5cm大の礫を混ぜた砂質土(12層)が堆積しており、1区の南側を中心に広がっていた。10～12層は本窯建設に伴う一連の地業と思われる。SB02の地覆石は11層中にあり、掘り返し痕などがいないことから造成中に過程に据え置かれた可能性がある。第1面よりも第2面の方が全体的に丁寧に造作された傾向がある。下層で見つかった桜谷鉾調査との区別を明確にするため、本窯作業以降の層位は基本層序のI層とした。

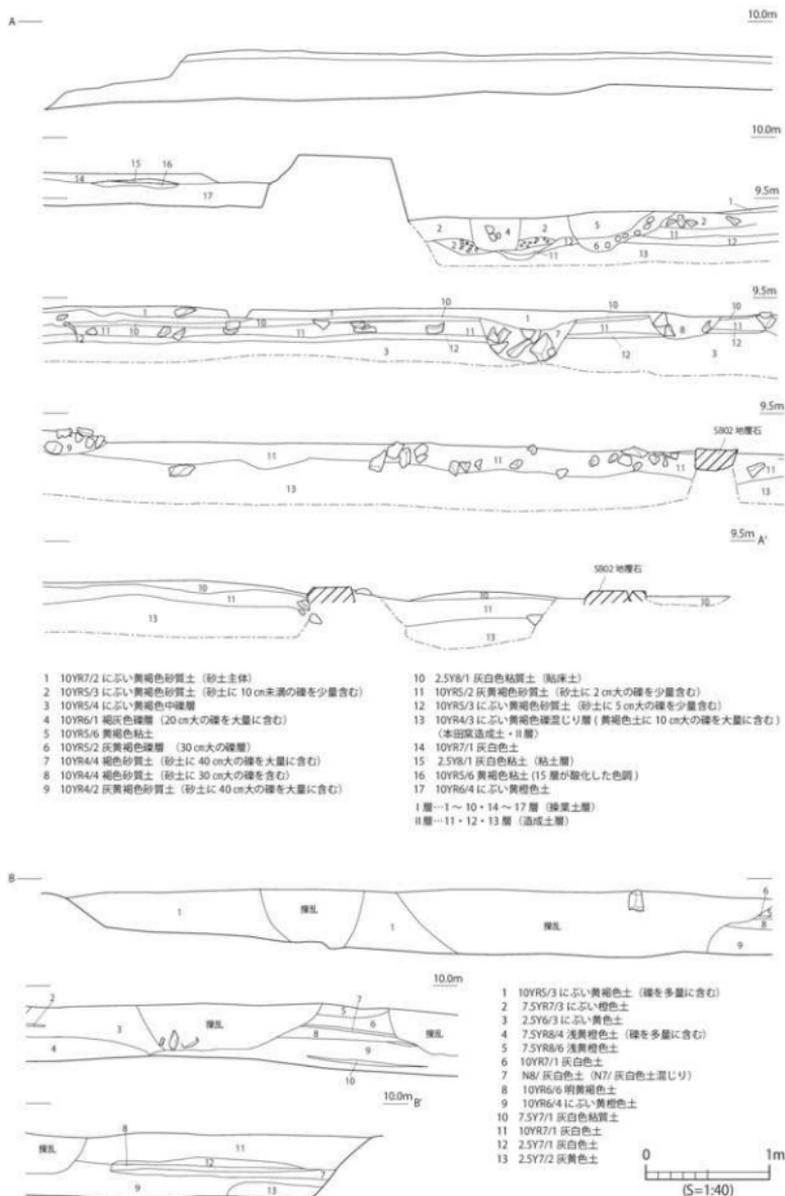
11層と12層の下には10cm大の礫層と黄褐色土が混ざった13層が調査区全面に堆積しており、これが本窯建設にともなう造成土と思われる。この造成土は標高9mにそろえて西側から東側にむけて厚く堆積し、東端では1mを越えている。13層は西側岩盤に由来する礫石であり⁽¹⁾1区の敷地造成や4区の登窯造成にともなって削平された岩盤から出たものと思われる。この本窯造成土を基本層序のII層とした。

2. 第1面の遺構

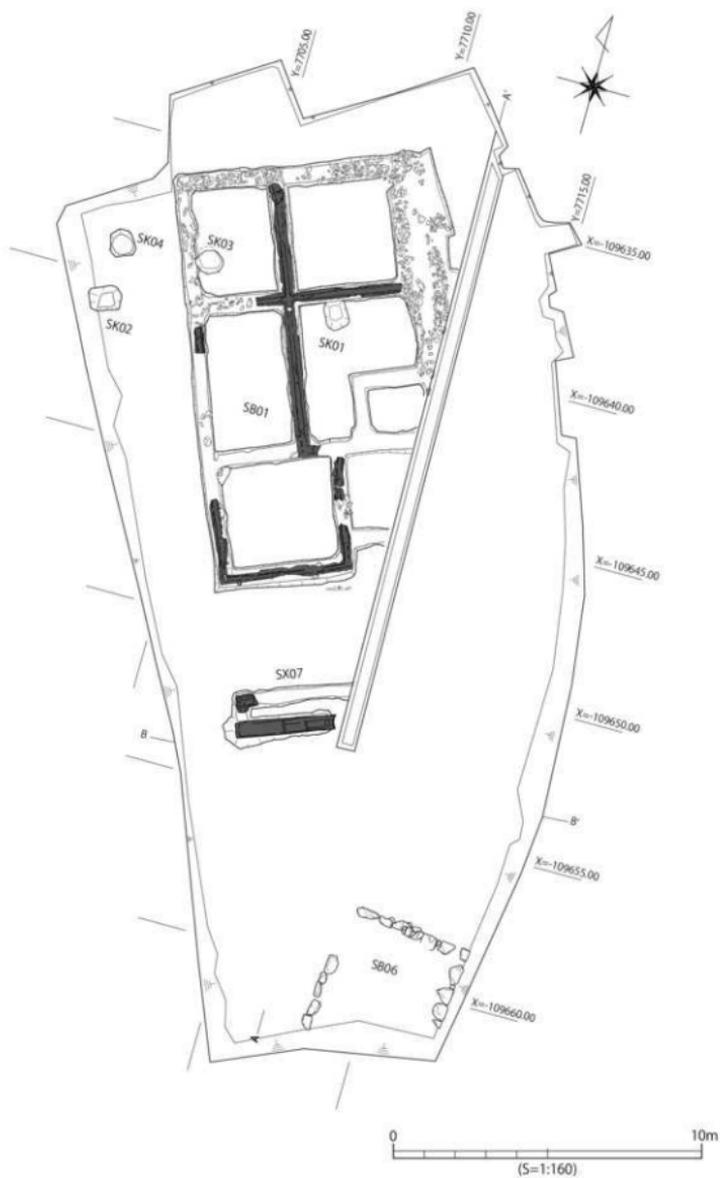
本田窯跡1区第1面では建物跡2棟、土坑4基、基礎1基を検出した。

SB01 SB01(第11図)は1区の北半を占めるコンクリート製基礎を据える建物跡である。南北13.6m、東西8.8mを計測する。平面形は長方形を呈し、南側に90cm程度の張り出しがある。この張り出しに沿って半壊した土管列(m・m')を検出しており、雨落ち排水溝の可能性はある。基礎の配置から推定される内部の仕切りは複雑な形状を呈している。コンクリート製基礎は内壁部分と南壁の一部が残存していた。基礎自体は規格が揃っていないで、c-c'面は60×20cm、H'面は37×19cmである。d-d'面は二つに割れており、k-k'面は不定形である。i-i'面の基礎は53×13cmの扁平で上面を平滑に仕上げていた。検出された基礎上面にはi-i'面を除いて中央部分がわずかに突出しており、e-e'面やj-j'面が顕著である。突出部分の付け根に板材の残欠がみえることから、木型の枠にコンクリートを流し込んだ可能性が考えられる。コンクリートは4cm大の川原石を大量に含み、砂粒が粗く表面はざらついている。基礎の上面は標高9.1～9.3mと揃っていないで、上部構造で高さを調整していたものと思われる。

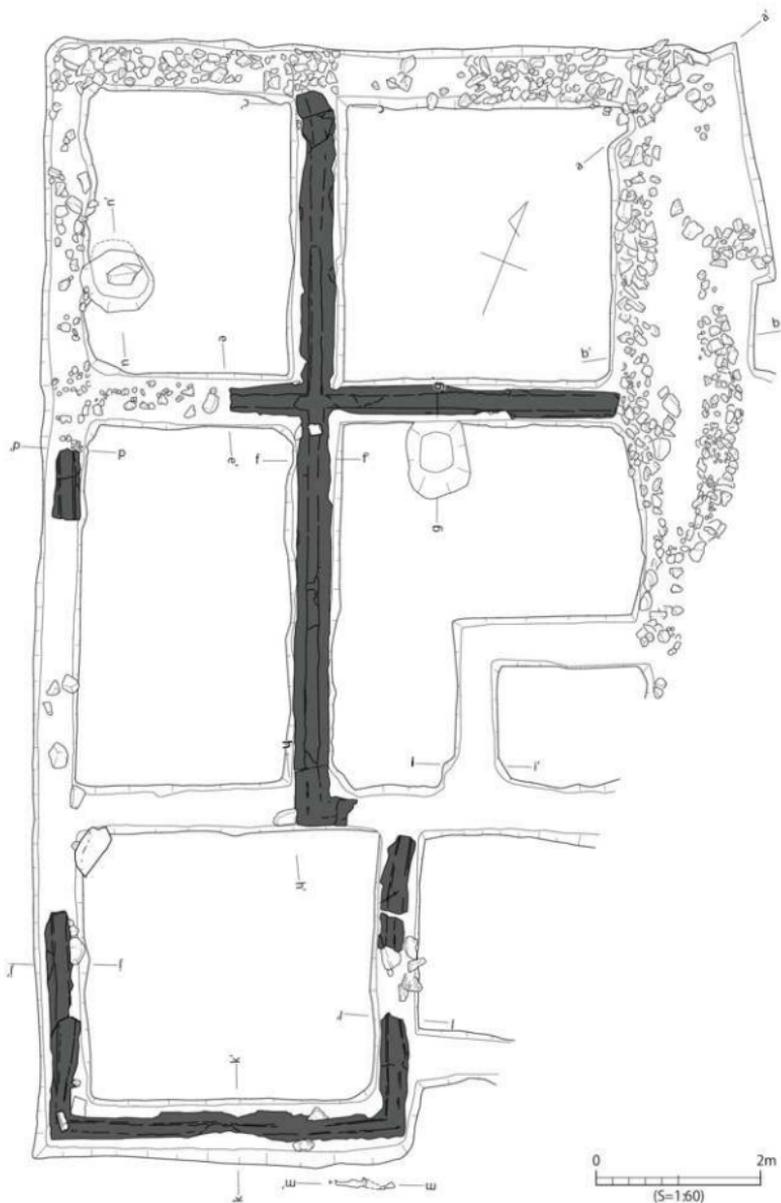
基礎の下には方形断面の溝を掘り、12cm大の碎石を溝内に充填する。溝の規模は一定しておらず、



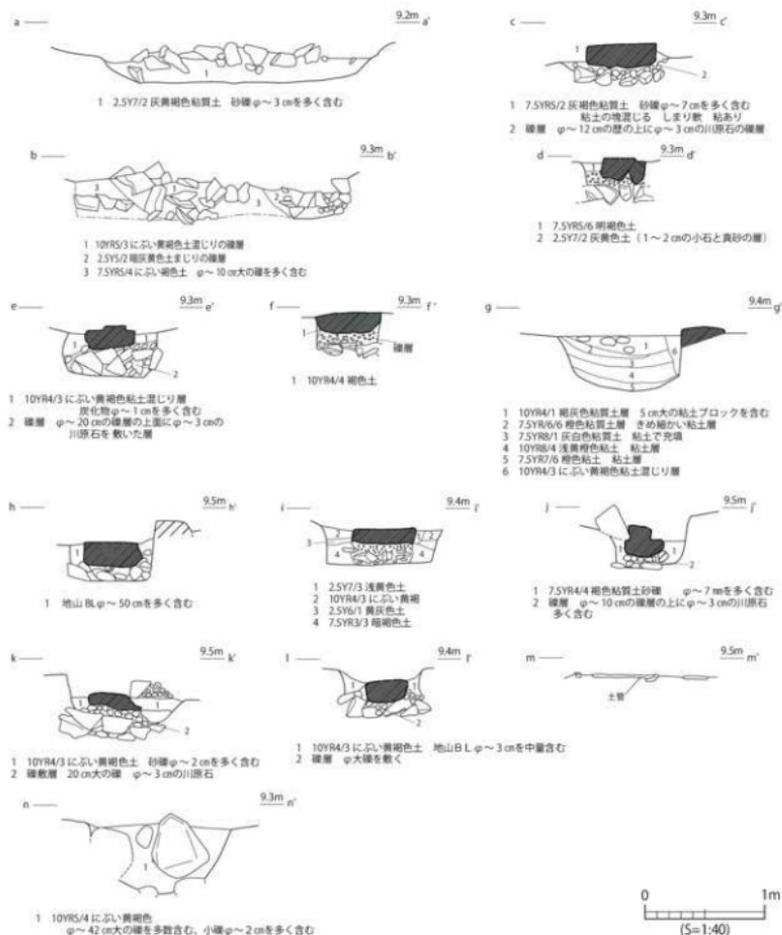
第9図 1区1面土層断面図(1:40)



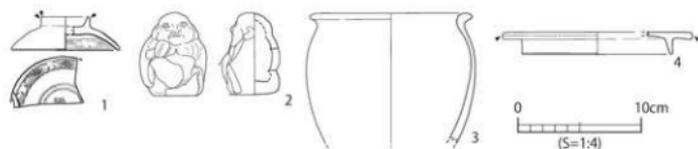
第10図 1区1面遺構配置図(1:160)



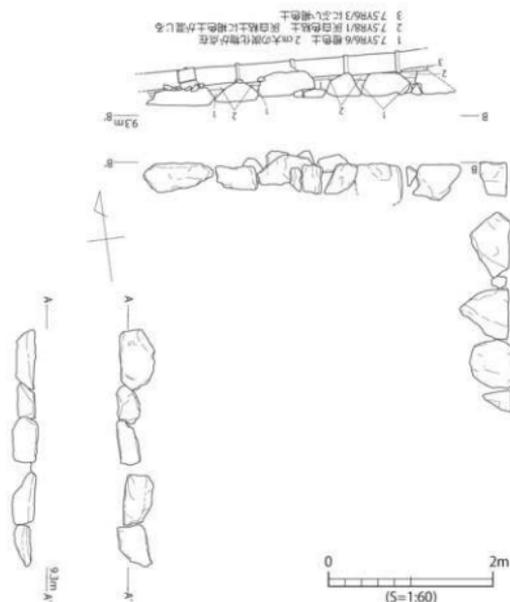
第11図 SB01実測図(1:60)



第12図 SB01 土層断面図 (1:40)



第13図 SB01・SK01 出土遺物実測図 (1:4)



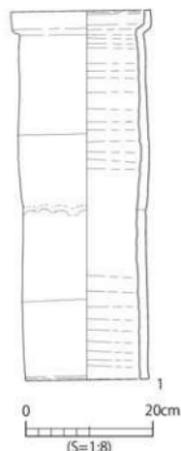
第14図 SB06 実測図(1:60)

e-e'面のように基礎より大きなものと、f-f'面のように基礎の幅に揃えたもの、c-c'面やk-k'面のように掘方が不鮮明な箇所がある。b-b'面には二条の溝の掘方がみえるが、a-a'面では合流して浅い溝となっている。施工段階で設計変更があった可能性がある。

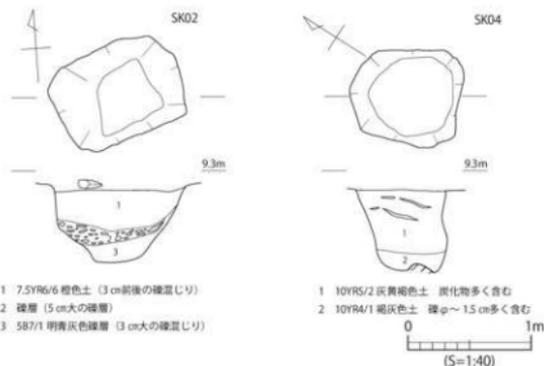
SB01 出土遺物 SB01の覆土は大部分が削平されていたので遺物はほとんど出土していない。1面基盤層(第9図2層)中から出土した2点を掲載する。13-1は青磁染付の蓋である。朝顔形碗にともなう蓋で、内口縁に四方禪文、見込みに五弁花が描かれる。推定される産地は肥前系で年代観は18世紀第3四半期である。13-2は土人形である。型成形の布袋人形で、内部は空洞であり背部が開孔する。後頭部が焼けただれて窯滓が付着する状態から本窯で作られた可能性がある。

またSB01に関連する遺物として、南側の張り出しに平行した土管列がある。20-3は小型の土管である。内外面に來待軸を施軸し、ソケットの内壁には縦位の浅溝を入れる。

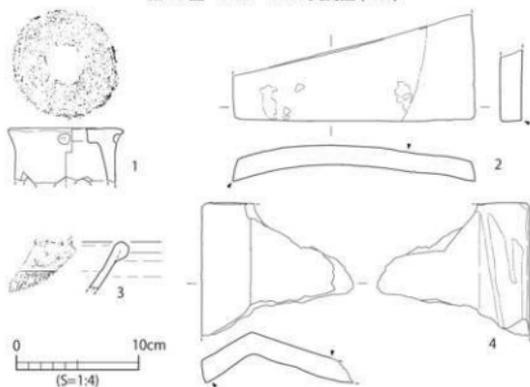
SB06 1区の南東隅で検出された地覆石建物跡である。重複するSB05より上位面から検出した。東側石列は3m、南側石列は4.4m、西側石列は2.9mを測る。地覆石は幅40～80cm、厚さ20～30cm程度の自然石で、建物の外側に面を揃えて設置される。地覆石の上面は平滑となるように加工して水平に据える。西側の地覆石の上面はおおむね標高9.2m前後に揃えており、東列は標高9.0m前後にあわせている。よって北列の地覆石は東側に傾斜することになる。当初から傾斜していたものか、東側が沈下したものは不明である。建物の主軸は東側の道路方向に平行している。南側石列の下より土管列が検出されるが(第14図)、土管列は2面より検出されることから、先行するSB05にともなうものと思われる。SB06時点でも土管列は機能していた可能性がある。灰白色粘土層(第



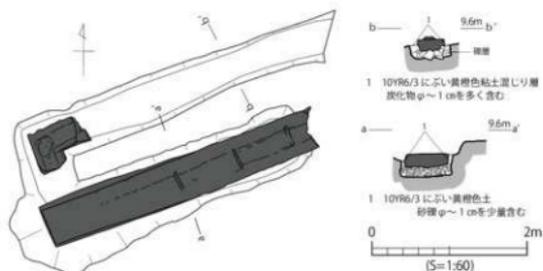
第15図 SB06 出土遺物実測図(1:8)



第16図 SK02・SK04 実測図 (1:40)



第17図 SK02・SK04 出土遺物実測図 (1:4)



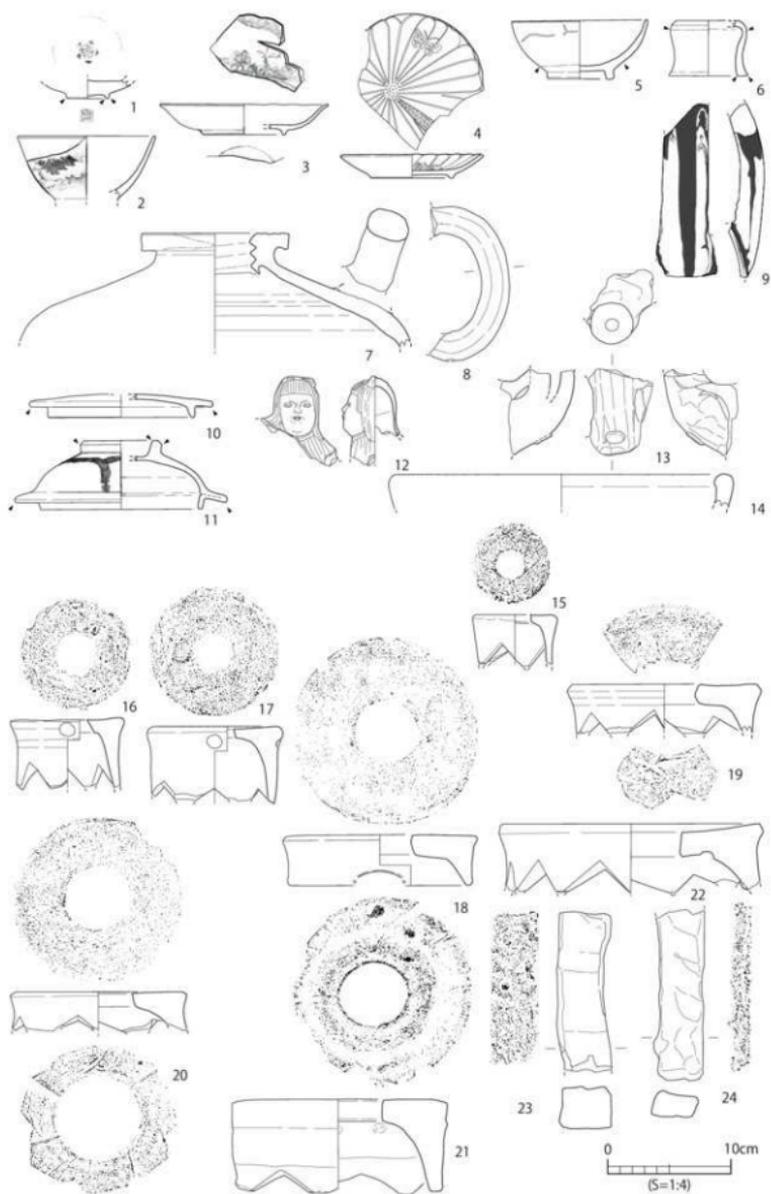
第18図 1区2面SK07 実測図 (1:60)

14図2層)が2面の貼床土と思われ、この貼床面の上さらに橙色土(第14図1層)を盛ってSB06遺構を構築している。第14図3層は本窯造成土Ⅱ層(第9図)と思われる。

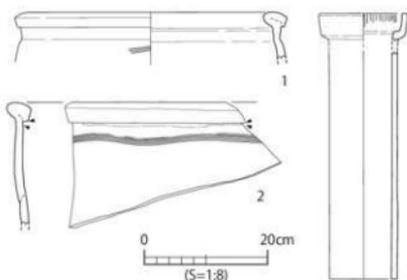
SK01 平面が方形を呈する土坑である。長軸88cm、短軸72cm、深さ46cmを計測する。1層は粘土ブロックを含む層であり、2~5層は粘土層が薄く叩き締めている。SB01の浅溝(6層)に切られており、SB01に先行する遺構である。出土遺物は13-3・4である。13-3は小型甕であり、13-4は平形の蓋である。

SK02 調査区の北西側で検出された、平面が方形を呈する土坑である。長軸104cm、短軸78cm、深さ57cmを計測する。堆積層は礫混じりの土壤である。1層は橙色、2~3層はやや灰色を呈する。2面で検出されたSB02の地覆石を壊しており、1面の遺構と思われる。出土遺物は17-3・4である。17-3は播鉢である。口縁端部は玉縁である。17-4は来待軸の棧瓦である。

SK03 SB01の北西に位



第19図 1区1面出土遺物実測図(1)(1:4)



第20図 1区1面出土遺物実測図(2)(1:8)

置する平面楕円形の土坑である。長軸90cm、短軸84cm、深さ44cmを計測する。土坑の中心には54cm×49cm大の礫石が入る。覆土には42cm以下の礫を多数含む。

SK04 調査区の北西隅に位置する不定形の土坑である。長軸88cm、短軸75cm、深さ65cmを計測する。1層は薄い炭化物層を含み、1～2層ともに小礫を多く含む。SK04の出土遺物は17-1・2である。17-1は焼台(ハリ)で、挟りで6足を成形する。

17-2は来待釉を施した熨斗瓦である。片側面から凸面の3/4程を施釉する。SK03とSK04は地山面に位置しており1面の貼り床層が及んでいなかった。これらの土坑は切りあいや建物内の位置から2面の遺構と思われ、轆轤台を据えたピット(穴)の可能性がある。

SX07 SX07はコンクリート製基礎と浅溝で構成されるが性格は不明である。SB01と西側面を揃えて平行することから同時期に配置したものとと思われる。2条の東西溝をコの字形に繋げ、コンクリート基礎が2ブロック残存する。北側溝は長さ4m32cm、幅51cm、深さ18cmを計測する。本来は西側に延伸していたものと思われる。溝内を12cm大の砕石で充填させ、その上に幅35cm、厚さ14cmのコンクリート基礎を敷いている。基礎の上には4cm程度の突起があり、南側に直角に折れ曲がり先端部が削平される。北側のコンクリートには6cm程度の川原石が大量に使われている。砕石やコンクリート素材はSB01と様相が似ている。南側溝は長さ3m94cm、幅63cm、深さ22cmを計測する。溝内を5cm大の砕石を充填させ、その上に幅56cm、厚さ19cmのコンクリート基礎を敷く。南側のコンクリートには3cm大の砕石が少量使われ、上面を平滑に仕上げる。砕石やコンクリート素材が南北で異なっており、南側が新しい様相を呈する。同一遺構として検出しているが、北側溝を切って南側溝のコンクリート製基礎が設置されたものと思われる。

1区1面包含層遺物 19-1～24は1区1面の包含層から出土した遺物である。その多くは1面の基盤層である黄褐色土(2層)層中より出土している。19-7は2面の包含層から出土しているが、関連する19-8・9と合わせて掲載した。19-23・24は調査前の表採である。

19-1～4は磁器である。19-1は筒形の青磁染付碗である。外面に青磁釉を施釉し、見込みに手書きで五弁花を絵付けする。高台内には変形字の銘款が記される。推定される産地は肥前系であり、年代観は18世紀末頃である。19-2は飯椀形の染付碗である。外面に吹き墨で富士山が絵付けされる。推定される産地は瀬戸美濃系で、年代観は昭和10年代頃である。19-3は輪花形の染付皿であり、銅版転写で山水文が施文される。年代観は20世紀前半である。19-4は輪花形の青磁皿であり、型成形で花蝶文の陽刻文様を施す。薄く青磁釉が施釉される。推定される産地は瀬戸美濃系で、年代観は昭和10年代である。

19-5～11は陶器であり、本窯の製品と思われる。19-5は丸形碗である。釉薬に冷め割れが生じている。19-7・8は硫酸瓶である。7は硫酸瓶の上部である。内外面に来待釉が施釉し、口縁から内頸にかけての釉を拭き取る。ナデ肩には把手を貼り付けた痕跡がある。内頸は螺旋状の螺子切があり、螺子式の蓋を伴っていたことがわかる。19-8は硫酸瓶の把手と思われる。全体的にナデ調整

される。19-9は把手である。来待軸が施軸され、鉄軸を流し掛ける。軸流れの方向から縦位の把手であったものと思われる。19-10は平形蓋である。上面に施軸された長石軸は、火勢により光沢を失って悴せている。19-11は輪摘みの壺蓋である。外面に長石軸を施軸し、コバルトで絵付けするが、外面には瓔珞文風の文様が描かれる。

19-12・13は土製品であり、本窯で製作されたものと思われる。19-12は土人形の頭部である。型成形で生地をつくり、前後を貼り合わせる。ポプヘアースタイルの少女で、頭頂にリボンをつなげ、ギャザーブラウス風の洋装を彫刻している。着色を前提とした土人形の素地と思われる。19-13は不明土製品である。把手の一部と思われ、付け根部分に円形の浮文を貼り付ける。

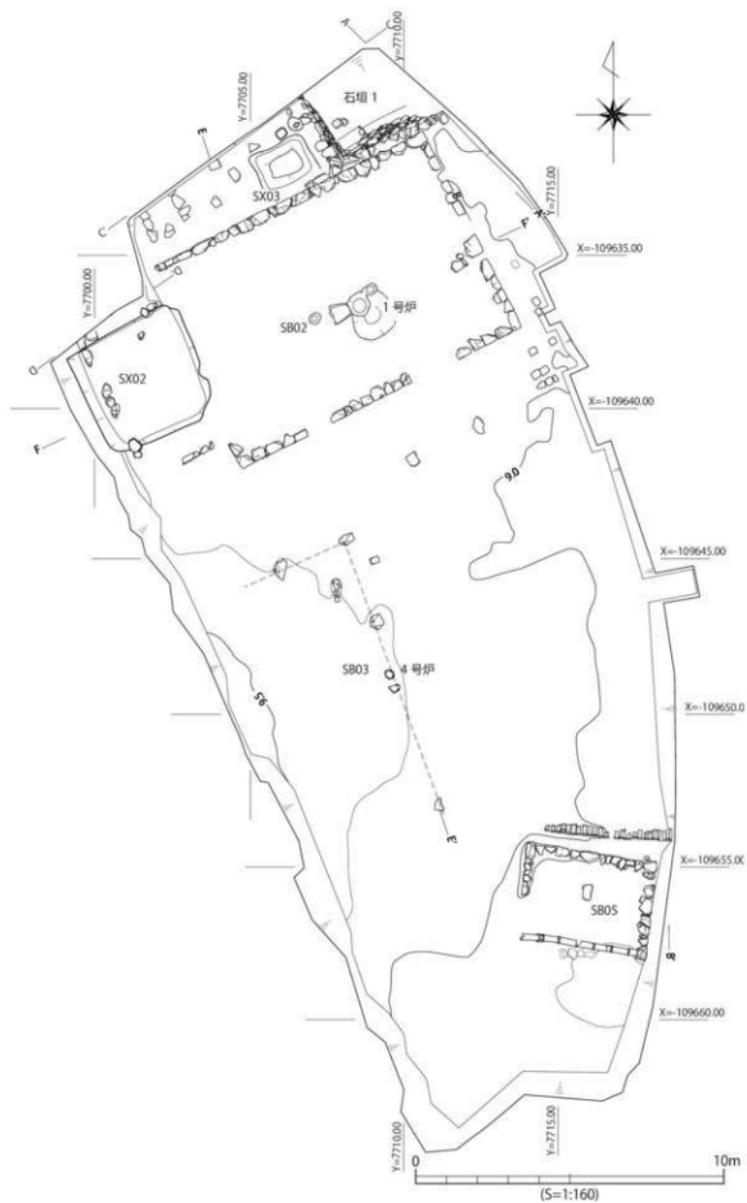
19-6・14～24は窯道具であり、19-14以外は本窯で製作されたものと思われる。19-6は陶製の湿台(シッタ)の可能性がある。胴部に長石軸を施軸し、頂部と畳付けを露胎とする。頂部には灰落ちが見える。畳付けを研磨しており、歪みを修正したものと思われる。19-14は白磁の乳鉢である。口縁端部を内側に折り返して玉縁とする。19-15～22は焼台(ハリ)である。糸切面を上面にして中央を穿孔する。円筒側面には切込を入れ、ノコギリ状の足を作り出す。19-15～17は7～10cm径で、器高は4～6cmを計測する。19-18～20は14～21cm径で、器高は3.2～5.5cmを計測する。19-18は挟りが1箇所の筒状で器高が低く、内面には刻書「二升カ」が記される。19-19の内面には刻書「大」、19-20はヘラ書きで記号が記される。19-23・24は瓦用焼台(モミツチ)で、器表面には粉殻痕が付着する。19-24はやや扁平な形状を呈する。

3. 1区第2面の層序

本田窯跡1区2面では建物跡3棟、土坑1基、炉跡5基、不明2基を検出した。

1面の黄褐色土(9・2層)を剥がすと、灰白色粘土層(9・10層)が1区全面を薄く覆っており、これが2面の貼床土と思われる。この灰白色粘土層上面に建物群が検出された。東壁面の土層(第22図下段)でも灰白色粘土の貼床土(1層)が確認され、その上には1面の基盤層と思われる明黄褐色土(6・6・2層)が薄く覆っている。これらの作業面の上には擁壁の裏込め土(4・13層)が堆積する。2面の貼床土の下には造成土と思われる礫層(3層)が堆積しており、厚い所では1mを越える。この礫層の上面では炭化物を多く含む礫層が堆積している。8～10層も造成土と思われるが、窯道具や耐火レンガなどを含んでおり南西側は北側と同様に作業中に敷地を広げた可能性がある。第22図の上段は桜谷鉦跡発見後に調査範囲を広げた層位面であり、この面でも造成土である礫層の上に炭化物を多く含む層位が確認され、その上に再び礫層が堆積している様子が確認される。

SB02 SB02は1区北側で検出された地覆石の建物跡(第27図)である。建物中央はSB01のコンクリート製の基礎と重複しており、地覆石の一部が失われている。建物跡は東西13m、南北7mを計測し、南列は西側2.6m付近で1m程度北側にクランクする。残存状態の悪い北列も同様にクランクしている可能性がある。地覆石は幅40～60cm、厚さ20cm程度の自然石で、建物の外側に面を揃えて設置される。上面を平滑に加工された地覆石を水平に据える。南列の地覆石の上面は西高東低になり、西端が標高9.24m、東端が9.14mを計測する。北列も同様に西端が標高9.22m、東端が標高9.10mを計測する。岩盤に近い西側に対して埋め立て造成された東側は約10cm程度低くなる傾向が認められる。地覆石は灰色粘土の貼床土に埋め込まれているが、掘方などは確認されず、造成中に地覆石を据えた可能性が考えられる。SB02の北側には建物に平行する石列と抜き取り跡があ



第21図 1区2面遺構配置図(1:160)



第22図 1区2面土層断面図(1)(1:60)



第23図 1区2面土層断面図(2) (1:40)

り、北側に庇をつけていた可能性がある。

SB02内からは土坑4基(SK01・03・04・06)、炉跡4基(1・5～7号炉)を検出している。建物西側のSK03とSK04は轆轤を据えた土坑(轆轤ビット)と思われる。建物の中心付近には大型の敷石を据えており、その周囲から小型の炉跡が複数見つかった。とくに5号炉は開業時に遡る可能性が考えられ、その周辺で何度が小型炉を作り直している。

SB02は元従業員からの聞き取りによれば、主に成形作業を行っていた作業場とされる。建物の西側で甕などの大型製品の成形を行い、建物の中心部には小型炉を据えて火を起こしていたようである。小型炉を作り直していることから建物内は土間と思われる。

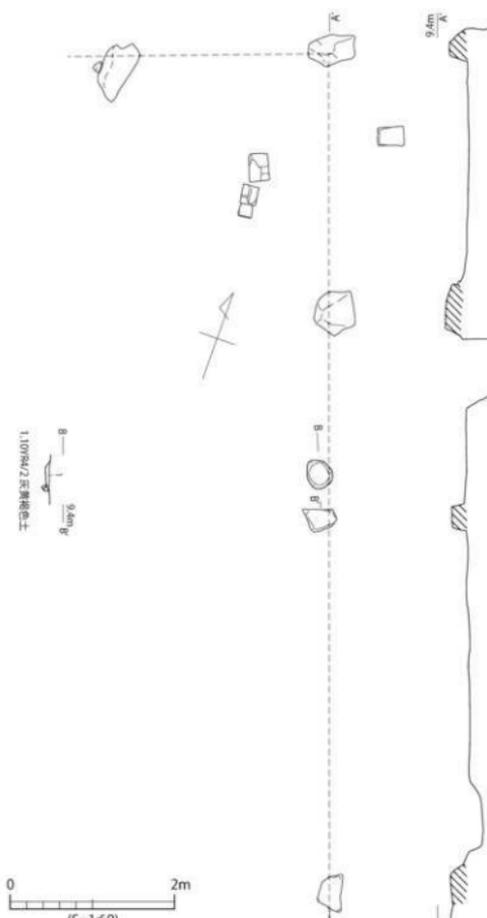
SB02の出土遺物は30-1～7・9・10で、いずれも貼床面から出土した。30-1は染付皿である。内面に型紙刷絵の青海波地丸文を施す。顔料はコバルトである。見込みに目跡を残し、蛇の目凹型高台である。推定される産地は九州北部から長門周辺の地方窯と思われる、年代観は明治10年代以降である。30-2は壺である。腰部以下を露胎とし、底部は鉢筒底である。肩部から三方にコバルトを流し掛ける。30-3は行平鍋であり、内面に刷毛で来待軸を施軸する。腰部には使用された被熱痕がある。30-4～5は長石軸を施軸する蓋である。30-4は摘まみのない壺蓋である。30-5は丸つまみの落とし蓋で、底部は糸切である。30-6は焼台(ハマ)である。粘土塊を上下に潰したものであり、本遺跡では数少ないタイプである。30-7は焼台(ハリ)である。糸切で切り出した円板の中央を穿孔し、足を貼り付ける。30-9は火立である。斜面側が火を受けている。器表面にはコビキ痕が残る。30-10は轆轤軸受けである。短い円筒状を呈し、口縁端部が内側に折れる。上面のみに長石軸を施軸する。30-1・3を除いて、本窯で製作されたものと思われる。

SB03 SB03は1区中央の東側で検出された礎石建物跡である。南北10.4m、東西2.6mを計測し、西側の切岸に平行する。南北軸は三つの礎石が検出され、礎石間は3.3mと7.1mであった。東西軸は二つの礎石が検出され、礎石間は2.6mである。礎石の大部分は失われているが、西側が切岸となる地形から南北棟だったと推定される。礎石は岩盤ないし礫層(造成土・II層)の上に置かれ、掘方は確認できなかった。礎石の頂部を水平にして、標高約9.3m付近に揃えている。聞き取りによると、この位置には母屋があり、この母屋に東面する広場は成形を終えた生地を並べる乾燥場として使われていたとされる。SB03の柱間より4号炉を検出しているが、前後関係は不明である。

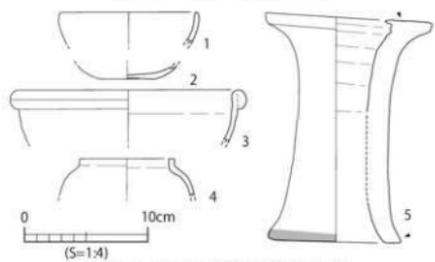
SB03から出土した遺物は25-1～5であり、これらの遺物は岩盤ないし礫層直上より出土している。25-1は丸形碗である。25-2は皿の底部であり、燈明皿と思われる。25-3は片口鉢の口縁である。25-1～3には長石軸を施軸する。25-4は壺上部の素地と思われる。胎土は白色を呈して緻密である。壺の一部には素焼き焼成を行っていたことを示す。25-5は焼台(ヌケ)である。

SB05 SB05は1区の南東側で検出された地覆石の建物跡(第2図)である。SB06より下層面より検出される。建物跡は東西4.8m、南北3.7mを計測し、本来は南側に延びていたと思われるが、重複するSB06により削平された可能性が考えられる。幅30～66cm、厚さ30cm程度の自然石で、建物の外側に面を揃えて設置される。地覆石の上面は西列は標高9.5m、東列は標高9.3mにそれぞれ合わせている。北列は西端から東端にむけて20cm程度下がる。地覆石は礫層直上に設置され、建物内と周辺には灰白色粘土が薄く堆積する。建物内には東西中心軸で、地覆石の北端から1.5mの位置に平坦な石(54×36cm)が据える。

また北端から3.6mの位置に建物跡を横断する土管列が検出された。土管列は調査区外に続いて



第24図 SB03 実測図(1:60)

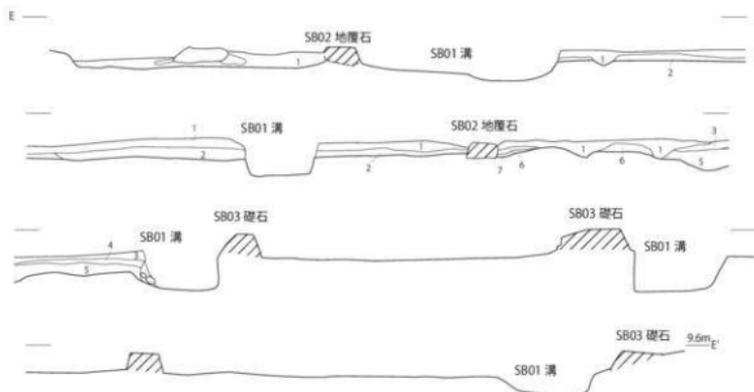


第25図 SB03 出土遺物実測図(1:4)

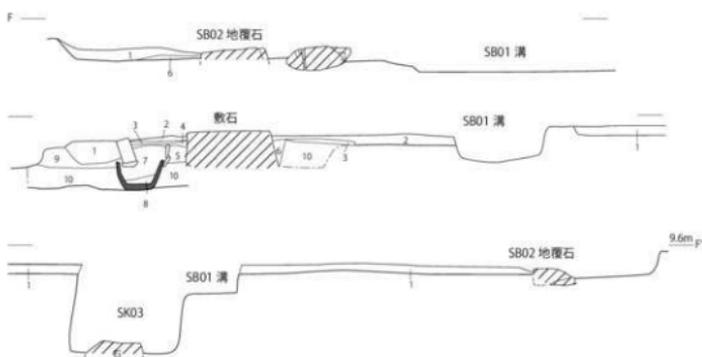
いる。検出された土管は東西軸に7個並べており、受口を西側に向けている。西側端の土管の受口内径下側は標高8.9mであり、東端の本体内径下側は標高8.4mである。比高差50cmで西側が高い。西側から1本目と2本目は直接接続しておらず、両側面を來待軸瓦で補っている。土管は東列の地覆石の下を通過しており、SB05に先行して設置されたものである。

SB05の北側に平行するように、22点の焼台(ヌケ)が南側に面を揃えて並べてあり、灰白色粘土が焼台の間を充填していた。石材の代わりに窯道具を用いた窯垣の一種と思われる。SB05の北東隅には焼台が1点だけ立った状態で見つかっている。

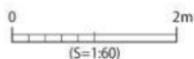
SB05からの出土遺物は32-1～8、15-1である。32-1は端反形鉢で、長石軸を施軸する。口縁端部は外側にせり出している。32-2は壺の底部で、長石軸を施軸する。内底に灰落ちが見える。32-3は染付皿である。見込みには流水と草花文、外面には唐草文が描かれる。高台内の中央にはハリ跡がみえる。推定される産地は肥前系であり、年代観は19世紀第2四半期頃である。32-4は足付の焼台(ハリ)である。糸切面を上面にして中央を穿孔する。接地面を抉って足を作り出す。底面に刻書で「四」が記される。32-5～8は足付の焼台(ヌケ)である。轆轤成形で中空の脚部を作り、台座中央を開孔して貫通するもの(32-5～7)



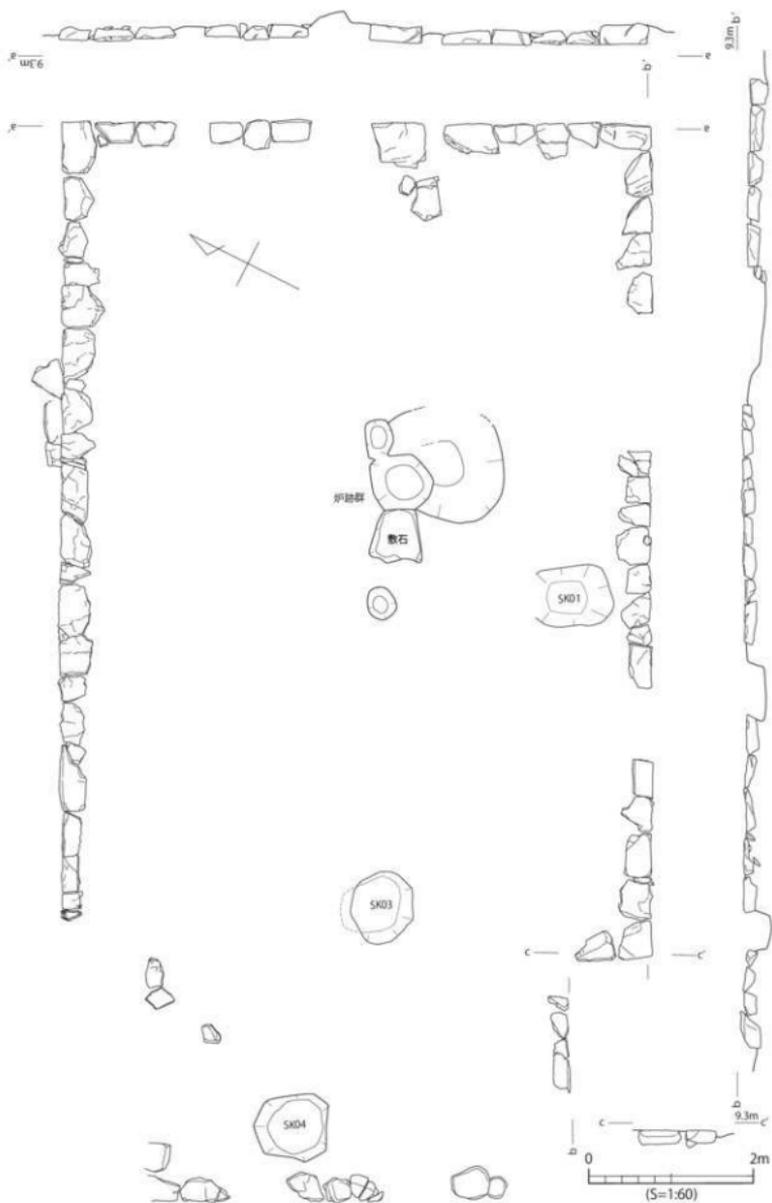
- 1 N6/ 灰白色粘質土 褐色土が所々に混ざるが比較的密度は高い
- 2 N6/ 灰色焼土 炭φ～2 cmを多く含む
- 3 2.5Y7/2 灰黄色土 きめ細かい1層と周辺が混ざった層 炭φ～0.5 cmを微量に含む
- 4 N6/ 灰白色粘質土 1層と同じ
- 5 2.5Y6/2 灰黄色土 炭φ～0.5 cmを微量に含む
- 6 7.5YR6/6 橙色ブロッコッ注じり層 白灰色R.L.φ～1.5 cmを多く含む
- 7 2.5Y5/1 黄灰色炭混じり土 炭φ～1.5 cmを多く含む



- 1 5YR2 灰白色粘質土 白色粘土を叩きて貼り付けた土層
- 2 N6/ 灰白色粘質土 耐火レンガの上面に及ぶ貼り付けた土層
- 3 N7/ 灰色炭混じり土 5号炉に伴う堆積層 炭化物φ～5 mmを少量含む
- 4 10YR6/1 灰白色粘質土 炭化物φ～1.2 cmを少量含む
- 5 2.5Y6/4 に近い黄色粘質土 裏ないし踏石を入れた際に貼り付けた層
- 6 10YR6/3 に近い黄褐色礫 礫φ～3 cm大の充填層
- 7 7.5Y6/2 灰オリーブ色砂質土 粘土塊φ～3 cmを少量含む 砂で充填下層
- 8 2.5Y3/2 黒褐色砂質土 炭化物φ～3 cmを中量含む
- 9 2.5Y6/1 黄灰色土 炭化物φ～2 cmを少量含む 灰をつき固めた 4 回程度つき固めた跡が残る
- 10 10YR 4/2 灰黄褐色礫層 礫φ～2 cmを多量に含む



第26図 1区2面土層断面図(3)(1:40)

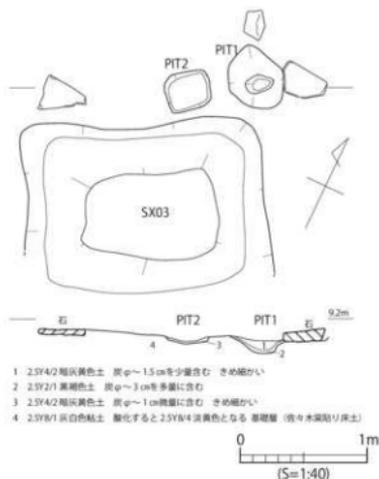


第27図 SB02 実測図(1:60)

と台座を開孔しないもの(32-8)がある。脚部には砂床に埋めた痕跡が残る。15-1は土管列を構成する1点である。タタラ成形された円筒を上下二段に接合し、片方に紐作りされたソケット部を貼り付ける。胴部にはわずかに光沢があり、塩焼の可能性がある。

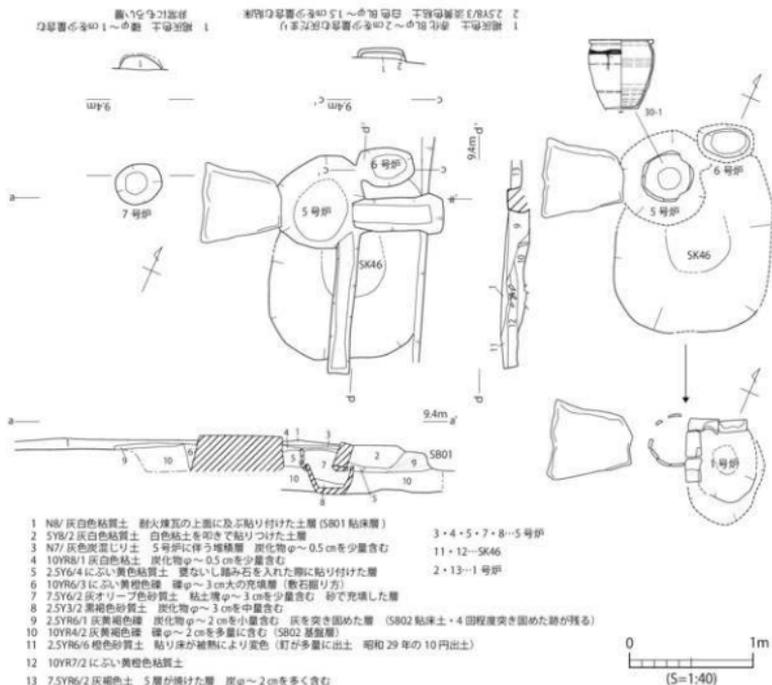
1号炉 耐火レンガでL字状に組まれた炉跡で、幅60cm、深さ20cm程度の土坑を伴う。土坑内に白色粘土を充填させ、その上に耐火レンガを組み合わせた炉跡を構築している。検出されたのは炉の下部構造と思われる。土層の切り合いにより、5号炉やSK46より新しい遺構である。

SK46 平面楕円形を呈し、幅1.2mで深さ12cmを計測する。薄い堆積層(11層)の中から大量の釘が出土した。この釘は5・6号炉で燃やした廃材に刺さっていたものと思われ、炉跡で生じた



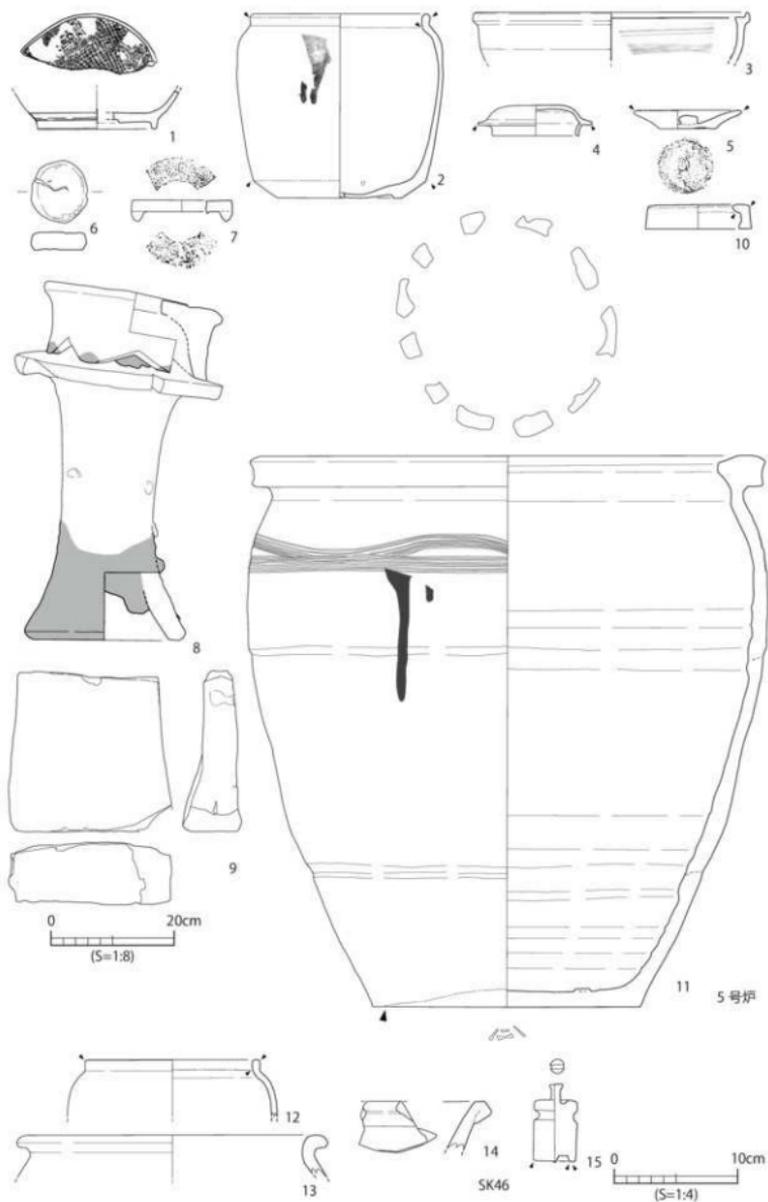
- 1 2.5Y4/2 灰白色粘土 灰 ϕ ~1.5cmを少量含む きめ細かい
- 2 2.5Y2/1 黄褐色土 灰 ϕ ~3cmを少量含む
- 3 2.5Y4/2 灰白色粘土 灰 ϕ ~1cmを少量含む きめ細かい
- 4 2.5Y8/1 灰白色粘土 酸化すると2.5Y8/4 黄褐色となる 層厚層(焼や木炭灰)床土

第28図 SK03実測図(1:40)



- 1 N8/ 灰白色粘質土 耐火煉瓦の上面に及ぶ貼り付けた土層(SB01粘床層)
- 2 5Y8/2 灰白色粘質土 白色粘土を叩きで貼り付けた土層
- 3 N7/ 灰白色炭質土 5号炉に伴う堆積層 炭化物 ϕ ~0.5cmを少量含む
- 4 10Y8/1 灰白色粘土 炭化物 ϕ ~0.5cmを少量含む
- 5 2.5Y6/4 に近い黄色粘質土 堅くない踏み石を入れた際に貼り付けた層
- 6 10Y6/3 に近い黄褐色砂 礫 ϕ ~3cm大の充填層(数石張り方)
- 7 7.5Y6/2 灰オリーブ色砂質土 粘土塊 ϕ ~3cmを少量含む 砂で充填した層
- 8 2.5Y3/2 茶褐色砂質土 炭化物 ϕ ~3cmを中量含む
- 9 2.5Y8/6/1 灰黄褐色砂 炭化物 ϕ ~2cmを少量含む 灰を突き固めた層 (SB02粘床土・4 印程度突き固めた跡が残る)
- 10 10Y8/4/2 灰黄褐色砂 礫 ϕ ~2cmを少量含む (SB02基礎層)
- 11 2.5Y8/6/6 褐色砂質土 貼り床が被熱により変色(釘が多量に出土: 昭和29年の10円出土)
- 12 10Y7/2 に近い黄褐色粘質土
- 13 7.5Y8/2 灰褐色土 5層が焼けた層 灰 ϕ ~2cmを多く含む

第29図 1号炉実測図(1:40)



第30図 SB02出土遺物実測図(14、11のみ1:8)

灰土などを廃棄した土坑であろう。

SK46からは30-12～15が出土した。30-12は長石軸を施軸する短頸の壺である。30-13は甕である。来待軸を施軸するが過熱により釉薬はカセている。30-14は窯道具の盛鉢である。内面に煤が付着する。30-15は磁製の低压ピン磚子である。マイナスねじの鉄芯をとまなう。この他、昭和29年銘の10円銅貨が出土した。

6号炉 平面楕円形を呈し、長軸38cm、短軸23cmで深さ5cmを計測する。内壁には厚さ6～8cm程度の黄褐色粘

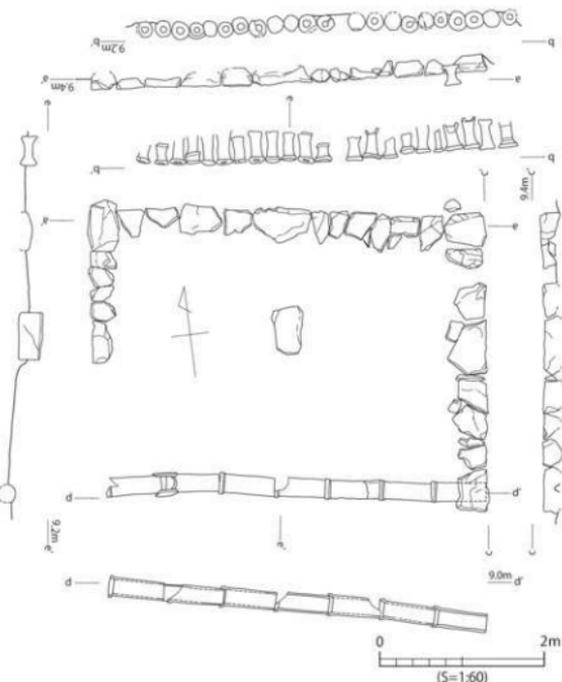
土を貼り付け、内壁の表面は焼けて赤黒く変色している。炉内には灰と砂が混ざった状態であった。炉跡の底部と思われる。上面プランの切り合いから5号炉より新しい遺構である。

5号炉 踏み石に隣接して検出された炉跡である。平面円形を呈し径は78cm、深さ41cmを計測する。円形土坑の中心に来待軸甕を据え、甕の周囲に灰色粘土を貼り付けて固定する。この甕に外接する粘土は焼かれて赤く変色している。甕の内部には砂を入れ、その上に炭化物混じりの薄い層が堆積する。切り合い関係から踏み石より新しい遺構である。SK46との新旧関係は1号炉に壊されて分からないが遺物の年代から先行するものと思われる。

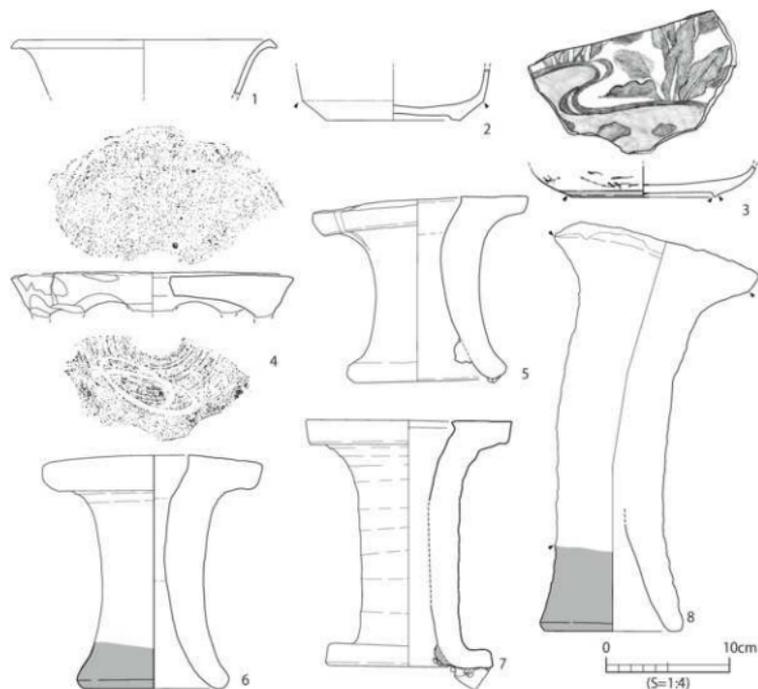
5号炉から出土した遺物は30-11である。30-11は甕である。肩部に櫛描きの波状文と直線文が施される。短頸に肩部がやや張り出し、口縁は折り返して外帯となす。胴継ぎ痕が二段みられ、底部には「△」の刻印が捺される。本窯製品は窯印をとまなっていないことから、他窯の製品と思われる。形状が甕2類に類しており、年代観は19世紀後半から20世紀前半代である。

7号炉 踏み石の西側で検出された炉跡。平面楕円形を呈し、径は33～37cm、深さ11cmを計測する。素掘りの状態で上部は焼けて赤色に変色している。炉内は灰と砂が混ざる層であった。

以上、1・5～7号炉・SK46はSB02内の踏み石周辺から検出しており、火を扱う作業は建物の中心でおこなわれたようである。最も古い5号窯は埋甕をとまなっているが、この甕は本窯の製品ではなく他窯のものが使われている。5号窯の築造は、本窯が操業する前のSB02建設時点まで遡る



第31図 SB05実測図(1:60)



第32図 SB05 出土遺物実測図(1:4)

可能性がある。5号窯に続いて、6号窯と1号窯が重なるように作られ、踏み石の反対側にも簡易的な7号窯が検出された。建物中心で繰り返して小型炉を築造した様子が窺える。SK46は窯跡から出た炭材や廃材などを一時的に寄せ集めた浅手の土坑と思われる。SK46からは昭和29年銘の十円銅貨が出土しており、SB02が存続した年代観を示している。

4号炉 SB03の柱間から検出された小型の炉跡である。平面楕円形を呈し、径は35cmで深さ5cmである。炉跡の周辺が焼けて赤く変色するものの、炉内は周辺の土とあまり変わらなかった。簡易的な炉跡とおもわれ、SB03との関わりは不明である。

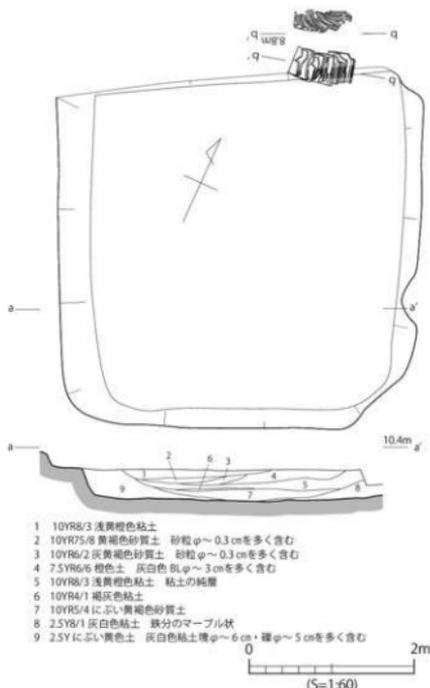
SX02 1区北西隅から検出された方形の土坑である。東西4m30cm、南北4m40cm以上を測る。北側はU字溝により壊され不明。遺構はSB02の下面より見つかっており、SB02より先行する。床は平坦となっており、低い壁が直立するように立ち上がる。このSX02は地山の上に築かれている。西側の地覆石を設置する範囲には堅く締めた礫層がみえるが、遺構の大部分は濃淡のある粘土層が堆積している。中心部には何度も掘り返した痕跡がある。SX02本窯造成にともなう削平面の一部であるが、建物内部となった範囲を粘土置き場として利用した可能性が考えられる。

SX02からは34-1～4が出土した。34-1は丸形碗で、長石釉を施軸する。34-2は壺蓋で、外面にコバルトが流し掛ける。34-3～4は焼台(ヌケ)である。34-3は上部の側面が開孔する。34-4は上面が開孔し、中心と外側を繋ぐ溝を掘る。34-5は盛鉢の口縁である。

34-6・7及び第35・36図はSX02の北側から出土した瓦群である。U字溝およびバラス土を除去して、Ⅱ層とした造成土中より出土している。地山が下降する面から出土し、SX02より古く、本窯以前に遡る可能性がある。遺構などは確認されなかったが、位置的に重なるSX02下出土として取り上げている。

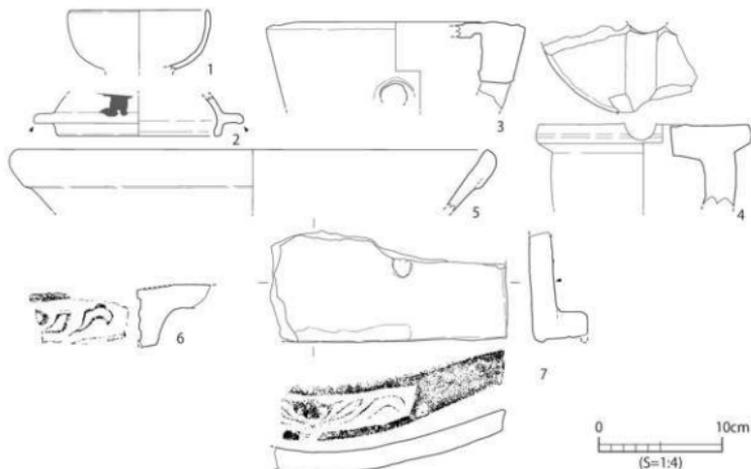
34-6・7はいずれも輪郭線で表現された均整唐草文の軒棧瓦である。34-6は中心飾が一部残り、内側の唐草は反転せず、唐草に切れ込みが入る。棧瓦部との接合は頸部を丁寧に成形する。文政から天保期頃のものか。34-7は厚い軸により中心飾が潰れ唐草には切れ込みがない。頸部は別材を貼り付け接合痕を残す。棧瓦部凹面に詰め物（ハセ）の剝離痕が残り、凸面側には長さ3.6cmにわたって別の粘土（モミツチか）が溶着している。

35-1・2は来待軸の棧瓦である。35-1は端部の小片で凸面は無軸となる。凹面側の端部近くは自然軸が被る。35-2は

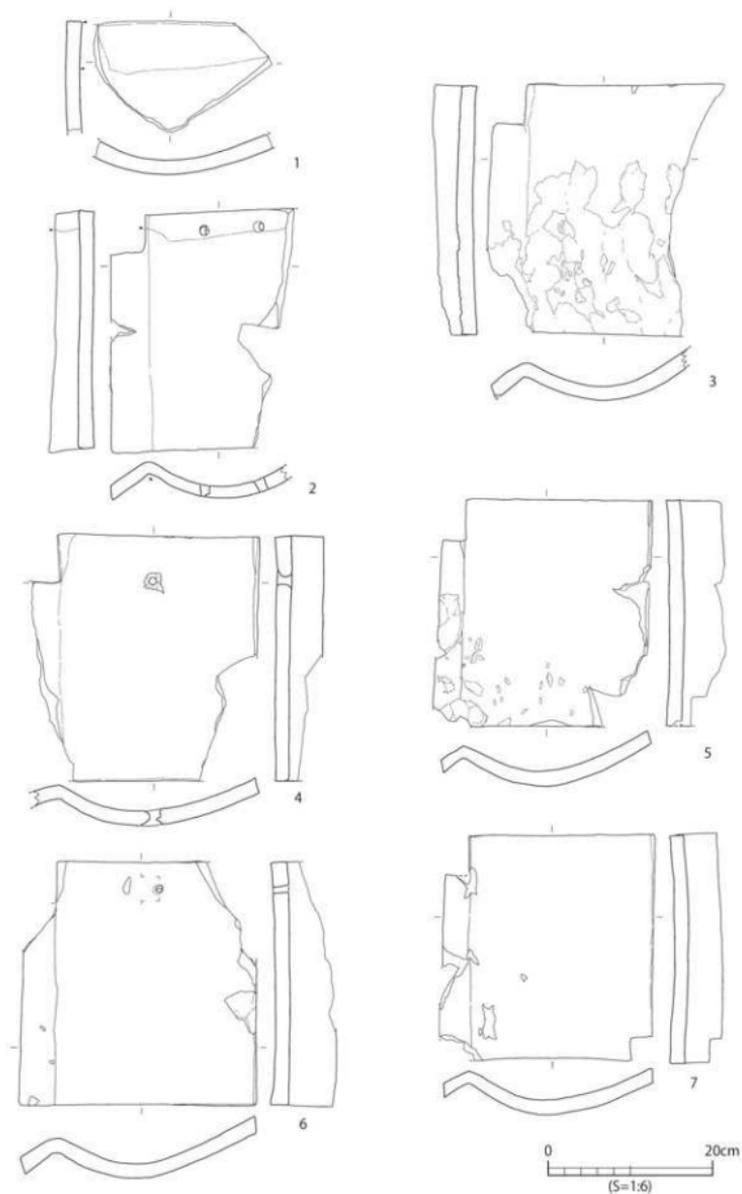


- 1 10YR8/3 浅黄褐色粘土
- 2 10YR7/5 黄褐色砂質土 砂粒φ～0.3cmを多く含む
- 3 10YR6/2 灰黄褐色砂質土 砂粒φ～0.3cmを多く含む
- 4 7.5YR6/6 橙褐色土 灰白色BLφ～3cmを多く含む
- 5 10YR8/3 浅黄褐色粘土 粘土の純層
- 6 10YR4/1 褐灰色粘土
- 7 10YR5/4 に近い黄褐色砂質土
- 8 2.5Y8/1 灰白色粘土 数分のマール状
- 9 2.5Y に近い黄褐色土 灰白色粘土層φ～6cm・硬φ～5cmを多く含む

第33図 本田窯跡1区SX02測図(1:60)



第34図 SX02およびSX02下出土遺物実測図(1)(1:4)

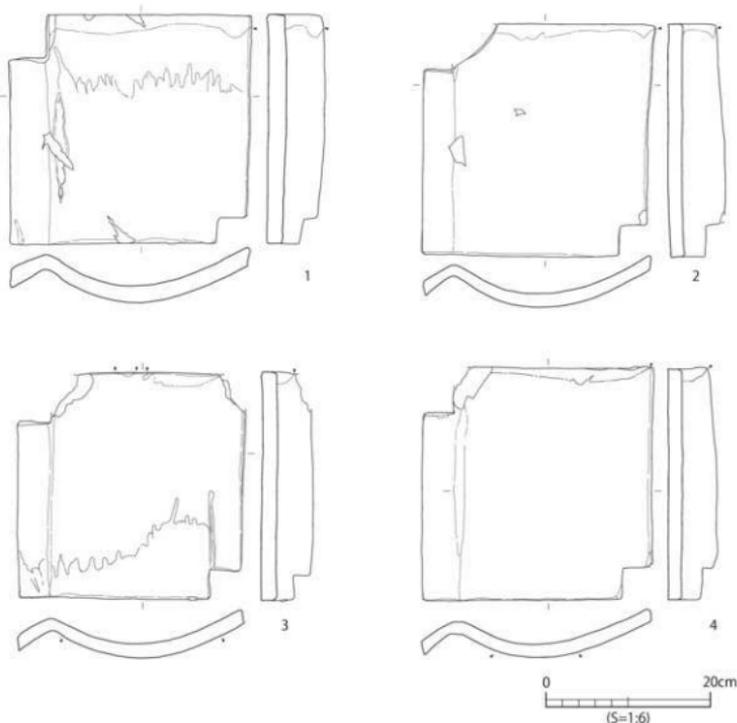


第35図 SX02 下出土遺物実測図(2)(1:6)

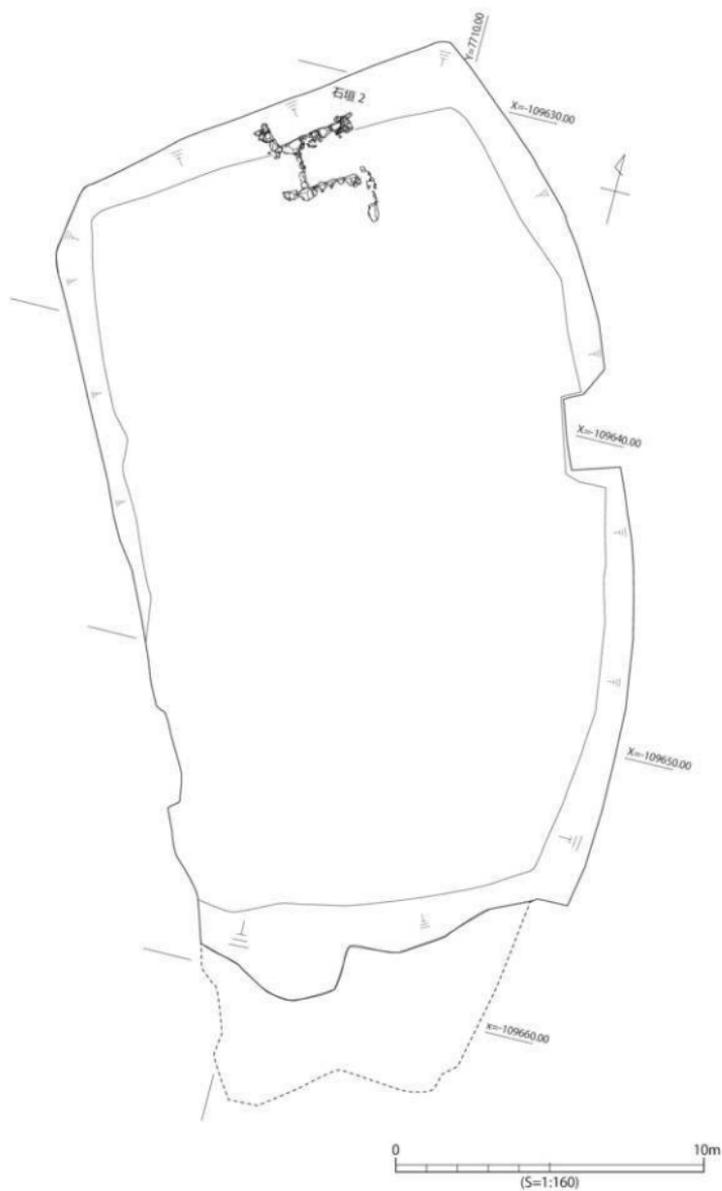
釘穴が2穴開く棧瓦である。棧を除く凸面から端部は無軸となり、棧は直線的に伸びる。35-3~7はいふし焼による棧瓦で、35-4・6には釘穴1穴を開ける。35-3は凹面側の約3/4にわたって凍害によって激しく剥離し、35-5凹面にも同様の剥離痕がみえる。35-4・6の釘穴は焼成後穿孔する。35-6・7は棧の頂部に擦痕があり使用痕であろう。第36図は来待軸の棧瓦で、いずれも凸面側は無軸とする。36-1・3は軸が流れた痕跡が顕著。36-3の端部には粘土が溶着しており窯道具の痕跡と思われる。

石垣1 1区北東隅よりL字に屈折する石垣列が検出された(第38図)。屋敷境の一部と思われ、東西軸の石垣の東側は6区に続いている。南北軸の石垣は調査区外の北側に延びるものと思われる。石垣の底面には南北方向に一段の石列が敷かれる。南北軸は長さ3.06m、高さ1.17m、東西軸は長さ4.14m、高さ1.78mを計測する。石垣の上部は失われていた。東西軸の石垣は開窓時に遡ると思われるが、南北軸の石垣は新しく増設されたものである。南北軸石垣は床面が50cm程度埋まった段階で粘土床(7層)を貼り、その上に石積みしている。

層位は、現道敷設にともなう造成土(2~3層)で埋めており、プラスチック片や鉄製支線の掘り込みなどがみえる。この造成土の下には水平に粘土層や円礫が堆積する(4~6層)。南北軸石垣造成

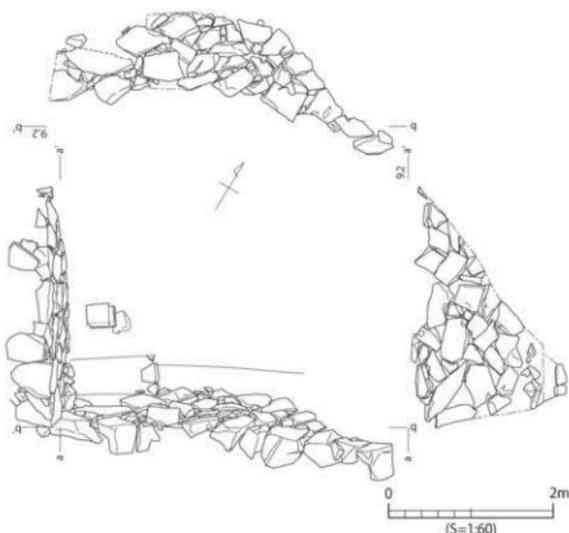


第36図 SX02 下出土遺物実測図(3)(1:6)



第37図 1区2面下遺構配置図(1:160)

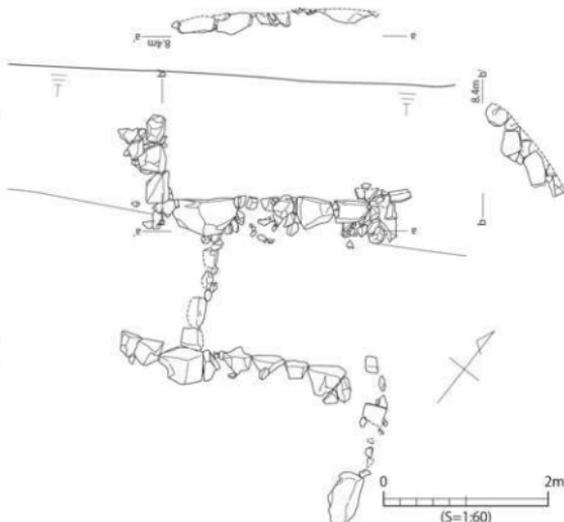
に合わせて粘土床(7層)を貼る。8～10層は南北軸石垣築造以前に堆積した層である。11～19層は南北軸石垣の裏込め土である。礫を主体に40cm程度の石や粘土塊、窯道具、瓦片などを含む。石垣1の西側には、先行する石垣2の一部がみえる。この石垣は本窯築造にともなう造成土(II層)を裏込め土(20層)としていることから、開窯時に遡る可能性が高い。北東隅部分は開窯時と比べ、石垣1を増設して敷地を約3.8m程度東側に拡張している。



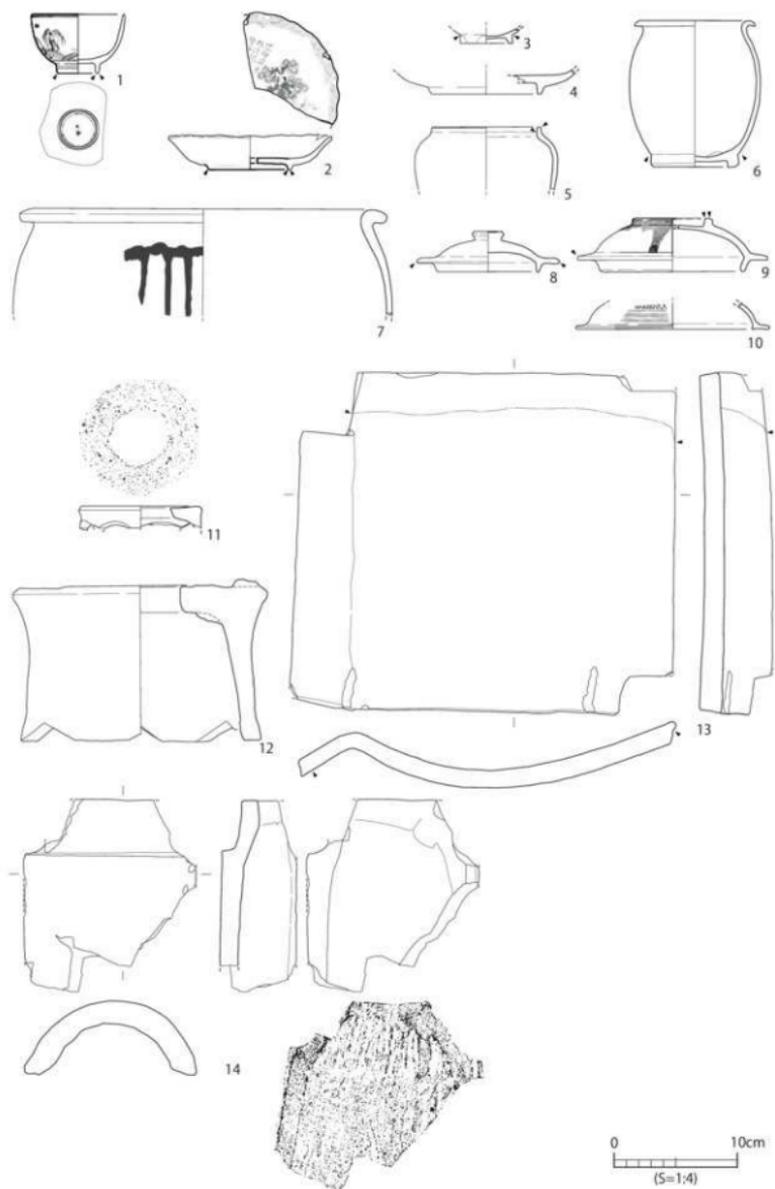
第38図 1区2面石垣実測図(1:60)

石垣1の外周から出土した遺物は40-1～14である。40-1は丸形の染付坏である。コバルトで山水が描かれる。高台内に「九谷」銘がみえることから、九谷焼と思われる。年代観は20世紀第1四半～第3四半期頃である。40-2は輪花形の染付皿である。ゴム印で山水文と詩歌文が施文される。

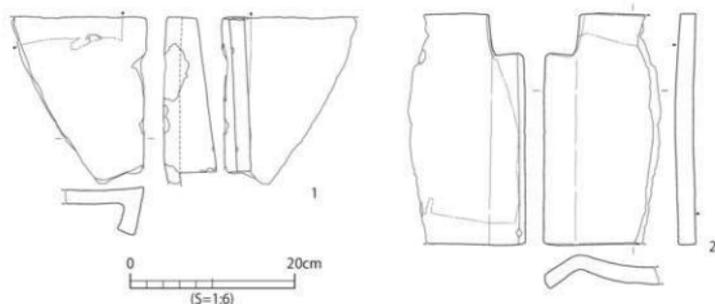
推定される産地は瀬戸・多治見であり、年代観は20世紀第2四半期以降である。40-3は錆釉を施釉した碗底部である。40-4は皿の素地である。40-5は長石釉を施釉した壺である。40-6・7は来待釉を施釉した甕である。40-6は小型甕であり、40-7の胴部には鉄釉が流し掛ける。40-8・9は壺蓋である。40-8は丸摘みで長石釉が施釉される。40-9は輪摘みで、外面にコバルトを流し掛ける。40-3～9は本窯



第39図 1区2面下石垣実測図(1:60)



第40図 石垣1外周出土遺物実測図(1:4)



第41図 石垣2外周出土遺物実測図(1:6)

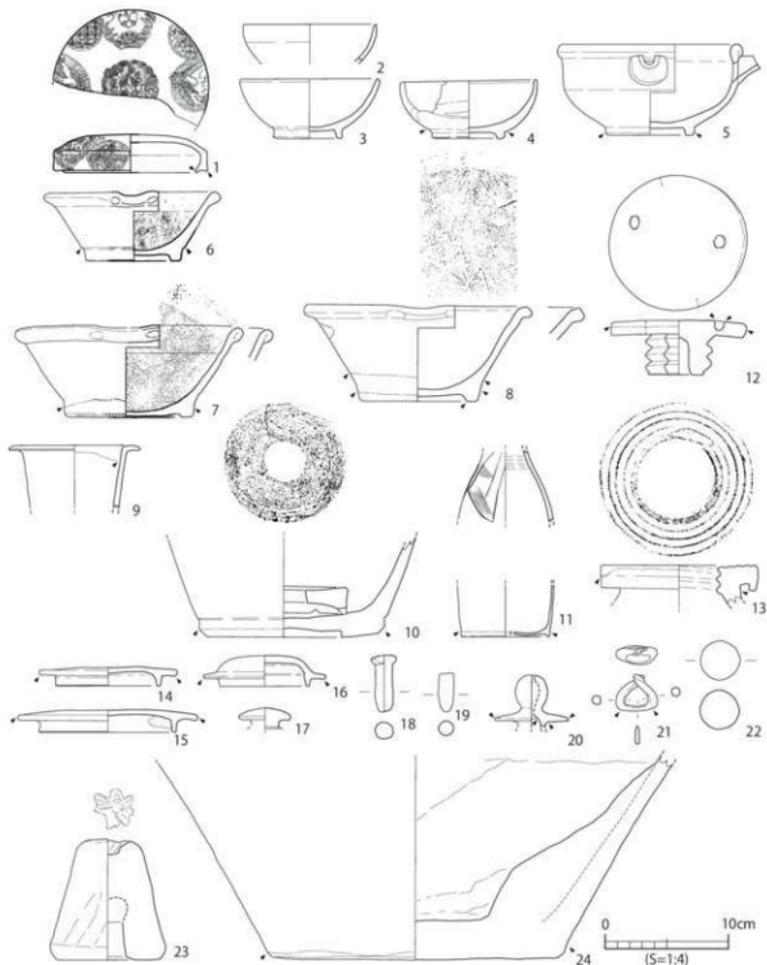
製品の可能性がある。40-10は行平蓋である。外面には飛び鉤が施され、錆軸で蛇の目文が描かれる。40-11～12は焼台(ハリ)である。11は挟りで足を成形する。40-12は器高が高く、上部は開孔して脚部に切り込みを入れる。40-13は来待軸の棧瓦である。厚さ1.6cmでやや薄手に作る。側面の途中から凸面側は無軸となっている。凹面側の2カ所に長さ3cm程の詰め物(ハセ)の剝離痕が残る。40-14は丸瓦の狭端部である。いぶし焼され、凹面には布目圧痕を残す。見えにくいがコビキBだと思われる。石垣1は20世紀第3四半期頃に埋めたものと思われる。

石垣2 調査区の北壁より検出された石垣遺構である(第39図)。石垣1と同様にL字状を呈している。石垣の大部分は壊されて残っておらず、基底部のみ確認された。東西軸は長さ2.75m、高さ0.32m、南北軸は長さ1.08m、高さ0.73mを計測する。北壁に残る石垣断面は高さ0.87mとなる。南北軸の石垣は調査区外である北側に延び、東西軸の石垣は本来は東側に延びて石垣1に連続したと思われる。石垣2の南側には石列による区画が見えるが、これは本窯以前に遡るものと思われる。石垣2は本窯造成土であるII層を裏込め土としており、開窯時に築かれたものと思われる。

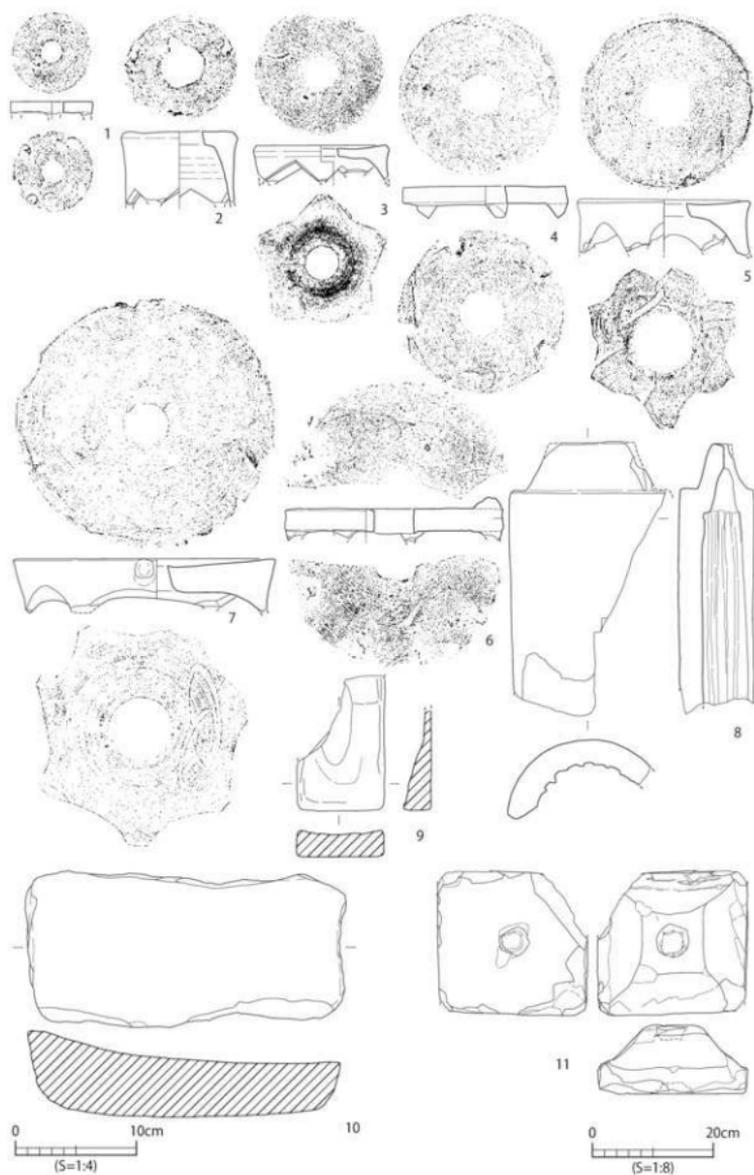
石垣2の外周から出土した遺物は41-1～2である。41-1は来待軸のかかる袖瓦。袖部分は長さ19cmしかなく、非常に短い。41-2は来待軸の棧瓦。凸面側は無軸。全長28.1cmしかなく小型のもの。41-1の袖も短いことから付近に小型瓦による屋根があったが。

1区第2面包含層遺物 1区2面の包含層から出土した遺物は42-1～24、43-1～11である。42-1は染付蓋物蓋である。コバルトとクロムの銅板転写により吉祥の丸文が施文される。推定される産地は有田系であり、年代観は明治20年代以降である。42-2～4は丸形の碗であり、42-2・4は来待軸、42-3は長石軸を施軸する。42-3は釉薬の発色が悪く、42-4の胴部には溶着痕が残る。42-5は長石軸の片口鉢である。口縁端部を折り曲げて丸縁とする。42-6～8は来待軸を施軸した播鉢であり、口縁の一端を押さえて片口とする。42-7と8の内底には重ね焼きの跡が残る、24-8の高台端部は白化粧土を塗る。隙間のない摺目を分割して施している。42-9は折縁形の植木鉢である。来待軸を施軸する。42-10は来待軸を施軸した壺ないし甕の底部で、内底に焼台(ハリ)が付着する。胴部には鉄軸を流し掛け、底部は蛇の目高台である。焼台は中心を開孔し、切込足は6足である。42-11は呉須絵燗徳利である。肩部に白化粧の下塗りを施し、コバルトで笹文が描かれる。底部は輪高台で露胎である。42-12～13は硫酸瓶である。42-12は螺子式の蓋で、42-13は瓶口縁部である。42-12は前後貼り合わせの型造りで成形され、上面のみに来待軸を施軸する。上面には2カ所

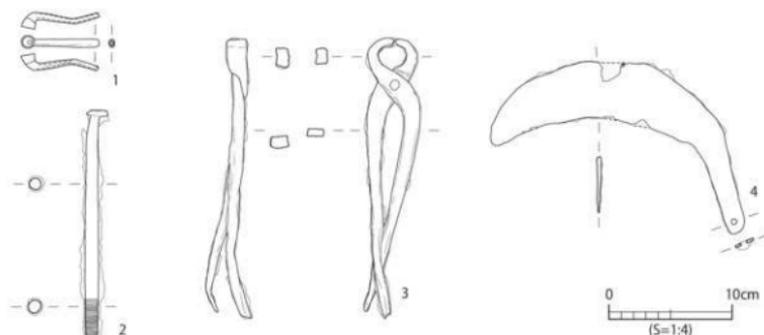
に窪みが見える。42-13は螺子式の蓋を受けるために、内頸に螺旋状の螺子切りを入れる。口縁上面には4条の沈線を巡らす。内外面に来待軸を施釉し、口縁上面を拭き取る。42-14・15は長石釉を施釉した平形蓋である。42-15の内面に砂が付着する。42-16は壺蓋である。上面にひび割れが見える。42-17は来待軸を施釉した壺蓋の摘みである。擬宝珠形を呈する。42-24は甕の底部であり、内面には白色の陶土が充填される。精製された陶土を保管していたものと思われる。42-18～23は窯道具である。42-18～19は瓦詰用の緩衝材(ハセ)である。42-18はピン状の形状を呈し、瓦に挟まれて変形し来待軸が付着する。42-20は軸受けである。円盤状の基底に球状の頭部を貼り付



第42図 1区2面出土遺物実測図(1)(1:4)



第43図 1区2面出土遺物実測図(2)(1:4)



第44図 1区出土金属器実測図(1:4)

けており、下部は破損する。頂部は開孔して下部まで貫通する。上面に長石軸を施軸し、円盤裏は露体とする。手轆軸の軸芯である可能性がある。42-21は色見である。リング状に粘土紐を抱り、上面に長石軸を施軸する。42-22は磁胎の丸玉である。露胎であり、外面は摩耗している。粉砕や攪拌を行うポットミル回転機に入れるミル・ボールと思われる。42-23は円錐形の栓である。底部から中心にむけて指で穴を掘る。頂部が窪んでおり絞り痕がみえる。表面は指ナデで整形されるが、わずかに布目が見えることから押型成形されたものと思われる。外面は被熱により堅く焼き締まり自然軸がかかる。焼成室側壁には室内の様子を確認する色見穴を設けるが、これを塞ぐ栓の可能性はある。43-1～7は焼台である。43-1・3～7は焼台(ハリ)であり、いずれも中心が開孔する。42-1・4・6は糸切で切り出した円盤板に、円錐状の足を貼り付ける。42-3・5・7は切込で足を成形する。内面には篋書きで記号ないし文字が刻まれており、42-3は「二升」、42-4は「キ」、42-7は「四」と記される。42-2は焼台(ヌケ)である。上面の中心が開孔し、円筒の端部を切込で足を設ける。42-8はいぶし焼の丸瓦である。凹面には玉縁部を除き簾状の摸骨痕を残す。玉縁部の凹面には布目圧痕があり、布目を消して簾状の圧痕が残る。側部は凹面側を面取りする。42-9は石製の硯である。軟質の灰色を呈し全体的に摩耗する。使い込まれて陸部分は掘り窪んでいる。42-10は砥石である。長辺の側面には打撃痕があることから、打ちかいて成形したものと思われる。内反側を研ぎ面としている。42-11はデイスイト製五輪塔火輪である。小型で扁平な形態をしている。上面には空風輪を受けるためのほぞ穴を作り出している。軒は薄く、上線のみ隅部で反り返る。下面は平坦で、中央には円形孔を彫り込まれる。44-1は煙管の雁首である。火皿は首部の筒管に直結し、脂返しには括れがない。雁首は下方に湾曲する。44-2は鉄製のボルトである。片方の端部に螺子溝が切られる。44-3は鉄製のやつこ鉄、44-4は鉄製の鎌歯である。

1 中村唯史氏(鳥根眼立三辺自然館)の指導による。遺跡西側に露出する岩盤は泥質片岩で、近隣の石垣等は基本的にこの泥質片岩を使用している。

第4節 2区の調査の成果

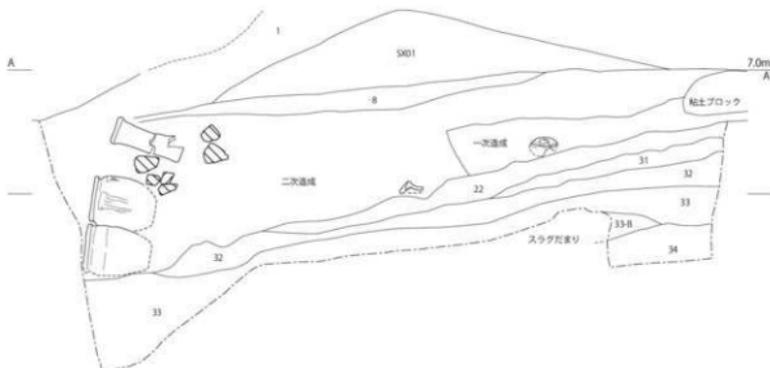
1. 調査区の設定と層序

調査区は、1区東側を通る市道と小河川(西川)の間に設定し、南側には国道261号が通る。付近の標高は約8mで調査前は空き地となっていた。狭長な調査区となったため、中ほどを横断する水路により南と北にわけて調査をおこなった。

重機を使用して表土を除去後、調査区中ほどにトレンチ(中央トレンチ)を設定し、主に北壁の土層を観察しながら掘り下げた。この中央トレンチは1区中央の土層断面(第10図B-B')の延長線上に一致し6区の1トレンチ(第127図)もこの間に収まる。中央トレンチは調査の途中で東側に延長(拡張1トレンチ)し、また、中央トレンチに並行して4m北側に拡張2トレンチを設定した。

2区の層序は中央トレンチの土層(第45図)を中心に説明する。西側では地表から標高7.5m付近まで、東側では標高7m付近までは砂と砂利交じりの土(1にぶい黄褐色砂質土)が厚く堆積し、近年の造成土とみられる。近隣の聞き取りによれば、昭和47年の大洪水による土砂を片付けたものという情報があり、確かに土中には陶器片以外にもガラス瓶などが含まれている。それよりも下層が本田窯跡に関わる土層で、造成土を除去した面が第1面となる。第1面の主な遺構としてはコンクリート製基礎による建物跡(SB04)とレンガを組んだカマド(3号炉・4号炉)がある。また、拡張1トレンチ南壁(第45図)では小規模な物原であるSX01がかかっている。

第2面は8灰白色粘土の下面が第2面である。拡張1トレンチ南壁では二次造成面上面に連続す



1 10YR6/4 にぶい黄褐色砂質土 洪水層

SX01 10YR6/4 にぶい黄褐色砂質土 多量の陶片、窯道具を含む

8 10YR7/1 灰白色粘土

二次造成 7.5YR6/6 硬雑土 窯垣近くは人頭大の大きな白を、一時造成近くには陶片を多量に含む

一時造成 10R5/8 赤色砂質土 土ぶし大の石、白色粘土ブロック、大量の陶片を含む

22 10YR5/3 にぶい黄褐色細砂層

31 10YR4/3 にぶい灰褐色砂層

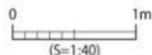
32 10YR4/4 褐色細砂層 白色粘土の粒、炭を含む

33 10YR3/4 暗褐色細砂層 白色粘土の粒、炭を少し含む スラッグの小片を含む

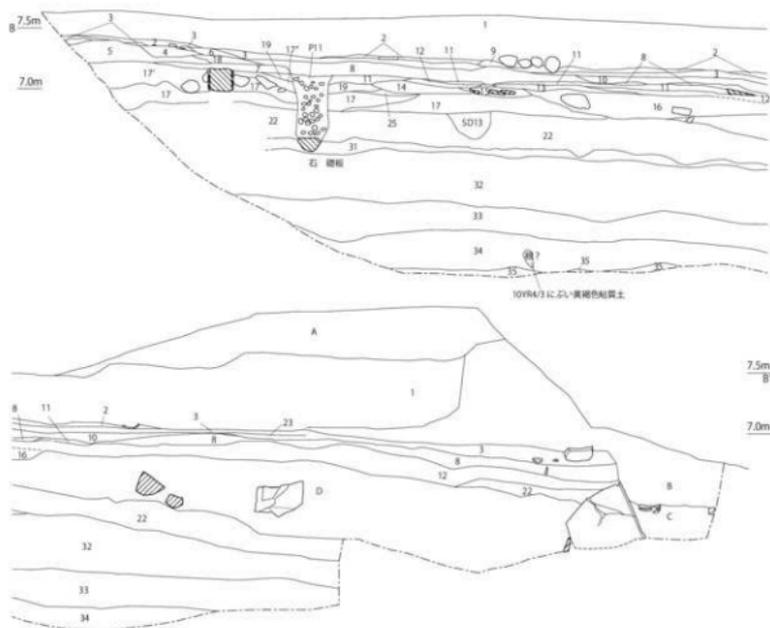
33-B 10YR3/4 暗褐色細砂層 白色粘土の粒、スラッグの小片を含む 水溜りによるスラッグ溜り(洗滌されその隙間に堆積した層)

34 10YR7/4 にぶい黄褐色細砂層 ラミナが見える

スラッグ灰まり 10YR3/2 黄褐色粘質土を含むスラッグ、小石の層 二次堆積

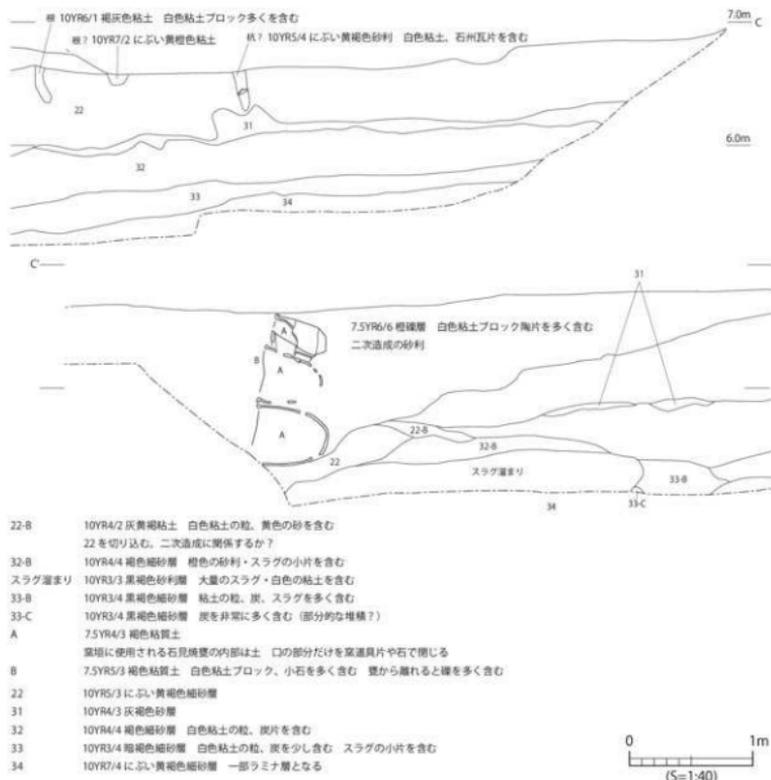


第45図 2区拡張1トレンチ南壁土層断面図(1:40)



- | | |
|--|---|
| <p>1 10YR6/4 にふい黄褐色砂質土 (中粒砂主体) 洪水層、表土
 2 10YR4/3 にふい黄褐色粘粒土 (極細粘砂主体) 灰を少量含む
 3 10YR3/1 黄褐色粘質土 (極細粘層〜シルト主体) 灰を多量に含む
 4 10YR1/7 黒色粘粒土 (極細粘砂主体) ほほ灰 濃横か?
 5 2.5YR/1 灰白色粘土 砂粒含む 極細粘含む 極細粘層 1面?
 6 7.5YR5/8 明褐色粘土 中粒粘含む粘土
 7 10YR4/3 にふい黄褐色粘砂土 (細粘砂主体) 11と同じ
 8 10YR7/1 灰白色粘土 極細粘砂含む粘土 1面?
 9 10YR4/2 灰黄褐色粘砂土 (極細粘砂主体) 黄褐色の粘土ブロック含む
 10 7.5YR8/1 灰白色粘土 極細粘砂多く含む (1面?) 5と同じか?
 11 2.5Y4/2 暗灰黄色粘砂土 (極細粘砂主体) 灰白色粘土ブロック含む 7と同じ
 12 2.5Y7/2 灰黄色粘土 中粒砂少し含む粘土 (2面?)
 13 10YR7/6 明黄褐色粘土 極細粘砂多く含む粘土 (2面?)
 14 10YR7/1 灰白色粘土 極細粘砂多く含む粘土
 15 10YR4/3 にふい黄褐色砂質土 細粘砂含む極細粘砂 コンクリートの小片を含む
 16 10YR4/3 にふい黄褐色砂質土 細粘砂含む極細粘砂 明褐色粘土ブロックを少し含む、コンクリートの小片・礫を含む
 17 2.5Y6/2 灰黄色粘土 (シルト主体) 細粘砂〜極細粘砂含む 3面濃横面?
 18 10YR7/6 にふい明黄褐色粘砂層 (シルト主体) 大きな灰色ブロックを含む
 19 10YR7/1 灰白色粘土 (シルト主体) 白色粘質ブロックを多く含む
 20 2.5Y6/2 灰黄色粘土 (シルト主体) 黄色粘土ブロック (中) を含む
 21 2.5Y5/1 灰白色粘土 (シルト主体) 白色粘土ブロックを含む 2面?
 22 2.5Y5/3 黄褐色粘質土 色粘土ブロック (中) を多量に含む
 23 2.5Y8/2 灰白色粘土 (細粘砂主体) 極細粘砂〜中粒砂含む 陶土?
 24 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂質土 (細粘砂主体) 洪水層 3面?</p> | <p>A 10YR5/3 黄褐色砂質土 表土、洪水層
 B 10YR8/4 浅黄褐色粘質土 陶片、礫を含む
 C 10YR7/6 明黄褐色粘砂層
 D 7.5YR6/6 暗褐色 二次造成 地山の礫を含む</p> |
|--|---|
- 31 10YR4/3 にふい黄褐色粘砂層
 32 10Yr4/4 褐色粘砂層
 33 10YR3/4 暗褐色粘砂層 白色粘土の粒・鉄滓の小片を含む
 34 10YR4/3 にふい黄褐色粘砂層 上に鉄滓 ラミナ層
 35 10YR4/3 にふい黄褐色粘砂層 直上の層と基本的には同じ

第46図 2区中央トレンチ土層断面図(1:40)



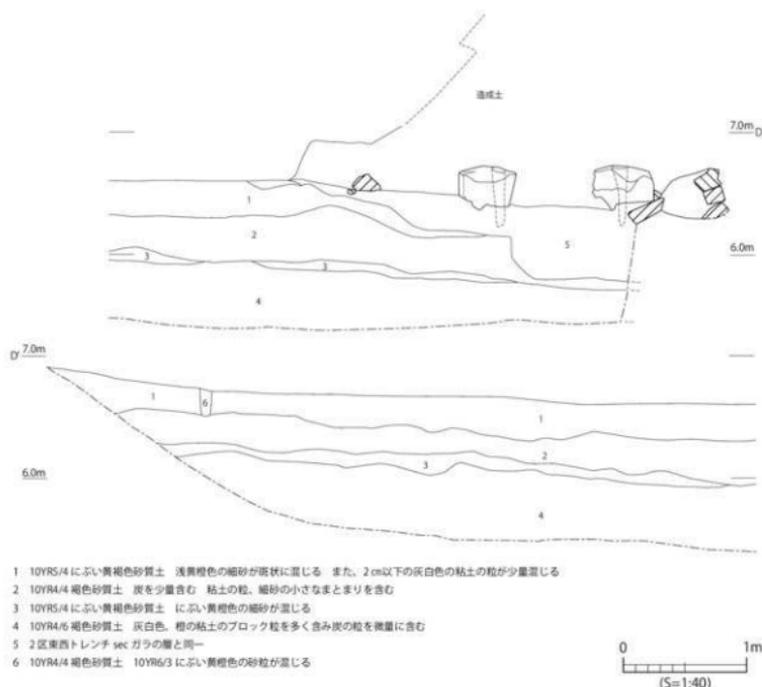
第47図 2区拡張2(南壁)土層断面図(1:40)

る。この面にはコンクリート製のブロックによる支柱(コンクリート基礎1)や白色粘土溝がみられる。南水簸施設もこの時点では機能していたであろう。第1面から第2面の間には大量の白色粘土の堆積がみられる。白色粘土は陶土そのものと思われ、南北水簸施設の他、6区でも発見された水簸施設によって大量の陶土が精製された結果とも思われるが、それが遺跡全体に大きく流出している理由はわからない。白色粘土と交互に堆積している砂層は水害によるものと思われるが、そのたびに大量の陶土が流出した様子が想像される。

第3面は16にぶい黄褐色砂質土・17白色粘土の下面で、22オリブ褐色砂質土の上面となる。この面の上に石見焼大甕を使用した二次造成面・一次造成面が造られ、作業面の拡大がはかれたほか、SD13が掘られ区画が造られる。南水簸施設が機能し北水簸施設もこの時期と思われる。

第4面は32灰褐色砂層の上面で、2区で確認できるもっとも古い面である。第3面を形成した22オリブ褐色砂質土が厚く堆積しており、洪水によると考えられる。

これより下層は基本的に砂層でほとんど遺物を含んでいないが、拡張1トレンチ南壁や拡張2ト



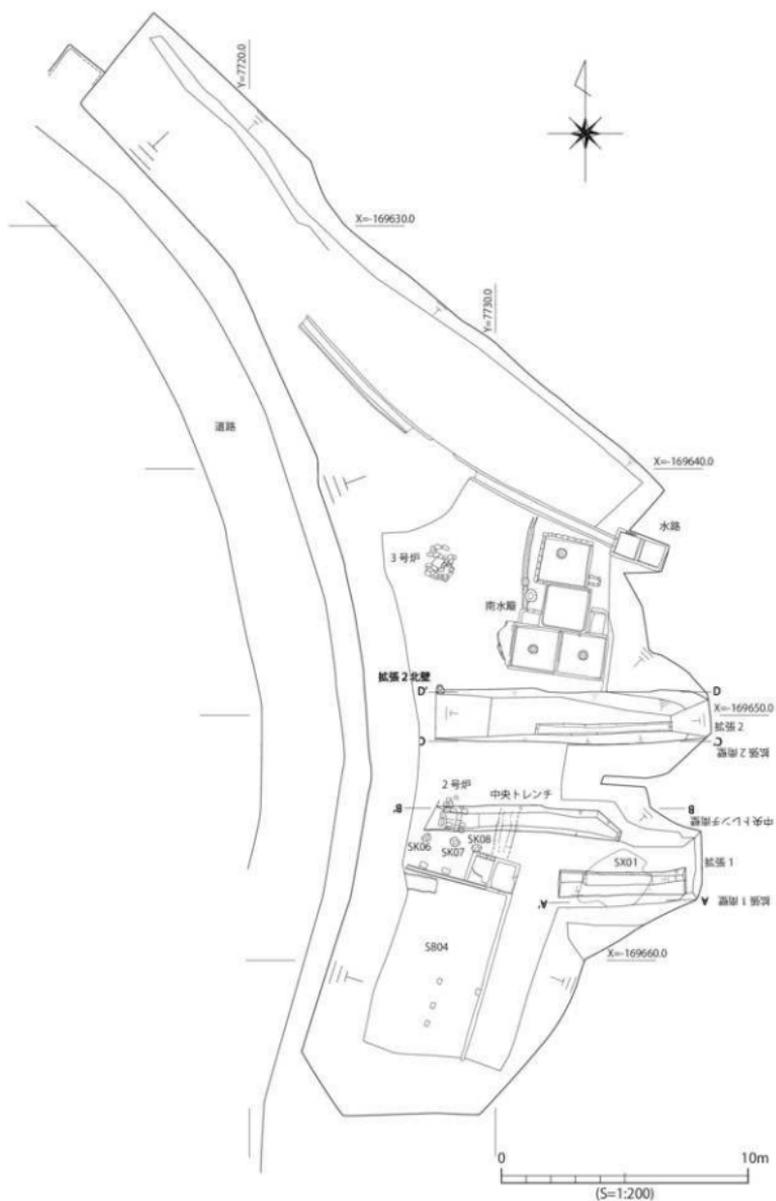
第48図 2区拡張2(北壁)土層断面図(1:40)

レンチ南壁の標高5.5m付近ではスラグ溜がみられる。スラグの堆積は地表下約2mで、スラグ自体は角が取れた小片となっている。砂も複雑にかき回されたような堆積となっており、強い水流によって流されたように見える。この層にはスラグ以外の遺物は含まれていない。

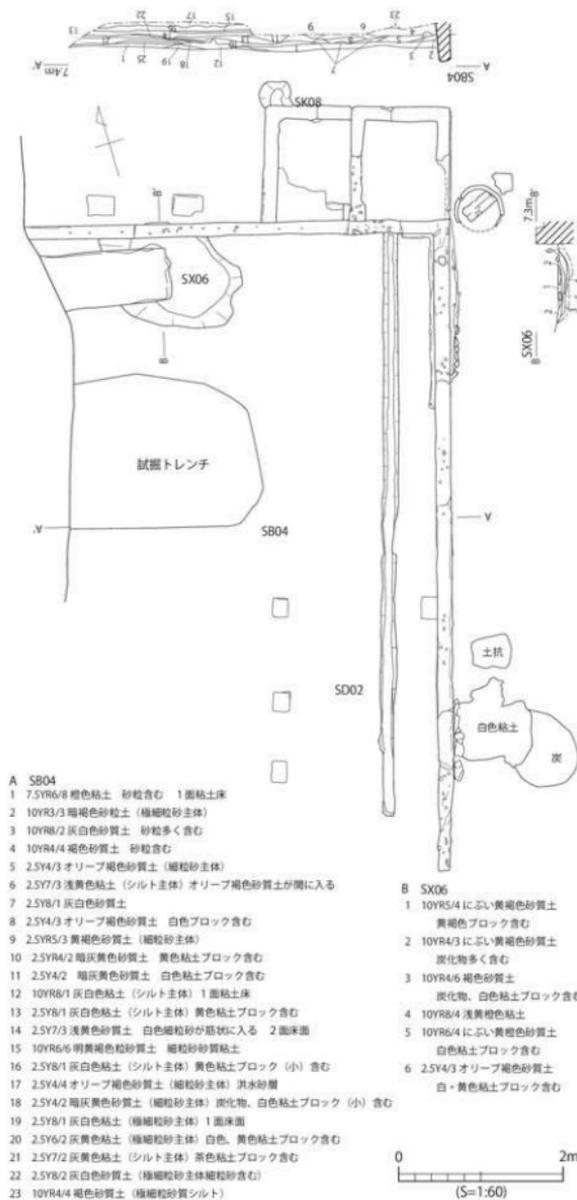
2. 第1面の遺構・遺物

表土直下から続く洪水砂を除去すると第1面の遺構が現れる(第49図)。第1面の遺構はコンクリート製の建物基礎(SB04)や水廠施設のほかにレンガを用いた炉がみられる。

SB04 SB04は調査区南端で検出したコンクリート製の建物基礎である。南北5.2m、東西3.8mにわたって検出し、西側の角を令和5年度になって6区で検出した。よって、東西は7.4mを測る。また、北東隅には北側に張り出してトイレを設けている。基礎は幅18cm、高さ30cm以上で、骨材に5cmほどの丸石を多量に含んでいる。下部の構造はわからない。内部の土層が細かく分層されているが、1褐色土がSB04の床面か。南北方向に延びる基礎に平行して幅約50cm、長さ6.5mの浅い溝が掘られている。土層断面の22灰白色砂質土か。土層図でみる限りSB04床面より深い位置にある。用途はわからない。建物の北東角に接して設けられているトイレから排水路が北へ伸び、中央トレンチ内で消滅している。トイレ東側の埋喪遺構は下層の遺構と思われる。



第49図 2区1面遺構配置図(1:200)

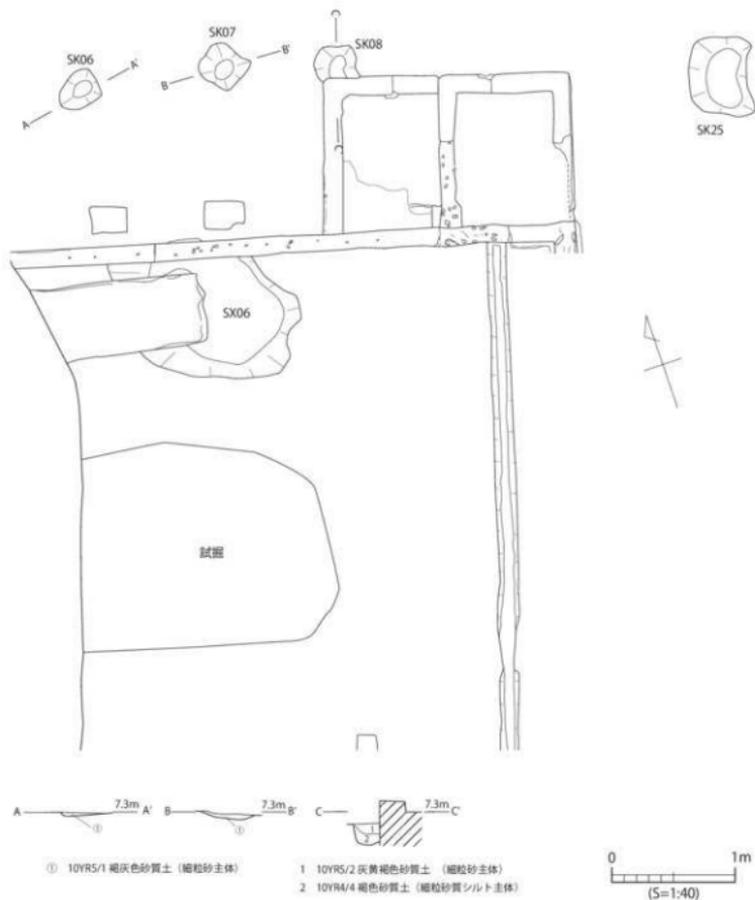


第50図 SB04実測図(1:60)

SB04北西隅に長径150cm、深さ約40cmの土坑がある。遺物はなく用途はわからないが、その上に長さ140cm以上、幅32cmのコンクリートが転倒していた。同様のコンクリート塊は6区でも出土している。このコンクリート塊はSB04の壁の一部だった可能性がある。このコンクリートの下から鉄製分銅(109.5)が出土した。

SB04南側の基礎の外側には何らかの遺構があったらしい。コンクリート基礎の外側に沿って角礫5個程度を並べ、その外側に白色粘土が入った土坑と円形の炭溜がみえる。円形の炭溜を切って白色粘土が詰まった不整形の土坑が掘られているように見え、その北側の円形の土坑は黒褐色の土が入っているようにみえる。6区でも基礎の外側に施設が発見されており、同様のものがSB04の各面にあったか。この付近では漆椀蓋(109.6)が出土しており、この炭溜にともなうものか。

SB04の周囲にはレ



第51図 SB04周辺の遺構実測図(1:40)

ンガ2基が置かれたほか、小さな土坑(SK06～08)がみられる(第51図)。いずれも浅いもので用途はわからない。

SB04出土遺物 第52図にはSB04から出土した遺物を示した。52-1・2は平形蓋で、52-1は長石軸を、52-2は米待軸をかける。いずれも完形品で粘土面の上面から出土した。52-4はガラス製のインク瓶である。背面に「30cc PILOT MADE IN JAPAN、底面に「□50」がみえる。52-4はガラス製のソース瓶である。側面下端に「一石」底面に「63 IKARI SAUCE CO..」がみえる。いずれも透明なガラスを



第52図 SB04出土遺物実測図(1:4)

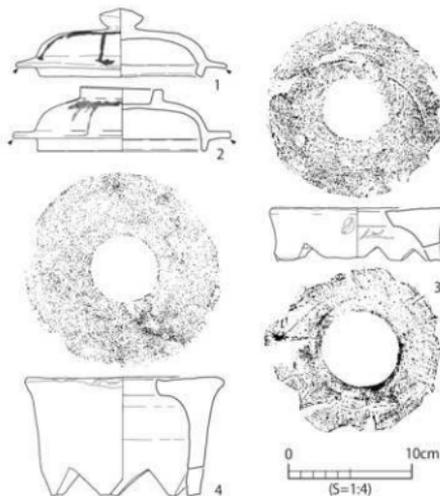


第53図 2号炉実測図(1:40)

とした堆積で洪水により洗われた様子が想像される。焚口は南に開口する。遺物は出土しなかった。

3号炉(第59図) 2区中ほどの南水廠施設西側の市道下で検出したカマドである。挿図の配置の都合で2面目の図面に入れ込んだが1面の遺構になる。2号炉と同様にレンガを囲って炉としたものだが、レンガは $28 \times 18 \times 18$ cmとやや小型か。焚口は幅26cmで、奥行63cmである。奥側がやや丸みを持って組まれているように見える。また、3号炉はカマドの外側のレンガが残っており、長さ103cm、幅約130cmほどの規模があったようだ。焚口はほぼ真西に開口する。内部には洪水砂が入り込んでいるが、その下には炭層があり炭層から多量の鉄製品が出土した。出土した鉄製品は丸釘と鉄線だったため図示していない。木箱などの廃材を燃やしたものであろう。

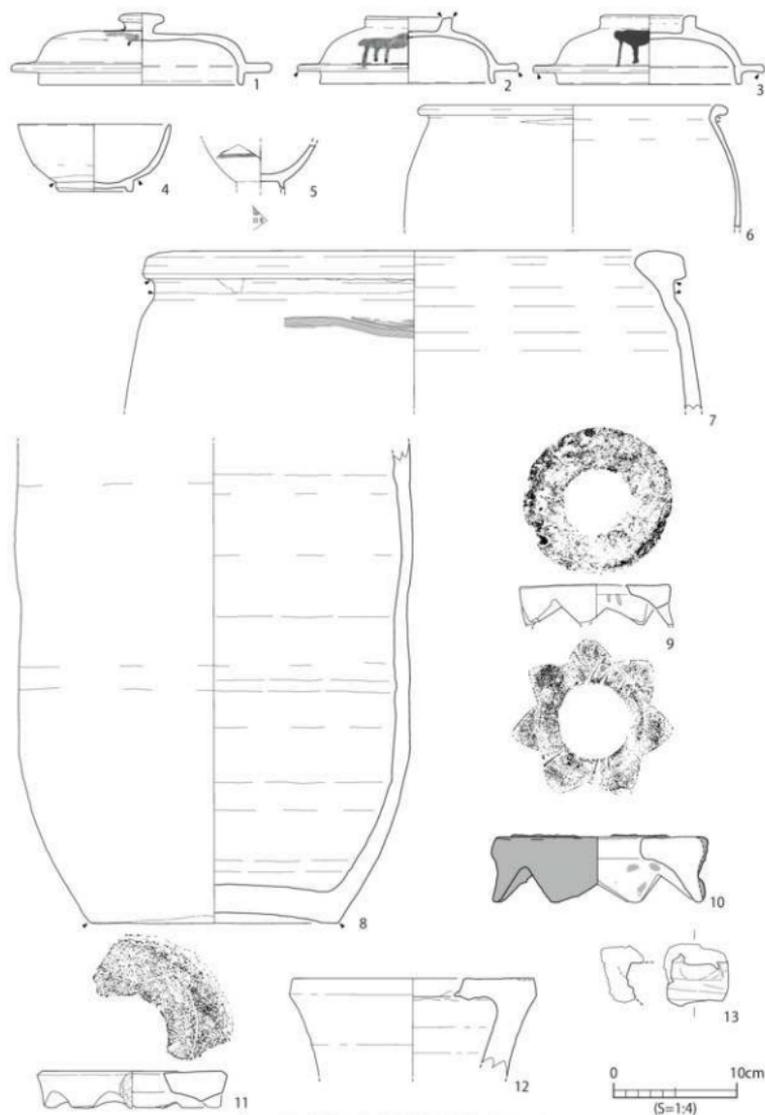
拡張1出土遺物 第54図には中央トレンチを東側に拡張した際に出土した遺物のうち、SX01にと



第54図 拡張1出土遺物実測図(1:4)

もならないと判断された遺物を示した。54-1・2は壺の蓋である。54-1は来待袖をかけたもので暗褐色を呈す。つまみの周囲に黒色の鉄釉で環珞文風に輪から6方向に釉が流れる文様を施す。54-2は輪状つまみを持つものになる。薄い緑色を呈した長石釉をかけ、三方向にコバルトによる流し掛けを施す。

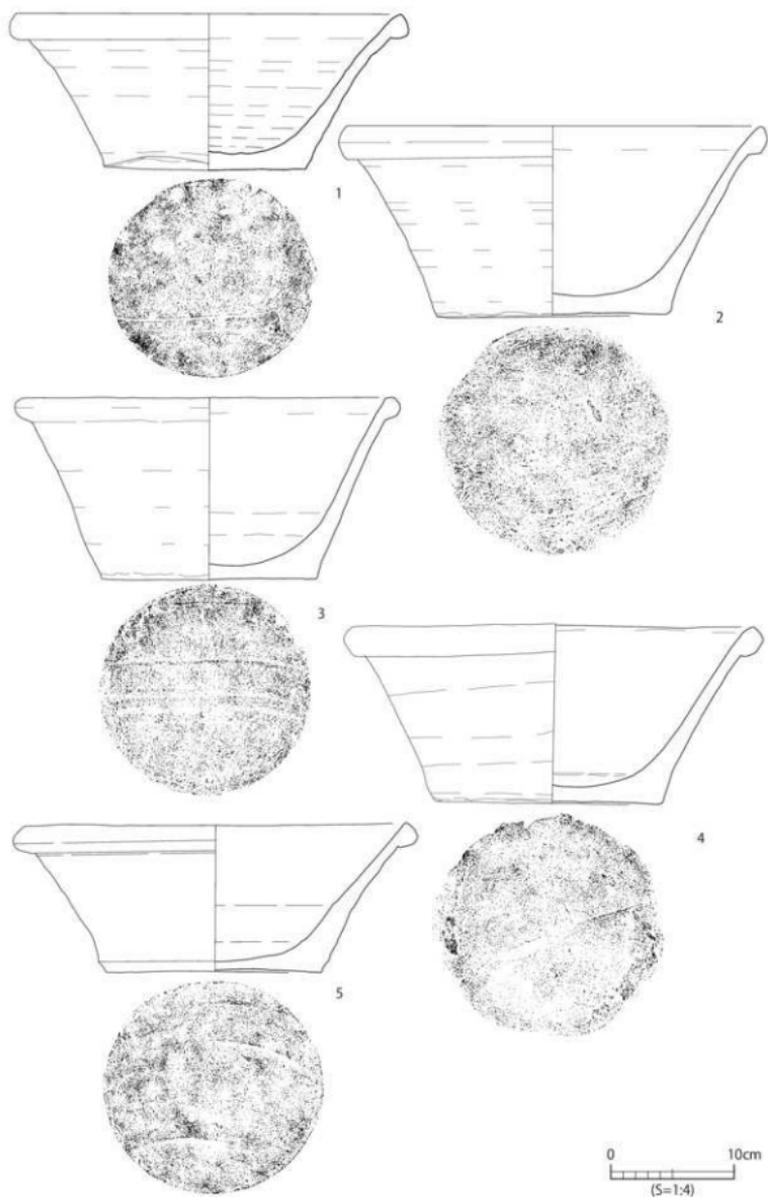
54-3・4は石見焼でハリと呼ばれる焼台である。脚端部が剝離し使用された痕跡を残す。いずれも上面には回転糸切痕を残し、ヘラで底部に切込を入れ7足を切り出すものである。54-3は側面に親指の先による半円形のくぼみを残し、内面にヘラ記号を入れている。また、理由はわからないが、足を切り出した後にさらにヘラで切り目を入れた部分



第55図 拡張2出土遺物実測図(1)(1:4)

がある。54-4は体部の高いものである。

拡張2出土遺物 第55・56図には中央トレンチ北側4mの位置に平行して設定した拡張2トレンチの遺物を示した。55-1～3は壺蓋である。55-1・2は長石軸をかけコバルトによる流し掛けを、55-3



第56図 孤張2出土遺物実測図(2)(1:4)

は来待軸をかけ鉄軸による流し掛けを施すものである。55-1は外面に砂目の痕跡を残す。また、55-3は内面に円形の焼台があたった痕跡がある。55-4は丸形椀である。来待軸をかけたもので褐色を呈す。見込み部分に灰かぶりがみられ、外面には少量の耐火砂が付着する。

55-5は飯椀形色絵椀である。外面を釉下銀彩する。底部に陽刻印で「岐113」銘があることから岐阜笠原町本郷の水野源太郎が昭和14～21年に製作したものと思われる。

55-6は来待軸をかけた甕である。体部が薄く作られる。内面を含め全面に施軸されるが、頸部はふき取る。文様はみえない。55-7は甕の口縁部である。全面に来待軸を施すが、頸部外面は軸をふき取る。肩部に櫛による波状文を描く。55-8は硫酸瓶の胴部である。2カ所に継ぎ目があり内面に強く凹凸を残す。胴の張りが少なく体部が直線的に長く伸びるものである。底部の切り離しはみえないが、糸切後ナデか。体部に流し掛けがみられず体部が直線的に伸びる。

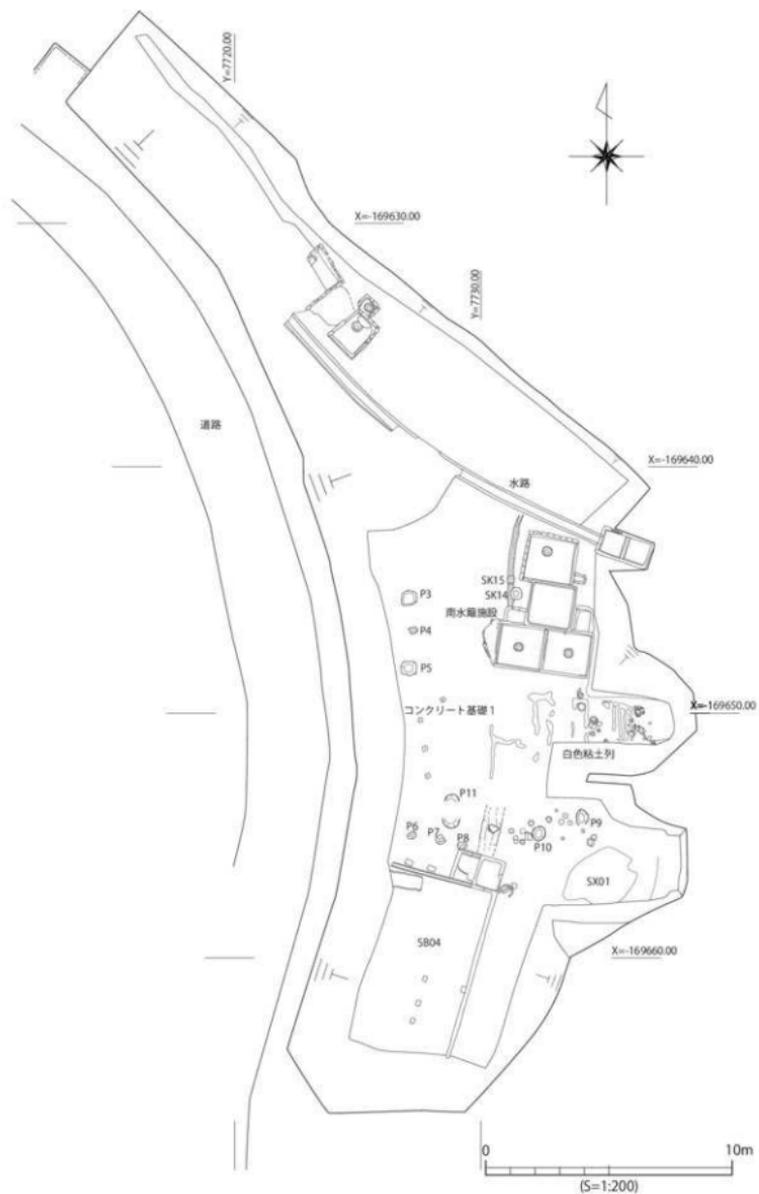
55-9～11はハリと呼ばれる焼台である。55-9・10はヘラで脚部を三角形に切り出すが、55-11は半円形にくりぬくものである。55-9の内面にはヘラ記号があり「三」か。55-10の外面は使用により全面に軸がかかったようにガラス化している。55-12はヌケと呼ばれる円筒形の焼台である。55-13は窯壁の一部か。

第56図は拡張2トレンチで出土した、陶土の脱水に使用する素焼きの盛鉢である。平らな底部から斜め方向に体部が伸び、口縁外面を玉縁状に作る。体部外面と内面には指によるロクロ目を強く残す。底面は、確認できるものはいずれも静止糸切で、糸切後にヘラ削りを施すもの(56-1・3)がある。

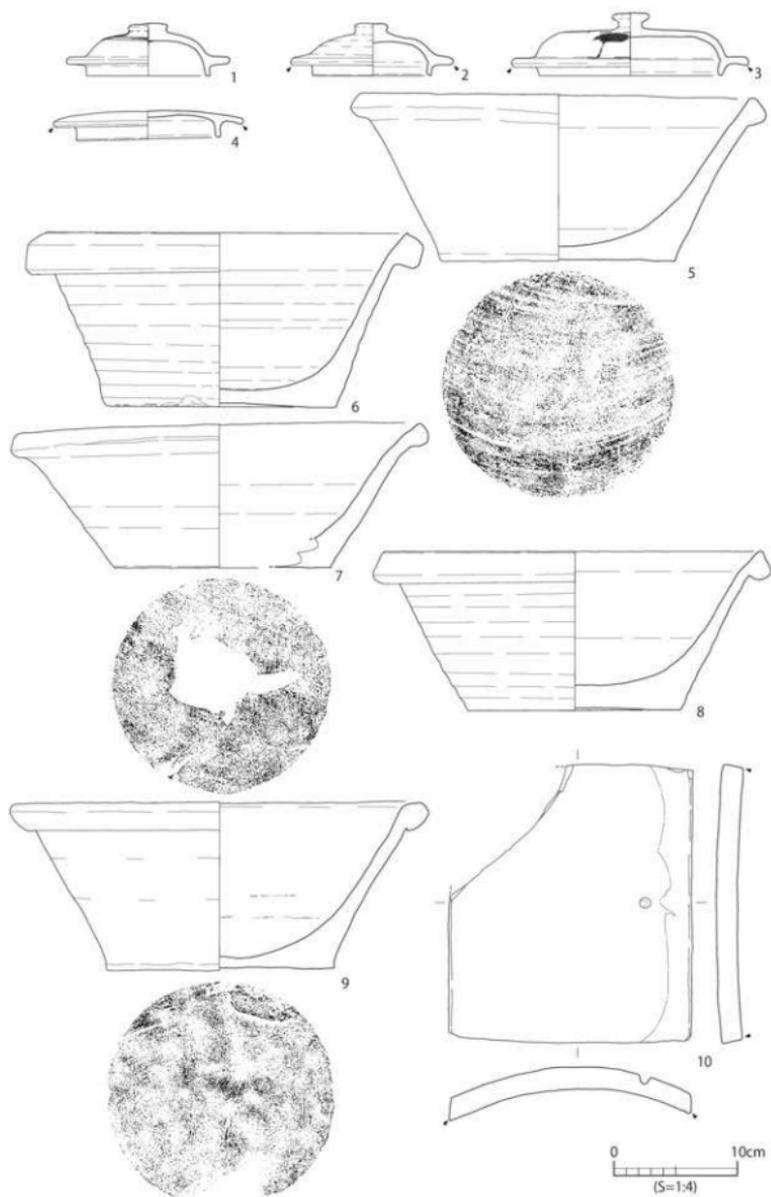
3. 第2面の遺構・遺物

第57図には2面目で検出した遺構を示した。南水施設を中心とするコンクリートによる施設の建設が進んだ時期で、第1面目の中心的な遺構であるSBO4もこの段階で存在していた可能性が高い。

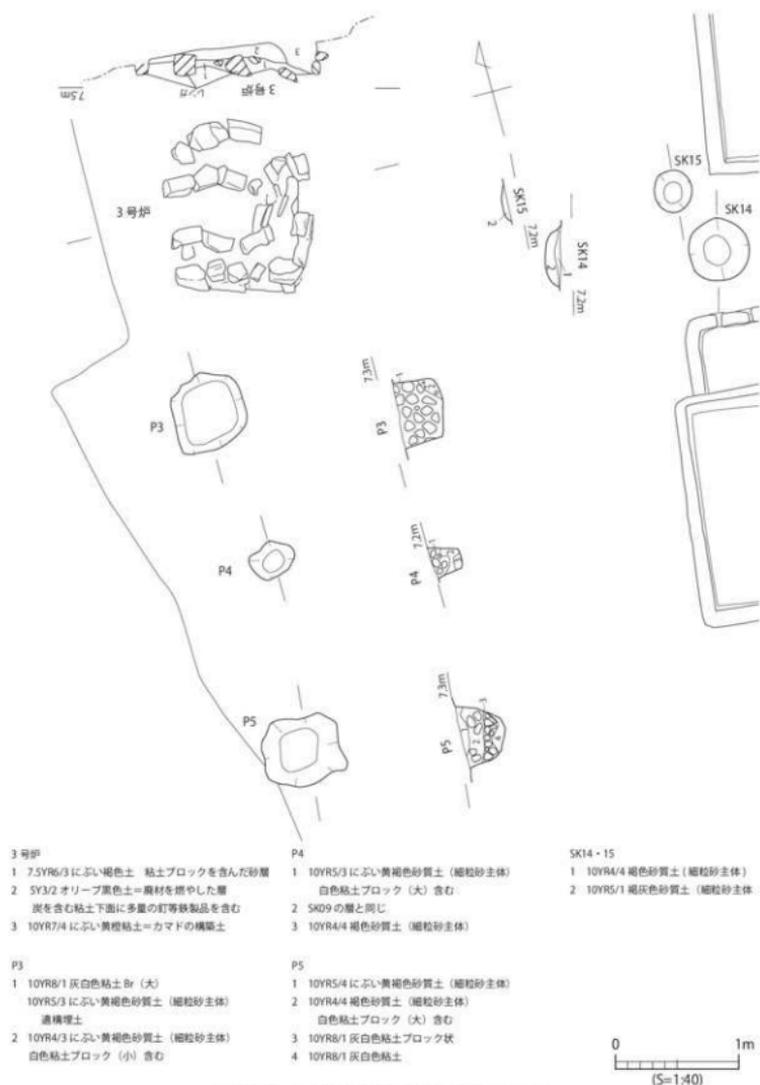
白色粘土列 南側水施設施設の南側から拡張2トレンチにかけては、完形品の蓋や盛鉢が点々と出土した。この付近では発掘支援業者がおこなったドローンによる空撮で白色の粘土が筋状に堆積している様子が撮影された(図版23)。この白色粘土列は調査時に遺構として認識せず、堆積状況を確認していない。このため白色粘土層が溝か畝なのかは不明で、第57図には空撮からみえる線を示した。この遺構は石見焼でオロ⁽¹⁾と呼ばれる陶土の一次脱水施設の痕跡だった可能性が考えられる。オロとは水施設で得られた泥状の陶土を脱水するため、杭を打ってその上に長方形の枠を組み、竹と篋で断面三角形の籠状の構造を設置したもので、多量に水分を含む泥状の陶土を入れ、篋を通して脱水する。直下は水が落ちるため地面が洗われ、その周囲に染み出した陶土が畔状に残る様子を想像している。確認できる範囲は東西約6.3m、南北約3.2mの範囲である。用途がわからないが、周囲には陶器蓋の完形品が転々と置かれており、踏み石のような使われ方をしたか。第58図は白色粘土列で出土した遺物である。58-1～3はつまみをともなう壺蓋である。58-1・2は長石釉で、58-1はコバルトによる二重圈文を、58-2は三方向に流し掛けを施す。58-3・4は来待軸を施すもので、58-4は平形蓋である。58-5～9は盛鉢である。確認できるものは底部に静止糸切痕を残す。58-6は口縁外面の玉縁部分が大きく体部が直立気味である。58-10は来待軸を施す甕斗瓦である。凹面側部近くに側部に並行して2条の滑り止めの溝を入れる。釘穴が貫通していない。



第57図 2区2面遺構配置図(1:200)

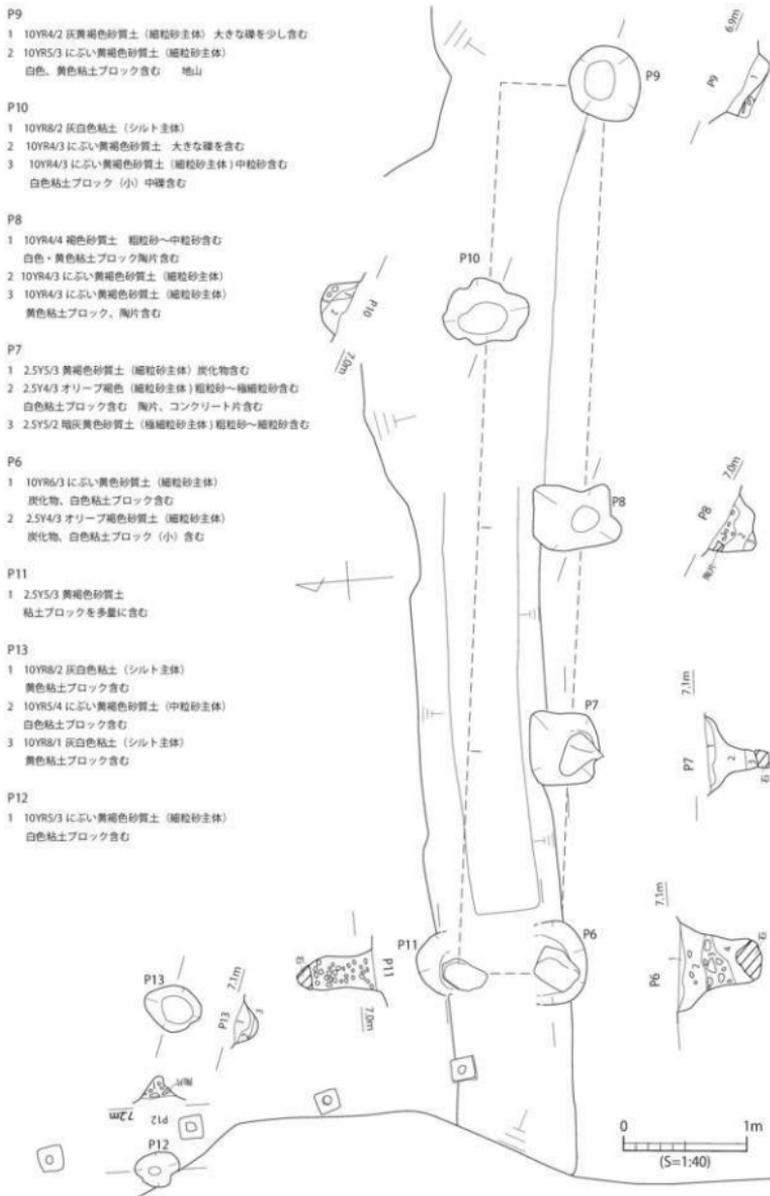


第58図 白色粘土列周辺出土遺物実測図(1:4)

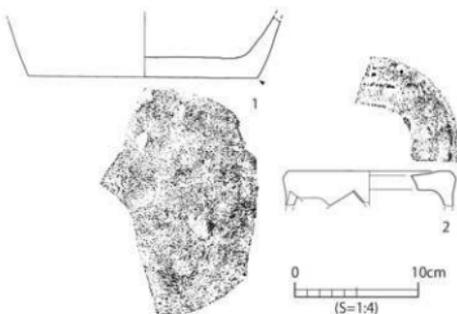


第59図 南水施設西側の遺構実測図(1:40)

水施設西側の遺構(第59図) 水施設西側では第1面の遺構である3号炉を検出したほか、その下方南側からは柱穴と思われる落ち込み3基(P3～5)を検出した。約1.4m間隔にあり、中央にあるP4だけが小さく浅い。西側に延びる簡易な建物か棚の妻側と思われる、P3・5は側柱の可能性がある。南水施設の横にも浅い落ち込み(SK15・16)がみられるが用途はわからない。



第60図 2区南中央トレンチ付近遺構実測図(1:40)



第61図 P8出土遺物実測図(1:4)

では扁平な石による礎盤が入られていることから重量物を載せた施設が想像される。

北西側に離れて2基の柱穴(P12・13)がみられるが、いずれもごく浅い落ち込みとなっている。

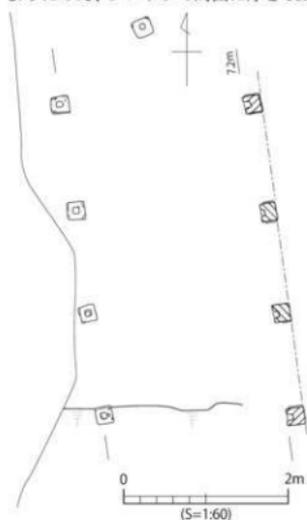
P8の最下層からは遺物が出土している。61-1は甕の底部で、底面を除き来待軸を施す。礎盤の代わりと思われる。61-2は上面に回転糸切痕を残す焼台(ハリ)の小片と思われる。埋土に混入したものであろう。

コンクリート基礎1(第62図) 中央トレンチの土層断面(第46図)には頂部に不整円形の穴が開いたコンクリート製の直方体がかかっている。これはコンクリート製のブロックで、支柱を支える基礎となっており、ほぼ同様の形状のものが北へ向かって約1.2m間隔で3基、北東に外れて1基の計5基がみられた。土層図(第46図)では17白色粘土層にブロックの周囲の直近で掘り込まれているようにみえ、ブロックの周囲に厚さ1cmほどの褐色の粘質土がみえる。この褐色の粘質土は型枠の

木材そのものと思われ、17白色粘土を掘り込んで木製の型枠を設置し、コンクリートを流し込んで設置したと思われる。これらは簡易な棚などの基礎と思われる。南水簾施設などに近い位置であることから、陶土の二次脱水施設である盛鉢棚の支柱などの可能性が考えられる。よく似たコンクリート製の基礎は西側の6区でも検出しているが、6区のは頂面の支柱孔が細く方形を呈している。

第63図はコンクリート基礎1のもっとも南側に置かれた1基で、中央トレンチにかかっていた。

上面は18×18cmの正方形で高さは20cmである。中心をわずかに外して直径11cm、深さ13cmの穴があり支柱を立てている。穴の底面は波打っており、支柱側の形状を反映しているか。穴の内壁には縦方向に多くの筋が入っており、支柱の木目にセメントが入り込んだものであろう。また穴の内部には炭化した木質が残っていることからからも木製の支柱だったことがわ

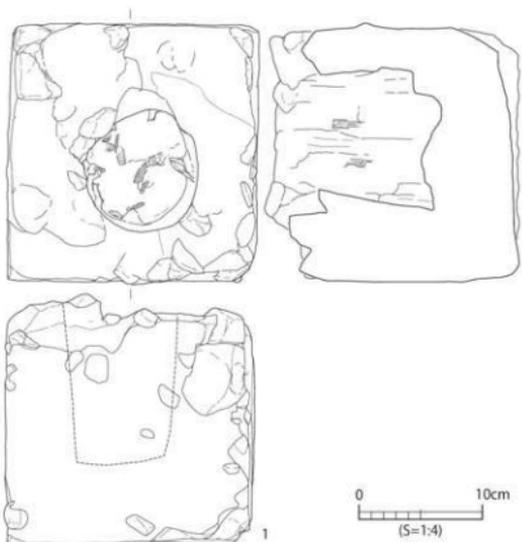


第62図 コンクリート基礎1実測図(1:60)

中央トレンチ付近の遺構(第60図) 中央トレンチの周囲では6基の柱穴(P6～11)を発見したが、位置関係からあと4基が中央トレンチ内にあった可能性が高い。P11は第46図の土層断面にかかっており、遺構の掘り込み面が非常に高いことがわかる。6区ではこの続きを検出していないことからこれ以上西に延びることはなく、4×1間の簡易な建物か棚と思われる。桁行約7m、梁間約80cmである。P6・7・11

かる。使用されるセメントには大きなものでは5cmほどの玉石が骨材として大量に入っている。セメント自体は非常にもろく、持ち上げただけでも多量の砂が落ちる。

土層断面に型枠によるとみられる炭化物層がみられるほか、支柱孔の内面のセメントに木目に入り込んだと思われる筋がみえることから、あらかじめ成形して固化したコンクリート基礎を設置したのではなく、現地に穴を掘って型枠を設置し、支柱を立てた上でコンクリートを流し込んで固めたと思われる。



第63図 コンクリート基礎実測図(1:4)

SX01 中央トレンチの東側

に拡張1トレンチとして調査区を広げた際に、洪水砂の直下から陶器・竈道具類が多量に出土する一角を検出した。物原の一部と考え掘削したが、調査後にSX01とした。

陶器類が出土したのは南北3.3m、東西2.4mの不整楕円形の範囲で厚さ約40cmである。掘り込みはなく平坦な面に堆積している。SX01の土層はにぶい黄褐色砂質土としているが、陶磁器片が主体となり洪水による土が混じっている状態である。土層断面の南側では2オリーブ褐色砂質土が被ってみえ、陶器片などを1カ所に集め、それが洪水砂に埋まった状態だったことがわかる。第64図でSX01西側に点々とみえるのはレンガで、陶器片と同様に寄せられたものの可能性がある。

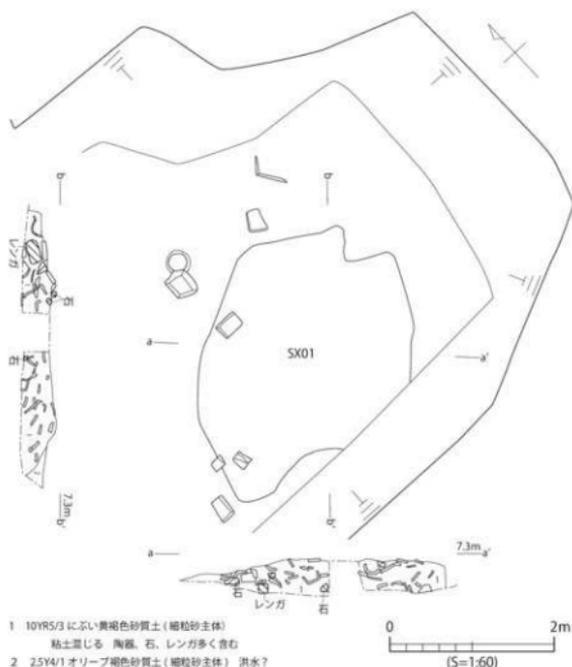
第65図はSX01から出土した陶器類である。65-1～3は長石軸を施す壺蓋である。65-1は3方向の流しがけを、65-3はつまみを囲む円から流れる落ちる文様をコバルトで描く。環珞文風の文様である。65-4・5は長石軸を施軸する平形蓋である。65-5は頂部にひび割れが入っており、破損品として廃棄されたものであることがわかる。

65-6～8は長石軸を施す丸形碗である。65-6・7は厚い軸が口縁部から流れ落ちており、65-6口縁端部の軸がはげ落ちている。65-8外面に軸の2度掛けの痕跡を残す。

65-9は来待軸を施す壺の蓋である。つまみ頂面の軸をふき取り内面側には焼台(ハリ)の爪痕を残す。焼台の方向が正位だったとすると碗だった可能性があるが、つまみの内側が薄く作られていることから蓋と判断した。

65-10～12は来待軸を施す搦鉢である。65-10の底部外面には摺目のスタンプが残り、重ね焼の際に焼台を使用していない。65-11は口縁外面を玉縁状に、65-12は口縁外面を分厚く作るものである。

65-13・14は長石軸の捏鉢である。口縁端部を強く外側に折り曲げるものである。外面の下方に



第64図 SX01 実測図(1:60)

す体部が直線的に伸び、口縁部外面を玉縁状に厚く作る。内面側の指ナデ痕は消えているものが多く、使用による摩滅か。66-2は底面に回転系切痕を、他は静止系切痕を残す。66-3・4は底部中央に外面から水抜き穴を開ける。

66-5・6も素焼きの浅形鉢であり盛鉢の一種か。口縁部外面の玉縁を作らない。

第67図はSX01で出土した焼台で、67-1～5はハリと呼ばれるものである。いずれも脚端部が剥離し、使用された形跡がある。67-1は回転系切で切り出した円盤に三角形の足を張り付けた形状である。円盤と脚部には灰色粘土を使用し、本体とは胎土が異なる。4足分が残存しており5足あったか。67-2～5は円筒形の下端部にヘラで切り目をいれる。67-2側面上部には指を押し当てたくぼみが、67-4の内面にはヘラ記号がある。67-5はやや大型のもので頂面には板目痕を残す。67-6は円筒形の焼台である。頂面に回転系切痕を残す。頂面以外はナデ調整し、脚部を分厚く作る。

コンクリート水路・集水升 2区中ほどの南水簸施設北側にはコンクリート製の水路と長方形の集水升が作られていた。この内、集水升の上部は調査前から地表に露出しておりその存在を把握したが、溝は埋没していた。表土除去後に北側に向けて連続する水路とともに検出した。

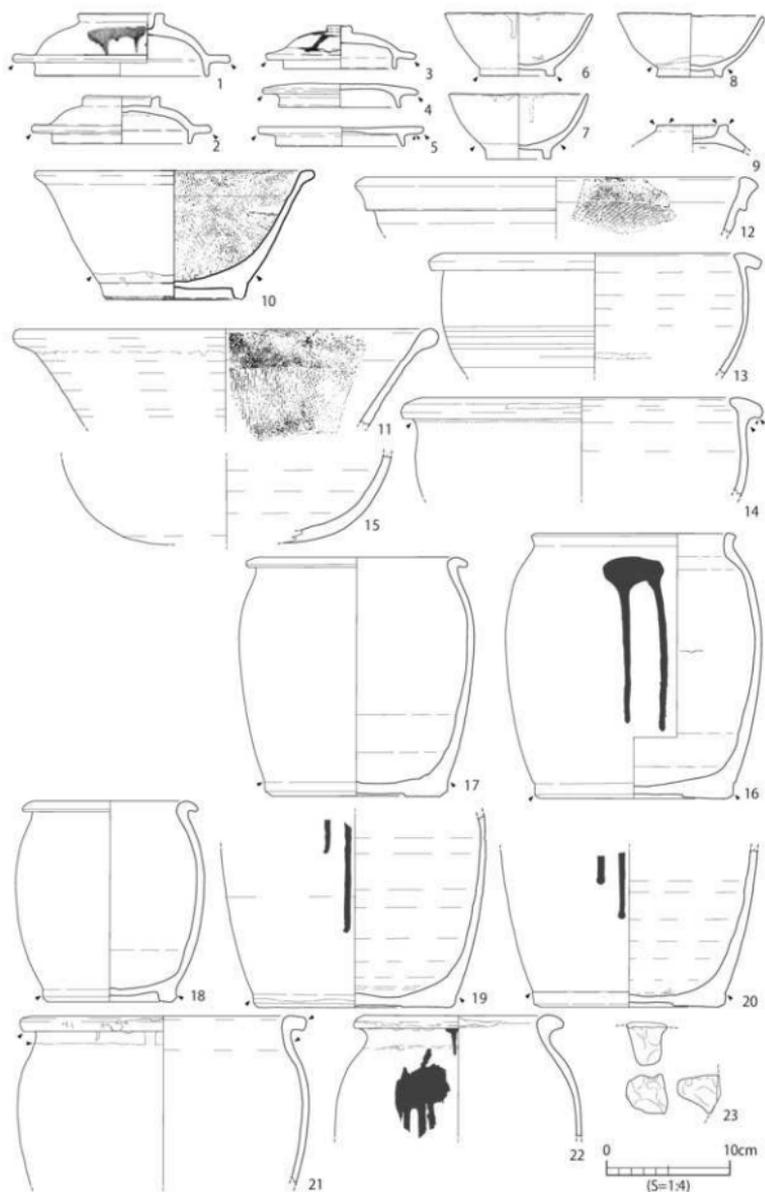
水路は北側から流れてきていたようだが現市道とは平行せず、市道下を斜めに横断し、令和6年度調査の6区で延長を確認した。幅30cm、深さ30cm、厚さ約10cmのコンクリート製で断面は箱型を呈す。コンクリートの骨材には長さ5cmほどの玉石が使用されている。水路は北側調査区外か

は回転ヘラケズリの痕跡を残す。65-15は素焼きの鉢状の器形で土鍋だろうか。底部外面に煤が付着する。本窯で使用されたと思われる本田窯跡の製品ではない。

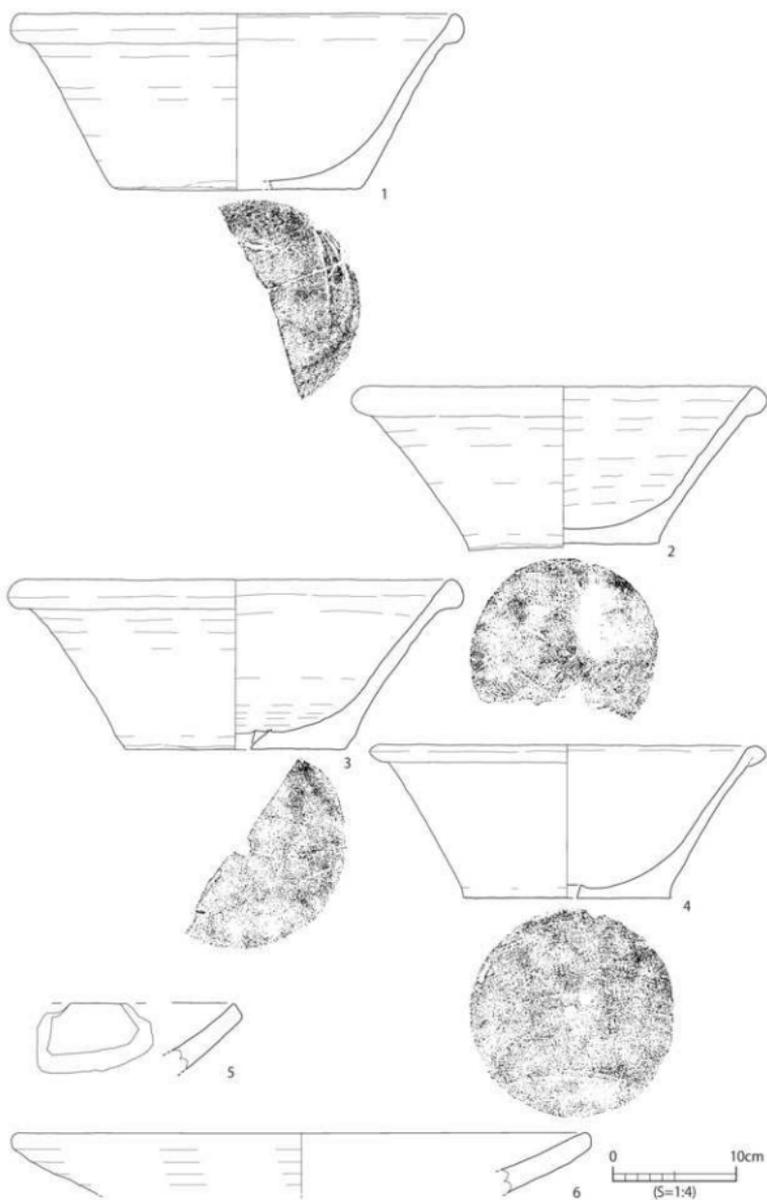
65-17～22は壺と甕である。65-19・20は長石釉をかけ、コバルトによる流し掛けを三方向に施す。他は来待釉を施し、65-16・22には鉄釉による流し掛けの痕跡を残す。

65-23は素焼き手捏ねでつくられたつまみ状のもので五徳か焔炉の内耳か。本窯で生産されたものではない。

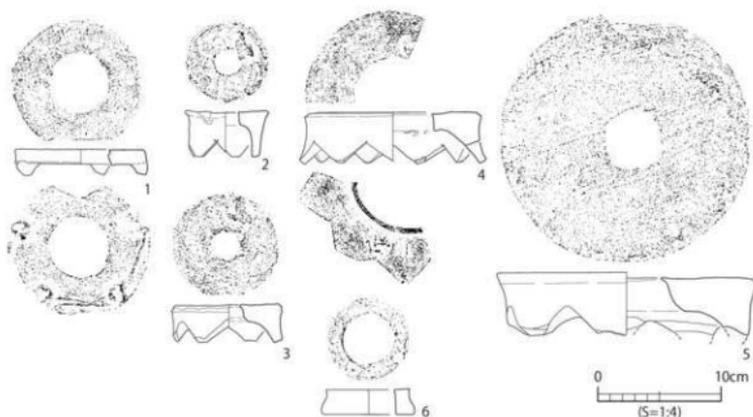
66-1～4は盛鉢である。強い指ナデ痕を残



第65図 SX01 出土陶器実測図(1:4)



第66图 SX01出土盛鉢実測図(1:4)



第67図 SX01 出土焼台実測図(1:4)

ら延びており起点はわからない。水路の内部に充満した土には陶器片を含んでおり、市道を造成した際に埋められたものであろう。

南東端に設けられた集水升は長さ1.1m、幅約90cmで深さ約90cmである。中央に高さ約60cmの仕切りがある。内面側には木目状のスタンプが残り型枠の痕跡と考えられる。水路の取付部がM字状にくぼんでみえるが、土圧によるもの可能性がある。

この集水升が水路の終点となるが、集水升南東壁の底から約30cmの位置に直径20cmほどの円形の排水穴が開いており、南東側を流れる西川に排水していたと思われる。排水穴の下場に一致する高さでコンクリートの劣化が異なっている。

集水升の位置は南水簸施設のすぐ北側で、南水簸施設に給水するための施設であろう。

第69図には水路の周囲から出土した遺物を図示した。

69-1は来待軸を施す壺の蓋である。輪状つまみを持ち、内面には「五」「二十」などの墨書がある。

69-2・3は来待軸の挿鉢である。69-2の底部には耐火砂が付着している。69-3も小型で器高の低い挿鉢である。半円形の片口を切り込んで付いているが、注口部分は欠損している。

69-4は円筒形の壺である。長石軸を全面にかけ、外面にわずかにコバルト軸が残る。破片のため全体がわからないが、流し掛けが施される可能性がある。この壺は断面を含め煤が付着しており、火を受けている可能性が高い。

69-5は鉢の破片で片口鉢である。口縁部を丸く肥厚させる。火を受けたと思われる、軸が剥がれている。69-6は長石軸の挿鉢である。口縁部を外側に折り曲げる。

69-7～9は素焼きの鉢で盛鉢といわれるものである。69-8底面には板状の圧痕を残す。69-9の底面は静止糸切痕をナデ消したものであろう。

69-10・11は円筒形を呈す大型の焼台でヌケと呼ばれるものである。69-10の外底部近くには分厚く耐火砂が付着し強く被熱しガラス化した部分がある。69-11はヌケと呼ばれる焼台の頂部で、頂面に剥離材(アルミナ粉?)が残る。体部の1カ所に外面側から穿孔される。外面は高熱によりガラス化し赤褐色を呈す。

69-12はハリと呼ばれる焼台である。頂面には剥離材が多く残り、脚端部にも耐火砂が付着する。脚端部に耐火砂が付着していることから焼成室に直接に置かれたものであることがわかる。

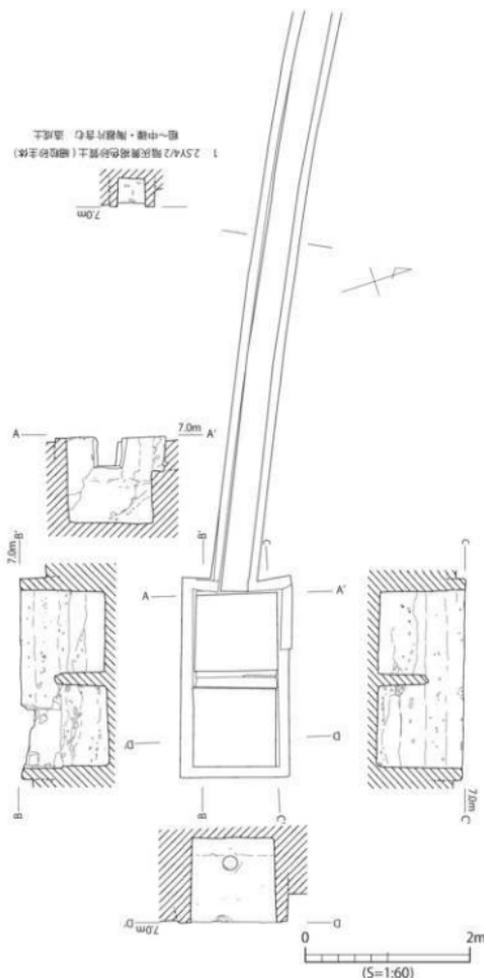
69-13は素焼きの土管である。中ほどのくぼんでみえる部分で接合している。内面にはらせん状の絞り目がみえる。無釉だが高温で堅く焼しめられている。水路に関わるものだった可能性がある。

南水蔵施設(第70～74図) 2区南の北東側にはコンクリート製の水蔵施設が設置されていた。水蔵施設は一辺2m弱のほぼ正方形を呈す升4基を接して作ったものである。高く作られた升を中心に

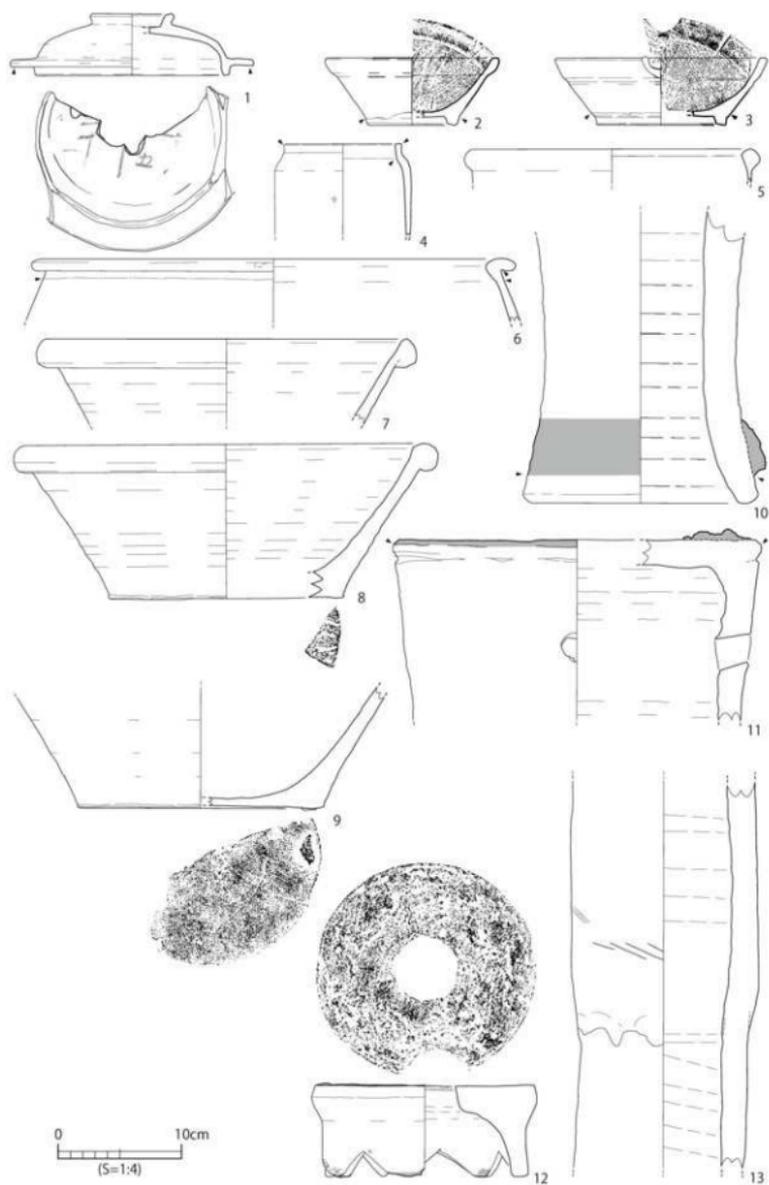
北側に1基、南側に2基の升が作られる。3基の下の升にはそれぞれに小さな排水樹が付属する。中央の升からは三方向に管が設けられ下の升へ、また、下に升からも排水樹へ管が設置され、上から下へ排水される構造になっている。北升・南西升・南東升の底面には石見焼甕が埋め込まれている。

土層断面(第70図)は各升を別々に土色がつけられているために、それぞれの堆積の関係がつかめないが、各升の1・①層は共通しており洪水砂であろう。よって、その下層が洪水により埋没する直前の状況と思われる。中央升と北升は、排水管の高さに一致することから排水管までが埋没していたことが判るが、南西升・南東升の②層は排水管の位置よりも低く、汲み取られていたか。また、南西升と南東升で全く異なる堆積となっている理由はわからない。各升ともに下層は粘土主体となっており、これらが水蔵された陶土か。南西升の④灰白色粘土面には、陶器蓋の完形品9点(76-1～9)が伏せた状態で出土した。投棄されたものと思われるが、蓋のみを一括して投棄した理由は不明である。

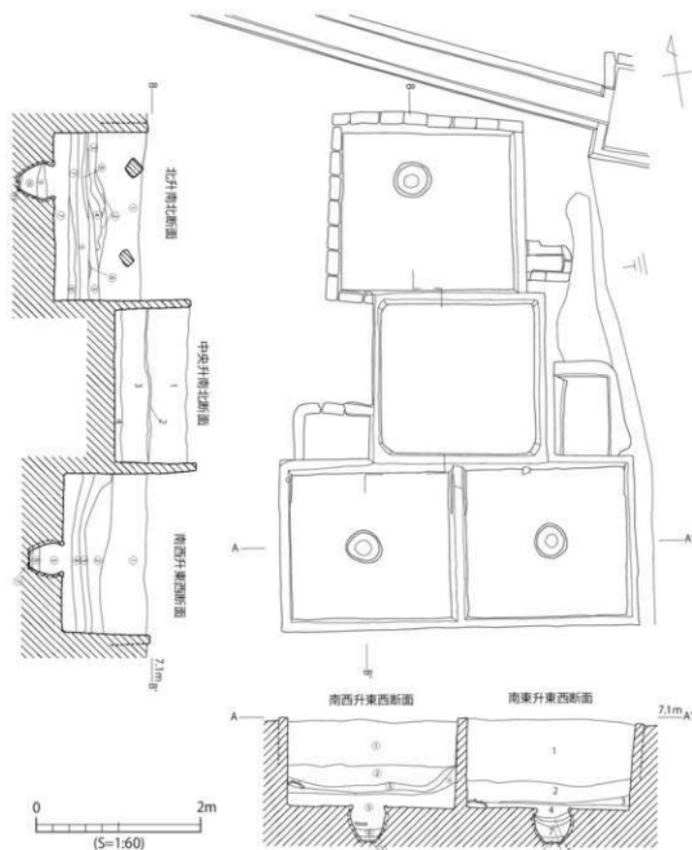
第71図は中央升の展開図を示した。中央升はすべてコンクリー



第68図 コンクリート水路・集水升実測図(1:60)



第69図 コンクリート水路・集水升周辺出土遺物実測図(1:4)



北升南北断面土色

- ① 10VR5/3cにふい黄褐色砂(細～中粒砂主体) 洪水砂
- ② 10VR5/2灰黄褐色砂質土(極細砂主体)
- ③ 10VR4/1黒灰色粘土(極細～細主体)
- ④ 10VR5/3cにふい黄褐色砂質土(極細砂主体)
- ⑤ 5Y5/4オリーブ色砂(極細砂主体)
- ⑥ 10VR6/3黄褐色粘土(シルト主体)
- ⑦ 10VR8/2灰白色粘土(シルト主体)
- ⑧ 10VR6/8明黄褐色砂質土(極細粒主体)
細～粗粒砂多く含む
- ⑨ 10VR6/4cにふい黄褐色粘土(シルト主体)
- ⑩ 10VR7/3cにふい黄褐色粘土(シルト主体)
- ⑪ 10VR7/1灰白色砂質粘土(極細砂質シルト)

中央升南北断面土色

- 1 10VR5/3cにふい黄褐色砂(細～中粒砂主体) 洪水砂
- 2 10VR3/1黒褐色粘土(極細粒砂主体)
- 3 10VR6/8明黄褐色粘土(シルト～極細砂主体)
極細粒砂多く含む
- 4 10VR7/2cにふい黄褐色粘土(シルト～極細粒砂主体)

南西升東西・南北断面土色

- ① 洪水砂
- ② 2.5Y5/2暗黄褐色砂(細～中粒砂主体)
- ③ 2.5Y4/1黄灰色粘土(シルト主体)
土層、木片を含む
- ④ 2.5Y8/1灰白色粘土(シルト主体)
- ⑤ 7.5Y7/4cにふい褐色粘土(シルト主体)
- ⑥ 2.5Y8/1灰白色粘土(シルト主体)
- ⑦ 2.5Y4/1黄灰色砂(粗粒砂主体)

南東升東西断面土色

- 1 洪水砂
- 2 2.5Y5/1黄灰色砂(細～中粒砂主体)
- 3 5Y4/1灰白色粘土(シルト主体) 木片多く含む
- 4 2.5Y8/3淡黄褐色粘土(シルト主体)
- 5 2.5Y1/8灰白色粘土(シルト主体) 炭化物を含む
- 6 2.5Y7/2灰白色砂(極細粒砂主体)
- 7 2.5Y7/6黄褐色粘土(シルト主体)
- 8 2.5Y4/1黄灰色砂(粗粒砂主体)

第70図 南水箴施設土層図(1:60)

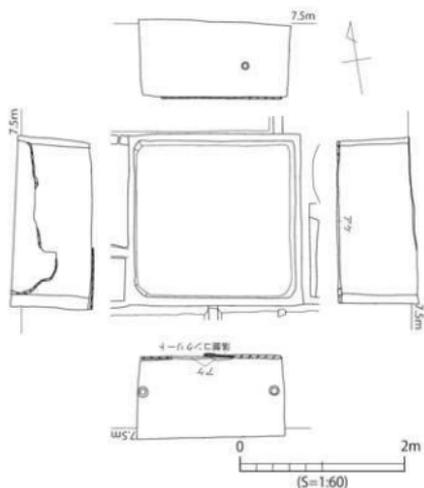
トで作られ、西面の上面は破損している。南水施設の中ではこの中央の升がもっとも高く作られ、緑の標高は7.6m、底面が6.8m付近となる。内形は四隅が小さく面取りされ、上面は1.7×1.7m、下面が1.6×1.6mを測る。北壁に1カ所、南壁の東西に各1カ所の計3カ所に排水管が設けられ、排水管の位置は標高6.5m、底から約40cmである。内径5～6cmの陶製土管が通され、それぞれ他の升に排水できるようになっている。南面の排水管の位置は、北側よりも10cm近く高い。

第72図は南東升の展開で、北面の図は南西升を含んでいる。南東升もコンクリート製で緑の高さ7.1mで底面は6.4mを測る。上面で東西1.9m、南北1.6mあり、北壁には中央升からの給水管と、排水樹への排水管2組が開けられる。排水管は標高6.7m付近と6.9m付近の2段である。また、東西の壁には標高6.9m付近に長さ約20cm、幅約3cmの錨が突き出ている。板をかけるような機能が推定される。

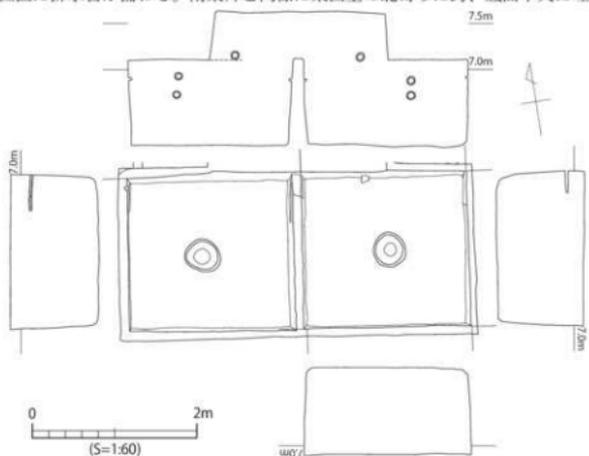
南東升底面の中央には埋め甕が設けられている。

第73図は南西升と北升の展開図である。南西升もコンクリート製で東西1.8m、南北1.6mとなる。頂面は南東升と連続しており、底面も南東升と同じ標高6.4mである。第72図に示したとおり、北壁には南東升の対称位置に排水管が備わる。南東升と同様に東西壁の北寄りに錨、底面中央に埋め甕が設置されている。

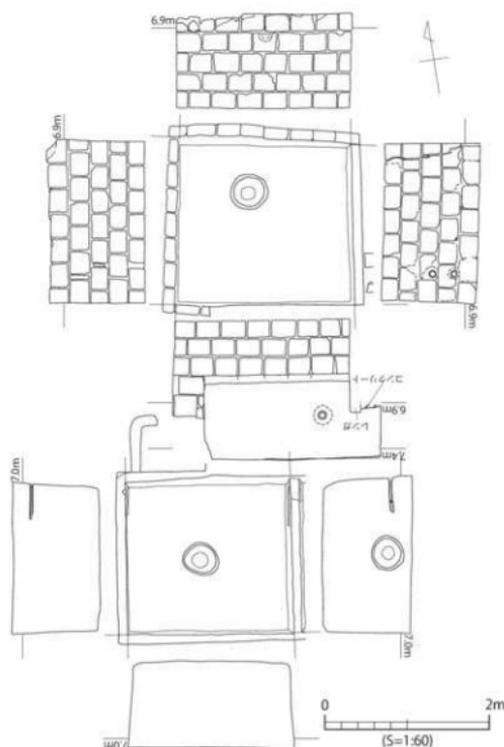
北升は上面で1.8m四方のほぼ正方形を呈す。南・西壁はほぼ直立し、北壁がやや傾斜する。西・北・東壁は総レンガ作りだが、南面の一部はコンクリートになっており、その部分は中央升の北壁に相当する部分となる。中央升北壁から外れる西側の一角



第71図 南水施設中央升立面図(1:60)



第72図 南水施設南東升立面図(1:60)



第73図 南水庵北・南西升立面図(1:60)

異なっている(第74図)。

南東升の北側に作られた排水升は東西50cm、南北80cmで深さは78cmである。南・西壁は中央升・南東升の壁を利用したコンクリート製だが、北壁から東壁はL字に組んだレンガをセメントで固めたものである。床面はセメントを張る。南壁に南東升からの排水口2穴があいている。底部の標高は6.1mである。北壁には施設外への排水口が開いており、排水口は標高6.5mである。北へ排水溝が延びると思われるが、調査区東側にある電柱のアース線との関係で掘削できなかった。南壁の下方には横方向に繊維が通る木質が残っており型枠の痕跡だったと思われる。

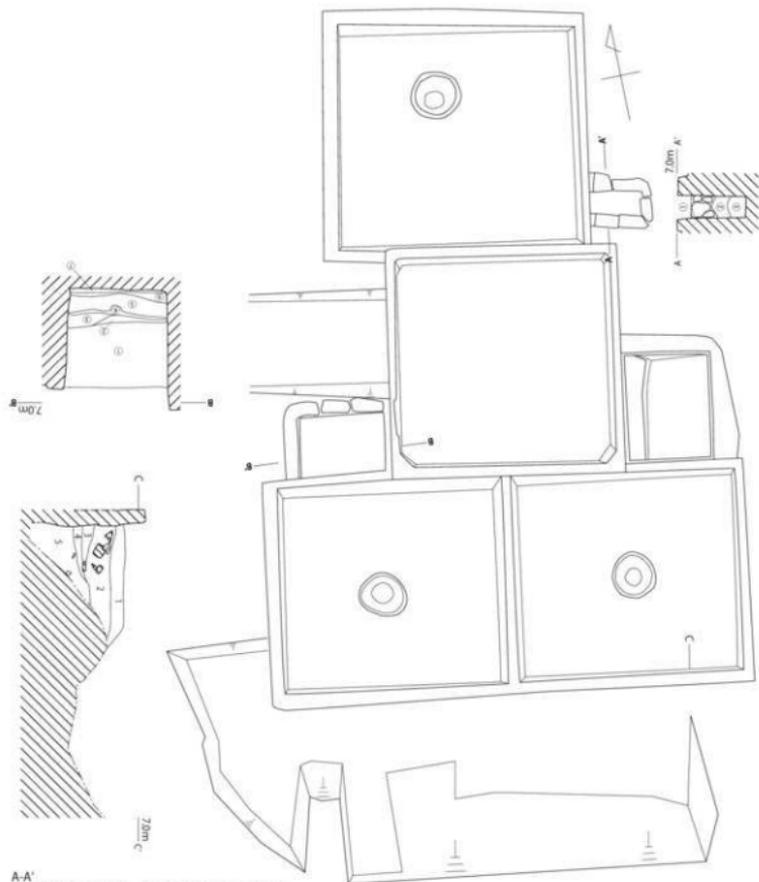
南西升の北側に作られた排水升は南東升の排水升と同様に南壁・東壁は中央升・南西升のコンクリート壁を利用する。北壁から西壁をレンガでL字に組み、床面までをセメントで固める。上面近くはセメントがはげ落ち、レンガがみえる部分が多くなっている。南東升の排水升は南北に長かったが、南西升の排水升は東西約70cm、南北50cmで東西方向に長い。深さは60cmを測る。南壁には南西升からの排水口が2穴あり、北壁の西寄り中央、標高6.8m付近に排水口が開く。形状は南東升の排水升と異なるが、構造は同じ。排水口から北へ向けて排水路が続いていたと考えられる。

北升の排水升は東に向けて取り付けられる。北升からの排水孔は南東・南西升と異なり1穴のみ

にはレンガを残している。また、床面はコンクリート製で、その中央に埋篋を設置する。東壁のレンガを穿って排水管を取り付けている。排水管は標高6.8mと6.55mの高さに開けられ、レンガを穿って穴を開けて陶製土管を差し込み、隙間をセメントで埋めている。使用されるレンガの大きさは幅24cm、高さ20cm、厚さ12cm前後で若干のばらつきがある。

北升は床面をコンクリートで作り各壁をレンガで作っていたものを、中央升を設置した際に一部解体していると思われる。コンクリート製の中央升設置以前に先行する升があったかどうかはわからない。

下側の3つの升にはそれぞれさらに小さな排水升が付属しており、それらはいずれもレンガを組みセメントで固めて作っているが、形状や大きさはすべて



A-A'

- ① 10YR7/1 灰白色粘土 (シルト主体) のブロック (大)
 10YR4/3 に近い黄褐色砂質土 (中粒砂主体)
 ② 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質土 (細粒砂主体) 粗粒砂～中粒砂含む
 ③ 2.5Y7/4 淡黄褐色粘土 (シルト主体) 粗粒砂～中粒砂含む

B-B'

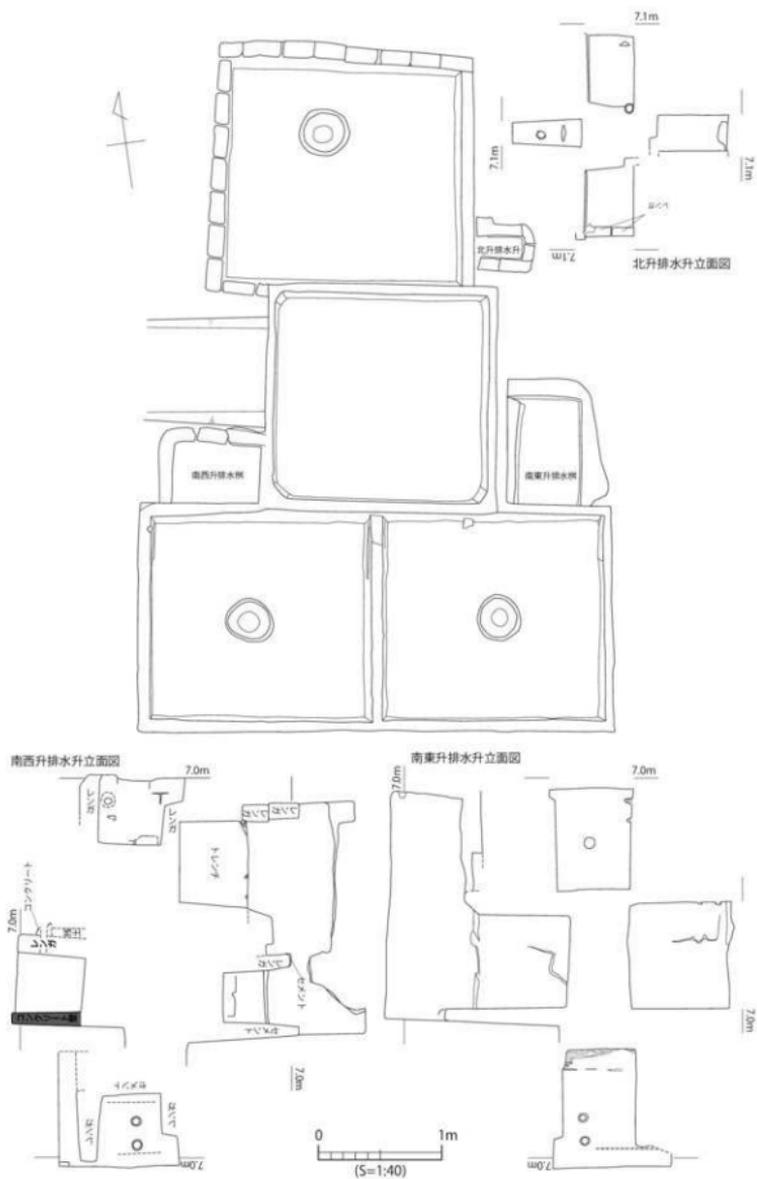
- ① 10YR4/3 に近い黄褐色砂質土 (細粒砂主体) 粗粒砂～中粒砂含む (埋土)
 ② 10YR4/2 灰黄褐色砂質土 (極細粒砂質シルト) 細粒砂含む
 ③ 2.5Y3/1 黄褐色砂質粘土 (細粒砂質シルト)
 ④ 10YR5/6 黄褐色砂質土 (細粒砂主体) 粗粒砂～中粒砂含む
 ⑤ 10YR7/1 灰白色粘土 (シルト主体)
 ⑥ 2.5Y5/4 黄褐色砂質土 (細粒砂主体) 粗粒砂～極細粒砂含む
 ⑦ 2.5Y4/1 黄灰色砂質土 (細粒砂主体) 極細粒砂～中粒砂含む

C-C'

- 1 10YR8/6 黄褐色粘土 白色黄褐色の粘土混じる
 2 10YR6/4 に近い黄褐色砂質土 石～10cm、粘土塊?混入
 3 10YR5/4 に近い黄褐色砂質土
 4 10YR5/4 に近い黄褐色砂質土 明黄褐色の粘土?の粒混じる
 5 10YR4/4 褐色砂質土 炭少量混じる

0 2m
 (S=1:40)

第74図 南水廠排水升土層堆積状況(1:40)



第75図 南水箴排水升立面図(1:40)

で、排水升西壁に開けられた排水管の位置は標高6.8m付近となる。この排水升は他の排水升と異なり、レンガをコ字形に組んでセメントで固めた構造である。東西40cm、南北20cmほどしかなく、深さは55cmである。床面南東隅最下部と北東隅最下部の2カ所に排水口が開いている。北側の排水口はまっすぐ北に、南東側の排水溝は東に向かうようだが確認できていない。非常に小型であることや最終的な排水口が排水升の最下部に開けている点、取水口も1穴しかないなど他の排水升と構造が異なっている。この排水升が取り付け北升だけがレンガ製であることから、他の升とは設置時期が異なる可能性がある。コンクリートで作られる中央升との関係から北升の設置は中央・南東・南西升に先行する。

南水簸施設自体の設置は、南側では斜めに掘り込んで作っている様子を確認できているが、西側では明瞭でなかった。また、レンガで作られた北升の設置状況は、SK40(第94図)の土層堆積状況から必要範囲を垂直に掘り込んでレンガを設置している。コンクリート部分とレンガの部分では設置方法が異なる可能性が高いが、南水簸施設では確認できなかった。

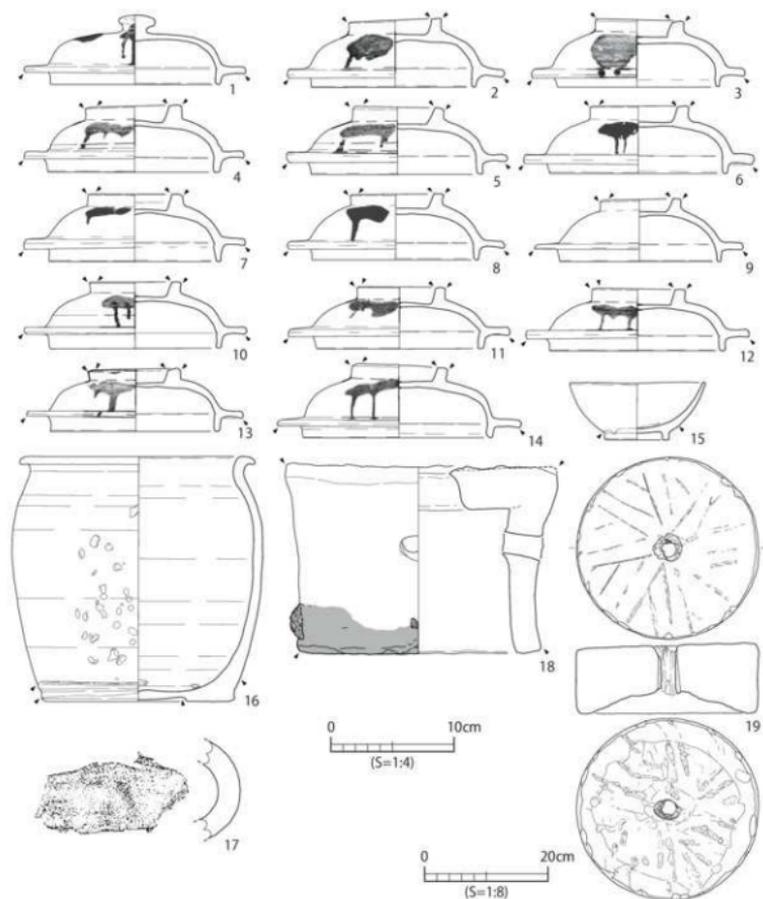
江津市文化財研究会1993『石見湯』第十三号には「土漻し場の一例」として水簸の工程が示されている。それによると、山から掘った粘土を「やまおけ」と呼ばれる中央の高い升に水とともに入れ攪拌する。篩を通して木の根などの不純物を除去した泥水を「ためおけ」へ流す。数日放置した後、上澄みを「水溜め」へ流す。「水溜め」の水は跳ね釣瓶を用いて「やまおけ」に汲み上げるという。南水簸施設では中央升が「やまおけ」、北・南東・南西升が「ためおけ」、排水升としている小さな升が「水溜め」に相当すると思われる。排水路からの排水升がはっきりしない点も、排水路がなかった可能性を示唆する。また、水簸施設で得られた濃い泥水はオロ(一次脱水施設)で数日から一月近く置き、それを盛鉢に入れ、盛鉢棚で二次脱水し成形できる堅さになるまで水分調整されるという。

第76図には南水簸施設から出土した遺物を図示した。この内76-1～9は南西升の土層図(第70図)の④灰白色粘土面に並んだ状態で出土した陶器蓋である。76-1・6～9は来待軸をかけ鉄軸による流し掛けを、他は長石軸をかけコバルトによる流し掛けを三方向に施すものが多い。76-1は擬宝珠形つまみを持ち、他は輪状つまみである。76-3の内面には爪跡状になった焼台の痕跡を残している。ハリと呼ばれる多脚の焼台を倒立させて使用したとみられる。76-7は来待油が酸化して黒色に近い発色となったものである。通常は黒色の流し掛けも白くみえる。流し掛けの軸に化粧土を混ぜた可能性もあるが、気泡によると思われる。76-7・8は、内面に円形の焼台の痕跡を残す。焼台の直径は7.4cmほどである。76-9は来待軸を施すもので流し掛けがみえない。内面には直径6.8cmを測る円形の焼台の跡を残す。これらの陶器蓋は粘土面の上で面的に出土したもので、すべてが完形品である。また、正位に置かれ重なりあってはなかったということなので、水簸施設を放棄した際に意図的に置かれた可能性もある。南水簸施設からはこれらに合う壺は出土していない。

76-10～14は南東升から出土した陶器蓋で、同様の状況で置かれていたと思われる。すべて同じ形状で、輪状つまみを持ち、長石軸にコバルトによる三方向の流し掛けを施す。

76-15は長石軸を施す陶器碗である。洪水砂を除去中に南西升のわずかに西側から出土した。口縁部の一部を欠き、底面中央に割れが入る。

76-16は南東升から出土した完形品の甕である。全面に来待軸をかける。外面下半を中心に耐火砂が付着し焼き付いている。内面には爪状の焼台(ハリ)の痕跡を残し、底面には丸く黒ずんでみえ



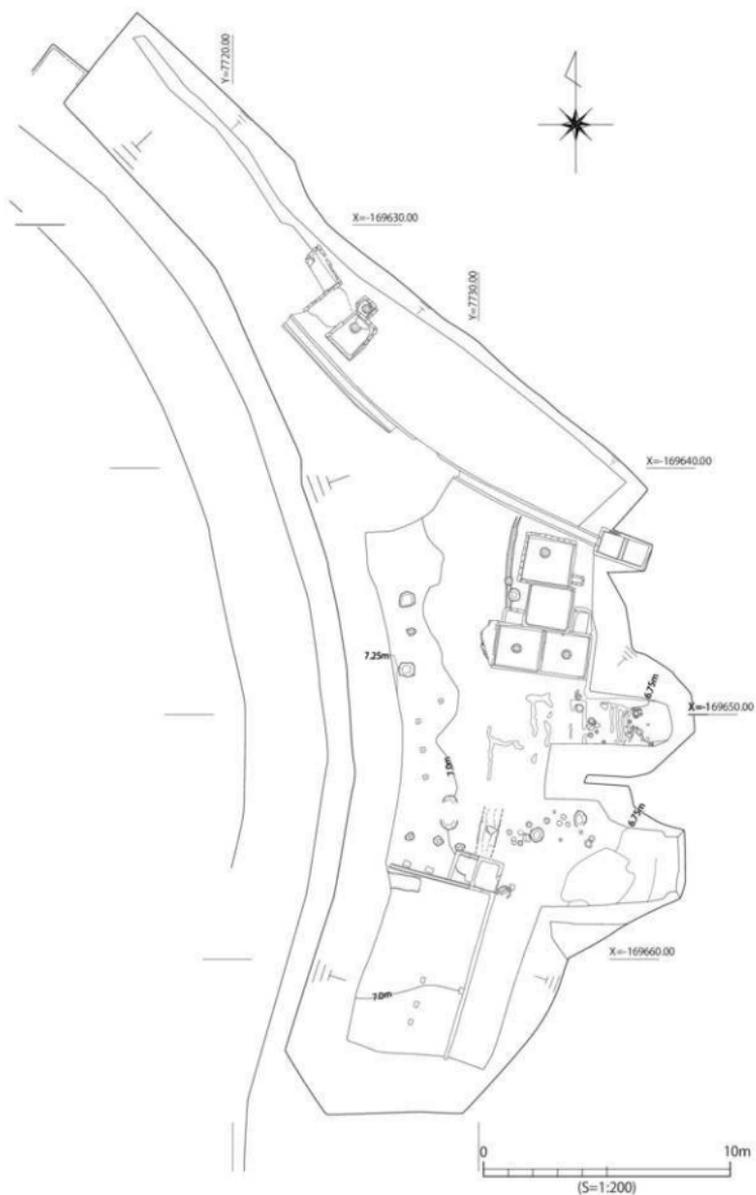
第76図 南水簾施設出土遺物実測図(1:4, 19のみ1:8)

の部分がある。焼台(トチン)の痕と考えられる。

76-17は北升の東側に取り付け排水升から出土した素焼きの土管の破片である。内面には布目圧痕が残り、外面はナデ調整される。残存長12cm、器壁の厚さは1.8cmあり、外径8.8cm、内径5.2～5.4cmに復元できる。煙突の一部と思われる。

76-18はヌケと呼ばれる焼台である。頂部に円孔が開けられるほか、胴部の2方向にも外面から穴が開けられる。実測図外面に▲マークで施釉範囲のように示している範囲は高温によってガラス化し、褐色の釉のようにみえる範囲である。頂面は剥離材がかかり、脚端部から外面には耐火砂が厚く付着する。南西升の粘土層から出土しており76-1～9より下層である。

76-19は石臼の下皿である。南東升の粘土層に入っていたもので、陶器蓋が面的に出土した層よ



第77図 2区2面地形測量図(1:200)

りも下層にあたる。全体に摩滅が進んでおり上面の摺目は浅くはつきりとは残っていない。下面側を彫りくぼめている。軸の木芯が残っていた。なお、4区で石臼の上皿(124-14)が表露されており、大きさはほぼ一致する。

第77図は第2面を面的に検出した後に作成した地形測量図である。調査区中ほどを標高7mの等高線が横断するが、ほぼ水平に造成されていることがわかる。なお、2区第2面の遺構は1区第2面の主な遺構より約2mも低い。

4. 第3面の遺構・遺物

第3面は地覆石を使用した建物(SB07)と北水簸施設を中心とした遺構面である。この段階で南側水簸施設が存在していたかどうかはわからないが、北水簸施設の升がレンガ製であることから、南水簸施設北升は存在した可能性がある。なお、調査に際してコンクリート製の構築物を除去できなかったため各水簸施設の下層の状況が不明で正確な設置時期は不明である。

SB07の北東側、拡張1・2トレンチの東端では石の代わりに土を詰めた甕を斜面に据えた窯垣(窯垣1・2)が検出された。また、SB07の北側では窯垣1に直行する主軸で小型の甕を並べた窯垣3が出土し、いずれも造成土の先端(一次造成・二次造成)にあたる。この造成土上からは不整形のコンクリート製の基礎が出土している。

南水簸施設の周囲では盛鉢がまとまって出土(第78図土器溜)したほか、南北に延びる浅い溝(SD13)を検出した。SD13は幅約20cm、深さ10cmほどの浅い溝だが8m以上連続する。土器溜など遺物の集中がSD13を超えて西側には広がらないことから何らかの区分けだった可能性がある。

調査区北側では遺構のない空間が広がり、その北側で北水簸施設を検出した。なお、調査区北側は標高9m付近を南北に通る市道と西川に挟まれ、市道の建設にともなうと思われる巨石を含む土砂で埋まっていることから面的に掘削することができなかった。

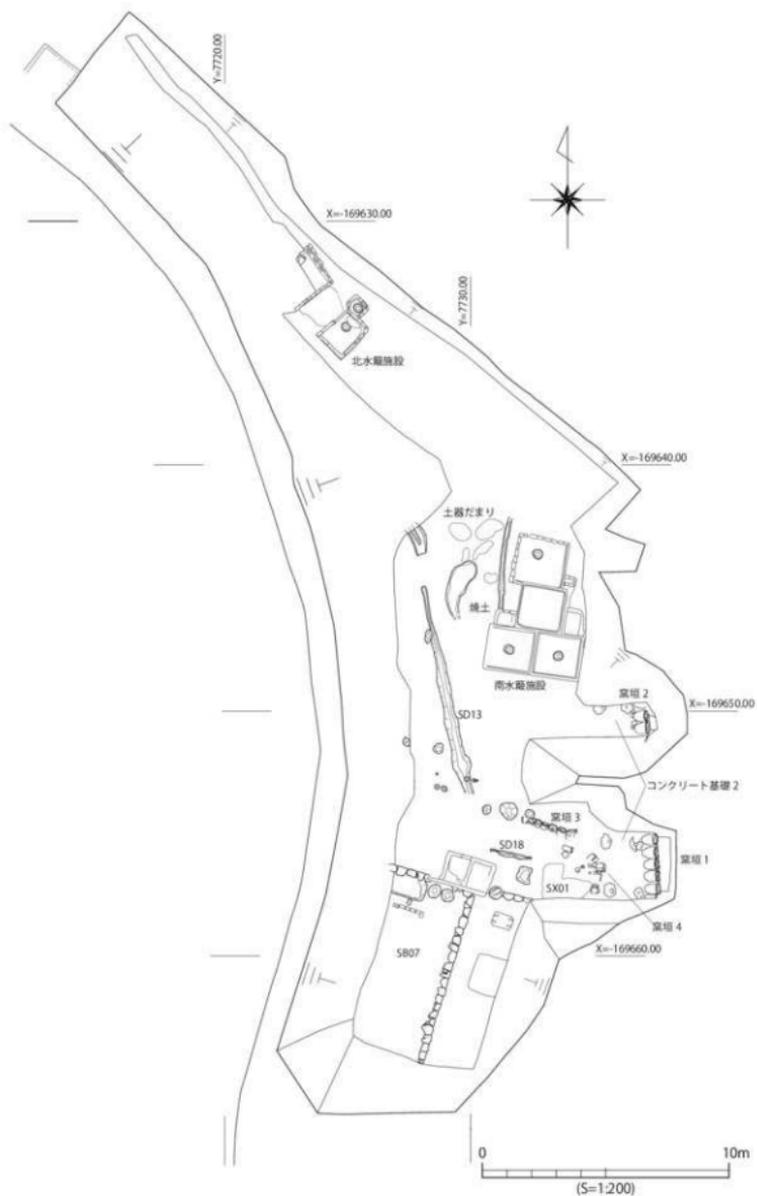
コンクリート基礎2 拡張1～拡張2トレンチ東端近くでは、窯垣1・2によって造成された面の上からコンクリートで作られた柱の基礎を6基検出し、コンクリート基礎2と呼んだ。コンクリート基礎2は、トレンチ壁面に斜めに食い込んで検出したため下部の構造を記録できなかったが、地表面のコンクリートは丸みを持ち、下部はレンガや陶器片が詰め込まれた状態となっていた。未掘削部分を挟んで6基の基礎を検出した。柱間は東西方向が1.0～1.2mである。南北方向は側間で8.0～8.1mであるため、未掘削部分にも基礎が存在したとすると2.7m前後になるはずだが、拡張1の中では2.1～2.2mである。不等間だった可能性がある。柱は木製で直径20cmほどとみられる。

第2面で見られたコンクリート基礎1と異なり、型枠によって作られたものではない。直径60cmほどの丸い穴を掘り、木製の柱を立ててレンガ等の廃材で根固めした後にセメントを流し込んだと思われる。この付近は川に近いうえ、電柱やアース線が残されていたため部分的にしか掘削できなかったが、コンクリート基礎2の続きは南北方向には広がっていた可能性がある。西側では検出されず、東側は川に接することから幅が狭く南北方向に長い構造だったと思われる。各基礎の高さ是不揃いで柱の太さも一定ではなく、簡易な小屋のような施設が想像される。

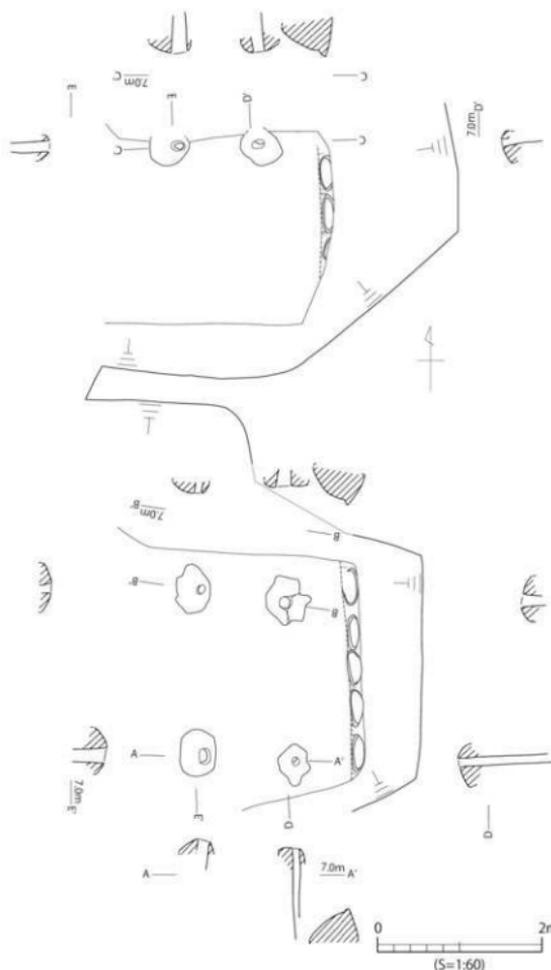
第80・81図には第3面を覆っていた2面下包含層から出土した遺物を図示している。

80-1は輪状つまみを持つ蓋である。長石軸を施し、薄緑色を呈すが、流し掛けがみられない。つまみの内側に割れが走っている。80-2・3は平形蓋で80-2は長石軸を、80-3は来待軸を施す。

80-4～6は片口鉢、80-7・8は捏鉢である。いずれも長石軸を施す。80-4～6は小型のもので



第78図 2区3面遺構配置図(1:200)



第79図 2区南コンクリート基礎2実測図(1:60)

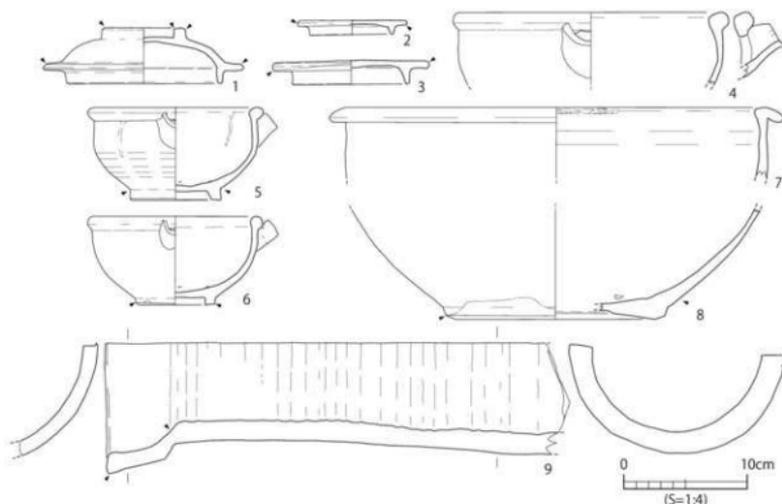
開ける。口縁部は外面側を玉縁状に作る。81-2は内面に刷毛目状の摺痕が横方向に残る。

81-3・4～12はハリと呼ばれる焼台である。81-3は円盤に別素材で脚部を張り付けたものである。底面側には回転糸切痕を残すが、側面から頂面はナデ調整する。2足分が剥離し、2足が残る。体部の胎土は白色の砂粒を含んだ粗い土だが、脚部は白色のきめ細かい粘土を使用している。81-4は器高の高いものである。裾をヘラによって三角形に切り取り脚部としたものである。頂面には剥離痕があり、体部上端近くが被熱氏シガラス化する。81-5～12は器高の低いハリである。いずれも頂面に回転糸切痕を残す。81-9の側面上端には2指分の、81-10は内面に3指分の指先の痕が残

口縁部を玉縁状に作り短い注口を取り付けたものである。内面底部近くが残る個体(80-5・6)はいずれも焼台(ハリ)の痕跡を残す。80-7は大型品で、口縁端部を外側に折り曲げる。口縁部内面に軸がはがれた跡があり、重ね焼きによるものである。80-8は大型品の底部である。内面には焼台の爪痕を残す。底面には剥離材が付着する。

80-9は片側が開く土管を半裁したものである。ロクロ成形した円筒を外側から分割し、側面を含め全面を来待軸で施軸したものである。一端を大きく開いて連結できるようにしている。凸面側の側部近くにヘラによる沈線が入られており分割界線の可能性がある。陶製の雨樋が想像される。

第81図は窯道具類である。81-1・2は素焼きの盛鉢で、いずれも底部に静止糸切痕を残し、中央に水抜き穴を外側から



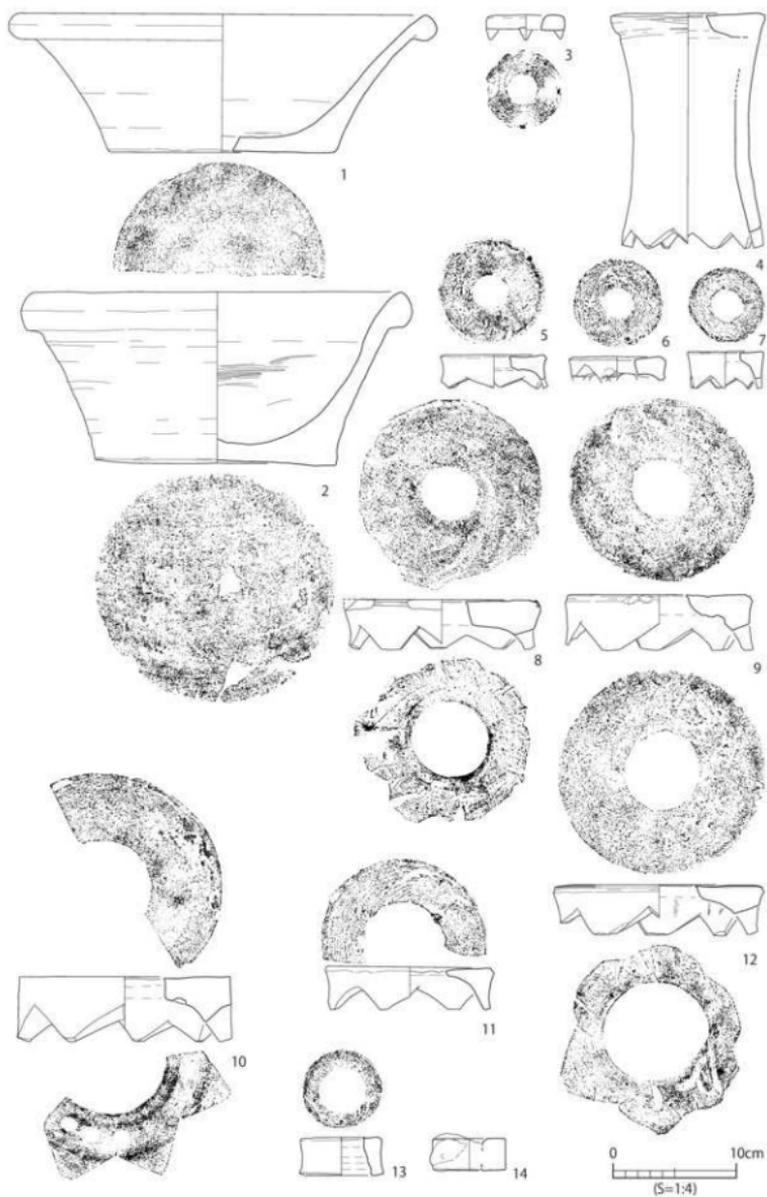
第80図 2面下包含層出土遺物実測図(1)(1:4)

る。81-12の内面には指先によるヘラ記号を記すが判読できない。81-2は円盤状の焼台で九州における叩きハマに類似する。81-13・14は脚部に切込のない環状の焼台である。いずれも頂面に回転糸切痕を残すが、81-14は軸が付着し、中心の穴にも土が入り込んだまま固まっている。付着する土はレンガなどにみられる粗い赤土で、窯の構築材や窯道具が焼き付いたと思われる。

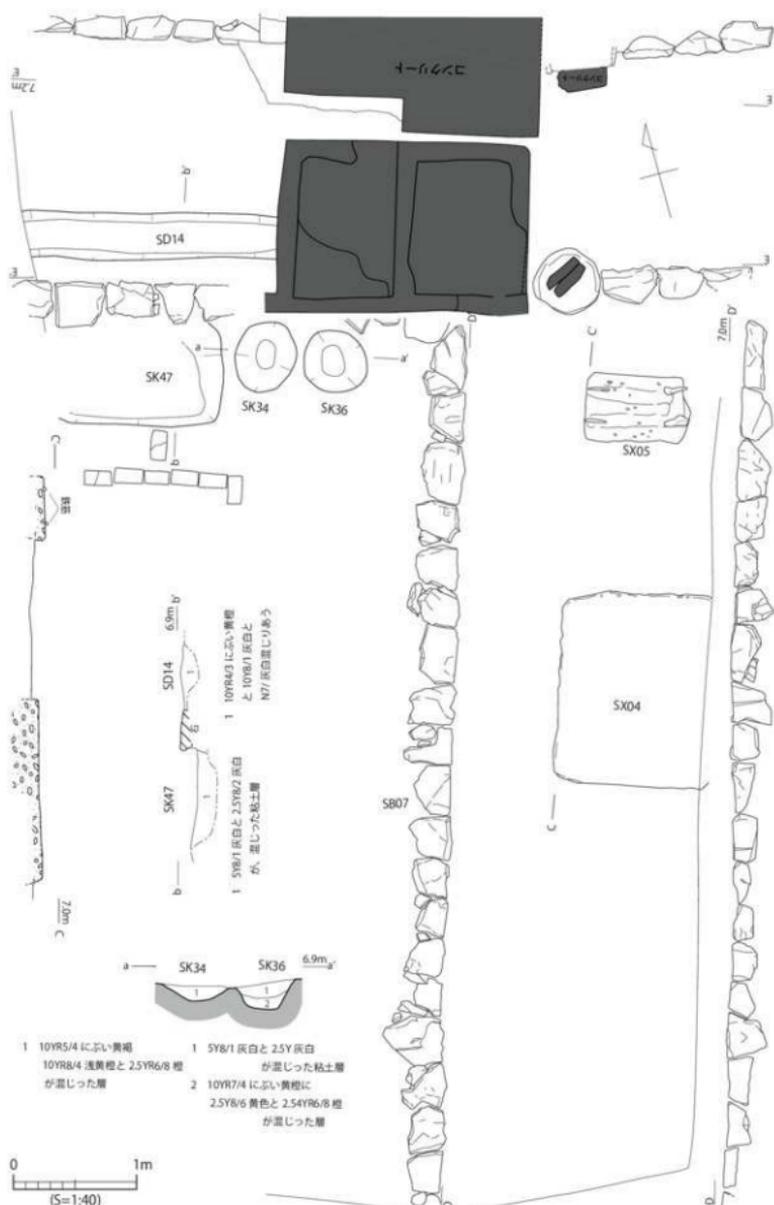
SB07 SB07は調査区南側で検出した地覆石の建物跡(第82図)である。コンクリート製の基礎によるSB04に重なる。地覆石列は南北約7m、東西約3.5mにわたって出土し、西側のコーナーは6区で確認できた。よって東西は約7.1mとなる。地覆石は幅約40cm、厚さ20～30cmほどの自然石を外側の面を揃えて並べたもので、石を設置するための地業はみられなかった。また、北側の地覆石列に連続するように、SB07外側の東にも同様の石列が続いている。北側に面を揃えており、SB07に続く壁が建っていた可能性が高いが、SB07東壁となる地覆石列があきらかに東側に面を揃えていることから、東側は戸外だった可能性が高い。東側を調査できなかったことからこれらの石列との関係はわからないが、東側を吹き放つ庇があった可能性がある。

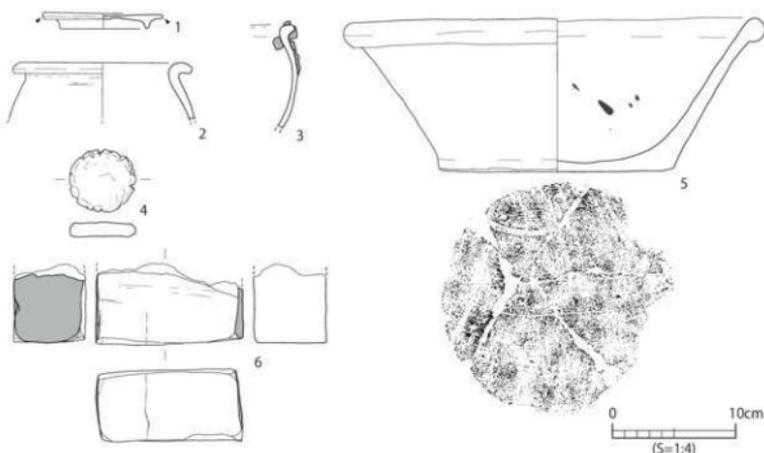
SB07内部には北壁に沿って土坑(SK34・36・47)がみられた。いずれも浅いくぼみで陶器片が出土したが、用途はわからない。SK47の南側からレンガ6個がL字形に並べられて出土した。さらに南側に続く可能性があり、何かの台のような機能が推定される。SB07北側には、SB07北側地覆石列に平行して幅約40cmの浅い溝が延びる。調査区西側から続いており、コンクリート製トイレにぶつかって消えている。SB07地覆石列からSD14の中心までは約40cmで、SB07の雨落ち溝と思われる。

なお、東側に隣接してコンクリート製の基礎(SX04・05)があり調査時にはSB07にともなうと考えていたが、コンクリート製であることや主軸方向がSB07に対しわずかに東に振ることからSB04にともなう可能性がある。また、SB04のコンクリート製トイレが撤去できなかったため、その部分



第81图 2面下包含層出土遺物実測図(2)(1:4)





第83図 SB07出土遺物実測図(1:4)

は掘削していないが、コンクリート製トイレの東側には、陶器大甕による埋裏が設置されており、コンクリート製トイレ設置以前の便槽であろう。SB07段階でも同所にトイレが設けられたと思われる。

第83図にはSB07から出土した遺物を示した。83-1は長石軸による平形蓋である。頂面に耐火砂が被った痕跡があり、商品にならず廃棄されたものか。

83-2はSK34から出土した小型甕の口縁部である。全面に來待軸を施し、頸部の軸を拭き取っている。83-3も小型甕の小片で、SK36から出土した。大きくゆがんでおり自然軸や耐火砂が付着する。窯内で焼成中に破損したと思われる。

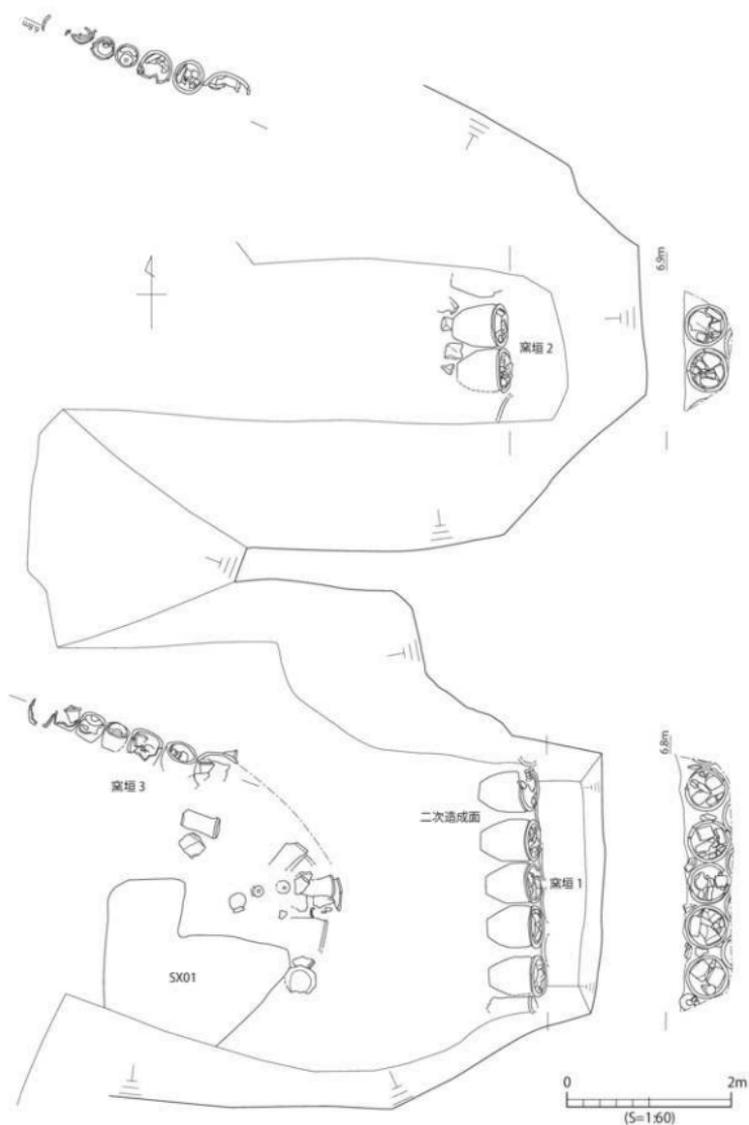
83-4は円盤状の焼台である。手づくねで成形され素焼きである。周縁にひび割れが多数入り部分的に剥離痕がみられる。九州地方における叩きハマに類似する。

83-6はSK34に落ち込んでいたレンガ片である。SK47南側のレンガ列の部材の可能性がある。幅11.9cm、厚さ5.9cmで、長さは12cm以上となる。SK47南レンガ列の資料から本来は長さ24cmほどだったと思われる。

83-5はSK36から出土した盛鉢である。口縁部の多くを欠くが、全体の3/4以上が残存する。底面に静止糸切痕を残し、口縁外面を玉縁状にする。内面に來待軸と思われる赤褐色の塗料状のものが付着しており、この盛鉢が施軸をおこなう場所の近くに置かれていた可能性を示す。

窯垣と造成面 第84図には拡張1・2トレンチ付近の遺構を示した。この付近では陶器甕に土を詰め、石垣の代わりに斜面に積み置いた施設(窯垣)が設置されており、発見順に窯垣1～3とした。それぞれの窯垣の背後は造成されており、造成順に窯垣3の背後を一次造成面、窯垣1・2の背後を二次造成面と呼んだ。いずれの窯垣も立面図では石が詰まってみえるが、土層断面(第47図)では開口部のみ石を使用し、内部は粘質土を詰めている。石は開口部の雨水対策であろう。

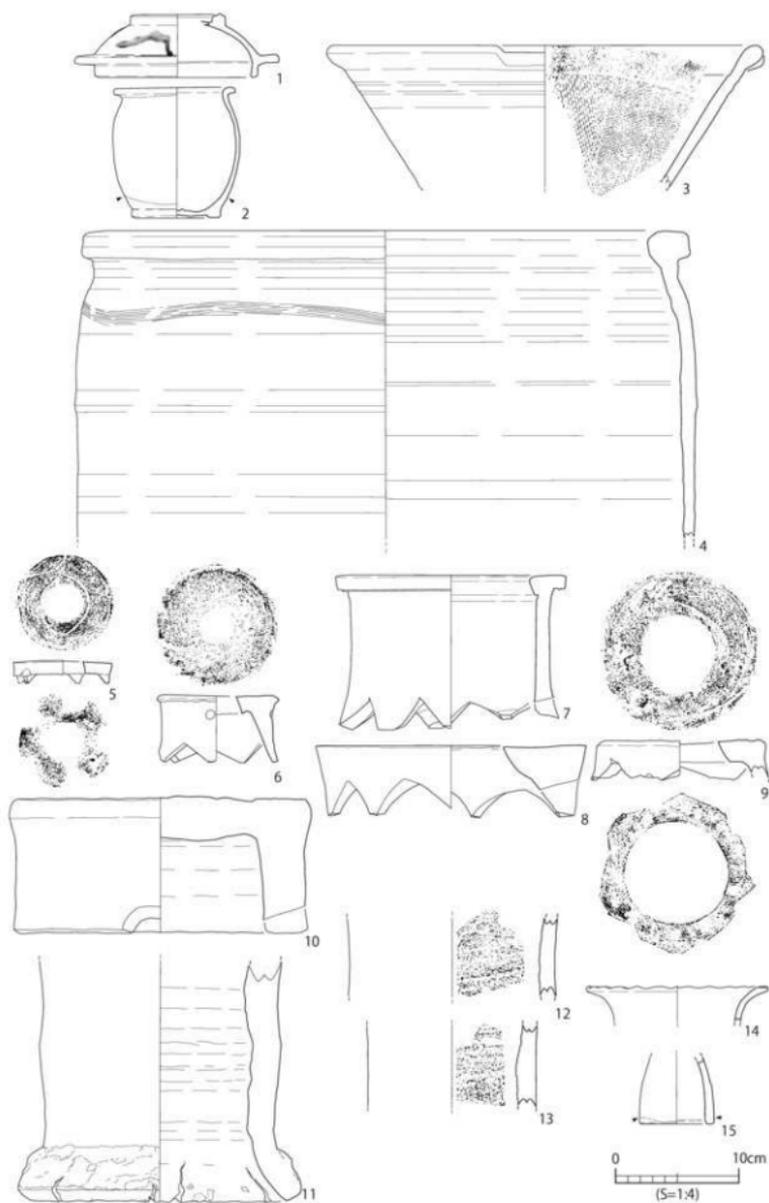
窯垣1・2は調査区東端に沿って検出した。東側の川が迫っていたため下方を掘削していないが、少なくとも2段以上に積み重ね南北8.1m以上続いている。窯垣1・2の西側は二次造成面となってお



第84図 南窯垣1～4実測図(1:40)

り、その上面にはコンクリート基礎2が設置される(第48・79図)。

窯垣3は中・小型の陶器甕を使用した窯垣で、真北から72°、窯垣1・2に対し62°西に振った方



第 85 图 二次造成土出土遺物実測図(1:4)

向に築かれる。窯垣は東西2.4mの範囲しか検出できなかったが、陶器片を含んだ造成土は、東側に延び弧を描いて南に向かっていることから、東側から南側にかけても窯垣が構築されていた可能性がある。こうした造成は、SB07を中心とした作業面を徐々に東へ広げていった様子を示すか。窯垣3に使用される甕は、口径30cmほどの中型品を使用する。窯垣1・2と同様に内部は土を詰めるが、開口部には円筒形の焼台の破損品を使用して塞いでいるのが目立つ。一次造成面の造成土には窯道具を始め大量の陶器片が大量に含まれていた。

第85図は二次造成面に含まれていた遺物を示した。85-1は壺蓋である。輪つまみの内側が破損している。体部外面にはコハルトによる流し掛けを3方向に施す。外面には耐火砂がかかっている。85-2は来待軸の小型甕である。全面に施軸するが、頸部の軸を拭き取る。85-3は陶器挿鉢の破片である。浅い片口を備え来待軸を全面に施す。本田窯跡では挿鉢の出土は少ない。また、二次造成面から出土した陶器類は多くが破片で完形品がほとんどみあたらない。

85-4は大甕口縁部の破片で窯垣の一部だった可能性がある。来待軸を施し、肩部にクシ書きの緩い波状文を入れる。破片のため流し掛けは確認できない。胴部中ほどの外面に強い段があり、成形時の継ぎ目と思われる。

85-5～11は焼台である。85-5はハリと呼ばれる焼台のうち脚部を別材で張り付ける。脚部は5足あり、本体となる円盤には両面に回転糸切痕を残す。頂面の外周近くに来待軸が付着する。85-6～9はハリと呼ばれる焼台のうち脚端部をヘラで三角形に切り取るものである。85-6の体部外面には指によるくぼみが付く。85-7は器高が高く輪状の頂部となる。脚端部には剥離痕がある。85-8はヘラによる脚部の切り取りを弧状におこなうものである。頂面にはアルミナ粉が付着している。いずれも何らかの使用痕を残すが、85-9の脚端部は剥離による欠損が特に大きい。外面には来待軸が付着する。頂面には回転糸切痕を残し、内面側には指によるくぼみを残す。85-10はハヤと呼ばれる焼台で頂面に剥離材(アルミナ粉?)を厚く残す。上方向に開口部を持たないことからサヤとして作られた可能性も考えられる。脚端部の一カ所に半円形の穴を開ける。穴の上側を始め外面は被熱によりガラス化し、内面側には耐火砂が付着する。

85-11は大型の焼台でヌケと呼ばれるものである。脚端部にはひび割れが目立ち耐火砂が付着する。全面的に赤褐色を呈し、器面はガラス化している。

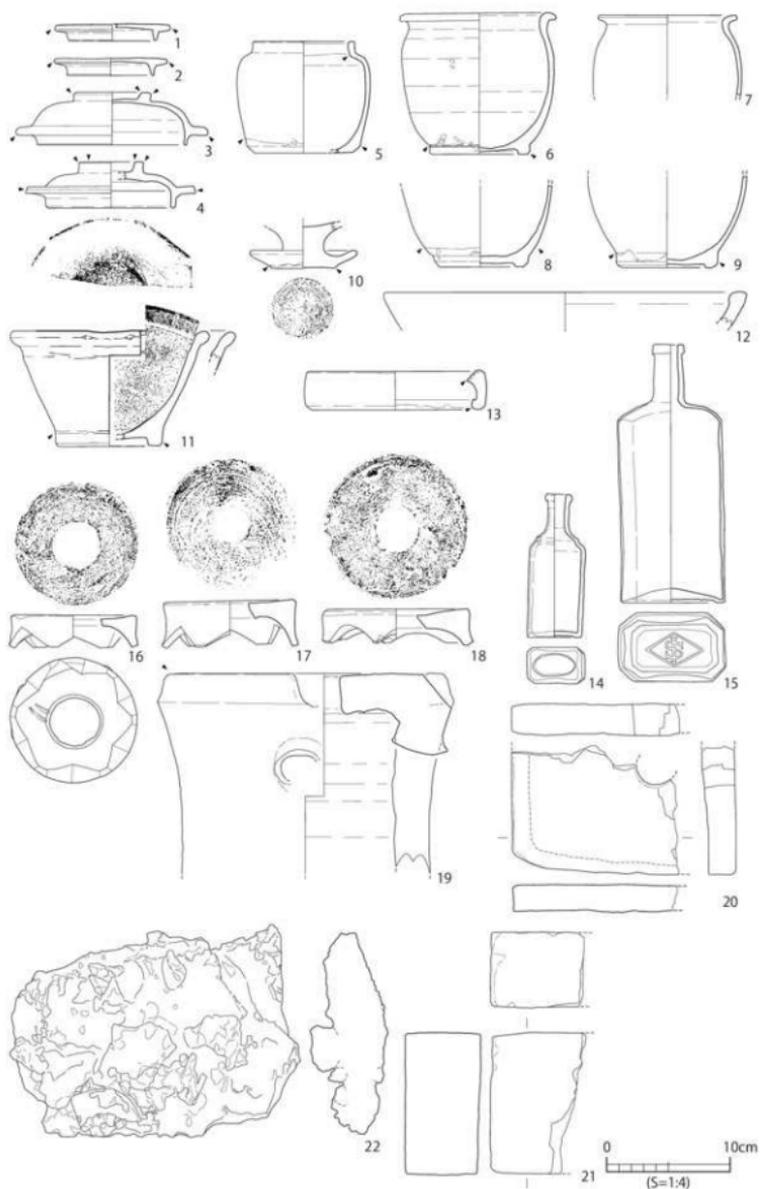
85-12・13は、素焼きで円筒形のもの破片で同一個体の可能性がある。外面は平滑にナデ調整されるが、内面は被熱し剥落が目立つ。煙突が想像される。

85-14は口縁部上面を輪花とした磁器鉢である。本田窯の製品ではなく有田産か。

85-15は磁器製の磚子である。傘部分の小片で脚端部から内面の一部は無軸となっている。

第86・87図は一次造成面から出土した遺物を示した。86-1・2は扁平蓋でいずれも長石軸を施すものである。86-2は頂部が割れている。86-3・4は輪つまみがつく壺の蓋である。いずれも長石軸を施すが、流し掛けは確認できない。86-4内面には焼台から写った回転糸切のスタンプが残る。

86-5は小型の壺である。長石軸をかけるが、口縁端部から頸部内面までの間は軸を拭き取る。つまみのない蓋と組み合わせるものであろう。86-6・7は小型の甕である。底部を除いて全面に来待軸を施す。86-6外面には耐火砂が付着している部分があり底部に割れが入る。86-8・9も同形の甕の底部である。86-8の胴部下端の高台近くには7～8カ所にわたって来待軸が剥離する場所があり、脚を上向きにした焼台を使用したか。この個体は歪みがみられる。86-9底面には円形の焼台の痕跡が



第86图 一次造成土出土遺物実測図(1)(1:4)

残る。

86-10は上皿部分を欠く皿付燈明皿である。底部を除き長石釉を施す。底面には回転糸切痕を残している。86-11は小型の鐏鉢である。浅い片口を備える。底面を除いて来待釉を施す。

86-12は磁器製の乳鉢の口縁部の小片である。口縁部内面を丸く肥厚させる。86-13は轆轤軸受けと思われるものの破片である。内面側を除いて黒褐色の釉（鉄軸?）を施す。頂面の軸は鍍金している。頂面内側の一部に軸が付着し、欠けていることから焼成中に破損した可能性がある。

86-14・15はいずれも完形品のガラス瓶で体部が断面方形を呈すものである。ガラスは透明で気泡などは目立たない。86-14は対角線に型をあわせた線が残る。製品を示す印等はない。86-15はやや大きな瓶である。底面には菱形の中にI・Sを組みあわせたマークが入る。

86-16～18はハリと呼ばれる焼台である。86-16・17は脚部を三角形に切り取るもので、いずれも脚端部が剥離し、釉が付着する。86-16の内面にはへら記号「二」がみえる。86-18は脚部を丸く切り出すもの。頂面には剥離材が厚く付着する。86-19は焼台のヌケである。上部に溝を入れ、側面が穿孔される。86-20は棚板と考えられるものである。隅丸長方形を呈すと思われる、中央に穴が開けられる。片面が被熱しガラス化するが周囲の幅1cmほどの間（点線外側）は灰色を呈し、強く火を受けていない。69-21はレンガである。精製の耐火レンガで窯材の可能性が高い。69-22は窯滓と考えられるものである。表面が高熱によりガラス化し、小石や砂が付着している。一部でレンガ片や焼台の破片も付着する。焚庭の堆積物と思われる。

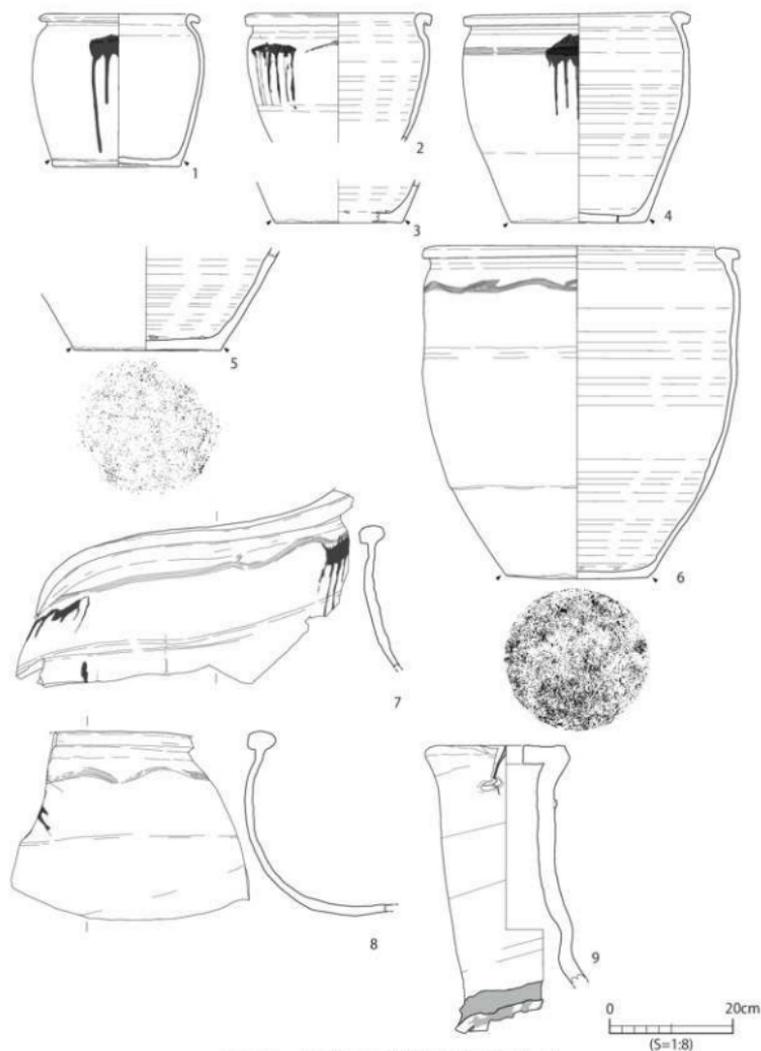
87-1～6は来待釉を施す小～中型の甕である。87-1・3・4は窯垣背後の造成土内から出土した。87-1体部外面の下方には2カ所に浅いくぼみがあり接合痕と思われる。87-2は窯垣に使用されていた甕である。流し掛けは飛び気味で、肩部の櫛書き波状文は厚い釉によりつぶれている。87-4底面には半円形にひび割れが入る。87-5は底部の破片である。底面には板目・布目の圧痕が残る。87-6は窯垣に使用されていた個体で、体部の2カ所に織目が見える。

87-7・8は大きく焼きゆがんだ大型の甕である。造成土内に入っていたもので、87-8には壺の口縁部と思われる破片が溶着しており焼台として再利用されたものと思われる。

87-9は大型の焼台（ヌケ）である。大きくゆがみ頂部近くにはひび割れが多くみられ、外面は被熱してガラス化し褐色を呈す。脚端部には耐火砂が付着する。

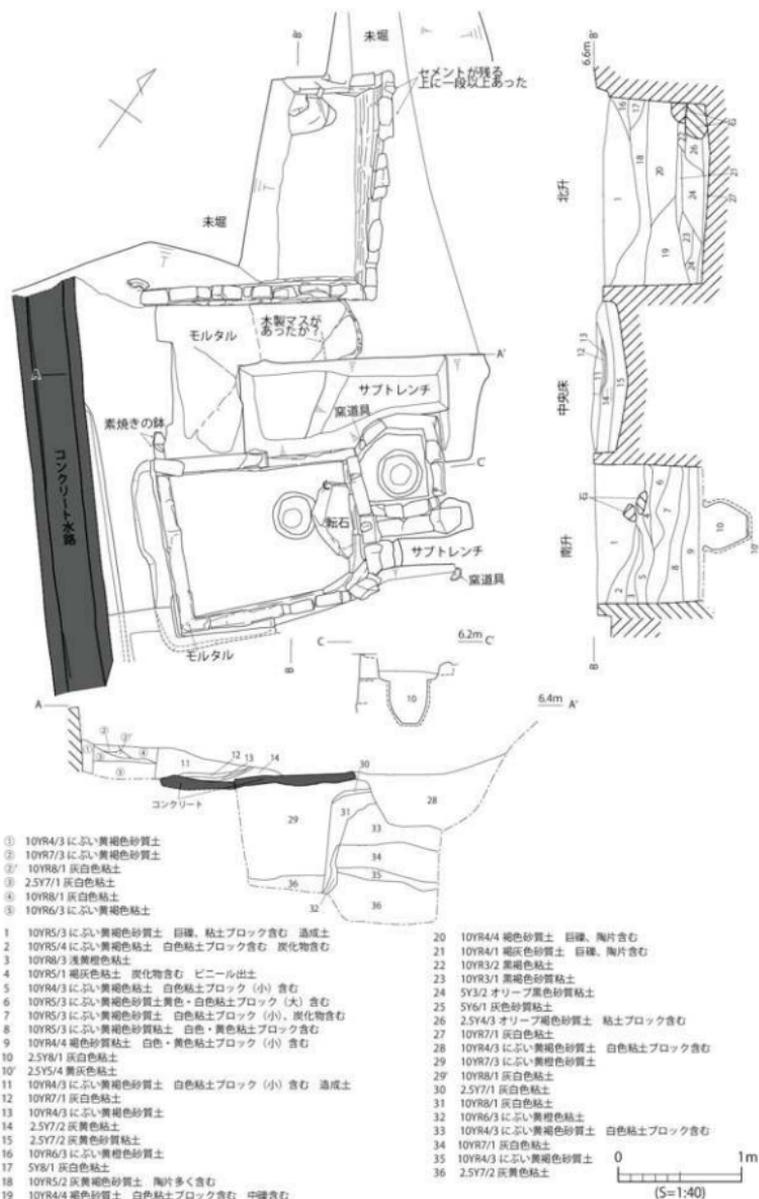
北水廠施設 2区の北側ではレンガを使用した水廠升が検出され、北水廠施設と呼んだ。北水廠施設はレンガで組んだ大きな升2基（北升・南升）と、その間にセメントを張った床（中央床）を備え、南升の北東側に小さな排水升が取り付けられている。なお、市道に近接した調査区だったため北升の西半および水廠施設西側が掘削できなかった。このため北升の排水升や北水廠施設西側の構造はわからない。

第88図b-b'断面は北水廠施設横断の土層堆積状況である。それぞれ独立して土色が振られているためどのように埋まったかはわからないが、調査時のメモによれば南升の8にぶい黄褐色砂質粘土以下、北升の23黒褐色砂質粘土以下が水廠に残っていた堆積だという。ただし、24層と26層の間に入り込む22黒褐色粘土の状況は不明である。また、中央床では12灰白色粘土以下が水廠施設にともなう堆積と判断されており、中央床はほぼ使用状態で陶土が充満したまま放棄されたか。一方、土層図北升北隅の石の埋没や平面図南升東側に落ち込んでいる巨石から南・北升については施設放棄時にほぼ空だった可能性も高い。

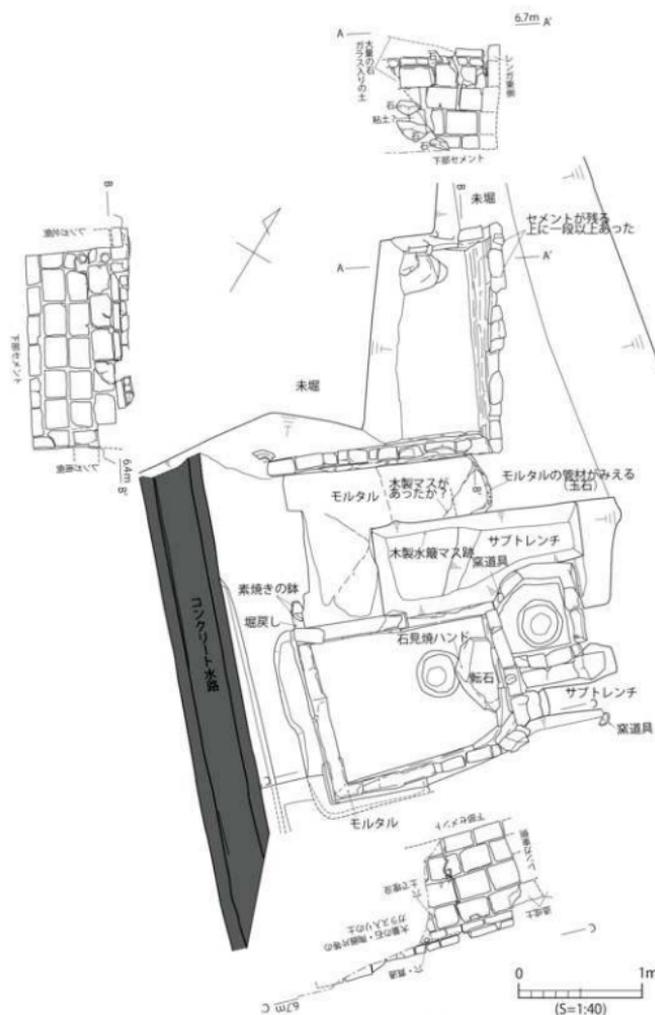


第 87 図 一次造成土出土遺物実測図(2)(1:8)

A-A 断面は中央床付付近の断面と東側下層に設定したサブレンチの土層図を合成した。西側でコンクリートによる床がとぎれるあたりで垂直に土層が切れており、何らかの遮蔽物があった可能性がある。ほぼ同じ構造の6区水簾施設では小型のレンガで仕切られており、施設放棄後にレンガを持ち去られた可能性がある。そうであれば 11 にぶい黄褐色砂質粘土以下の堆積は水簾施設に残されていた土であろう。



第 88 図 北水施設実測図 (1 : 40)



第 89 図 北水籠施設排水升実測図(1)(1:40)

は板が立っていた痕跡だったと考えられる。これは北水籠施設に先行する木製の水籠施設の痕跡と思われる、造成土を掘り込んで木製升を設置し、後に29にぶい黄褐色砂質土で木製升を埋め、その上面にレンガとセメントによる北水籠施設を作り直したと考えている。

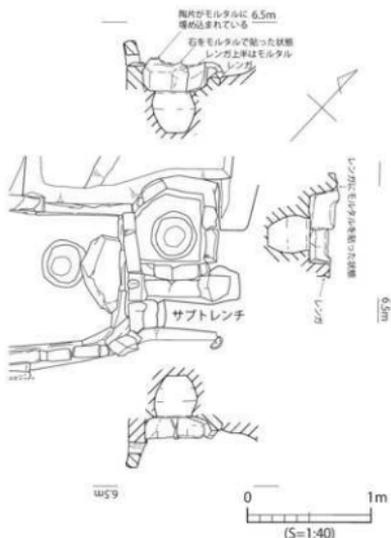
南升は東西1.3m、南北1.1mで南壁の南東隅がやや湾曲し東側が狭い。深さは84cm。底の中心よりも東寄りに埋甕を設置する。床面はコンクリート。周囲の壁はレンガをセメントで固めたものである。

西隅の①にぶい黄褐色砂質土はコンクリート水路設置のための掘り込みである。この土層図では先後関係は判断できないが、周囲の状況からコンクリート水路が新しいと考えられる。

A-A'断面では中央床のコンクリート面以下の土層が問題となる。33~36層はこの付近の造成土と考えられ、そこに31・32層が縦に入り込んでいるが、これら

中央床はコンクリート製で南北の幅約1mを測る。南北の升の壁を利用して高さ18cmの壁が立っており、床面は中央で東西方向に折れ、中心付近の深さは30cm近い。東西方向は約1.6mにわたってコンクリートが貼られる。

北升は全掘できなかったが東西1.7m以上、南北1.6mで深さ80cmとなる。周囲をレンガとセメントで固め、床面はコンクリートとなる。幅26cm、高さ18cm、厚さ約10cmの大型のレンガを4段積み、上部には16×8×8cmほどの小さなレンガを2段積む。大型レンガの上面が中央床に近い高さで、中央床に接する南壁の標高6.5mと6.3m付近に取水口があり、東壁西隅の標高6.4mと6.2m付近に排水口が開いている。南壁の6.3m付近の取水口は中央床の床面より低く、完全に埋まっているため機能しない。中央床設置以前の別の升のためのものだろうか。北升は全体の2/5程度しか掘削できなかったと思われるが、半分近くを検出している床面で埋塞を確認できていない。南升とは大きさや



第90図 北水廠施設排水升実測図(2)(1:40)

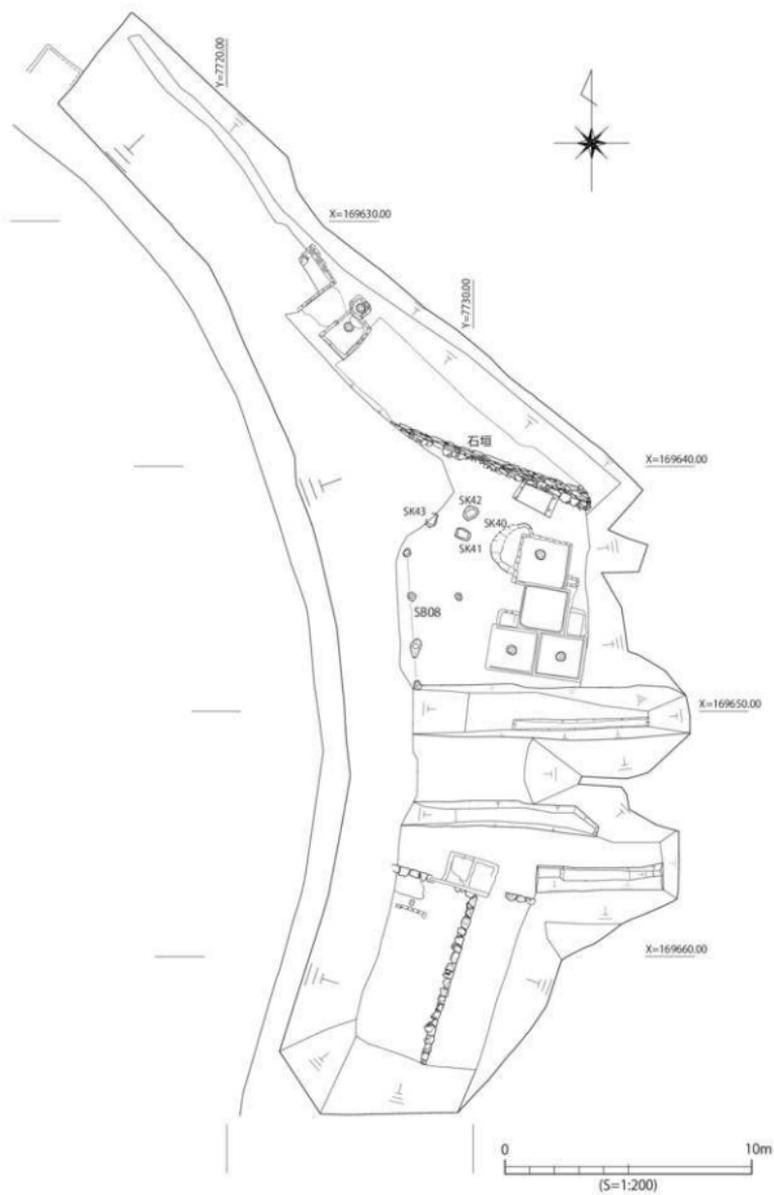
形状も若干異なることから、構造が違う可能性もある。

第90図は南升の北東に作られた排水升である。西壁の比較的高い位置、標高6.2m付近に南升からの取水口があり東西44cm、南北50cmで北西側が斜めに取り付く5角形を呈す。深さは20cmほどしかなく、中央に埋塞が設置される。南升からの出水口があるが、排水升からの排水口は確認できない。升の周囲はレンガをセメントで固め、床面がコンクリート製であることは南北升と共通した構造となる。底付近から埋塞内には10灰白色粘土が入り込んでおり、南升最下層の堆積と同様の陶土とみられる。

北水廠施設は元々深い位置に木製の升で作られていたものがそれを埋め、レンガ製の升に作り替えられた。レンガ製の水廠施設は南水廠施設でみられたコンクリート製の中央升に相当する部分が浅い中央床となっており、東西の仕切りも木製だった可能性がある。排水升からの排水溝もないなど、南水廠施設とは構造が全く違う。

4. 第4面の遺構・遺物

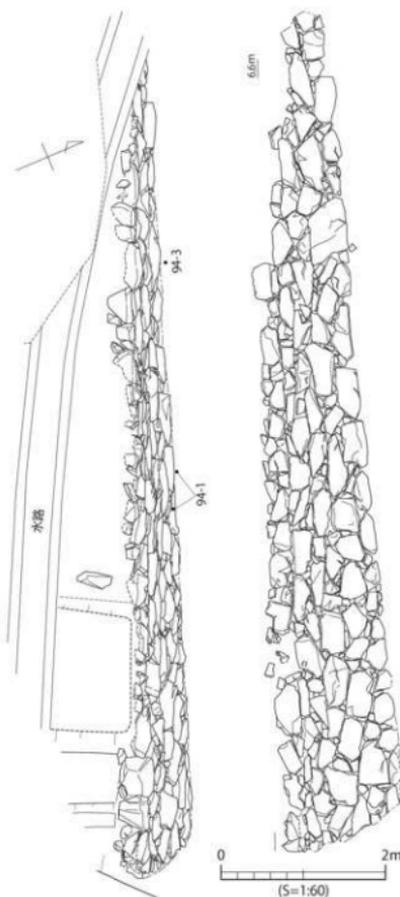
第4面(第91図)は2区周辺で窠場としての作業面を造成した最初の段階と考えられ、南水廠施設西側にいくつかの落ち込みを検出したほか、石垣を発見した。2区の北側は市道と西川に挟まれた狭小な調査区だったうえ、市道造成時の転石が多く堆積していたことから、調査当初から十分な掘削をおこなってこなかった。しかし、南北の水廠施設の間に遺構がなく、2区南側で遺構面と考えた褐色砂の面を認識できなかったことから調査終盤になって北水廠施設南東側にトレンチを入れ、下層の状況を確認した。



第91図 2区4面遺構配置図(1:200)



第92図 2区北土層断面図(1:40)



第93図 石垣実測図(1:60)

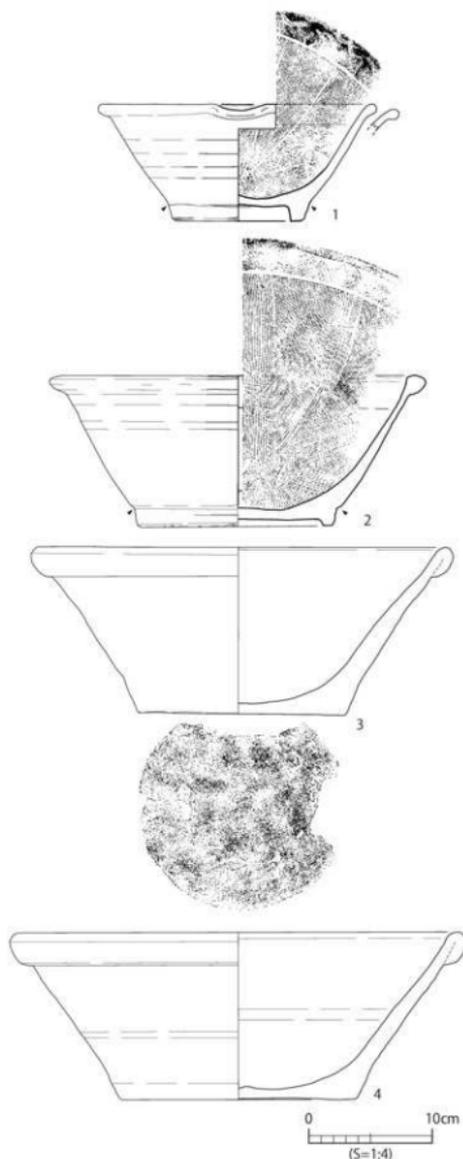
る。砂地の上に直接石垣を組んでおり、下部構造はみられなかった。

石垣の背後の堆積は8層が石垣の裏込め、9～13層が2区南側を構成する造成土と思われ、これらには遺物が入っていない。表層近くはコンクリート水路の設置によって攪乱され複雑な堆積となっている。石垣の前面は5～7層が斜めに落ち込んでおり人為的に埋められた土の可能性が有る。5層が北側トレンチの12層に相当すると思われる。北側トレンチの12層では遺物は多くはなかったが、5～7層には遺物を含んでおり、特に石垣下端に接する場所からは播鉢や盛鉢など完形品の土器・陶器類が出土した。

泥質片岩を使用した石垣は、西川の護岸や石田家跡の石垣を始め太田地区周辺では一般的にみられる。

第92図上は、北水簾施設南東側に設定したトレンチ北壁の土層堆積状況である。7黄褐色砂質土は西端にみえるコンクリートを設置した際の掘り込み。5層以上の斜めに入り込む堆積が市道の造成にとまう造成土であろう。東端にみられる巨石は市道造成時に押し出された石と思われ、2区北側では多くみられる。10灰黄褐色粘砂層下面が平らに整地されており、この面が北水簾施設の設置面である。12にぶい黄褐色粘砂層には炭や小石を含んでいることから造成土と思われる。その下層の13層以下は無遺物で河川による自然堆積であろう。これらの堆積は、2区南側(第45～47図)の32褐色細砂層が炭を含み12層に、32暗褐色細砂層が13層に相当すると思われる。

石垣 南水簾施設の北側で東西方向に延びる石垣を検出した(第92図)。石垣は高さ約1.3mで緩やかにカーブしながら北へ向かっており、コンクリート水路の下に延びる。2区で確認できた長さは9.5m以上となるが、6区で検出した石垣7につながる可能性があり、その場合は25m以上である。幅40cmほどの自然石を4～5段積み上げ、隙間を小石で埋めるが、上面近くはやや小さい石材が使われる。横目地が通る積み方で、石材は周辺で産出する泥質片岩と思われる。石垣上面の標高は6.4～6.7mである。川に近い東に向けてわずかに傾斜する。石垣下面の標高は5.5m前後であ



第94図 石垣下出土遺物実測図(1:4)

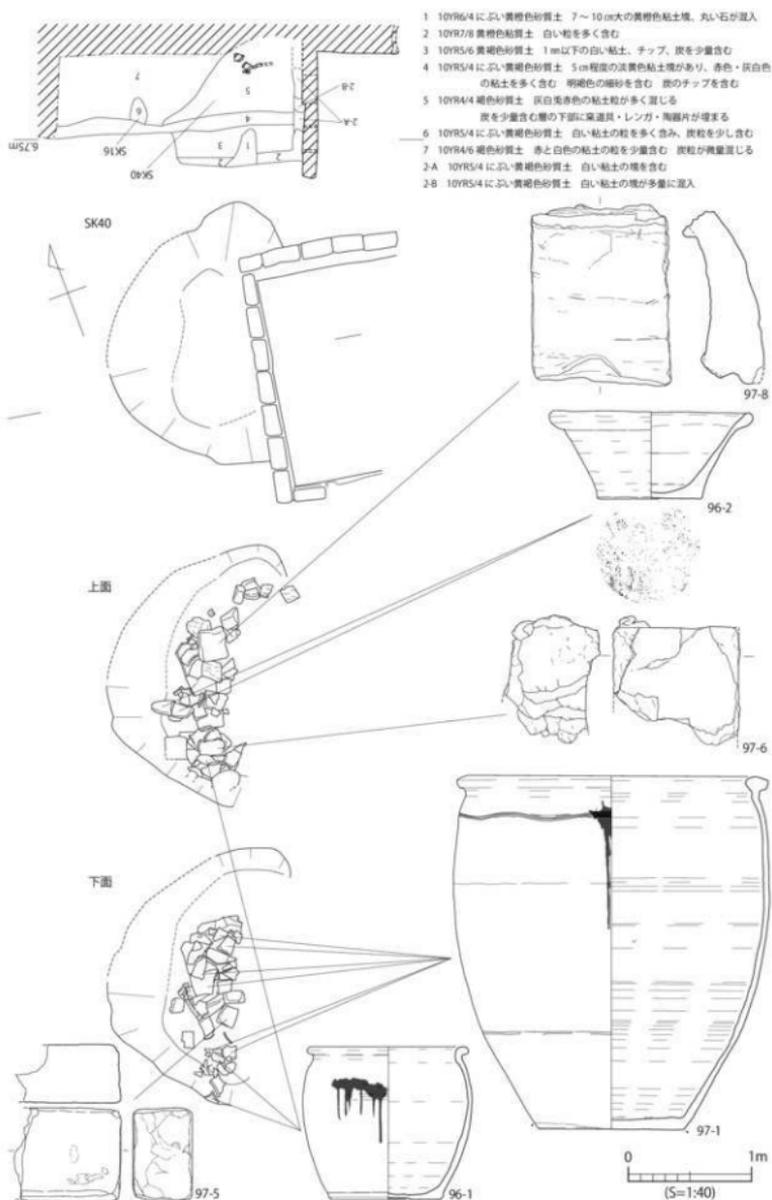
石垣下から出土した遺物 第94図は石垣前面から出土した遺物である。94-1・2は石垣の下から出土した完形品の播鉢である。94-1は小型のものである。底部を除いて来待軸を施す。浅い片口が作り出す。高台の外周に摺目が写り、内面にも輪状に重ね焼の痕跡が残る。94-2は口径29cmのものである。内面と高台の外周には93-1と同様に重ね焼きの痕跡を残す。片口の部分が非常に浅い。

94-3・4は盛鉢である。いずれも底面の穿孔はない。94-3は石垣の下から完形で出土したものである。底部には静止糸切痕を残す。体部は斜め方向に直線的に立ち上がり、口縁部を外側に折り曲げ玉縁状に作る。94-4は盛鉢の破片である。底面には静止糸切痕を残し、内外面ともナデ調整する。内面にロクロ目を残さないことから使用により摩滅したと考えられる。

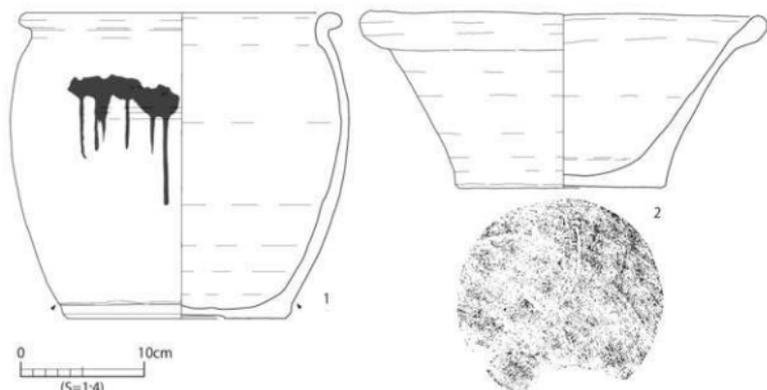
石垣の上面に当たるコンクリート水路南側からは多量に盛鉢が出土しておりその一部だったと思われる。

SK40 南水廠施設の西側では直径2mほどに復元される土坑を検出しSK40とした(第95図)。この土坑は、南水廠施設によって東半が壊されているが、南北2.0m、深さ60cmの円形で、内部には褐色砂質土が充満し、陶器や窯道具類が大量に落ち込む。

SK40に入っていた遺物は大小の陶器甕・盛鉢のほか、焼台・火立・耐火レンガが含まれる。焼台・火立・耐火レンガは被熱して器面がガラス化しているうえ、火立は焼きゆがんで



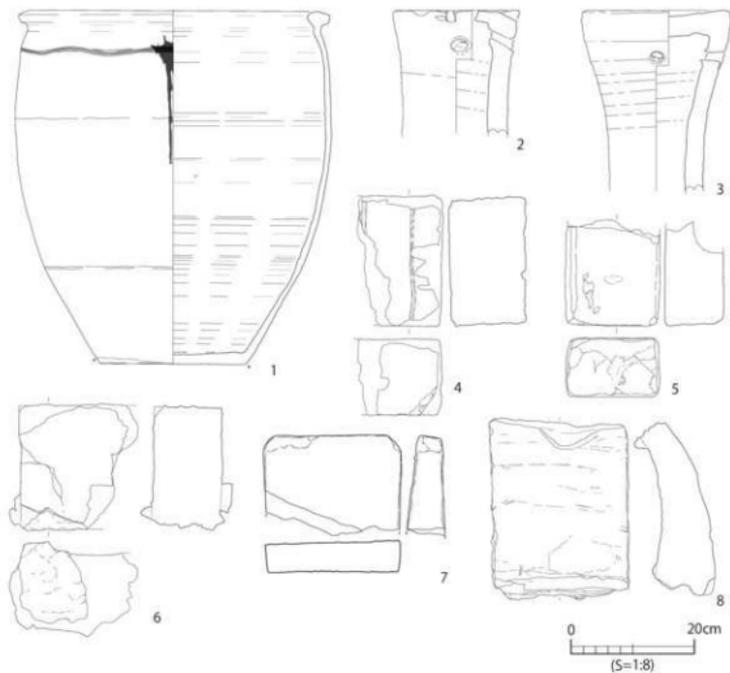
第95図 SK40 実測図(1:40 遺物は1:8)



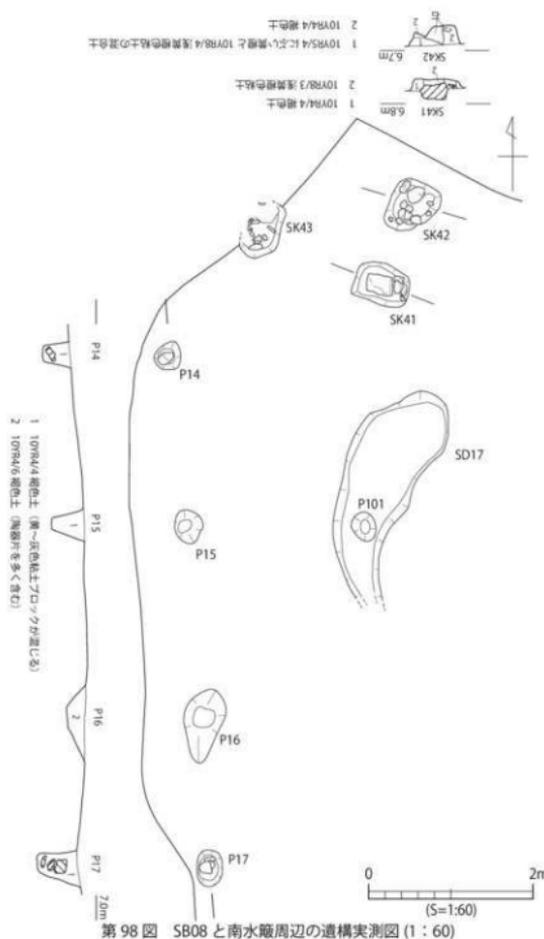
第96図 SK40 出土遺物実測図(1)(1:4)

いることから、窯の操作に使用されたことは確実である。第4面の遺構は本田窯跡でも古い時期のものと考えられるが、確実に使用されていることから操作開始以後の遺構であることがわかる。

第96・97図はSK40から出土した遺物である。96-1は小型の陶器甕である。底部を除いて来待



第97図 SK40 出土遺物実測図(2)(1:8)



える胎土は灰黄色を呈し、来待軸の発色もエンジ色に近い他の甕とは印象が異なる。

97-2・3はヌケと呼ばれる焼台である。いずれも断面まで被熱痕があり、破損後にも焼台として使用された可能性がある。

97-4～6はレンガである。97-4には使用痕がみられる。幅21.4cm、厚さ12.4cmで半分程度を欠いている可能背がある。1面に2条の平行沈線が入る。97-5はやや小型のレンガで長さ16cm以上、幅15.3cm、厚さ9.6cmを測る。来待軸が付着した痕跡があるが溶着やガラス化した部分がない。建物用のレンガと思われる。97-6は非常によく焼け表面がガラス化し、別のレンガ片が溶着している。一辺19.5cm以上あり幅約20cm、厚さ約10cmである。

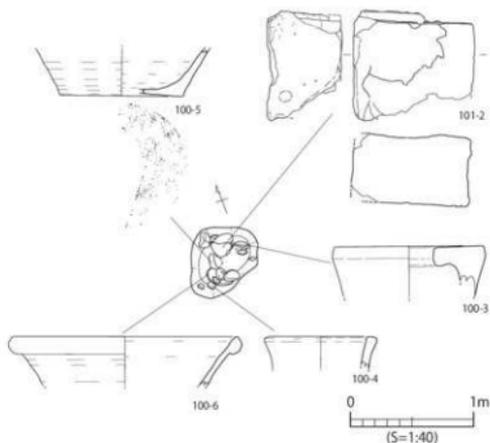
97-7・8は窯道具の火立である。96-7は火立の上端部で、片面にコビキ痕を残し、他面は布目庄

軸を施し三方向に鉄軸による流し掛けを入れる。底部は、幅の広い高台を削り出しており、その内側と頸部外面は軸を拭き取る。見込み部の周囲には7足分の焼き台の痕跡を残す。破断面に煤が付着しており、火を受けて破損したことがわかる。

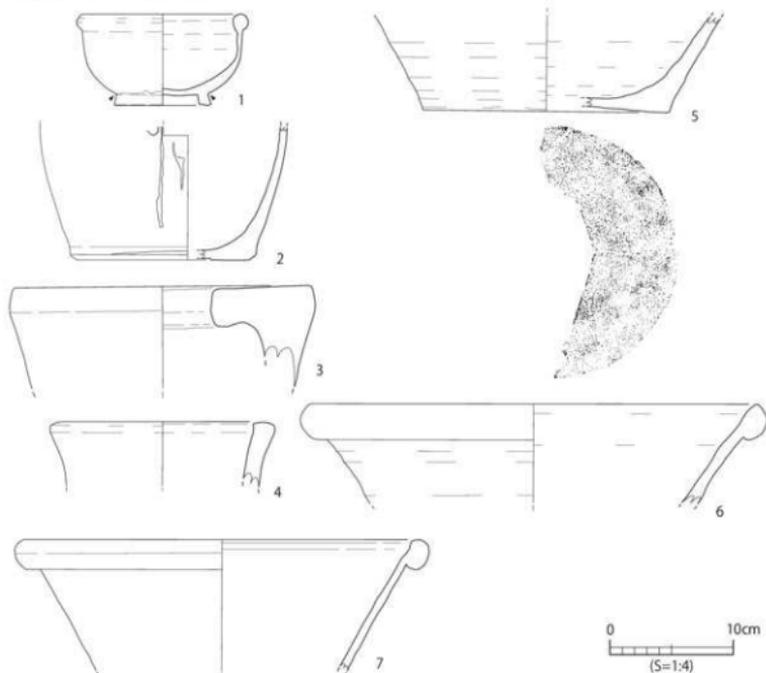
96-2は盛鉢である。底面には回転系切痕を残す。96-1と同様に火を受けた痕跡がある。

97-1は来待軸を施す大型の甕である。ほとんどの破片がSK40から出土したが、一部の破片はSK42から出土した。底面はナデ調整され切り離しはわからない。見込みには8足程度の焼き台の痕跡を残す。口縁部は分厚く作られ、肩部に櫛書き波状文を入れる。鉄軸による流し掛けがみられる。体部外面の器面は縮れたように見え、いわゆる火膨れとなっている。断面からみ

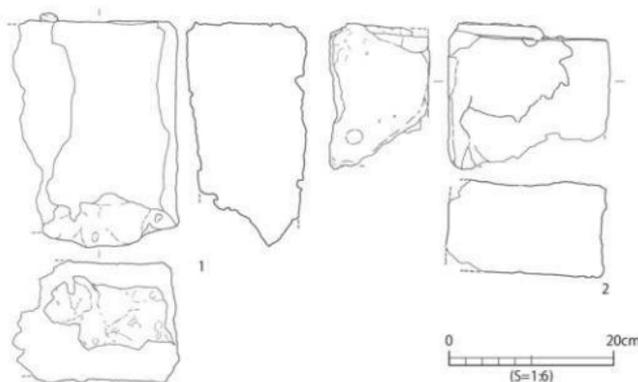
痕か。幅22.4cmになる。基部側では6cm程度の厚みがあるが上端部側は4cmである。96-8は被熱して溶け曲がった火立である。高さ29.5cm、幅22.4cmで、基部側の厚さは10.2cmあるが、上端部は4.6cm程度である。被熱して大きく前傾し、上端部の中ほどがくぼむように溶け落ちている。基部は棒状に丸くくびれており、くびれた内側は耐火砂の付着が少ないことから棒状の台の上に載っていたことが想像される。基部の周囲には耐火砂が付着し、前傾した凹面側は強く被熱してガラス化が進む。



第99図 2区南SK42遺物出土状況実測図(1:40 遺物は1:8)



第100図 SD13・SK41・43出土遺物実測図(1:4)



第101図 SK41・42出土レンガ実測図(1:6)

SB08と南水簸
周辺の遺構
南水簸施設の
西側からは柱
穴とみられる
落ち込み4基
(P14～17)と
土坑を検出し
た。

調査区の西
壁に沿って柱
穴と思われる
落ち込み4基

(P14～17)を検出した。これらの落ち込みは、一直線に並ぶところから西に展開する簡易な建物の一面と思われる。柱間は1.3+1.5+1.2mと不均等になる。直径20cmほどで、深さは15～25cmである。側柱となるP14とP17はやや深く、内部に石が入っている。

SD17は不整形な溝状の落ち込みである。内部に小さな柱穴状の穴が開くが遺物がなく、用途はわからない。

北側には3基の土坑(SK41～43)が見られた。SK41は長方形の浅い土坑で平面40×25cm、深さ20cmほどしか検出できなかったが、さらに上面からあったと思われる。内部にはレンガ(101-1)が入っていた。

SK42はSK41北側で検出した不整形な土坑である。平面35～42cmで深さは18cmを測る。内部には陶器片やレンガの破片が入っていた。また、甕の破片が出土しSK40に入っていた甕(97-1)と接合した。

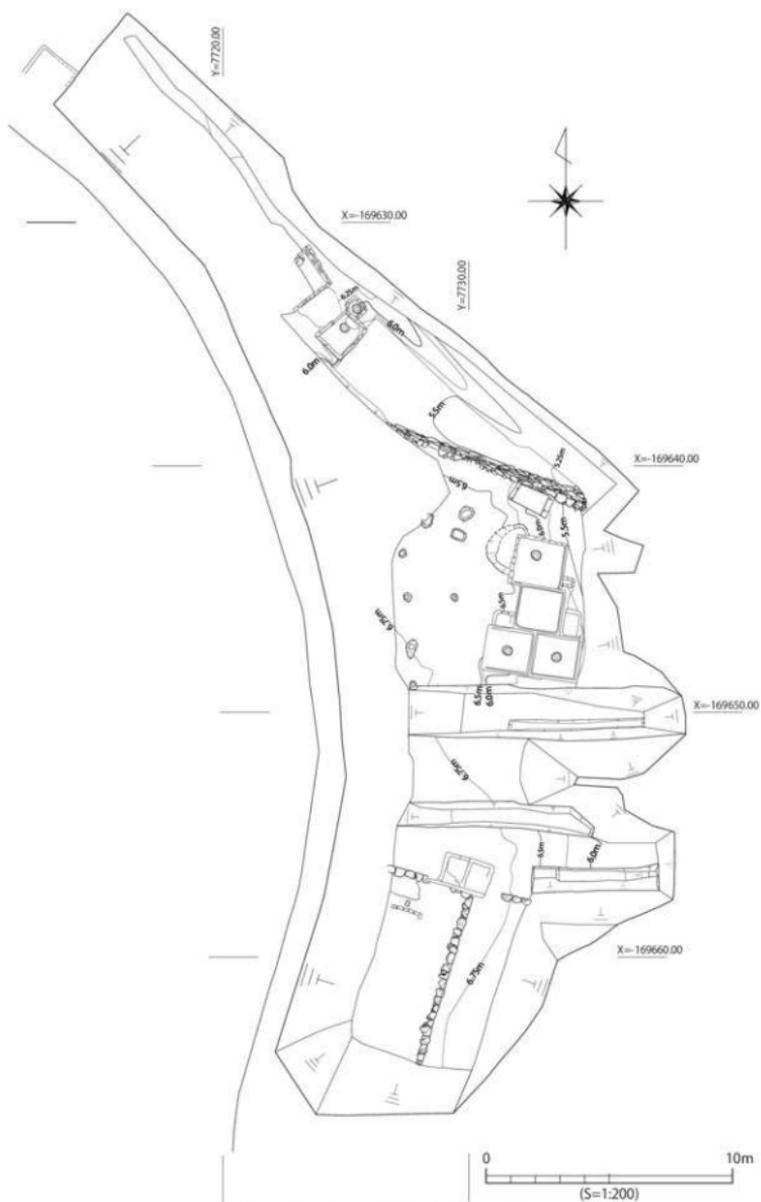
SK44は壁際で検出した不整形な土坑である。この部分は市道のカーブミラー直下のため掘削できず内容はわからない。石と盛鉢と思われる素焼きの破片が入っていた。

第100図はSK42とその周辺で出土した陶器類である。100-1は長石釉による小型の片口鉢である。口縁部を玉縁状に作る。100-1はSK41の西側から出土しており、第3面のSD13にともなう可能性もある。

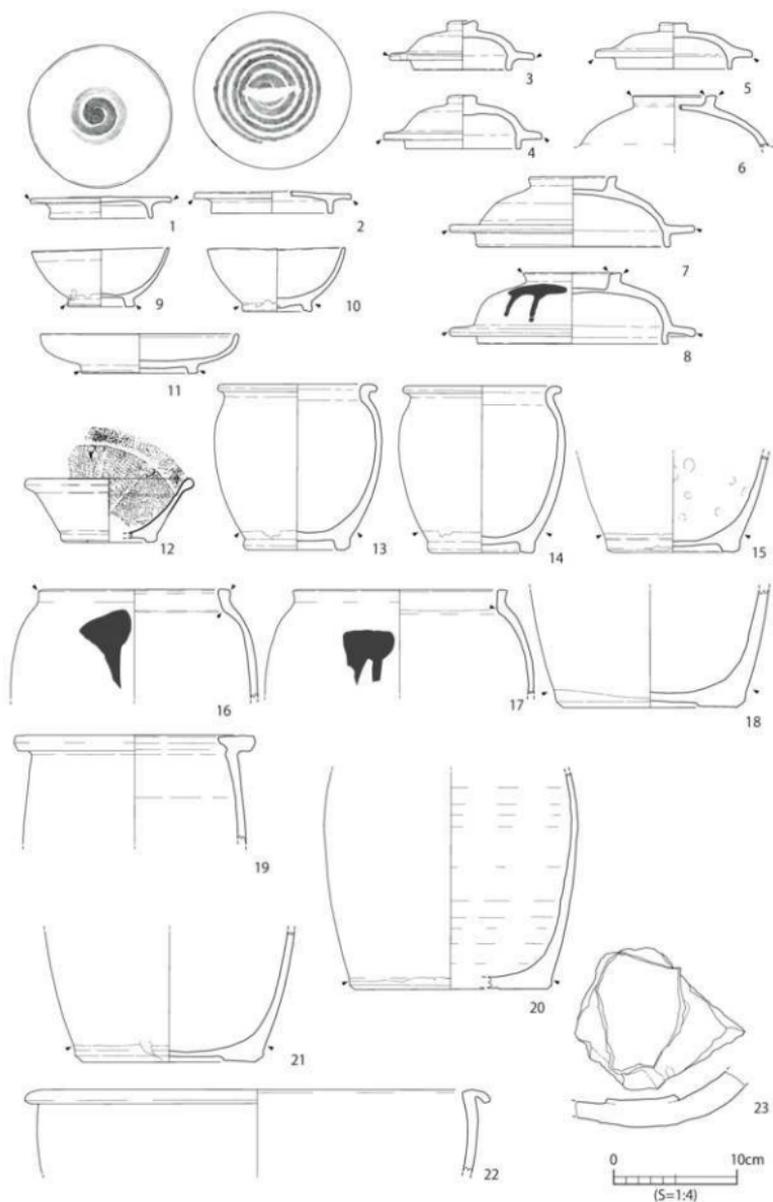
100-2は小型の壺・甕の底部である。来待軸を施し、黒褐色の流し掛けがみられる。底面はあて具によって底上げする。

100-3は焼台(ヌケ)の破片である。上面には剝離痕がある。100-4は焼台の基部にみえるが、端面まで黒褐色の釉が付着した痕跡があり上面側であろう。復元口径12.5cmの小型のものである。100-5～7は盛鉢である。100-5は底部の破片となっている。底面は摩滅し切り離しはみえない。100-6・7は口縁部の破片である。内面は摩滅が進み調整がみえない。SK42から出土した遺物には完形品はなく、いずれも破片となっている。また、SK40との間に接合資料が含まれる点は注意される。

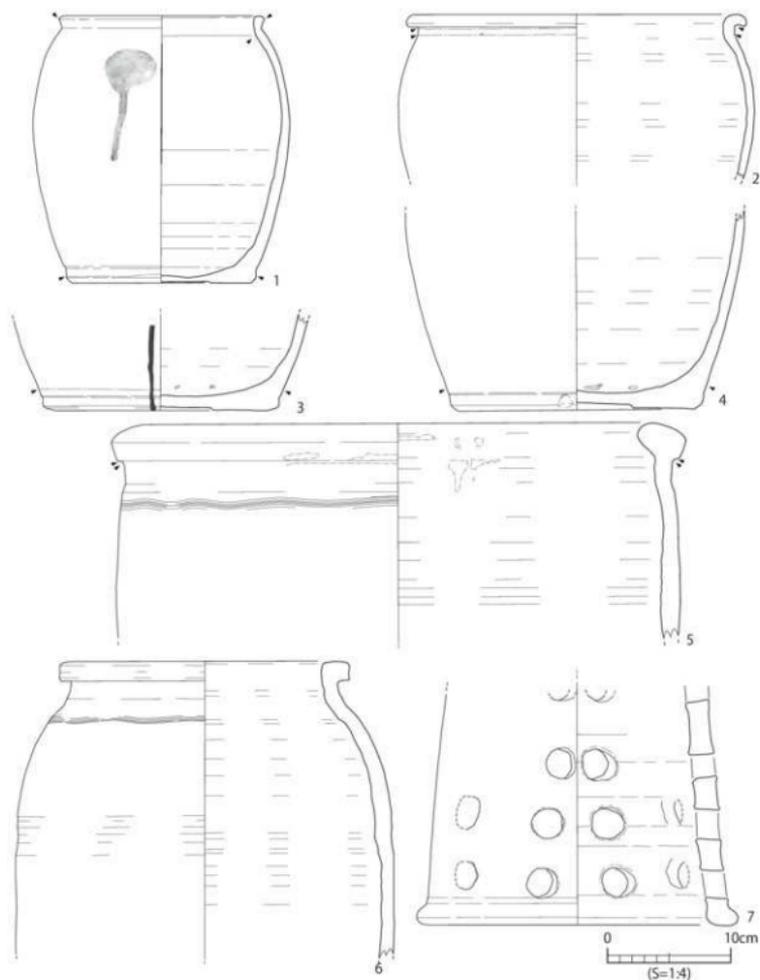
101-1はSK41から出土したレンガである。長さ27cm以上あり、側面の一面がガラス化してい



第102図 2区4面地形測量図(1:200)



第103图 2区出土遗物实测图(1)(1:4)

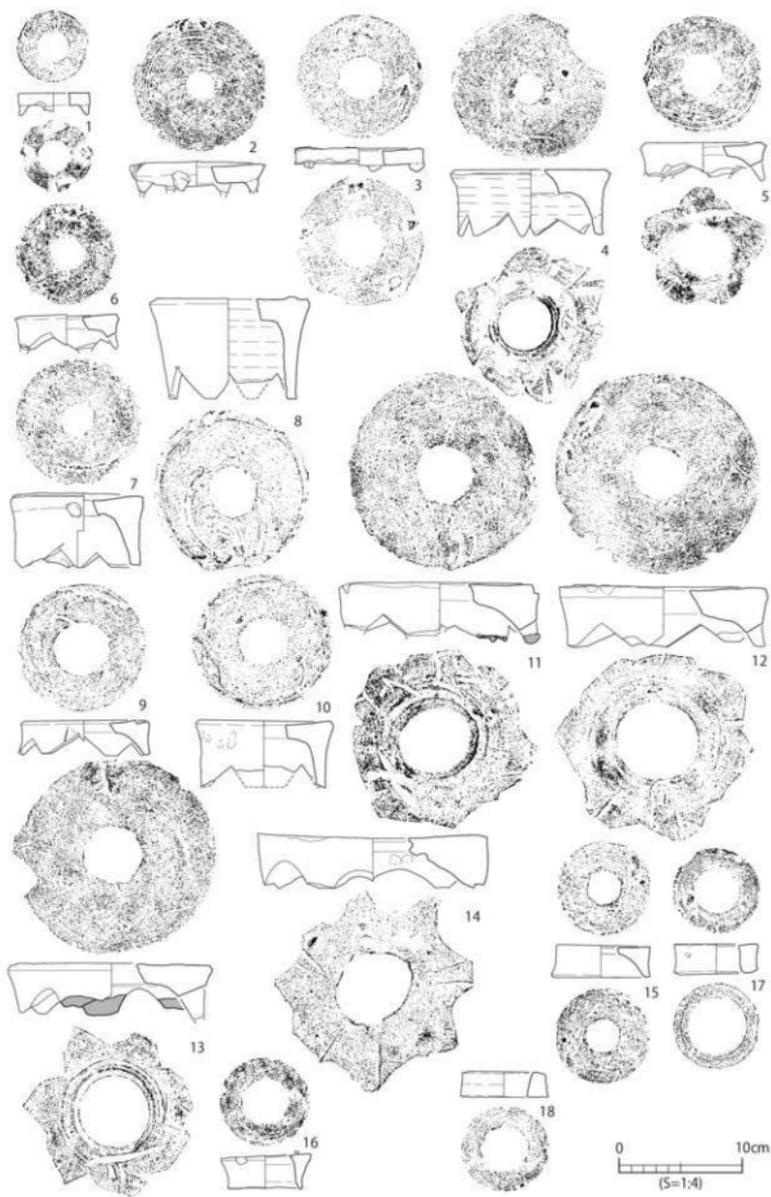


第104図 2区出土遺物実測図(2)(1:4)

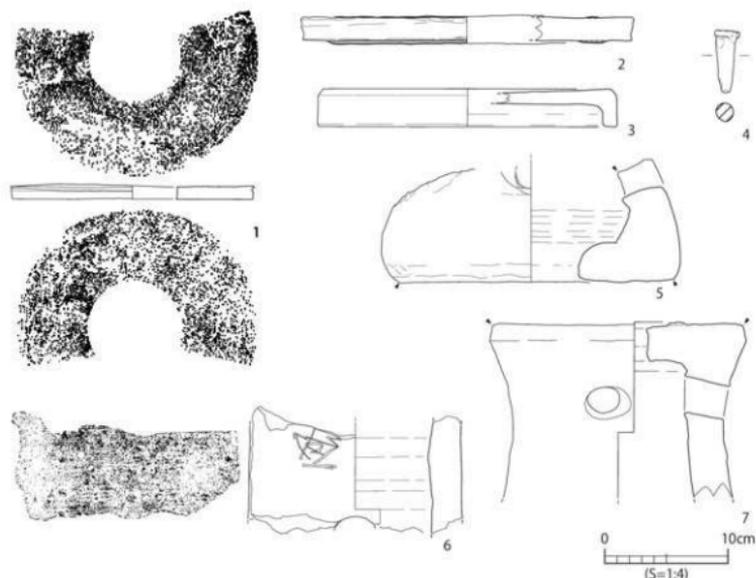
る。

101-2はSK42から出土したレンガである。長さ19.7cm以上の耐火レンガ、側面の一面と、端面の一部がガラス化する。

第102図は第4面の地形測量図を示した。石垣より南側では中ほどを標高6.75mの等高線がとおり、ほぼ平坦となっているが、石垣より北側では2m近く落ち込み、標高5.5mほどしかない。やや東に傾斜しており、川に向かって落ち込むことがわかる。



第105图 2区出土遗物实测图(3)(1:4)



第106図 2区出土遺物実測図(4)(1:4)

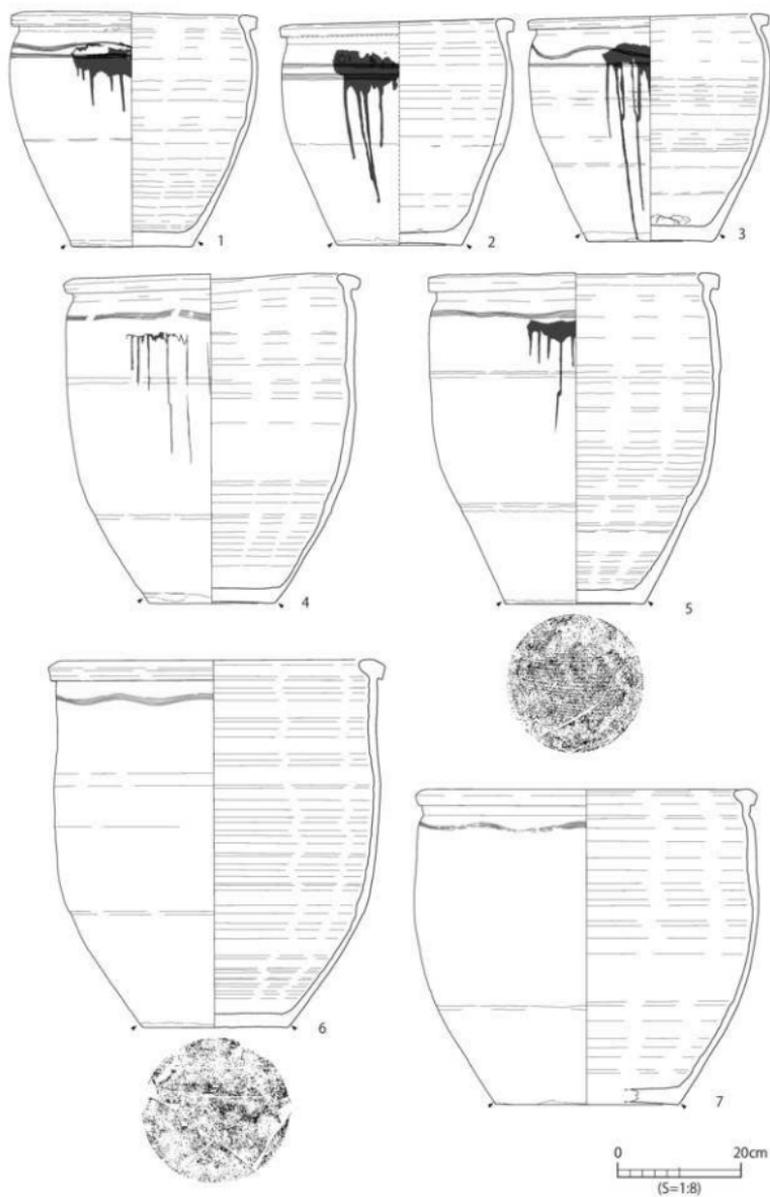
4. 2区出土遺物

陶器類 (第103・104図) 103-1・2は平形蓋である。長石軸を施し、頂面にコバルトによる渦巻の文様を描く。103-2は頂部にひび割れが入る。103-3～8はつまみの付く蓋蓋である。103-3～5は小型のもので口径約9cmである。いずれも来待軸をかける。103-6～8は輪状つまみを持つ直径16cmほどのものでいずれも来待軸をかける。103-9・10は丸形椀である。103-9は長石軸を103-10は来待軸をかける。103-10は器高が5.3cmあり底面にひび割れが入る。

103-11は高台の付く丸形皿であり、本田窯跡では数少ない器種である。来待軸を施し、見込み部分に灰かぶりがみられ、本窯で製作されたことを示している。

103-12は小型の擂鉢である。高台の外側に別個体の摺目が写っている。103-13・14は小型の甕で、103-15も同様のものの底部である。来待軸を施す。103-15は見込みに灰かぶりがあり、内面に気泡が入る。103-16・17は甕の口縁部である。端部の軸を拭き取る。いずれも来待軸で肩部に鉄軸による流し掛けがみられる。103-18は小型の甕・甕の底部である。来待軸を施し器壁が厚い。103-19は窯道具の焼台(ハリ)か、全面ナデ調整され灰白色を呈す。103-20・21は甕・甕の底部である。内外側とも来待軸がかげられ底面の内側は軸を拭き取る。103-21の内面には6足分の焼台の痕が残る。103-22は捏鉢の可能性のあるものである。口縁部を強く外側に折り曲げる。長石軸をかけ緑灰色を呈す。103-23は大型の焼台(ヌケ)の破損後の再利用による焼台である。内面側に甕と思われる破片が溶着する。焼台側には来待軸が残るが、溶着した製品には長石軸がほどこされていく。

104-1は長石軸の甕である。コバルトによる流し掛けを施す。底面は露胎のままとされる。104-2



第 107 图 2 区出土罐实测图(1:8)

は小型の甕の口縁部である。来待軸を施す。頸部外面は軸を拭き取っている。104-3は来待軸を施す甕の底部である。底部外面は無軸で、流し掛けから垂れ落ちる鉄軸は、無軸部分にかかる透明に見える。内面には焼台の痕が残る。104-4は来待軸を施す甕の底部である。104-5・6は大型の甕の口縁部である。来待軸をかける。104-5の肩部には柳書き波状文がみえるがとぎれ気味で直線的になる。104-6は体部が直立する。

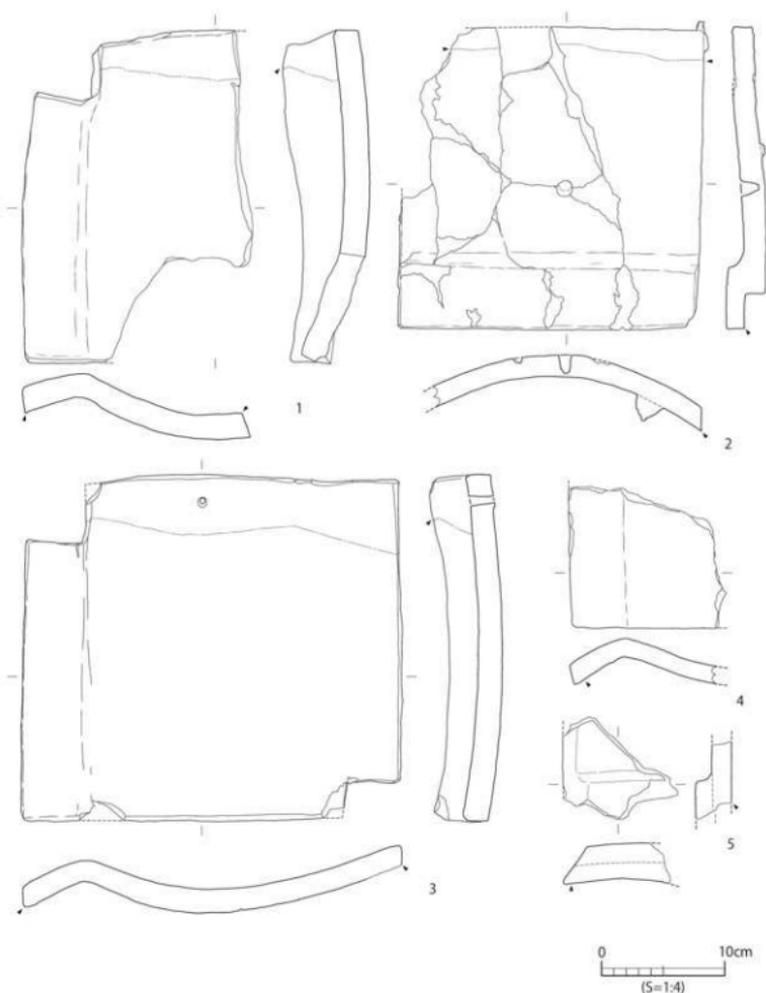
104-7は全面に来待軸を施し、直径2～3cmの穴を多数入れたものであり、蒸し器と思われる。同様の破片はもう1点出土している。2区南側の表土掘削中に出土していることからSB04にともなう可能性がある。

105図は円盤状の焼台で、105-1～14はハリと呼ばれるものである。105-14の内面には指の痕が残る。105-1～3は脚部を別の粘土で張り付けるものである。105-4～12はヘラによって下部を三角形に切り取る。105-4の内面には「T」にみえるヘラ記号がある。105-7の側面には指による丸いくぼみが残り、105-10の側面には指の痕3本程度が残る。105-11の内面にはヘラにより3字程度の文字が入るが判読できない。105-12内面のヘラ記号は「七」にみえる。105-13・14は丸く削り取って脚を削り出したものである。105-13の内面側にヘラ記号「キ」がみえる。105-14の内面には指の痕がみえる。105-15～18は円筒形の焼台である。いずれも頂面に回転糸切痕を残す。

106-1は円盤状の焼台(ハマ状)であり、両面に回転糸切痕をとまう。106-2も同様のもので、糸切後にナデ調整する。106-3は火消壺の蓋と思われる。106-4は瓦を焼成する際に瓦間の詰め物として用いるハセと呼ばれる窯道具である。頭部の下に来待軸が付着する。106-5はヌケと呼ばれる円筒形の焼台の基部である。高温で歪み破損後も焼台として使用されたい。破面もガラス化し、底面には耐火砂が付着する。106-6も円筒形の焼台(ヌケ)の胴部である。外面にヘラ書きがあり漢字にもみえるが判読できない。107-7は円筒形の焼台(ヌケ)の頂部である。外面はガラス化が進む。

第107図には大型の甕を図示した。107-1は南水廠施設のうち北升の埋甕に使用されていた来待軸の甕である。器高33.4cm、口径35.9cmを測る。肩部に櫛による波状文と直線文を入れ、三方向に黒色の流し掛けを施す。体部中ほどに接合痕がみえる。底部が厚く内面には焼台の痕を残す。107-2は南東升の埋甕に使用されていた甕である。器高37.0cm、口径34.4cmで106-1に近い法量となる。肩部は2条とも櫛による直線文で波状文になっていない。黒色の流し掛けを三方向に施す。体部中ほどにひび割れが入っており、接合位置と思われる。底面に剝離剤が残る。107-3は北水廠施設排水升の埋甕である。口縁部下面までしっかりと来待軸がかかり、三方向に鉄軸による流し掛けを施す。肩部に櫛による波状文と直線文を入れるが、波状文は起伏が大きく丁寧に施される。体部中ほどよりやや下方に接合痕があり、最大径付近にもくぼみがあることからもう一段の継ぎ目があると思われる。全体に軸が厚く、底面はナデ調整される。見込み部にセメントが付着し、石が貼り付いている。

107-4・5は窯垣1に使用されていた大甕である。肩部に柳書き波状文が入り三方向に流し掛けを施すが、107-4の流し掛けはかなり飛んでいる。いずれも体部中ほどの2カ所に接合痕がある。107-5の底面は静止糸切の上から板目状の圧痕が付く。いずれも底面に三日月形のひび割れが入っている。窯垣に用いるために廃品を流用したのだろうが、雨水が溜まらないようあえてひび割れた個体を選んだように思われる。

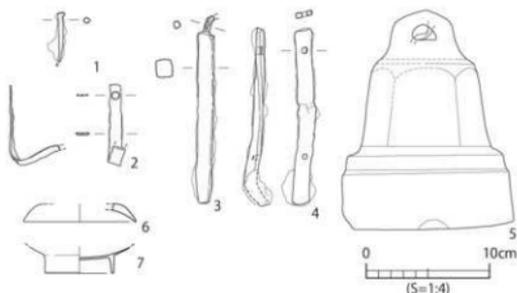


第108図 2区出土瓦実測図(1:4)

107-6・7は2区北側の表土中から出土した費である。107-6は頸部にくびれない器形で肩部の相当する位置に櫛書き波状文を施す。体部の2カ所に継ぎ目があり、底面には板状の圧痕がみえる。流し掛けは確認できない。107-7はやや器高の低いものである。頸部は帯状にくぼむ。体部下半に継ぎ目が残るほか、上半部にも器壁が厚い部分があり、接合痕であろう。いずれも見込み部の外周に8足分の焼台の痕跡を残す。

第108図には2区で出土した瓦類を示した。108-1は二次造成土から出土した小型の棧瓦で、全

長は27.1cmである。凹面側に
来待軸を施し、凸面側にはコ
ビキ痕がみえる。焼きゆが
みが大きく凸面側に小さな溶着
物が残ることから、屋根に使
用されたものではなく、本田
窯跡で焼成された製品の破損
品であろう。108-2は雁振り瓦
である。凸面に来待軸を施軸
する。焼成前に凸面側から釘



第109図 2区出土金属器・木製品実測図(1:4)

穴を開けようとしているのが貫通していない。また、凹面側には鉄釘が7本以上を始め鉄錆が多量に
錆着している。これは焼成や屋根の施工には無関係で、鉄釘などの上にこの瓦を放置していたもの
だろうか。108-3は拡張2トレンチの表土中から出土した棧瓦で、二次造成面にとまうと思われ
る。凹面側には来待軸を施し、凸面側は露胎だが、軸によって2条の線が引かれる。また、中軸に
浅い沈線が引かれている。この線は型側にあつたと思われ、分割界線にみえる。上端部近くの軸が
かかっている部分に釘穴が開けられる。凸面側部に剥離痕があり、窯道具の痕跡であろう。歪み
があり窯道具の剥離痕もみられることから本田窯跡の廃棄品と思われる。108-4は二次造成面から
出土した棧瓦の小片である。凹面側に来待軸を施す。凹面側に来待軸の上から灰かぶりによる自然
軸が多くかかる。108-5は表土中から出土した雁振り瓦の小片である。凸面側に来待軸を施す。

第109図には2区から出土した金属器・木製品を示した。109-1はSK40から出土した和釘であ
る。残存長は4.2cmで先端を欠く。断面は正方形である。109-2は二次造成面から出土したL字
形に折れ曲がる板状の金具である。直径8mmの釘穴が上端部と折れ曲がった角の2カ所にあき、欠損
した下端部にも釘穴の痕跡を残す。用途はわからない。109-3は一次造成面から出土した断面方形
の鉄製品である。両端とも欠損している。方形断面の基部の芯に銅線が入る構造にみえる。絶縁材
等はわからないが室内用の配線だろうか。109-4は幅14mm、厚さ4mmの板状で2区北側の表土から
出土した。下端側が緩やかに湾曲し、径6mmの釘穴2カ所があく。用途はわからない。

109-5はSB04のコンクリート壁の下から出土した分銅である。釣鐘型を呈し上半は6面体を呈
す。鈕の穴に紐が錆着する。基部に手がかりとなる半円形のくぼみがある。重量は9.5kgあり2.5貫
に相当すると思われる。分銅は、口縁部付近を継いで成形する際にすでに乾燥が進んでいる底部付
近(石見焼で「しき」と呼ばれる部分)が地板から離れないよう見込み部に置き重しに使用するとい
う¹⁰⁾。

109-6は第2面を覆う包含層から出土した木製品で、漆器の蓋と思われる。復元口径は9cmであ
る。器壁は5mm以上ある。両面に黒漆を施す。109-7も漆器の碗である。部分的に黒漆がはげ、下
地の赤漆がみえる部分が多い。

8. 小結

本田窯跡2区は市道や電柱、カーブミラーなど撤去できない施設による制約から面的に掘削する
ことが困難だったが、4面におよぶ遺構面を検出し、作業面の変遷を追うことができた。

第1面は、SB04が存続している可能性が高いが、確実に機能している施設としては2・3号炉がある。2・3号炉の出土品には釘など鉄片が多く含まれることから廃材を燃やした可能性が高く風呂釜だろう。本田窯跡が操業を停止した昭和30年代から大水害に見舞われた昭和47年夏までのであろう。南北の水簾施設も洪水砂や碎石によって埋まっているので、この直前まで開口していたことがわかる。これらの遺構は洪水によると思われる砂や石を含んだ土砂によって埋められており、洪水の片付けや市道の建設とともに埋没したと思われる。

第2面はコンクリート製の基礎を備えたSB04を中心とした遺構群と考えている。南水簾施設を設置しているほか、コンクリート基礎1・2による簡易な建物か棚(盛鉢棚?)があり、白色粘土列もこの時期であろう。多量の盛鉢が出土していることから、近くに盛鉢棚が置かれていたことは確実といえる。白色粘土列は水簾施設で得た陶土を脱水する施設(石見焼でオロと呼ばれる施設か)の可能性があり、盛鉢を使用する二次脱水施設、粘土を精製する南水簾施設といった、陶土を得るための一連の工程がこの付近でそろっていた可能性が高い。中央トレンチ付近の簡易な建物も脱水・乾燥に関わる施設だったと思われる。コンクリート製の基礎によるSB04からは成形に使用される分銅が出土していることから、陶土の精製から陶器の成形に至る施設がこの時期の2区にあったと考えられる。南水簾施設は第3面から作られていた可能性があるが、この時期コンクリートを使用し、増設改築がおこなわれている。SB04は地覆石によるSB07とほぼ同位置に建てられるが、わずかに主軸をずらして建てられている。この窯跡が操業を終える昭和30年代までの遺構群か。

第3面は北水簾施設を中心とした時期になる。2区北側は北石垣までの範囲だったが、北石垣の北側を埋め施設を拡大している。北側にはまず木製の水簾施設を作り、それを埋めてレンガを多用した北水簾施設を作った。SK40を壊して作られる南水簾施設の北升はレンガ製であることから、南水簾施設もこの時期に機能していた可能性がある。南水簾施設西側の遺構群は陶土の脱水に関わる施設だった可能性が高く、この時期から粘土の精製が本格的におこなわれていた。2区南では石を地覆に使用したSB07が建てられ、窯業関係の施設が充実していく時期だったと考えられる。

第4面は北石垣とその上面の遺構群からなる。北石垣北面は川に向かって落ち込んでおり、ここまでは窯跡の作業場は広がっていない。北石垣上面にみられる遺構は廃棄土坑で、本格的な陶土の精製はおこなわれていない。一方、廃棄土坑には焼成時の破損品が廃棄されていることから、すでに登窯での操業は始まっており、登窯操業以前の遺構は2区には存在しない。時期を決定する決定的な根拠はないが、SK40に入る甕は古い要素がみられ、第4面の遺構は窯跡の操業開始からそう遅れない明治期の遺構であろう。

【註】

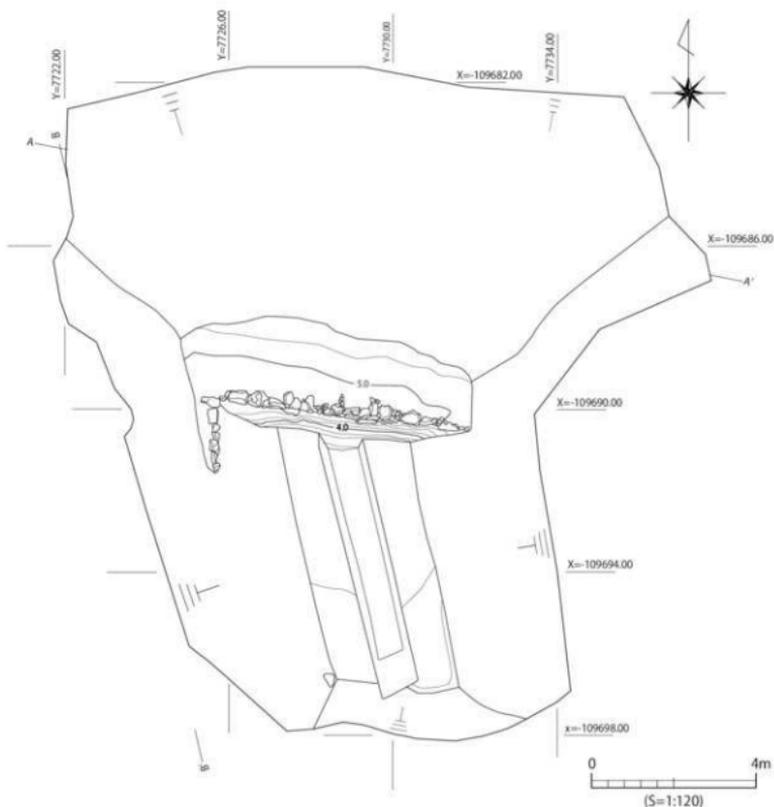
- 1 石見焼窯場での名称は江津市文化財研究会 1993『石見湯』第十三号を参考にした。
- 2 江津市文化財研究会 1993『石見湯』第十三号には石見焼の制作工程を細かく紹介されている。分銅の使い方を説明した上で、分銅が写った写真が掲載されている。

第5節 3区の調査の成果

1. 層序

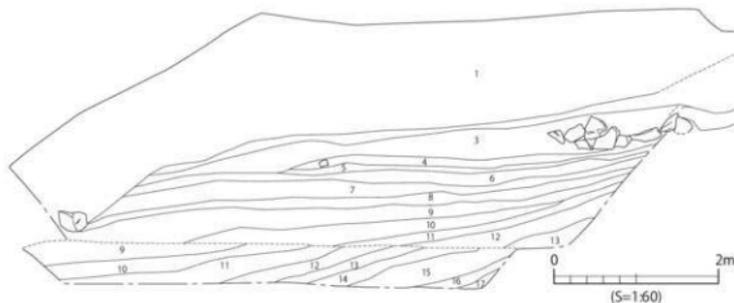
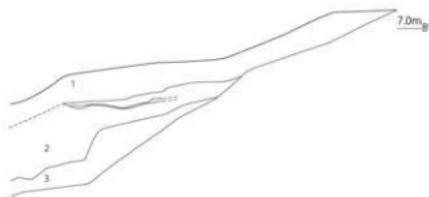
本田窯跡3区とした部分は国道261号の南側で江の川に面した部分。当初は川岸の約960㎡にわたって調査をおこなう計画だった。しかし、調査区の一隅に残った保安林の周囲が砂だけの堆積だったため、巨樹が転倒する恐れが生じたことから表土掘削の後、直ちに埋め戻しを実施した。この巨樹の周囲は、1m以上におよぶ洪水砂の厚い堆積となっており、調査可能な深度の中では遺構の広がりは認められず、遺物も含んでいなかったため調査区から外し、3区は当初の調査予定地の東側部分のみとした。このため、最終的な調査面積は60㎡にとどまった(第110図)。

第111・112図には3区の土層堆積状況を示した。調査地の標高は約9mで、国道路面高から水平に続く平坦面となっていた。試掘では地表下2mにわたって造成土が堆積しており、国道261号建



第110図 3区遺構配置図(1:120)

- 1 10YR8/2 灰白色種（埋立土） 国産造成土、電柱などを含む
- 2 10YR4/2 灰黄褐色砂質土 土壌性がある
- 3 2.5Y6/3 に近い黄色砂質土 若干土壌性がある
- 4 10YR4/2 灰黄褐色砂質土 土壌性がある
- 5 10YR5/3 に近い黄褐色砂質土 若干砂土が混ざる
- 6 10YR4/3 に近い黄褐色砂質土 土壌性がある
- 7 10YR7/3 に近い黄褐色砂
- 8 10YR5/3 に近い黄褐色砂
- 9 10YR7/2 に近い黄褐色砂
- 10 10YR6/2 灰黄褐色砂質土 土壌性を帯びる
- 11 10YR6/4 に近い黄褐色砂
- 12 10YR5/3 に近い黄褐色砂
- 13 10YR6/2 灰黄褐色砂 土壌性を帯びる
- 14 10YR6/2 灰黄褐色砂質土 土壌性を帯びる
- 15 10YR7/3 に近い黄褐色砂
- 16 10YR5/2 灰黄褐色砂質土
- 17 10YR5/3 に近い黄褐色砂質土



第111図 3区西壁土層断面図(1:60)

設時に造成されたものと思われる。造成土を除去すると石・遺物を含む層があり、この面が遺構面となる。それより下層は砂が厚く堆積している。この砂は洪水層と思われる、堆積の単位が洪水の単位を示すと思われる、遺物をほぼ含んでいない。地表下約4m、遺構面より約2m下まで掘削したが、無遺物の砂層がさらに下層に続き基盤層は検出できなかった。

2. 遺構

標高約5mの地点から緩やかに下る石列を検出した(第113図)。石列は、調査区北側で東西方向に約6.5mを検出し東側へさらに延びている。調査区の西面に接する位置で南に直角に折れ曲がり、川に向かって高度を下げながら約1.9mあり、そこで消滅する。石列に使用される石は人頭程度の自然石を組みあわせたもので加工はみられない。面を南・東側に向け、北側・西側の土砂を抑えている。石垣は1段から場所によって2段程度重ね、高さは高いところでも80cm程度しかない。石垣に使用される使用される石材は、近隣で産出する泥質片岩である。この内、北面する石垣の一部に白色の粘土が付着していた。

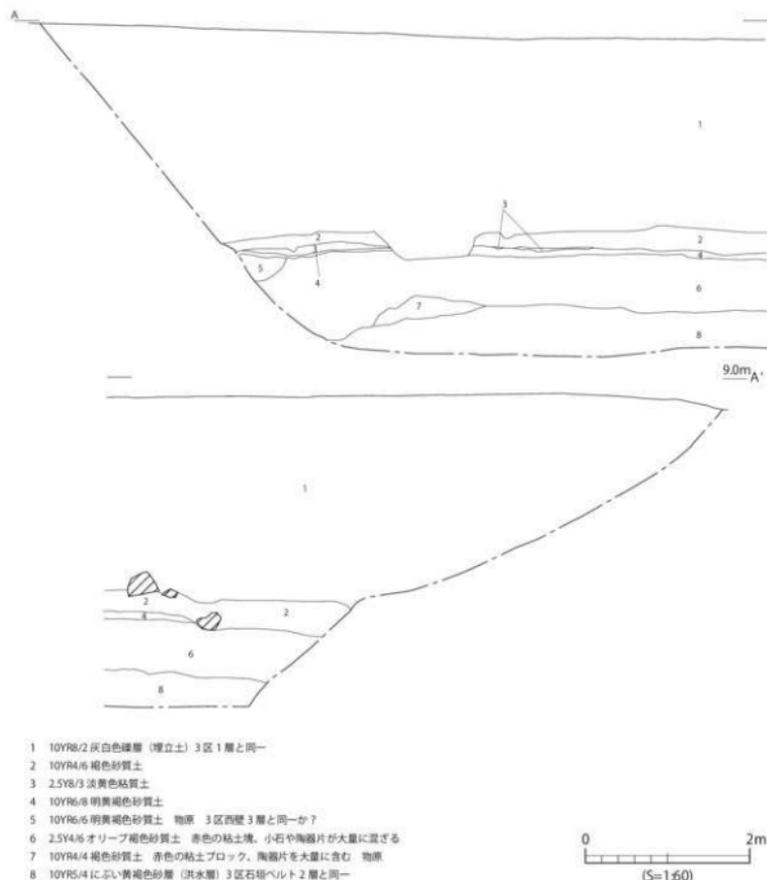
土層断面では石列の背後に焼土がみられるほか、陶器片や竈道具が堆積している。焼土は現位置ではなく、直上の登窯から掻き出された廃棄物だと思われるが、一般的な竈跡の物原ほどの遺物量は少なく、焼土に含まれるものか。石垣の背後には平坦面が広がるものとみられ、石列は法面の護岸

と想像される。また、西側で川に向かって緩やかに下降しており通路が想像される。

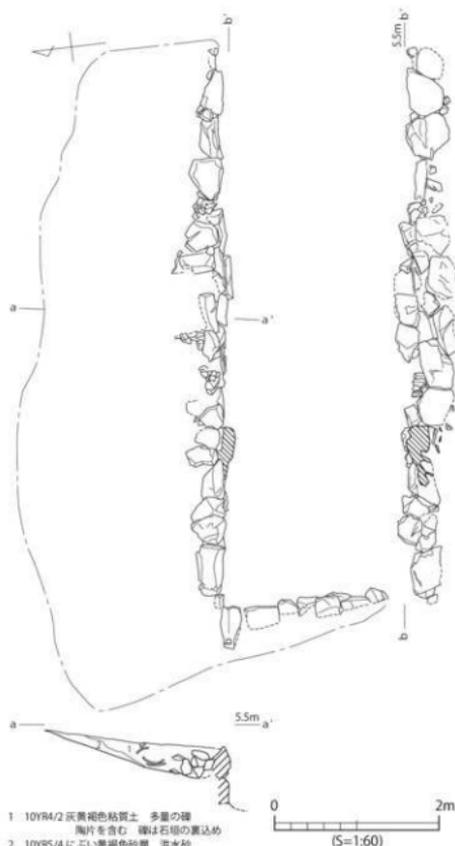
3. 遺物

第114～116図には本田窯跡3区で出土した遺物を示した。陶器類は本田窯跡で生産した製品の破損品で廃棄されたものと考えられる。

114-1～5は蓋である。114-1～3は輪状つまみを持つ壺蓋で、114-1は来待軸をかける。内面の4カ所に目跡が残る。114-2・3は長石軸を施すものである。いずれもコバルトで114-2は環珞文崩しともいわれる文様を施している。114-3は3方向に流し掛けをおこなう。内面には円形の焼台の跡が残る。114-4・5はつまみのない小型の平形蓋である。いずれも外面に長石軸をかける。



第112図 3区北壁土層断面図(1:60)



第113図 3区平坦面実測図(1:60)

残る。

114-21～23は来待軸を施す甕の口縁部である。肩部に5～7条の櫛書き直線文を施す。114-23は大型品で鉄軸による黒色の流し掛けがみえる。

114-24は花入である。底部を除いて長石軸を施す。コハルトを使って正面側に「アイラブユー」、裏面には個人名を含む短文が記される。完形品で欠損はみられない。

115-1・2は素焼きの鉢で、石見焼で盛鉢と呼ばれ、陶土の脱水に使用される。内面は丁寧にナデ調整され、口縁部外面に大きな玉縁を持つ。口径31～32cmに復元できる。115-3～7はハリと呼ばれる焼台である。115-3は脚部をヘラで6脚に削り出す。115-4～6は三角錐の陶土を貼り付けて脚とする。いずれも糸切によって円盤を切り出しており、上下両面に回転糸切痕を残している。115-4・5は4脚で、115-6は5脚の焼台である。115-7の外面には格子状の文様をヘラで刻む。上

114-6は小型品の底部で鉢の可能性はある。内面に焼台(ハリ)の痕があるが、その外面が裂けて割れている。重ね焼きによる過重によって割れたと思われる。

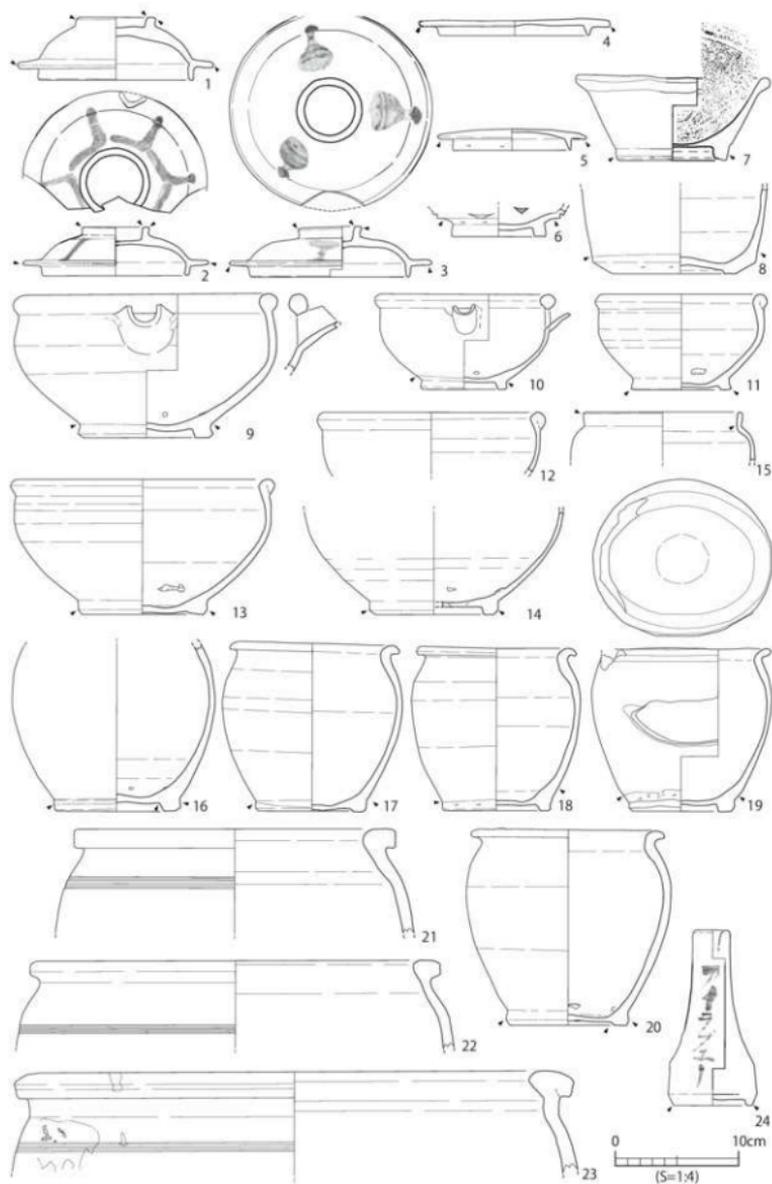
114-7は浅い片口の付く小型の播鉢である。底部を除き来待軸を施す。摺目は20条単位となっている。

114-8は長石軸がかかる壺の底部である。

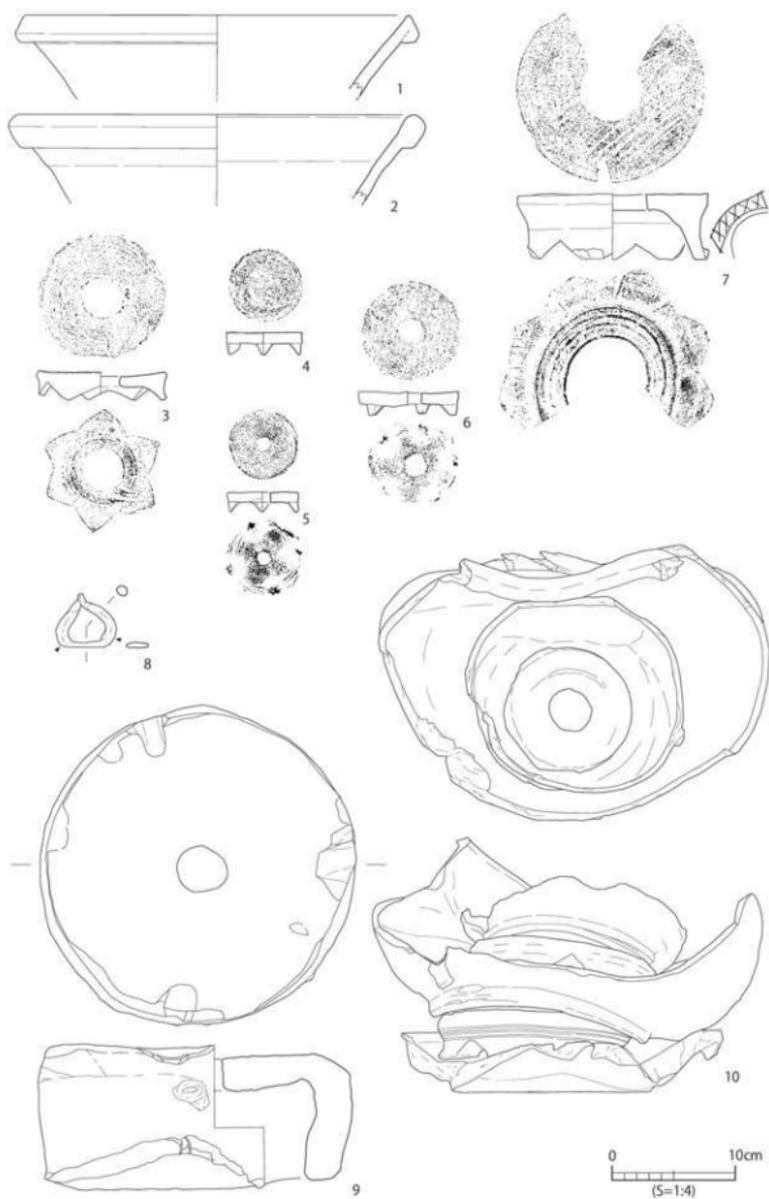
114-9～14は片口鉢で、いずれも長石軸をかける。114-9・10・13は大型品で口径約21cm前後である。114-9・10は底部外面の軸をふき取り、底面をあて具によって成形する。114-11・12は口径13cm前後の小型品である。114-13は復元口径17.4cmの片口鉢である。

114-15は小型の壺である。薄く作られ、内面まで施釉するが、口縁端部から内面側の頸部上まで軸をふき取っている。

114-16は壺・甕の底部である。114-17～20は来待軸がかかる甕である。底面を削り込み高台を作り出す。114-19は被熱して変形し、胴部中央に穴が開いたもの。114-20の底部内面には焼台(ハリ)の痕が4カ所



第114図 3区出土陶器実測図(1:4)



第115图 3区出土祭道具類実測图(1:4)

面は回転糸切の後、板目状の圧痕を強く残す。下面には強い回転ナデの痕跡を残す。

115-8は色見と呼ばれる焼成中の状況を確認するための窯道具である。底面は無軸だが、全体に薄緑色の長石釉がかかる。ひも状に成形し三角形に折り曲げ、頂部で握るようにして接合している。115-9は円筒形の焼台(ヌケ)である。

頂面の三方向にく

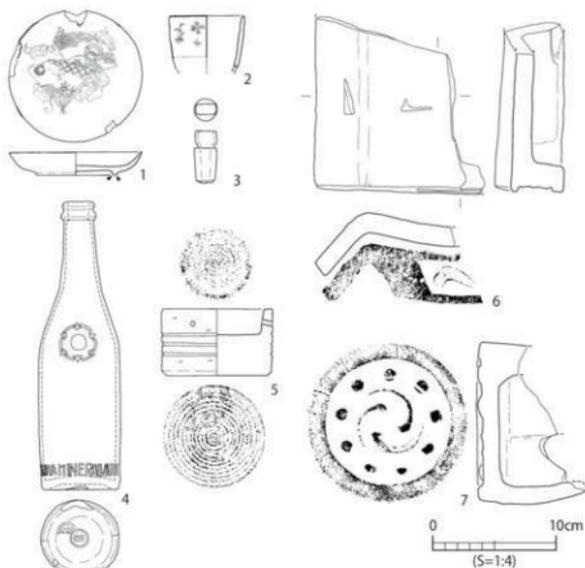
ぼみがあり、焼台上に置かれた製品の下に指を入れやすくする工夫が施される。頂面中央と側面の1か所毎に穴が明けられる。頂面には剥離剤(アルミナ)が付着する。115-10は溶着した甕の底部である。焼台(ハリ)を挟んで窯詰め状態のまま製品3個体と焼台3個が溶着する。

116-1・2は磁器である。116-1は瀬戸美濃系の丸形赤絵皿である。赤色の銅印で扇文散らしが描かれる。大正から昭和10年代頃のものと思われる。116-2はカップである。透明釉にプリント色絵と銀彩で花文を描く。デミタスサイズで昭和20年代以降のもの。これらは本田窯跡の製品ではなく、近隣で使用されていたものか。

116-3はガラス製の栓で、頭部には扁平なつまみがある。透明で気泡が多い。116-4は濃い青緑色のガラス瓶である。口縁部に段があり王冠を使用する。肩部の両面に円形のマークがあり、下部に「ARIMA MINERALWATER」「泉鏡馬有」が読める。底面には丸囲みで「B」のマークが重なって刻まれる。有馬鉱泉株式会社は明治34年から大正15年の間に操業といわれる。

116-5は軸受けと考えられる。非常に硬質に焼成され、底部が厚く、側面の三方向から内側に向けて貫通する直径5mm程度の穿孔がある。底面にはらせん状のナデが施され、「(浦)□」の墨書があるがかすれて読めない。三方から螺子で固定したものと思われる。

116-6は軒棧瓦である。瓦当部分の左端の小片で、全面に赤褐色～黒色の来待軸がかかる。凸面側と棧の一部に溶着した窯道具の剥離痕が残っており本田窯跡製品であろう。115-7は棟巴である。三つ巴を主文様に9個の珠文を配す。丸瓦部後端を波状に装飾する。全面に黒褐色の来待軸を施す。



第116図 3区磁器・ガラス製品・瓦類実測図(1:4)

第6節 4区の調査の成果

4区とした部分は1区南西側の一角で、国道261号に面した約34㎡である。連房式登窯の本体の一部を含む範囲である。ただし、工事予定地内に含まれる窯体は1室分である。窯自体は道路下に続くことがわかっており、道路に接する部分が本来の4室目ないし7室目に相当すると思われるが⁽¹⁾、確定できない。みかけ上の1室目について掘削し調査をおこなった。

1. 連房式登窯

窯体は連房式登窯で調査時点では7室分が確認され、うち2室にはドーム状の天井が現存していた(第118図)。焼成室は東壁は面をそろえるのに対して、西壁は6室目までは一室ごとに西側に延伸し、6室目と7室目はほぼ同規模である。焼成室の奥行も一室ごとに大きくなる傾向が認められる。1室目が幅4.7m×奥行1.8mで面積8.4㎡を計測するのに対して、7室目は幅5.8m×奥行2.2mで面積12.8㎡となる。残存する窯体全体の勾配は約22.2°である(第119図)。焼成室の床面にはそれぞれ砂土がみられ、砂床であったことが確認される。保存状態がよい3室目と6室目の北壁の上部には瓦用の焼台(モミツチ)の端部が付着しており、耐火レンガを組んで上部まで瓦の窯詰めしたことがわかる。また3室目と6室目の天井には円形のツユヌキが二カ所ずつ開孔している。焼成室の西側にはそれぞれ階段状の作業用テラスを設けており、瓦などが山積みになされたなかで礎石が二カ所確認された。登窯にともなう覆屋の柱跡と推測される。また登窯の背部には焼成室をともなわない作業用テラスが増設されており、天日干しや窯詰めなどをおこなう作業用スペースとなっている。作業用テラスの西側は通路となっているが、近年の擁壁工事で削平されて幅狭となっている。

焼成室の層序 第120・121図は、焼成室の断面図である。12層は7cm大の礫が堆積した層であり、登窯建設にともなう造成土と思われる。被熱で赤変した上部は12-2層としている。登窯はこの造成土の上に築造されている。この礫層を基盤にして耐火レンガが組まれ、6～8・10層を充填して焼成室の床面が成形される。とくに8・10層は堅くしめられており、7～8層は砂を多く混ぜている。9層は焚庭に溜まった溶滓でありガラス化している。4～5層は砂を主体とした層位であることから砂床と思われる。5-1・2層はあまり攪拌を受けた形跡がないが、4層は赤変したレンガ碎片を含んでいる。砂床の中央部は耐火レンガを組むために掘り返されたものと思われる。2～3層は赤変したレンガ碎片が堆積した層である。焼成室が手入れがされなくなってから堆積したものと思われ、とくに2層は天井落下にともなって堆積した可能性が考えられる。1層は天井落下後に堆積した層と思われ、タイヤなどが投げ入れられていた状況から国道261開設後と推測される。13～16層は焼成室の外側に堆積した層であり、赤変したレンガ碎片を含むことから操業時のものと思われ、踏みしめられて薄くなっている。

焼成室の遺構 焼成室は長方形を呈し(規模は先述)、天井は東端を除いて崩落し、小口部分は全壊して原型をとどめていない。小口の外側には扁平な大石が敷かれており、踏み石と思われる。

北壁は比較的残りが良く、耐火レンガは一定の規則性をもって積み上げられる。壁の最下部には14口の火格子が開孔し、高さ85cm前後の位置に瓦用焼台(モミツチ)痕跡が付着する。焼成室は上

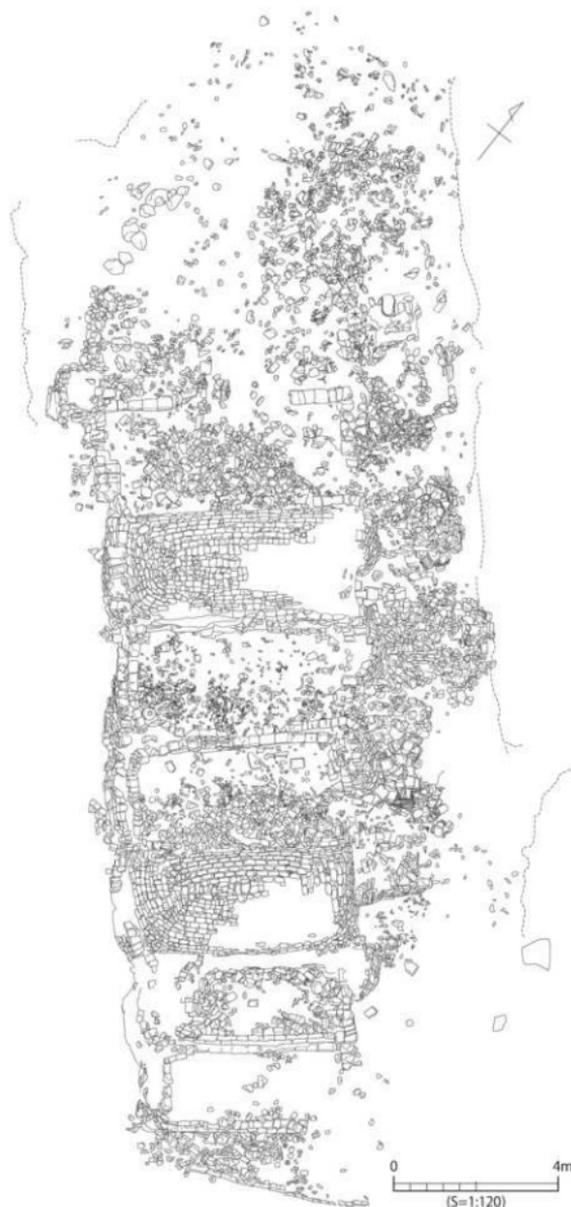
下の二段構成となっている。製品を並べる上段はハマと呼ばれ、焼台を据えるために砂を敷いた砂床となっていた。一段下がった下段は焚庭と呼ばれ、追い焚きや製品の出し入れ用の通路として使われており、下段付近の耐火レンガ表面はガラス化し、底面には溶滓が堆積している。焼成時にはこの焚庭とハマの境界にはさらに火立とよばれる窯道具が並べられる。焼成室前面の火格子下端と背面の火格子下端の高低差は99.6cmを計測し、傾斜角は 28.2° であり、約5.4寸勾配となる⁽²⁾。石見焼の瓦窯は5寸勾配とされ、本窯が最終的に瓦を生産したとされることに符号する。石見焼の瓦窯では焼成室に耐火レンガを階段状に組んで瓦を並べて基台とするが、本窯の各焼成室内には耐火レンガは残されておらず、廃窯後に抜き取られた可能性がある。

一部に瓦窯の要素がうかがえるものの、登窯後半4室の床面勾配が緩やかであること、また各焼成室には陶器(丸物)用の砂が敷かれていることから一概に瓦窯の構造を呈しているとは限らない。

焼成室内の火まわりについて、火格子から抜けた熱風は直接製品にあたらず、いったん焚庭の壁にぶつかり火立と前壁に沿って天井部に抜ける。壁の下端に火格子が開孔することから横狭間であるが、火まわりに関しては前壁に沿った縦狭間の要素も取り入れており、石見焼の登窯にみられる窯構造を呈している。



第117図 4区全体図(1:160)



第118図 登窯平面図(1:120)

2. 登窯の遺物

第123・124図は焼成室およびその周辺から出土した遺物である。

焼成室内から出土したのが、123-1、124-3～9・12・13である。そのうち砂床(4～5層)の上面から出土したのが124-8・9・12・13である。124-8は扁平な焼台(ハマ状)であり円形を呈する。上下面に回転糸切痕が残る。124-9は互用の焼台(モミツチ)である。側面にはタタラ成形による切り離し痕、上下面には平瓦と緩衝材(ハセ)の痕が残る。124-12・13は被熱により陶化した粘土板である。上下面は圧迫を受けて平滑であり、124-13の火面には薬灰が付着している。耐火レンガの間に挟んだ粘土が、天井崩落時に落下したものと思われる。124-3～7は礫層と焼成室を成形した土層との境目付近から出土したものである。124-3は小型の甕ないし壺の碎片である。内外に来待軸を施軸し鉄軸を流し掛ける。破面にも被熱をうけている。124-4は片口鉢の腰部である。内外面に長石軸を施軸する。124-5は

来待軸檣の底部である。高台以下を露胎とし、高台端部を面取りする。124-6は窯道具の色見である。リング状に粘土紐を挽り、長石軸を施軸する。124-7は焼台（ハリ）である。糸切で切り出した円形の粘土板に円錐状の足が4足貼り付けられる。礫層直上にこうした窯道具がみられることから、この登窯が作り直されたことがわかる⁽³⁾。砂床直上には最終操業である瓦用の焼台（モミツチ）がみられる。焼成室を埋める土層からは先行して生産された丸物（壺・甕など）関連の遺物が出土しており、層位と出土遺物の様相は整合性している。

123-2、124-1・

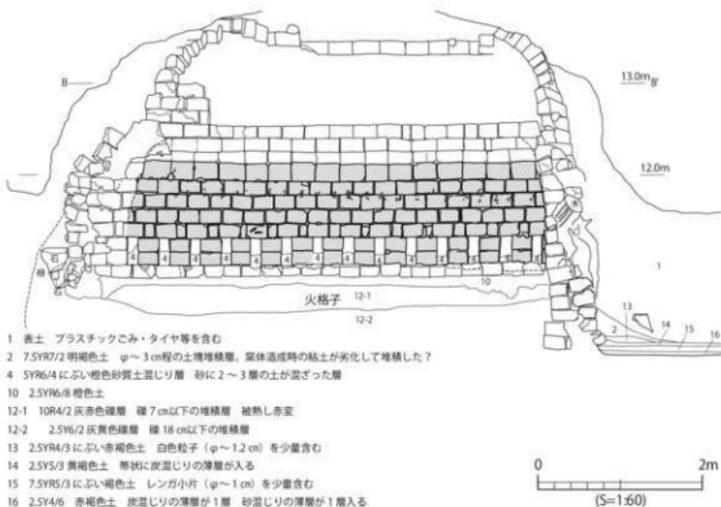
2・10・11・14は調査区周辺からの表採遺物である。123-2は銅製の簪である。124-1は丸形火鉢である。口縁は内湾して内側に曲げられ、外面には薬灰を混ぜた胎軸が施軸される。124-2は硫酸瓶の上部である。内外面に来待軸が施軸し、口縁から内頸にかけての軸を拭き取る。肩部には把手を貼り付けた痕跡がある。内頸には螺旋状の刻みがある。上面には3条の沈線が巡らされる。124-10・11は瓦用の焼台（モミツチ）である。124-10は調整用の粘土紐が付着している。124-11は一面にしか平瓦を置いた痕がなく、反対面の大半に圧迫痕があることから一番下に敷いた焼台と思わ



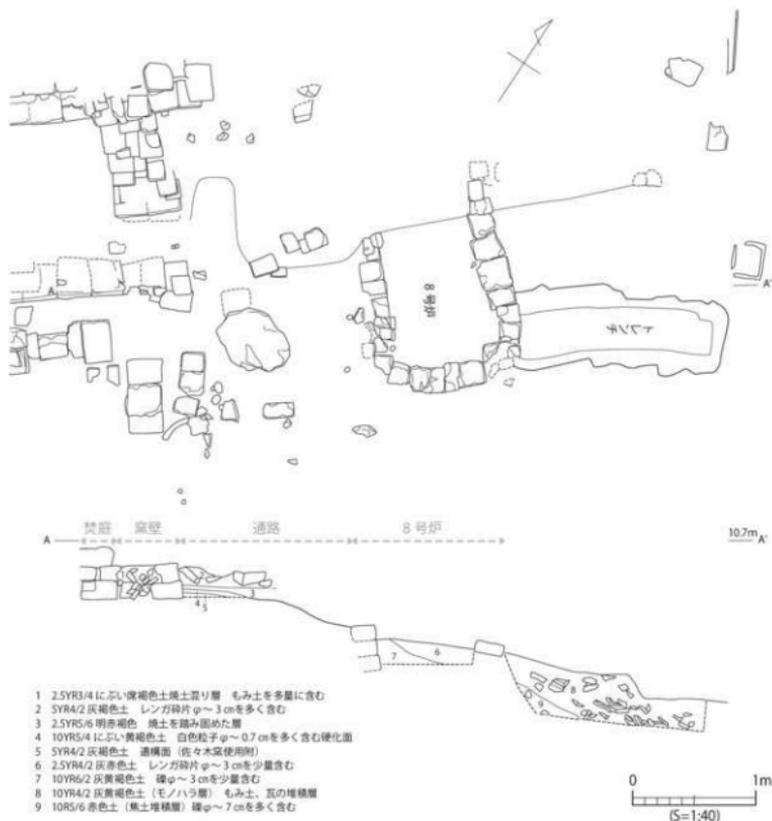
第119図 登窯立面図・断面図(1:160)



第120図 登窯平面図・土層断面図(1:60)



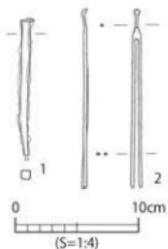
第121図 登窯焼成室立面図(1:60)



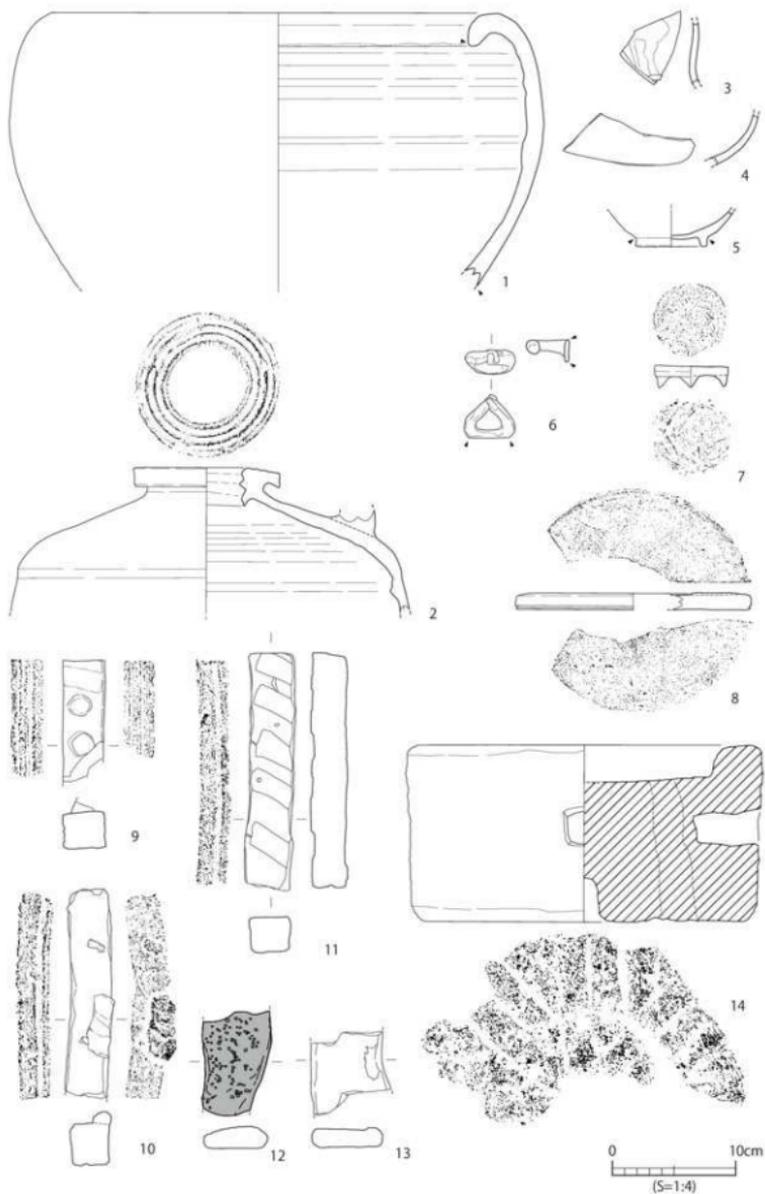
第122図 8号炉実測図(1:40)

れる。124-14は石白の上白である。摺面の中心に深さ約4cmの軸受けが掘られ、これを中心に放射状に延びる主溝が約40°間隔で掘られており変則的な9分画になる可能性がある。主溝に対する副溝は3本である。上面から擦面には「もの入れ」とよばれる供給孔が貫通し、擦面には素材を行き渡らす「ものくぼり」と呼ばれる浅溝が掘られる。側面には把手用の孔が掘られる。

8号炉 焼成室小口の東側には半円形の浅い土坑が検出された。遺構は調査区外に続いており、円形になる可能性がある。土坑の内壁にはU字形に耐火レンガを組んでおり、西側は3段、東側は1段であった。この炉跡を境に西側には焼台(モミツチ)を大量に含んだ層が堆積していることから、瓦窯操業時に作られたものである。遺構の底面は平坦であり、堆積層中にはレンガ碎片を多く含んでいた。形状から2区で検出された2号炉に類す



第123図 4区出土金属器実測図(1:4)



第 124 图 4 区出土遗物实测图 (1:4)

るものと思われる。

8号炉の土層 焼成室の小口付近から東側の堆積層である。西側の耐火レンガは焚庭の壁である。窯壁中には瓦用焼台(モミツチ)が挟まっていることが確認される(1層)。窯壁より外側は通路となっており、踏み固められた薄い堆積がみられる(3～5層)。その上を瓦用焼台(モミツチ)を大量に含む層で覆われる。6～7層は8号炉内の堆積で、レンガの碎片を大量に含んでいた。8～9層は物原に続く瓦用焼台(モミツチ)堆積層である。

【註】

- 1 登窯は全体で13室あったとする聞き取りと、道路造成で埋められたのが3室分であったとする聞き取りがある。
- 2 高さ÷距離×10, 99.5÷182.8×10
- 3 大田市城ヶ谷遺跡の窯は丸物用として作られた窯の基底部を掘削し、床面の傾斜角が深くなるように改造した痕跡がみられた。

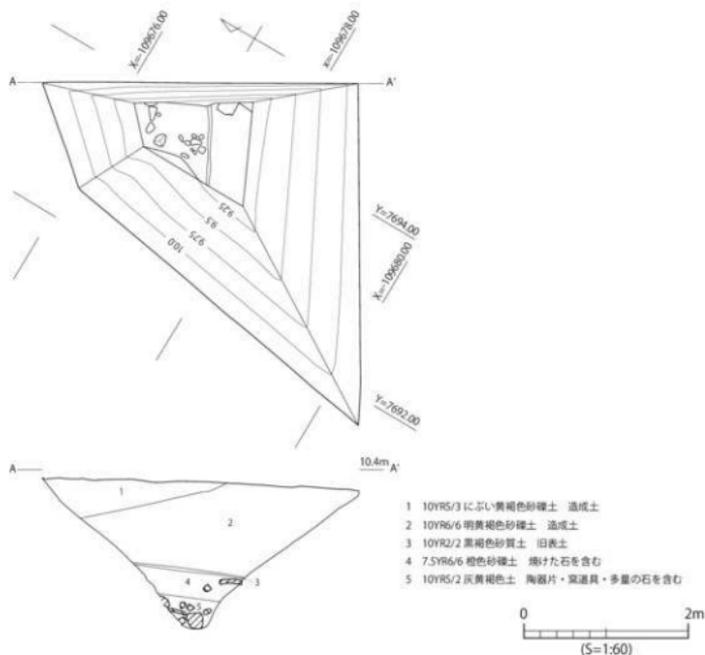
鳥根県教育委員会 2016『城ヶ谷遺跡(1区)・神谷遺跡・涼見E遺跡』

第7節 5区の調査の成果

5区は国道に面した調査地西側の一角で、4区の西に接する。調査前は歩道に接する小さな空き地で、地表面は国道261号の道路高から連続する。約110㎡を調査する計画だったが、表土掘削中に電線のアース線が埋設されていることが判明し、それを除去できなかったことから東半分の掘削を断念した。また、周囲の控えを取ると実際に掘削できる面積は極狭となり、結果として10㎡の調査に止まった。法面の安全勾配を確保しながら地表下2m程度まで掘削したが、地山面まで達することはできなかった。

1. 層序

現地表直下から固くしまった明黄褐色砂質土が厚く堆積していた。この土には遺物は含んでいないが石を含み、国道261号改築にともなう造成土と思われる。その下層の標高約9m付近に旧表土(黒褐色土)が見られ、国道261号改築直前の地表面だった可能性がある。旧表土は南西方向(江の川の方)に向けて緩やかに傾斜している。それより下層の褐色砂質土中には陶器片や火立などの窯道具類、耐火レンガなどの遺物が多く含まれている。遺物は登窯そのものの構築材や窯道具が大半で製品は少ない。掘削可能幅が40cmを下回ったところで火立が出土し(第126図)、それ以下の掘削



第125図 5区遺物出土状況・土層断面図(1:60)

が不可能となったため掘削を停止した。

2. 遺物

本田窯跡5区からは陶器、瓦、窯道具類などが出土している。127-1・2は壺蓋である。127-1は来待軸を、127-2は長石軸をかけコバルトによる流し掛けを施す。127-3は小型の甕、127-4は壺・甕の底部であり、いずれも褐色の来待軸をかける。127-5は熨斗瓦である。凸面側に赤褐色の来待軸をかける。

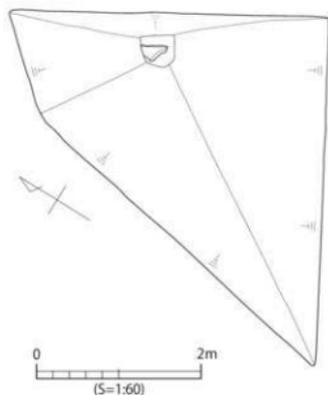
127-6～12は窯道具の焼台である。この内127-6～8は脚端部をへらで三角形に切り取るハリと呼ばれる焼台である。127-6は外周頂部に半球形のくぼみがあり成形時の指の跡と思われる。127-8・9はヌケと呼ばれる焼台である。127-9は底部に三角形の切り込みを入れる。底部付近には耐火砂の付着が見られる。127-10はトチンと呼ばれる中実の焼台である。直径4.9cmの円筒形で手づくね成形する。一部に布目状の圧痕がみられるが軍手の痕か。127-11はモミツチと呼ばれる瓦を焼成するための台である。一面に直径1.7cmの浅いくぼみが連続しており、瓦間に間隔を空けるための道具(ハセ)の痕跡と思われる。他面にはコピキ痕を残す。

127-12は窯道具の火立である。焼成室に瓦を並べた際、製品に直接炎が当たらないように最前列に置かれた板状の遮蔽貝で、高熱を受けて曲がっている。

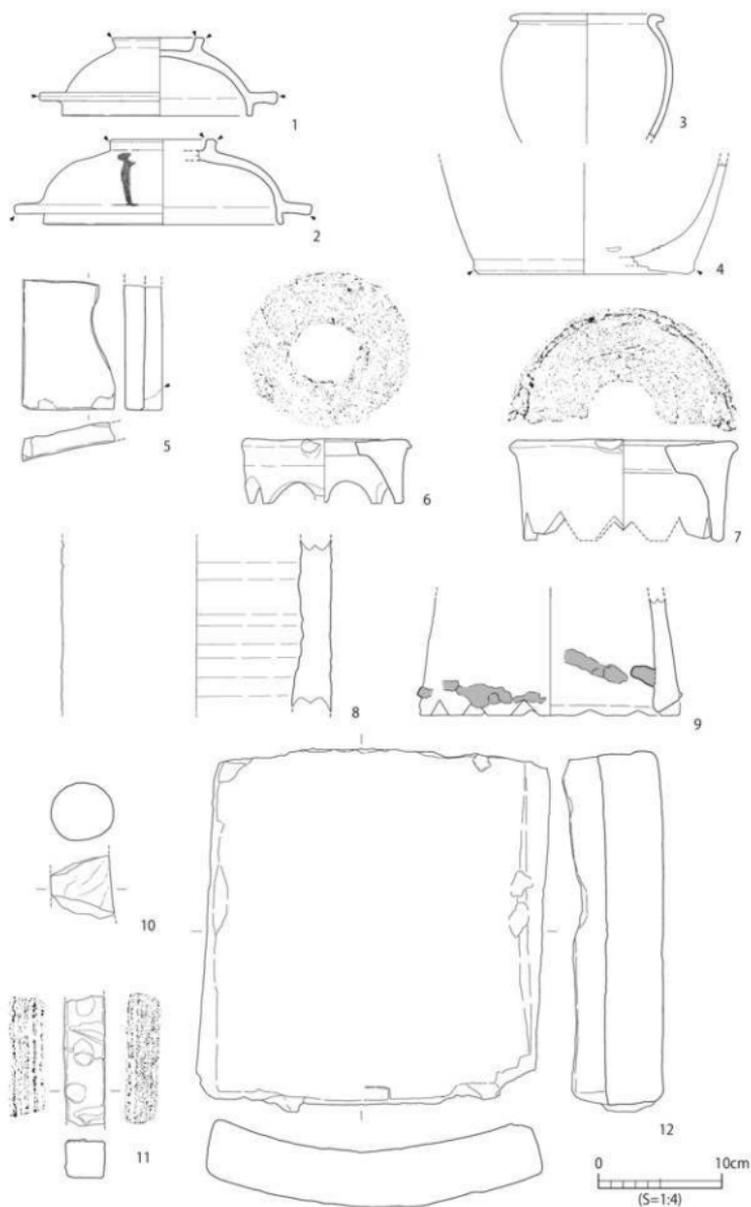
3. 小結

本田窯跡5区の下層から出土した遺物には製品が少なく窯道具類が多い。よってこれらの出土遺物は物原ではなく、窯そのものを壊したことに由来する可能性が高い。地元での聞き取りによれば、窯は現在の国道261号の下にさらに続いており、国道建設時に一部破壊されたというが、出土遺物の状況はそうした内容に符合する。また、出土遺物には熨斗瓦やハセと呼ばれる瓦用の窯道具が含まれ、最終操業が瓦だったという聞き取り結果にも一致する。

本田窯跡付近を通る国道261号は昭和38年に川下江津線が国道に昇格したもので、この時に登窯の一部を破壊して道路を拡幅したか。土層断面ではこれ以後と思われる旧表土があり、さらにその上に造成土が堆積している。国道261号は昭和46～47年に江津～谷住郷間について拡幅改修工事がおこなわれたものの、直後の昭和47年7月豪雨で被災し、再度の改修工事がおこなわれている。本田窯跡5区の旧表土より上の造成土はこの工事によるものと思われ、本田窯跡3区で見られた分厚い造成土も同様であろう。本田窯跡5区は様々な制約からきわめて限られた範囲の調査となったが、本田窯跡の操業終了後の状況を知ることができた。



第126図 5区実測図 (1:60)



第127图 5区出土遺物実測図(1:4)

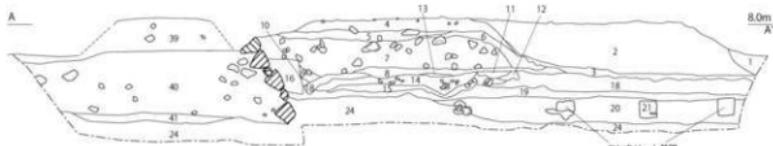
第8節 6区の調査の成果

令和5年度には本田窯跡下層で発見された桜谷跡跡の発掘調査をおこなうため、本田窯跡中央を横断していた市道と宅地の擁壁が撤去できることとなった。このため、市道下に残されていた本田窯跡の遺構・遺物も検出できるようになり、この部分の調査成果について本田窯跡6区として本報告書に盛り込むこととなった。

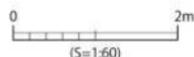
1. 層序

第128図には6区トレンチ1北壁の土層を示した。6区トレンチ1は1区の第9・21図の土層堆積状況、2区の中央トレンチの土層図(第46図)に連続する。

市道の路盤および住宅の擁壁を除去すると4多量の石を含んだオリブ褐色土の層があり、元の市道の路面か。東側はそれを覆って2黄褐色砂層がみられ洪水による堆積と思われる。その下には白色の粘土層が複数あり、これらが本田窯跡2区に続く遺構面となり、この上面が6区での第1面となる。20灰白色粘土層にはコンクリート基礎が入り込んでいるようにみえるが、この上面から掘り込まれたものか。西側には石垣5(第151・152図)がみえており、その背後には裏込め土が厚く堆積する。石垣5の上のくぼみは宅地の擁壁を撤去した痕跡で、これより上層は現代の工事によって壊された部分である。24暗褐色砂質土は炭を含む洪水層と見られ本田窯跡より下層の遺構に関わる



- 1 2.5YR4/3 に近い赤褐色 R4 埋め戻し土
- 2 2.5YR5/6 黄褐色砂質土 洪水層
- 3 2.5YR4/1 黄灰色粘質土
- 4 2.5YR4/6 オリブ褐色土 上面に〜拳大の石を多量に含む 踏面か?
- 5 7.5YR4/3 褐色土 5〜10 cm程度の石を多量に含む
- 6 10YR7/8 黄褐色砂質土 1 mm程度の灰白色土を含む
- 7 10YR4/3 に近い黄褐色土 1〜20 cmの人の型を多く含む
- 8 2.5YR3/4 黄褐色土 1〜4 cmの意思をおおく含む 踏面か?
- 9 10YR6/8 明黄褐色土 2 cm程度の石を多量に含む
- 10 10YR5/4 に近い黄褐色土 8 cm大の礫多く含む やや粘質
- 11 10YR7/3 に近い黄褐色粘質土 8 cmの石を含む
- 12 10YR4/3 に近い黄褐色粘質土 褐色土 (5YR6/5) を含む
- 13 10YR6/3 褐色土 粘質土や0.1〜0.4 cmの炭を含む
- 14 7.8YR8/4 に近い褐色土 1〜6 cmの石を多量に含む、土層を多く含む
- 15 2.5YR8/4 淡黄色粘質土 1〜5 cmの石を多量に含む
- 16 10YR5/3 に近い黄褐色土 多量の炭、褐色土 (7.5YR6/8) を含む石埋め埋土か?
- 17 7.5YR6/8 褐色粘質土 灰白色粘質土 (7.5YR8/1) をまだらに含む黄褐色粘質土 (7.5YR6/1) を水平に含む (別図)
- 18 10YR7/1 灰白色粘質土 黄褐色粘土 (7.5YR7/8) をまだらに含む 黄色粘質土 (5YR6/6) を水平に含む
- 19 10YR8/4 淡黄褐色粘質土 灰白色 粘質土 (10YR8/1) を含む 土層中にコンクリート基礎の遺構を含む
- 20 5Y7/1 灰白色粘質土 黄褐色粘質土 (10YR7/8) をまだらに含む
- 21 10YR5/4 に近い黄褐色土 コンクリート基礎の根跡 木料とおもわれる 木目の痕跡がわずかに残る
- 22 2.5Y6/1 黄灰色粘質土 炭を少量含む (別図)
- 23 2.1Y4/3 オリブ褐色粘質土 明黄褐色粘質土 (2.5Y7/6)、灰白色粘質土 (2.5Y8/1) を含む (別図)
- 24 10YR3/3 暗褐色砂質土 炭を多く含む 洪水層
- 29 7.5YR7/8 黄褐色土 灰白色粘質土 (7.5YR/1) や〜10 cm程度の礫を多量に含む → II層
- 40 7.5YR5/2 灰褐色土 礫〜20 cm程度の礫を多量に含む 炭を含む 石垣5の裏込め土
- 41 7.5YR4/3 褐色土 多量の炭を含む 灰白色 (5YR/1) の粘質土を含む



第128図 6区トレンチ1北壁土層断面図(1:60)

と思われる。この上面が6区の第2面となり、東側(2区側)の標高は6.8m付近である。1区の東側の遺構面は標高9m付近である。一方、2区の遺構面が標高7.5～6.5m付近にみられることから両区の比高差は2m近くにもなり、1区東側から6区にかけては大きく落ち込んでいた様子が確認できる。石垣5の上場は標高7.8m付近だった。

2.1 面の遺構

6区の1面では2区から続く建物跡、複数の石垣のほか水簾施設などを検出した。複数みえる石垣列は概ね2条に分かれており、その間は道か。北側では道を横断する土管列が残る。また、北東側では2区北から続くコンクリート水路が残る。調査区中ほどにコンクリートなどで作られた水簾施設があり、その下側(東側)には複数の土坑がみられる。



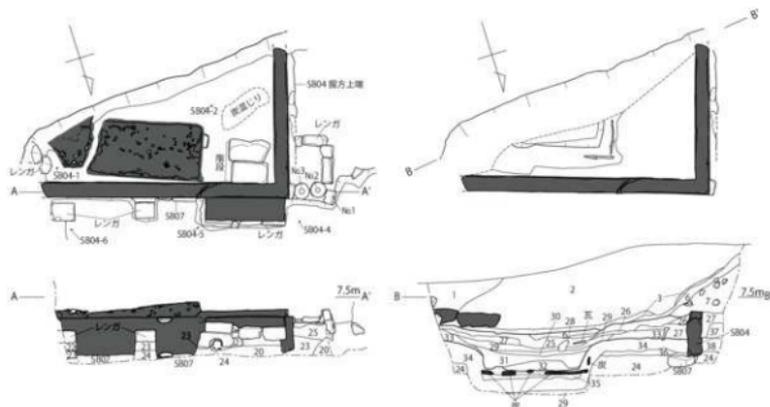
第129図 6区1面遺構配置図(1:200)

SB04 SB04は南西隅で検出したコンクリートによる建物跡(第130図)で、2区SB04(第50図)の南西の角にあたる。この建物は2区で北東の角を検出しており、東西7.4mに規模がある。基礎は幅17cm、北面の中ほどで折れており、高さ45～51cmである。周囲の状況から角の周辺が元の形状を保っていたと思われる、基礎上面は標高7.35m付近だったと思われる。基礎の下部15cm程度が上中だったと考えられ、標高6.9m付近が床面か。北西の角の北面にレンガを敷きその上にコンクリートを貼った幅95cm奥行28cmのステップがあり、ステップの上面は標高7.25m付近である。コンクリート下に置かれたレンガのうち、東側のものには直径10cmほどの穴が開けられている。排水用にみえるが、コンクリートの基礎には貫通しておらず用途はわからない。SB04内側にもコンクリートを張った2段分

の階段がある。壁側は幅42cm、奥行26cmを測る。内側は幅45cmほどで、西側が欠ける。奥行きは25cmである。

SB04の北面外側には28×20×14cmのレンガブロックが98cm間隔で置かれており、庇を支えたか。立面図ではこのレンガの下に土が置かれているようにみえるが、レンガの下面がSB04外側の床面であろう。

西面にはレンガがL字形に組まれ、北列には焼台が2点が置かれる。さらに1点が西側に転倒している。

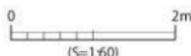


SB04 (新) 平面・断面図 (1:60)

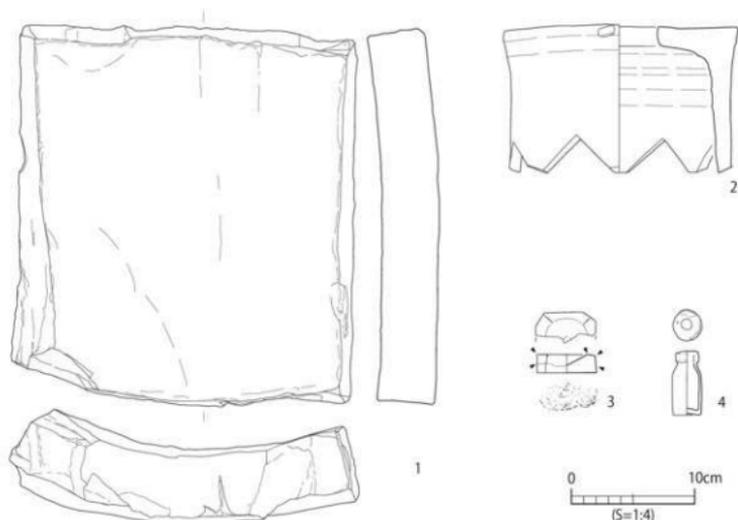
- 20 5Y7/1 灰白色粘質土 黄褐色粘質土 (10YR7/8) をまだら状に含む
- 22 2.5Y6/1 黄灰色粘質土 炭を少量含む
- 23 2.5Y4/3 オリーブ褐色粘質土
- 明黄褐色粘質土 (2.5Y7/6)、灰白色粘質土 (2.5Y8/1) を含む
- 24 10YR3/3 暗褐色砂質土 炭を多く含む 洪水層
- 25 7.5YR5/6 橙土 灰白色粘質土 (7.5YR/1) を含む

SB04 (古) 平面・断面図 (1:60)

- 1 2.5YR4/3 オリーブ褐色土 R4 層埋め戻し土
- 2 2.5YR5/6 黄褐色砂質土 洪水層
- 3 2.5YR4/1 黄灰色粘質土
- 6 10YR7/8 黄褐色砂質土 1mm程度の灰白色土 (10YR8/1) を含む
- 7 10YR4/3 に近い黄褐色土
- 10 ~ 20 cmの人型の磚 (10YR8/1) を多く含む
土層中にコンクリート基礎の遺構を含む
- 20 5Y7/1 灰白色粘質土
- 灰褐色粘質土 (10YR7/8) をまだら状に含む
- 22 2.5Y6/1 黄灰色粘質土 炭を少量含む
- 23 2.1Y4/3 オリーブ褐色粘質土
- 明黄褐色粘質土 (2.5Y7/6)、灰白色粘質土 (2.5Y8/1) を含む
- 24 10YR3/3 暗褐色砂質土 炭を多く含む 洪水層
- 25 10YR5/2 灰黄褐色砂質土 上面に炭をとまなう
- 26 5YR5/8 明赤褐色粘質土
- 27 2.5Y8/1 灰白色粘質土 橙褐色粘質土 (7.5YR6/8) を含む
SB04 外側に沿って埋められている
- 28 5YR5/8 明赤褐色粘質土 粘土ブロック
- 29 10YR6/1 褐灰色砂質土 炭を含む やや砂質
- 30 10YR7/6 明黄褐色土 灰白色粘質土 (10YR8/1) を含む
- 31 2.5Y5/1 黄灰色粘質土 明黄褐色土 (2.5Y7/6) を含む
- 32 N5/ 灰粘質土 黄褐色粘質土 (7.5R7/8) を含む
- 33 10YR5/3 に近い黄褐色土 炭や黄褐色粘質土 (10YR7/8) を含む
- 34 10YR8/3 浅黄褐色粘質土
- 明黄褐色砂質土 (10YR7/6) や黒色 (N151) の炭層 (木材) 35 層を含む
- 35 7.5YR6/8 橙土 やや砂質 34 層中に含まれる
- 37 2.5Y4/2 暗灰黄色土 黄褐色砂質土 (7.5YR7/8) や炭を含む
- 38 2.5YR4/4 浅黄褐色粘質土 灰白色 (2.5Y8/1) の粒を含む



第130図 SB04新旧実測図(1:60)



第131図 SBO4 出土遺物実測図(1:4)

SBO4内部には、長方形の大きなコンクリート塊が落ちていた。幅68cmで、長さは1.9m以上の板状を呈するものである。東側で折れている。上面にはアスファルトが付着している。コンクリート基礎のすぐ内側に倒れていることから、壁そのものが内側に転落したのか。ちょうどステップの幅に一致するところでコンクリート塊がなくなっており、この部分に木製の戸が設けられていたことが想像される。同じコンクリート塊は2区SBO4でも見られた。このコンクリート塊近く、階段の先にあたる南西側の一角で炭が混じった土がみられた。用途はわからない。階段やコンクリート塊などを取り上げるとその下には方形の落ち込みがあり、周囲にはそれに沿って木質がみられる。土層図(第130図)では、掘り込み面から約30cm下方に炭層があり、木製の板があったか。落ち込みの底はそこからさらに20cmほど下がり標高6.3m付近である。半地下状の構造になっており、その機能は不明である。調査区南側に続き全体の規模はわからない。この構造は2区では検出していない。

SBO4からは窯道具などが出土した(第131図)。131-1はSBO4北壁の脇から出土した火立である。高さ29.1cm、幅28.2cmで厚さは4.6cmを測り湾曲する。湾曲した凹面側は強く被熱しガラス化している。両端面の左右に幅4cmほどのくぼんだ場所があり、長方形の焼台の剝離痕となっている。この剝離痕はモミツチと呼ばれる瓦用の焼台によるものである。瓦を焼成する際に使用されたもので、最終操作が瓦とされることを示す資料となる。

131-2は円筒形の焼台でハリと呼ばれるものである。下端部をヘラで波形に切り取る。側面上部の1ヵ所に楕円形のくぼみがあり指の痕か。頂面は摩滅し切り離しはみえない。

131-3は窯道具とみられる陶器である。平面形は四隅を面取りする1辺4.8cmの方形だろうか。厚さは1.4cmである。上面に円形のくぼみがあり、くぼみの内側と周囲に長石釉をかける。下面には重ね焼きの痕跡を残している。軸受けの一種の可能性はある。

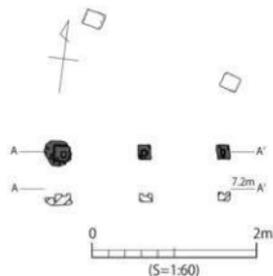
131-4は器高5.0cm、口径1.2cmのガラス製のバイアルである。口のコム栓を薄いアルミで閉じており、頂面にかぶるアルミの1カ所に小さな穴がある。アルミが劣化し一部剥がれているがコム栓は脱落していない。内部に液体がみえるが雨水であろう。使用済みの薬瓶か。

第132図はSB04の北側で検出したコンクリート基礎である。基礎は上面に柱のほぞ穴が開く一辺約20cmの立方体で、3基が約90cm間隔で東西方向に並ぶ。その北側にはやや大きなレンガブロック2基が方位を変えて1.8m間隔で置かれている。このコンクリート基礎は第128図の層位では20灰白色粘土中にみられるが、おそらく20層上面から掘り込んで型枠を埋置していると思われる。ほぼ基礎の形状のとおりに四角く穴を掘り込んで木製の型枠を設置し、その中にコンクリートを流し込んで作られている。基礎の上面中央には方形のほぞ穴が開けられ断面方形のほぞを持つ支柱が立つ。支柱の断面形や太さはわからない。この基礎は、コンクリート固化後も型枠を外さずにそのまま現地に残された可能性が高く、2区コンクリート基礎1と同じ工法である。ただし、2区のコンクリート基礎1・基礎2のほぞ穴はいずれも断面円形だった。

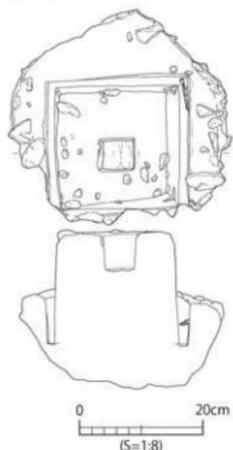
コンクリート基礎列北側に置かれた2基のレンガは、レンガどうして主軸を揃えており、一連のものであることがわかる。2基の間隔は1.8mで近接するコンクリート基礎3基分の間隔に一致するが、コンクリート基礎列がN-82°-Eを向くのにに対し、N-113°-Eと大きく西に振っており、約2.6m離れたSB04の主軸に近い。SB04との間は距離があり、間にコンクリート基礎もあることからSB04との直接の関係は考えにくい。一連の施設か。コンクリート基礎とレンガブロックはいずれも上面が標高7.2m付近にあり、2区のコンクリート基礎1もほぼ同じ標高であることから、支柱の形状や主軸方向が異なるものの一連のものと考えられ、簡易な建物か棚と考えられることから盛鉢棚の一部か。

第133図はコンクリート基礎の内、西端の1基を取り上げたものである。前述のとおり本体は一辺約20cmの立方体だが、大きくコンクリートが流れ出したまま固化している。これは粘土面を掘り込んで型枠を設置しコンクリートを流し込んだ際に、型枠が浮き上がり下側からコンクリートが流れ出したまま固化したと思われる。型枠は木製だったと思われる、厚さ1.3cmである。木質は残存していないが型枠のあった隙間に鉄釘が残されており、木製の板に釘を打って底のない箱型に組んだものだったことがわかる。鉄釘は太さ0.4cm、残存長5.2cmで先端を欠く。断面方形の和釘にみえるが、腐食が進んでおり断定できない。コンクリート基礎の頂面には5.8×5.3cm、深さ5.8cmの方形のほぞ穴が開く。コンクリートには骨材として長さ5cmほどの円礫が多量に含まれているが、コンクリートそのものは風化が進んで持ち上げようとすると砂が散る状態となっている。

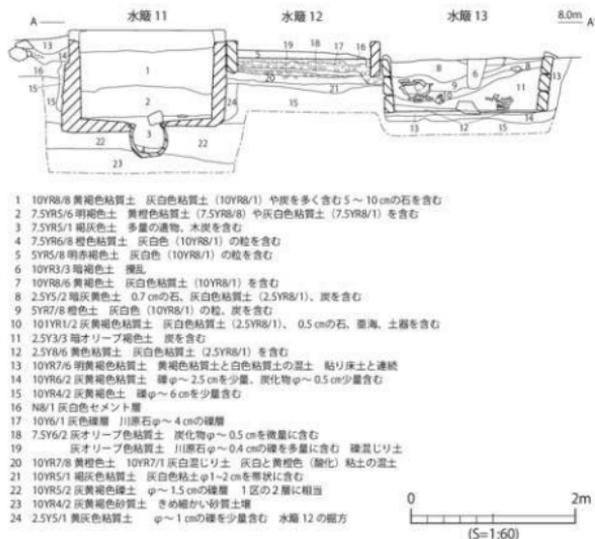
水廠施設(第134～138図) 6区中ほどでは水廠施設を検出した。6



第132図 コンクリート基礎実測図 (1:60)



第133図 基礎実測図 (1:8)



第134図 水籠施設土層断面図(1:60)

面に斜めに堆積する11暗オリーブ褐色土には炭が交じり、陶器が落ち込む。水籠11・13とも床面近くに炭を含んだ層がみられ、大量の陶器が入り込んでいることから、空の状態で陶器や廃材が投棄されたか。また、水籠13に関しては一方向から埋まっており、市道敷設などの工事によって埋められたか。

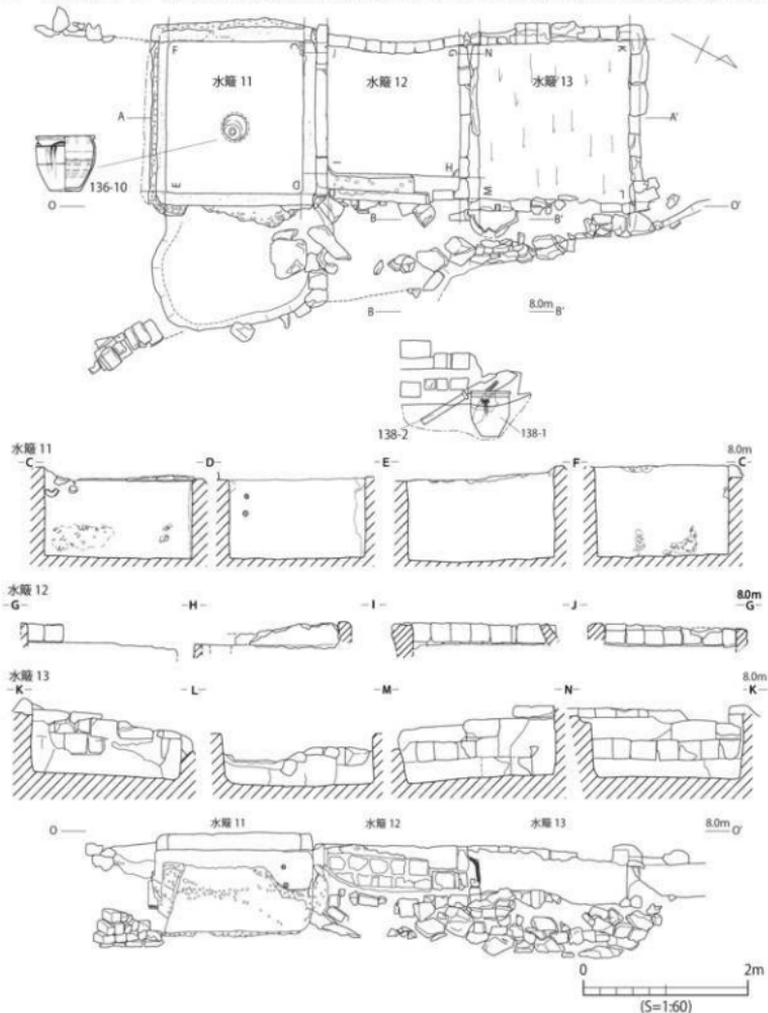
中央の水籠12は浅いため埋没状況はわからない。16層コンクリートの床直下には礫層がありコンクリートの下地であろう。コンクリート床は周囲の壁とつながっておらず別作り。床面より下層にも炭を含んだ粘土が薄く堆積しており、両壁もかなり深い位置まで下げて作られていることから、当初は標高7.5m付近を床面としたやや深い升があり、水籠11を作り直す際にかき上げてコンクリートを張ったものか。一方、水籠11の床面下層には下地らしい土層がみえず、砂礫層の上に直接セメントを流し込んだか。なお、埋壘を設置するための掘方土層断面ではよくみえない。

水籠11はコンクリート製の大きな升で東西1.8m、南北1.6m、深さ1.1mである。中央に埋壘(136-10)を設置する。床面のコンクリートは厚さ14cm、壁は16~21cmある。床面および周囲の壁とも平滑で、2区南水籠施設にみられたような鈎のような構造はない。東壁外側には剥離痕があり、南側で壁状に張り出す部分があることから東側に別の升が存在した可能性がある。また、周囲は標高7.6m付近より下の壁面が荒れており、この高さまで埋まった状態で機能したらしい。北壁の西よりの位置で縁より約10cm下の標高7.7m付近には水籠12からの給水口があるが、埋めて塞がれていた。水籠12の床面が7.7m付近なので、水籠12からはほぼ全排水ができる構造である。また、東壁の北より上下2段の排水口が開く。排水口は上側が標高7.6m付近で、下側が標高7.4m付近である。水籠11の床面からは約50cmと70cmの高さになる。排水口外側には大きな土坑があり石が据えられているが、排水升の形状はわからない。

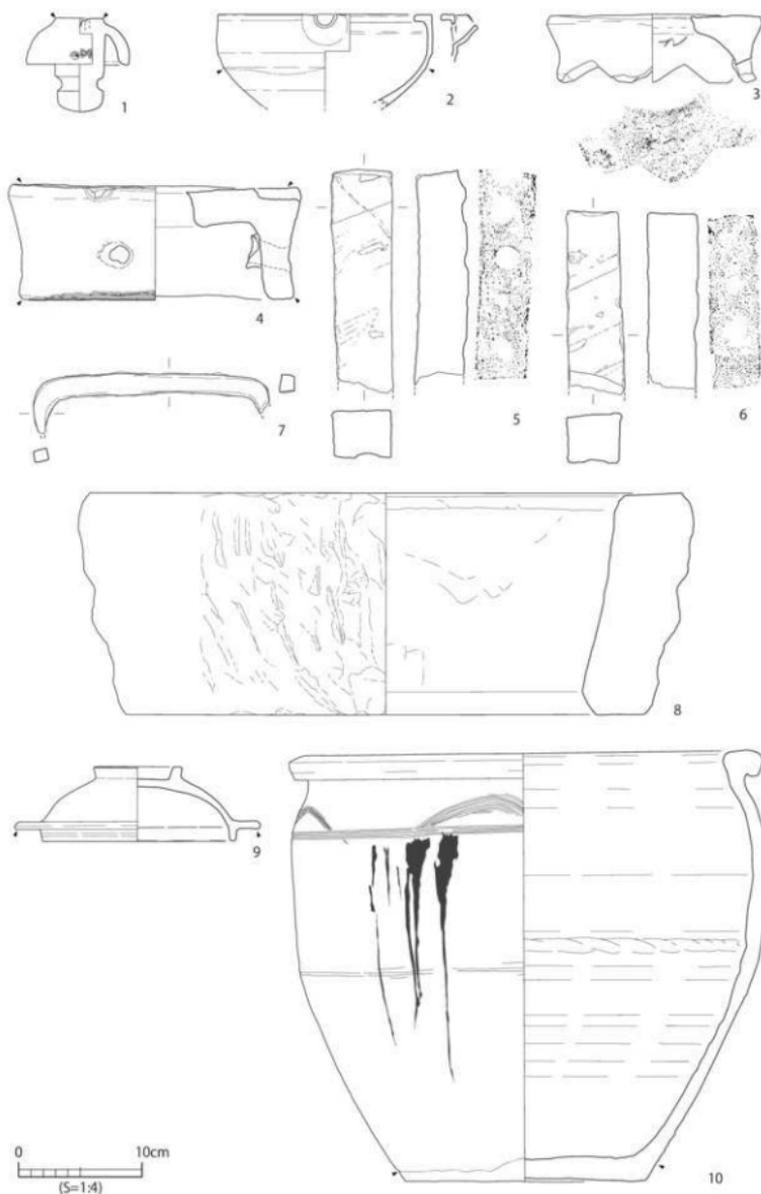
区の水籠施設は3つの升を南北に連結したもので、升ごとに南から水籠11・12・13と呼んだ。

第134図は6区水籠施設の土層堆積状況を示した。水籠11は上層に洪水砂が厚く堆積する。底面近くには3褐灰色土堆積し、埋壘内部にも溜まるが、大量の炭や陶器を含んでいる。また、水籠13は北側から流れ込んだ土砂によって埋まったように見える。床

中央の水籠12はコンクリートを張った浅い枠状の施設で東西1.6m、南北1.5m、深さは16～20cmである。北壁と東壁が一部崩落しているが、南・西壁はレンガ列が保たれている。南・北・西壁はレンガにセメントを張り床面はコンクリートである。東壁は複雑な構造となっている。床面から連続するコンクリート製の壁を作るが、その外側にはレンガ列が残っている。レンガ列は基礎部分しか残存しておらず、升の高さより上はコンクリート壁のみとなるが、土中はレンガとコンクリートが重なっている。床面は標高7.7m付近にあり、わずかに東に傾くが、2区北水籠施設中央升



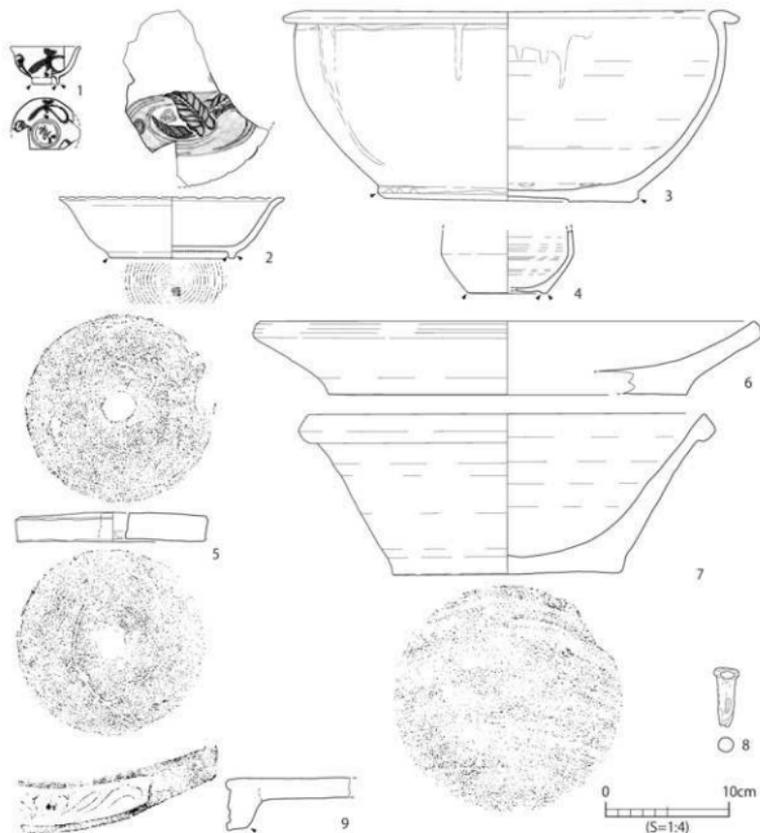
第135図 水籠施設実測図(1:60)



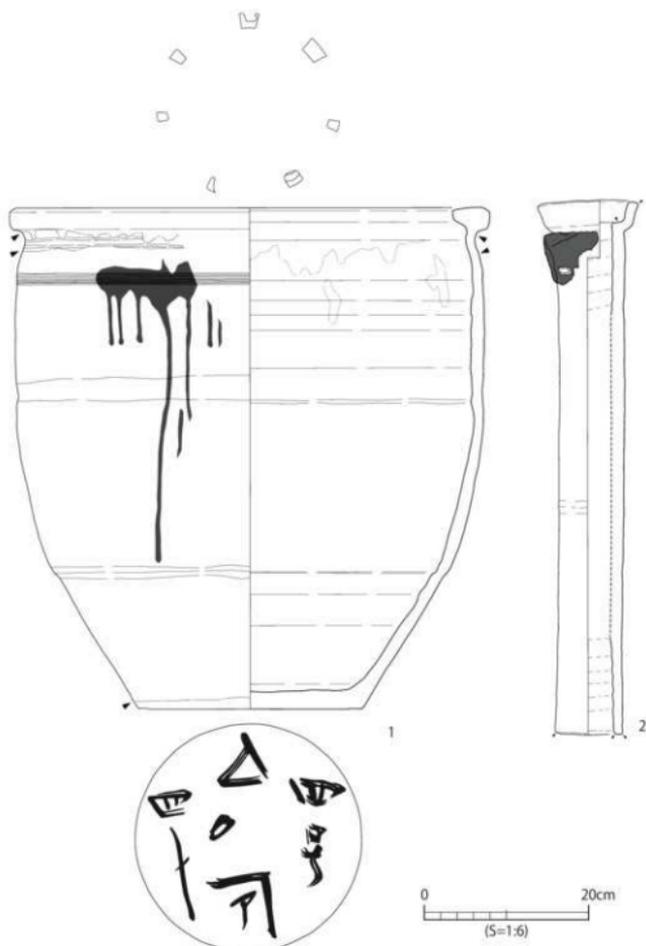
第136图 水箴施設11出土遺物実測図(1:4)

のような折れて水を集める構造はない。西側（山側）の壁は埋没時の土圧によるものか湾曲している。水竈12は両側の升とは壁を共有せず別に作っているが、東壁の二重構造は改築をうかがわせるもので、当初はレンガで作られた東壁が南側の水竈11を増設（改築？）した際に改造されたものか。

水竈13はレンガを積んでセメントで固めた升である。東西1.8m、南北1.8mで深さは66cmである。最上段で使用されるレンガは長さ約25cm、幅20cm、高さ10cmである。2段目より下では長さ25mm、幅20cm、高さ20cmで規格が異なる。レンガはセメントで塗り込められているが、露出するレンガには被熱してガラス化したものも見られ窯壁の転用材が用いられている。升の底面は板が貼られ埋塞はない。東壁が崩落するなど全体に残存状況が悪く給排水口そのものはわからない。しかし、水竈13東面外側の南寄りにはB-B'断面で示す施設がある。陶器甕が据えられ、その上にセメントを扇形に貼って陶器甕に水を集める構造が作られている。さらに、陶器甕の口縁部を打ち欠



第137図 水竈施設13出土遺物実測図(1:4)



第138図 水箴施設13にともなう溜枡出土土遺物実測図(1:6)

向けて直角に折り曲げる。体部外面の下半は露体で回転ケズリの痕跡を残す。

136-3はハリと呼ばれる焼台である。ヘラで脚部を7足切り出す。内面にヘラ記号があるが判読できない。脚端部は剥離し別の粘土が溶着する部分のみられる。136-4は大型品用の焼台でヌケと呼ばれるものの一種か。頂面の外周に沿って3カ所のくぼみが入り指掛かりとする。体部外面には2方向に穿孔がある。頂面の外周には剥離材が残り、体部外面は被熱してガラス化する。下端面には耐火砂が厚く付着する。136-5・6はモミツチと呼ばれる瓦用の焼台である。水箴11の最下層から出土した。断面方形の棒状で、いずれも1端を欠く。一面に斜め方向のくぼみがあり、瓦の圧痕とみられる。反対面には瓦間に隙間を作るピン型の詰め物(ハセ)による円形のくぼみが残ること

いた部分に陶製土管を斜めに据えてオーパフローを排水できるようになっている。

第136図は水箴11から出土した遺物を示した。136-1は高圧ピン碍子である。白色の磁器製で、傘部外面に「NS」「DK」のマークが銅印判で入れられている。上面の穴の中には銅線・絶縁体が残る。

136-2は長石釉の陶器片口鉢である。口縁部は内側に

から使用時はハセの痕跡が残る面を下に向け、すでに並べられた瓦の間に置かれたハセの上に並べられ、さらにその上に瓦を積んだことがわかる。瓦用の窯道具類は登窯から離れた2区での出土は少なく、水竈底面からの出土は水竈11に限られる。

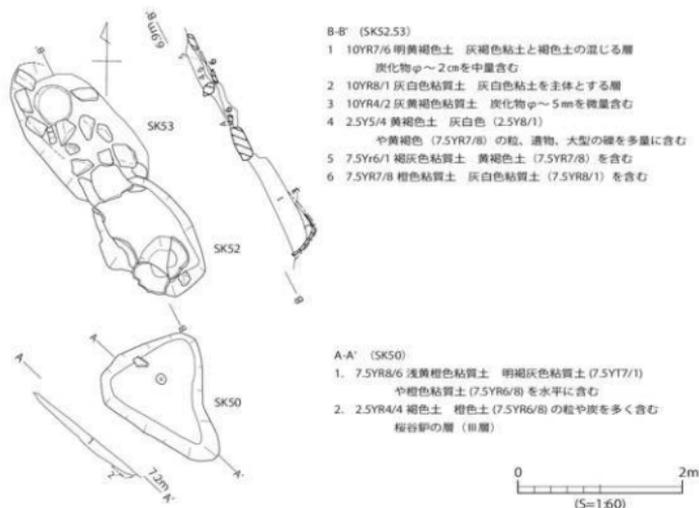
136-7は水竈11最下層から出土した鉄製のカスガイである。断面方形で厚さ21mmと非常に太い。

136-7は福光石裂の石製品である。リング状の形状になると思われることから井戸杵を考えたが、内径が小さ過ぎるか。高さは18cmである。上下両端面は丁寧に加工され鑿痕を残さず、縁は面取りされる。内面にはわずかに鑿痕が残す程度だが、外面は粗い鑿痕を残す。内面から破面には煤が付着しており、火を受けて破損したと思われる。

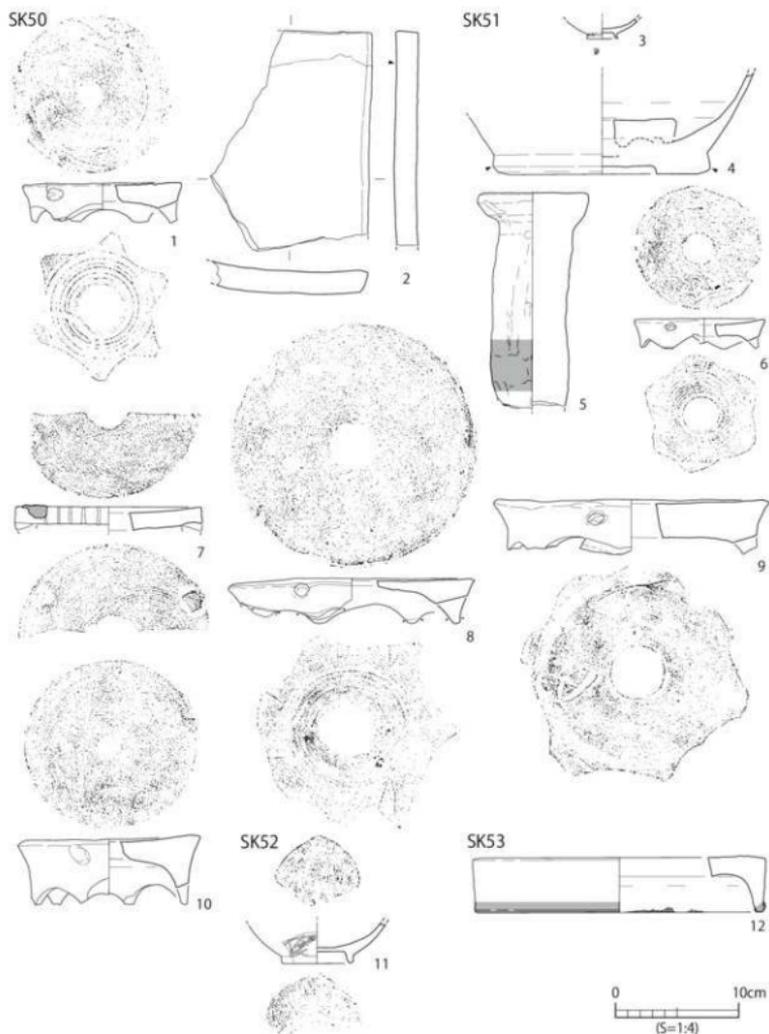
136-9は埋裏の中に入っていた陶器の壺蓋である。輪状つまみの頂部まで来待軸を施し、つまみ頂部の軸をケズリ取らない。内面には褐色の付着物がみられる。

136-10は埋裏に使用されていた陶器甕である。口縁端部が垂下し頸部が短い。肩部には櫛書きの波状文と直線文が重ねて施されるが、波状文は下部が途切れる。三方向に流し掛けを施すがとび気味である。1面に点々と耐火砂が付き軸に埋まっている。この面が火当たり方向で、焼成時に舞い上がった耐火砂がかかったか。体部中程に接合痕があり、特に内面の接合痕は明瞭に残る。口縁の内面側は細かい傷が多く入り軸が割れている。この甕は水竈11の埋裏に使用されていたもので、ひしゃくで陶土となる泥水を汲み上げる際についた使用痕か。

第137図は水竈13から出土した遺物である。137-1・2は磁器染付である。137-1は端反形の染付坏である。外面にコバルトで「□風月」と書き、高台内側に「道八」銘を入れる。京焼の道八窯産である。137-2は輪花形の鉢である。内面にはコバルトと錆軸により蓮花文を描き陰刻にダミを重ねている。高台内側に統制印「岐1139」がみえることから、岐阜県陶町山田松治窯で昭和14～21年に作られた。



第139図 SK50・52・53実測図(1:60)



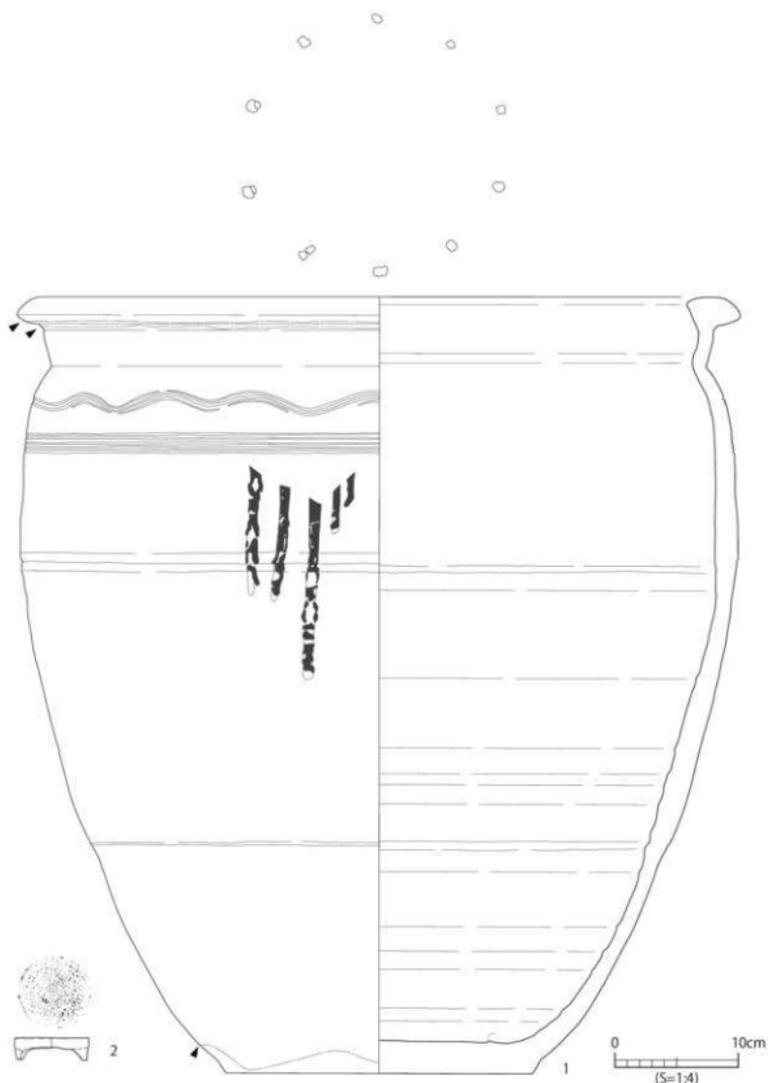
第140図 SK50～53 出土遺物実測図(1:4)

137-3は陶器控鉢である。長石軸をかけ外面には軸が垂れる。見込み部に8足の焼台の痕が残る。

137-4は陶器で瓶か。全体に長石軸をかけ高台下端の軸を削り取る。

137-5は円盤状の焼台である。両面に回転糸切痕を残し、片面に剥離痕が残る。

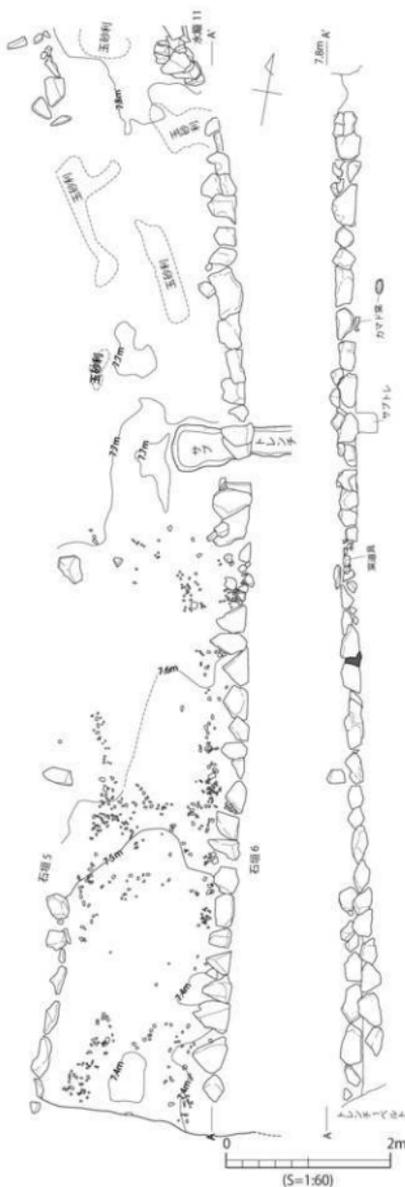
137-6は素焼きの浅鉢と思われる。口縁端部を始め丁寧にナデ、底面はケズリである。上面には重ね焼きの痕跡がある。内面には錆が付着する。137-7は盛鉢である。素焼きで底面には静止糸切



第141図 SK52 出土遺物実測図(1:4)

痕を残す。137-8は瓦を焼成する際に隙間を開けるためのハセと呼ばれる窯道具である。頂部に周囲に褐色の来待油が付着する。137-9は来待軸の軒椽瓦である。凸線で輪郭を描く唐草文である。中心飾りは釉で潰れてみえにくい立花か。

第138図は水簾13の東側に置かれた甕と土管である。138-1が水簾13の排水升にあたると思わ



第142図 道路(南側)実測図(1:60)

れ、138-2はオーバーフローした排水を流すための管である。138-1は陶器甕で全面に來待軸をかけるが、頸部外面は軸を拭き取る。肩部は柳書きの直線文を入れ三方向に流し掛けを施す。体部中ほどの2カ所に縦じ目がみえる。底面に墨書があり、「四斗」のほか、△や冫などが3行にわたって記される。左行は「四号」か。口縁部は一部が欠けているが、土管を設置するために意図的に欠いたと思われる。大甕2類に相当する。138-2は來待軸の土管である。端面から受け部内面を除いて内面側まで施軸される。頸部外面にセメントが残っており、セメントで138-1の口縁破損部分に接着していたと思われるが、出土時には完全に剝離していた。

SK50・52・53 (第139図) SK50・52・53は水篦13の南から東側にあった土坑である。SK50は不整形の浅い土坑で、水篦11の南側に接している。用途はわからない。

SK52・53は水篦11の東側に接して検出した土坑で、SK52には大甕(141-1)が据えられていた。水篦11の排水口はやや北側にあたるSK53の上に開いているが、水篦11東壁には複雑に飛び出したコンクリートがあり、先行する水篦施設があった可能性が高いことから、先行する水篦施設の排水升か。

SK53は直上に水篦11の排水口が開いており、水篦11の排水升だった可能性が高いが、礫が多量に入り込み、元の形状がわからないため、周辺遺構との関係は不明である。

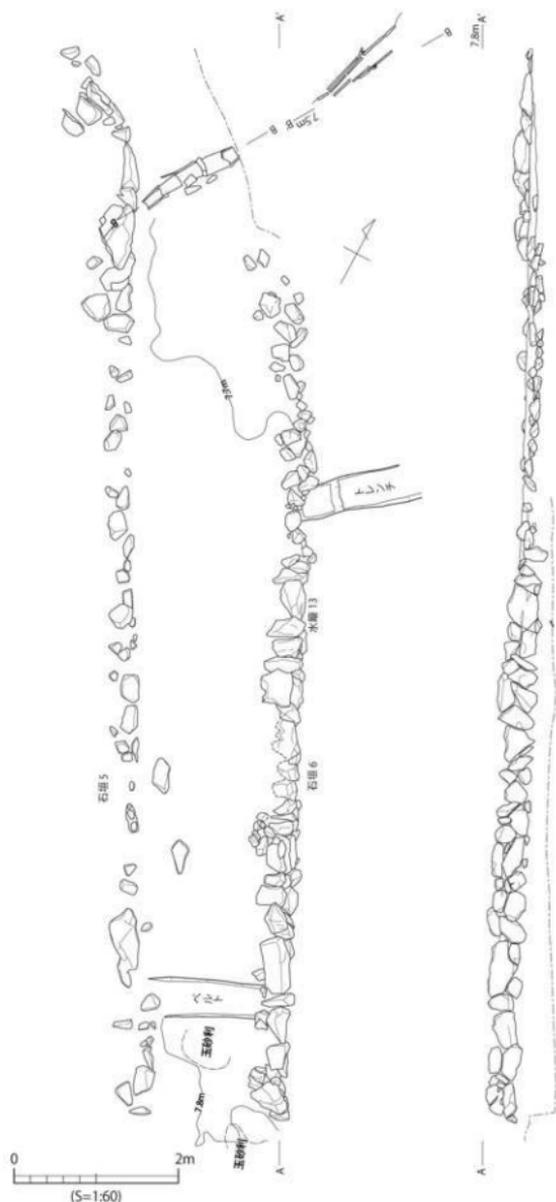
140-1はSK50から出土した焼台(ハリ)である。脚部を丸く削り出すもので、頂面には回転糸切痕を残し、側面指によるくぼみがある。このくぼみには釉が溜まっている。内面側には指による回転ナデの痕跡を強く残し、ヘラ記号が入るが判読できない。140-2はSK50から出土した棧瓦である。來待軸を施す。端面に窯道具(ハリ)の剝離痕を残して

いることから本田窯跡で生産された瓦であろう。

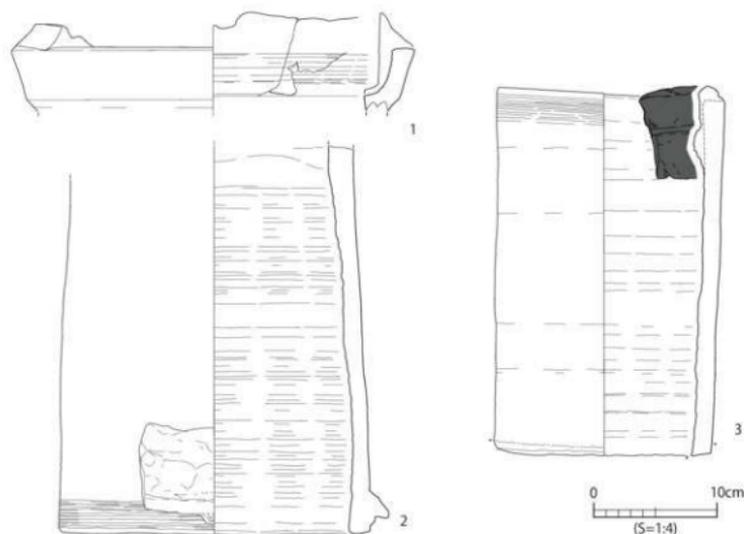
140-3～10は第2面のSK51から出土した陶磁器と焼台である。140-3は瀬戸美濃系の染付坏である。呉須で高台の付け根に芻文を、底面に変形字銘を入れる。東大Ⅸ期で明治初期のものか。

140-4は陶器甕の底部で、内面に焼台溶着する。高台の畳付を除き赤褐色の来待釉が厚く施される。高台の内側は釉が拭き取られる。内面に溶着する焼台はハリと呼ばれるもので、上面に剝離痕が残る。

140-5はトチンと呼ばれる中実の焼台である。全面手づくねで成形され、頂面に剝離痕が残っている。下端部を欠くが、破面にも砂が付着していることから欠損後も使用された可能性がある。本田窯跡ではヌケと呼ばれる中空の焼台が多く使われるが、トチンも少量がみられる。140-6はハリと呼ばれる6足の焼台である。側面に指による半円形のくぼみがある。頂面に回転糸切痕を残し、耐火砂が付着する。下面側は工具による



第143図 道路(北側)実測図(1:60)



第144図 土管出土遺物実測図(1:4)

ナデで、強い痕跡を残しヘラ記号「二」を入れる。

140-7は、円盤の下面に別の粘土で三角錐の足を張り付けるものである。足の部分は白色にみえる陶土を使用している。足は4足か。両面に回転糸切痕を残す。側面はナデ調整するが、ヘラによる刻み目5条以上を入れている。側面に軸・砂が付着する。

140-8～10は脚部を丸く削り出すハリである。いずれも頂面に回転糸切痕を残し、下面側は回転ナデ調整する。140-8は「二」、140-9はヘラ記号「四」を入れる。140-9の脚部には甍片が付着している。

140-11はSK52から出土した素地の陶器椀である。外面に草花文の刻花が施される。内面にも刻花の一部が施文される。

140-12は器高の低い焼台で、ヌケと呼ばれるものの一種か。中央の穴が大きい。頂面には剥離材が付着し、下端には耐火砂が付着している。

141-1はSK52に据えられていた甕である。来待軸を施し肩部に櫛書き波状文と直線文を入れる。肩部に流し掛けがみえるが、とび気味で鉄軸が定着していない。頸部が長く、体部の2カ所に接合痕を残す。胎土が密でやや重く、本田窯跡産でない可能性がある。大甕1類相当である。

141-2はSK52から出土した小型の焼台(ハリ)である。脚部を三角形の粘土で別に作り張り付け、頂面には回転糸切痕を残すが、下面は糸切痕をナデ消す。

道路 6区を南北に縦断するように2条の石列が検出され、その間を道路と考えた。第142図は道路の南側部分である。道路西縁にあたる石列は途切れ気味にみえるが、実態は後述する石垣5の上端部分である。東縁は石垣6となる。石垣6の上端は南側で標高約7.6m、北側では標高約7.3mである。石垣5の上面とその西側については、調査前にあった宅地の擁壁が深く入り込んで攪乱され

ていたため、遺構の状況がわからないが、さらに高く石垣5が積まれていたと思われる。

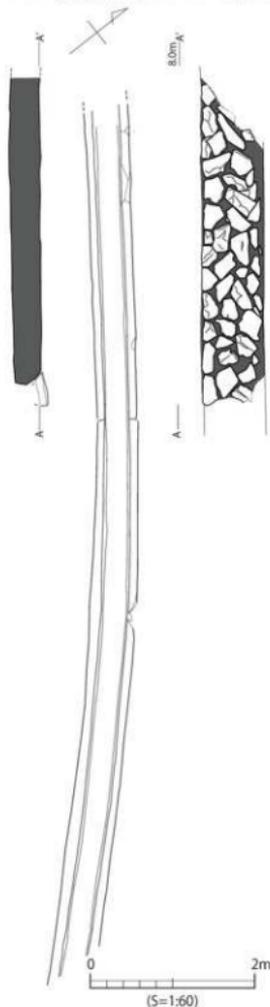
この石列に挟まれた幅1.7m長さ約25mの間が道路だったと考えられる。この道路は、6区中ほどで折れ曲がるようだが、その南北は直線的に延びており、北端で路面の標高約7.7mである。緩やかに南に下り、南端では標高約7.4mとなる。道路の北側では明瞭でないが、南半では路面を覆うように玉砂利が残っていた。道路の舗装に使用されたと思われるが、残存状況はまぼらで輪などは認識できなかった。

石垣6の検出南端にあたるコンクリート基礎、SB04付近ではセクションベルトにかかったこともあり、石垣が途切れ、SB04付近とのつながりがわからない。しかし、SB04のコンクリート上面が標高7.4mでほぼ一致することから、SB04西側に接して道路が通っていたと思われる。また、石垣6下面は標高7.2mで、コンクリート基礎の高さに位置する。

第143図は水簾施設に接する部分から北側を示したものである。第142図上側で水簾11の南西隅の位置に文字を入れているが、この部分が水簾11に沿って折れており、第143図水簾13の北西角を示している部分までが直線になっている。石垣6が水簾施設に規制されていることが明確で水簾施設以降に造られ、水簾施設のコンクリート面を利用して石材を並べた可能性が高い。

道路の北側には道路を東西に横断して土管列が埋設されていた。土管列は第143図上側にあり、土管4本以上を繋げて北東側へ排水する。道路の西縁にあたる石垣5の直前から始まっていることから、石垣5に接して道路側溝があったかもしれないが検出できなかった。石垣西側で標高約7.4m、東側では約7.3mで、西から東へ排水していたことがわかるが、東側には後述する石垣7があり塞がれている。石垣7を設置した際にその機能を停止したらしい。

第144図には土管列で使用されていた土管の一部を示した。144-1は受け口部分の破片である。本体内径で24.6cm、連結部分の内径29.0cmを測る。連結に使用された白色の石膏が厚く残り、石膏の内面側には144-2の下端部につけられたネジ状のスタンプが移り、その外面に連結していた。143-2は胴部側の個体である。内径は約22cmで、残存長31.6cmである。内面にはナデによる線が多く残る。外面は丁寧にナデられ調整痕を残さない。基部近くには連結のためのネジ状の線が入られる。基部外側には石膏が残存し、143-1頂部のスタンプが写る。143-3は受け口側が破損して脱落したものである。144-2の内側に入っていた個体である。外径18.5cm、

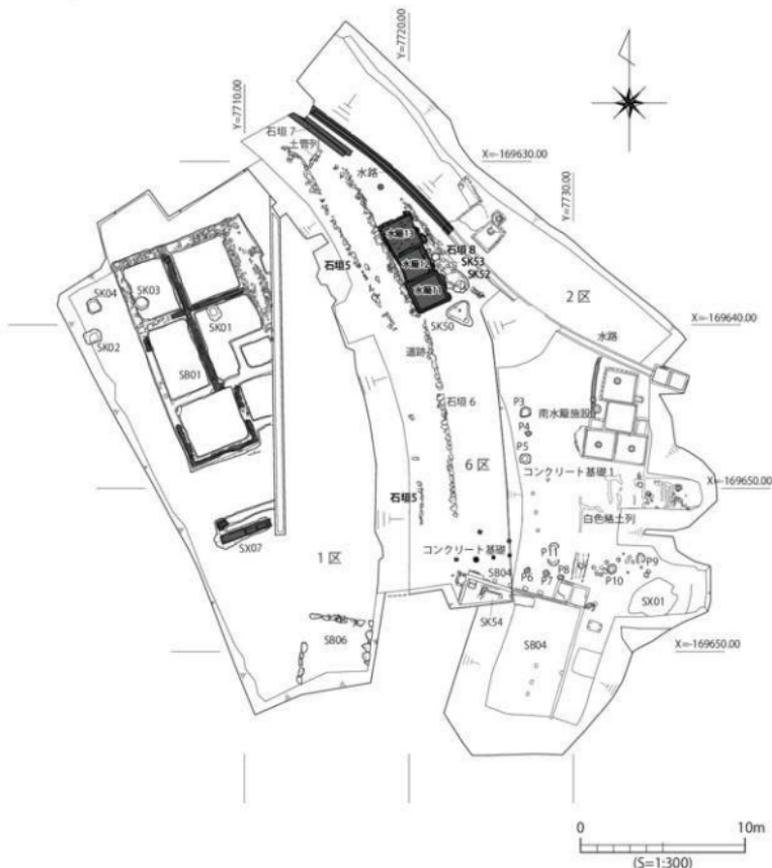


第145図 石垣7・コンクリート水路
実測図(1:60)

内径16.2cm、長さ30.0cmである。端部の外面には連結用のネジ状の線が入り、端部から内面側に石膏が付着する。内面の石膏には指で押さえた痕があり、漏れ止めか。143-1～3の土管は一見來待軸にみえる赤褐色を呈しているが、露体の部分がなく軸のかかりも薄い、來待油に比べてやや明るい色合いであることから塩軸だろうか。

石垣7・コンクリート水路 6区北側では石垣7とコンクリート水路を検出した。コンクリート水路は2区で検出した水路の続きで、緩やかにカーブしながら調査区の北西へ延びている。継ぎ目にみえる部分があり、施工の単位か。東端は2区で検出(第68図)しており、溜枦が設けられていた。

コンクリート水路に並行して石垣7を長さ3.2mにわたって検出した。高さは62cmである。石垣7は石をセメントで固めたもので、隣接するコンクリート水路に比べても直線的に作られている。石垣下下面是標高7.0mでコンクリート水路の上面の高さに一致し、石垣7とコンクリート水路との



第146図 1・6・2区1面遺構配置図(1:300)

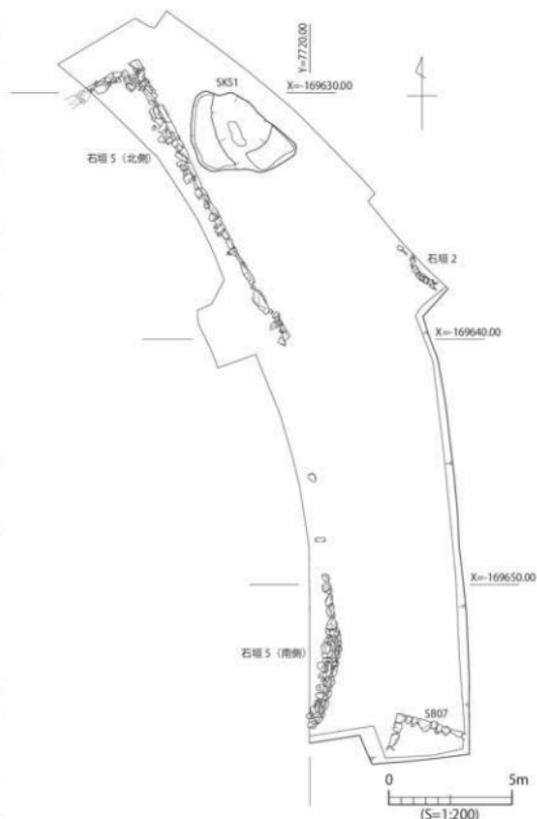
間は約50cmしかない。石垣6の延長線上に位置し、上面の標高は7.7mで道路の東縁となると思われる。この道路は調査前に撤去したアスファルト敷きの現道（市道）に改築されているので、それ以前のものであることがわかる。改築時期はわからないが、現道よりも直線的に設置されている点に注意される。

6区1面の遺構 6区第1面では、SB04と水竈施設のほか数条の石垣、道路などを検出した。1区と東側の2区の間は2m近い高低差があるが、その間の6区では南北に走る石垣と道路を検出し、階段状になっていることが確認できた。1区SB05と2・6区SB04の比高差は2mあるが、その間を石垣5・6に挟まれた道路が通っていたことになり、道路の西面が高さ2m近い壁となっていたはずだが、石垣5の上面から西側は宅地の擁壁によって攪乱されわからない。道路は石垣5の他に石垣6・7によって構成されるが、石垣7にみられるようにセメントを使う段階になって以後も改修されて使われていることがわかる。この道路は現道（市道）の直下にあるが、線形が異なり、現道よりも直線的だった。

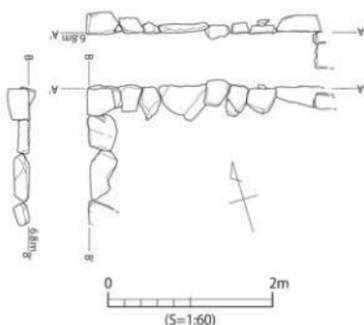
6区では水竈施設を全解体し下部の状況をあきらかにできた点は大きな成果となった。水竈11に作り替えの痕跡がみられた点や水竈13の床面に板が使用されていた点は、同じ構造の2区北水竈施設でも同様だった可能性がある。排水弁に陶器甕を使用する例も2区ではみられなかった特徴である。また、水竈施設の使用を中止した時点で陶土を残さず、空だった可能性が高く陶器などを廃棄した上で土砂によって埋まっている可能性がある。

4. 第2面の遺構

第2面は標高6.5mから6.8m付近に展開する遺構で、第128・130図の24暗褐色砂質土の上面にあたる。第1面の道路を構成した石垣5のほか、地覆石の建物跡(SB07)と土坑を検出した。石



第147図 6区2面遺構配置図(1:200)



第148図 SB07実測図(1:60)

内側のため少し小さい。

地覆は頂部で面を揃えており標高6.8m付近である。基部側はまちまちで標高6.5～6.6mである。長さ30～50cmの自然石を使用し、建物外面にあたる北・西側に面を揃える。石材は1区西側で露出する地山と同じ泥質片岩で、近隣で産出されたものである。2区と同様に下部構造などはみえない。また、東側の地覆の上面にはSB04のコンクリートが接して残る。

SB07の地覆石は上面を平らに揃えており、上に横材を置きその上に壁を建てていたと思われる。入り口などは不明である。SB07の内部には、新たに遺構等は検出されず、遺物も出土しなかった。



- 1 2.5Y8/1 灰白色砂質土 きめの細かい砂層
- 2 2.5Y5/3 黄褐色土層 灰白色粘質土 (2.5Y8/1) を多量に含むφ～10 cm程度の礫や炭を含む
- 3 2.5Y8/6 黄色粘質土 灰白色 (2.5Y8/1) の粒を含む
- 4 2.5Y5/2 暗灰黄色土 多量の遺物を含む
- 5 2.5Y4/2 暗灰黄色土 黄色土 (2.5Y8/6) や灰白色粘質土 (2.5Y8/6)、径φ～110 cm程度の礫を含む
- 6 7.5YR7/6 橙色粘質土 灰白色粘質土 (7.5Y8/1) を含む
- 7 5Y4/3 灰オリーブ色土 φ～10 cm程度の礫を含む

第149図 SK51実測図(1:60)

垣によって1区からの高低差を解消しており、最も低い南側で2区から続くSB07を検出した。

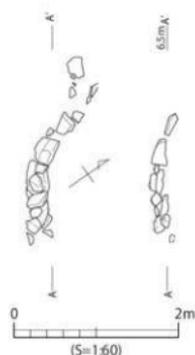
SB07 SB07は調査区南隅で検出した地覆石列である。コンクリート製の建物であるSB04の下層で検出し、2区で検出したSB07の西角にあたる。6区で検出した規模は東西3.1m、南北1.7mで、高さは20cmほどである。SB04の直下にあたる。建物の北東の隅を2区で検出しており、建物の東西規模は7.1mとなる。建物軸はN-20°-EでSB04とほぼ同じで、6区の範囲ではSB04のコンクリート基礎の真下になるが、2区側の北東隅はSB04よりやや

SK51 SK51は調査区北側で検出した不整形の土坑である。東西4.1m、南北3.05mで深さ98cmである。概ね南側から土砂が流れ込んで埋没しているように見える。この内4暗灰黄色土には多量の遺物が含まれている。SK51-4層に含まれる遺物は、第140図3～9に示したが、確認できる多くが焼台で、壺の見込みに焼台が溶着したままの破片(140-4)など、窯焼きに関わる遺物が大半を占める。出土した焼台は多くがハリと呼ばれる脚付の低い台である。本田窯跡でもっとも多く出土するハリは脚部をヘラで三角形に切り出すタイプのものだが、SK51から出土した焼台は側面を下から丸

くぐり取って脚とするものが多い。壺の見込みに溶着していた焼台もこのタイプで、SK51に廃棄された遺物の多くがこの形状の焼台だったことがわかる。また、本田窯跡では比較的数量の少ない中実のトチンが含まれることも注意される。

SK51に入っていた焼台以外の遺物には染付杯(140-3)があるが、この杯は明治初め頃の瀬戸美濃系で、6区第2面遺構の時期の上限を示す。

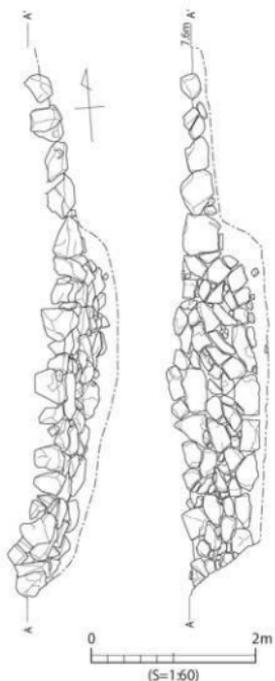
石垣2 石垣2(第150図)は調査区東壁沿いの中ほどで検出した小さな石垣である。位置関係から2区北石垣(第93図)に続くと思われ、南東-北西方向に延びるが、中ほどで折れ曲がり北に向きを変える。石垣2は長さ2.2mほどしか検出しておらず、高さも1~2段分しか残存していない。最大でも20~30cmほどの比較的小さな自然石による石垣で、南側で標高6.4~6.66m、北側では6.36~6.54mを測る。2区北石垣は北へ向かうほど基底部が上がり石垣の高さもなくなっていくが、元は傾斜地に斜めに築かれた石垣で上面がコンクリート水路によって削平されていると思われる。6区においても石垣2はコンクリート水路直下に位置しており、検出できた石垣2は削平を免れた残存部分だったと思われる。



第150図 石垣2実測図(1:60)

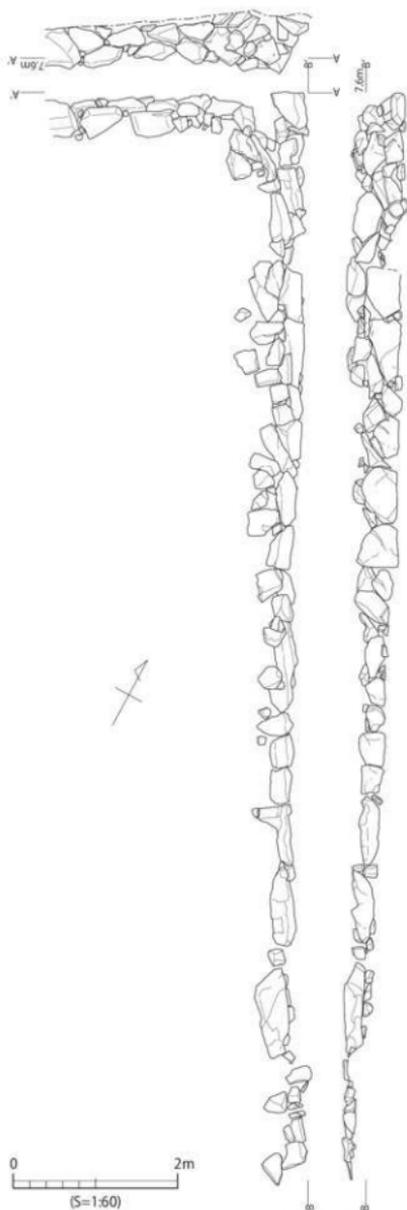
石垣5 石垣5は調査区を南北に縦断する石垣である。最上部は第1面で検出した道路の西縁となる。調査区中ほどでは検出できず、南北に2分割で検出した。

第151図は石垣5の南側である。東に面を向けてほぼ南北方向に延び、わずかに東側に膨らむ弧状となる。検出長は約6mでさらに南に続く。石垣の北半は30~60cmの大きな石を並べているだけだが、南半はやや小さめの石を使用し高さ1mほどの石垣を築いている。この部分はやや小さく扁平な石材を使用し、斜め方向に目地が通る積み方となっている。石材は近隣で産出される泥質片岩である。積み方が替わる位置は、地山面が約70cm落ち込む位置で、南半の石垣となっている部分の下面は標高6.8m付近となる。北側の一段しか積まれていない部分では標高7.3~7.5mとなり、北へ向かって緩やかに昇っている。また、石垣上面は標高7.6m付近である。石垣の裏込めからは窯道具が出土しており、積み直しがおこなわれた形跡がある。



第151図 石垣5(南側)実測図(1:60)

第152図は石垣5の北側部分を示した。一直線に北に延びる石垣が直角に折れ曲がり1区石垣1に続く。南端は一段分しか残っていないが北側の角付近では2段程度積まれ、折れ曲がって西に向かう部分は2段程度が残存する。東、北に面を向ける。北の角から1.6m南には1面の道路の下を通る土管列があるが、石垣5の段階ではまだ設置されていない。

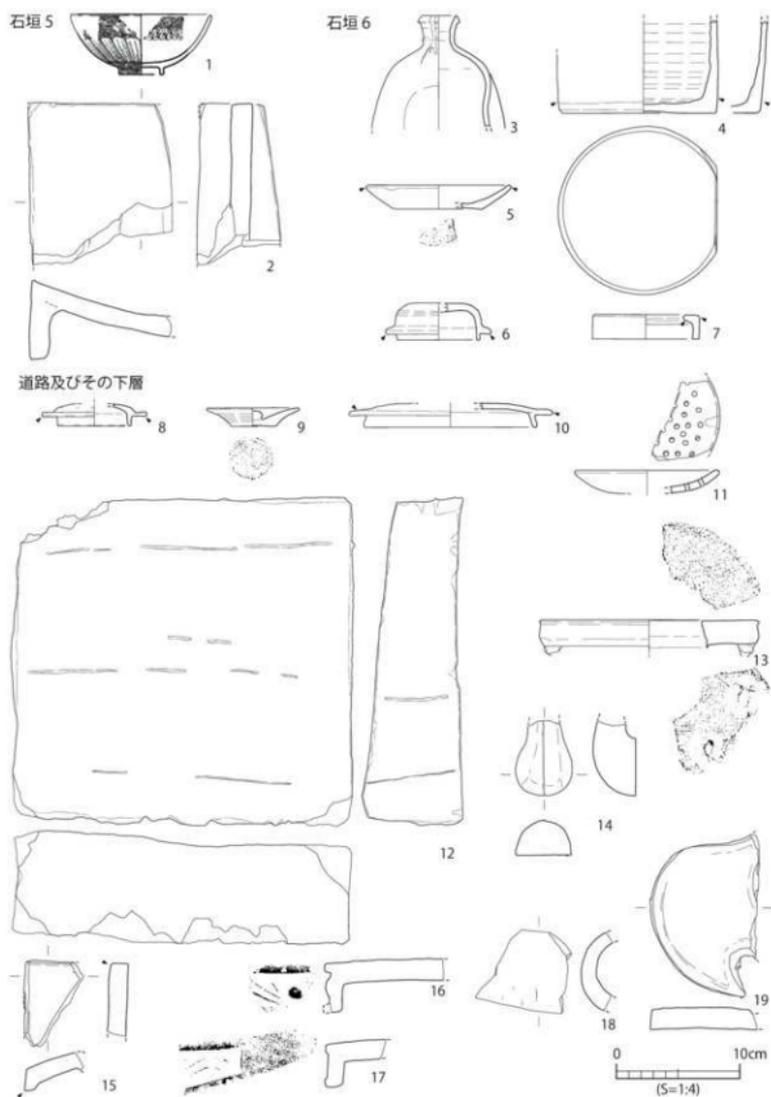


第152図 石垣5(北側)実測図(1:60)

石垣5北側の南端は標高7.75m付近にあって、その基底は北へ向かうにつれて段階的に下がる。南端から1.5mの位置で一段下がり7.5mに、そこから緩やかに下り南端より7.4mの位置でまた一段落ち込んで標高7.2mとなる。北の角付近では標高7.1mとなる。また、西に向けて折れた後は緩やかに上昇し、6区西端で標高7.4mを測る。一方、上面は7.8m前後で一定しているが、それよりも上部が削平されているためか。石材は石垣の高さが残る北の角周辺に大きなものが使われ、一辺40～50cmほどの大きさである。南端では長さ20cm、高さ10cmほどの小さな石が使用される。北の角に使われている石材には矢穴の可能性がある楔形のくぼみが残る。

石垣5・6、道路およびその下層から出土した遺物 153-1は石垣5の裏込めから出土した浅半球形の染付碗である。コバルトで区割文を描く。近代以降の有田焼か。153-2も石垣5の裏込めから出土したいふし瓦の袖瓦である。凹面から袖外面、端面はミガキが施される。

153-3～7は石垣6付近から出土した遺物を示した。153-3は陶器徳利である。体部中央を押押し、口縁部の外面には火漕がみられる。備前焼の献上手徳利である。153-4は陶器の瓶で湯たんぽか。円筒形の一面を平らにいており、図上左側の平らな面を下向きにして使用するものか。上半の形状はわからない。内面から底部は露体で、体部外面は長石軸をかけ明灰緑色を呈す。153-5は陶器燈明皿である。浅い皿で体部外面から底面は露体となる。口縁部から内面に長石軸をかけ、底面には回転糸切痕を残す。使用痕は残していない。153-6は陶器壺蓋である。外面に長石軸をかけ、内面側は露体とする。153-7は祭道具の軸



第153図 石垣5・6、道路およびその下層出土遺物実測図(1:4)

受けである。高さ2cmの円筒形で頂部を折り曲げ内側に口縁部を向ける。口縁部の内径は6.0cmで、体部の内径は7.4cmを測る。頂部から口縁部に長石軸をかけ他は露体とする。

153-8は道路の路面上から出土した陶器壺蓋である。小型の蓋で外面に長石軸をかける。内面の

ほぼ全面に赤色顔料が付着する。ベンガラか。

153-9～14は道路の路面中から出土した遺物を示した。153-9は陶器落し蓋である。内面には長石軸をかける。外面から底部は露体で、底面に回転糸切痕を残す。153-10は陶器蓋で、頂面に長石軸をかける。153-11は瀝し皿である。径4mmほどの穴を底面側から不規則に開ける。全面に長石軸をかける。

153-12は窯道具の火立である。頂面にコピキ痕をわずかに残し、灰が落ちる。表面から側面に横方向の線がみえるが用途はわからない。

153-13はハリと呼ばれる焼台である。円盤状の体部に粘土を張り付けて足としたものである。このタイプの焼台は小型のものが多いが、153-13はやや大きく足も8足程度か。上下両面に回転糸切痕を残す。

153-14は土型と考えられるもので注口を成形するためのものだろうか。1面が平らで、丸く作られる背面には方から外す刃物を入れたことによる浅い沈線が入る。

153-15～19は瓦類である。153-15は椀瓦の椀上端部付近の破片である。凸面側に緑色の科学釉を施し、端部から裏面（凸面側）は無釉となっている。椀の側部近くには屋根側の椀に引っ掛けるための型作りによる段がある。昭和60年代以降の石州瓦か。153-16・17は緑色の化学釉薬をかけた軒椀瓦である。円形の中心飾から多条の唐草が伸びる文様で、現代の石州瓦では一般的な文様である。153-18は鳥伏間か。細い半円筒形の瓦で両面とも来待軸がかかる。凹面には絞目目が顕著である。凸面側部にも、わずかに絞目目状の線がみえる。153-19は石垣5の外側から出土した無文の鬼瓦の破片である。下側に爪状の突起が表現する。表面の縁に沿って沈線を引く。裏面も含め全面に来待軸を施す。

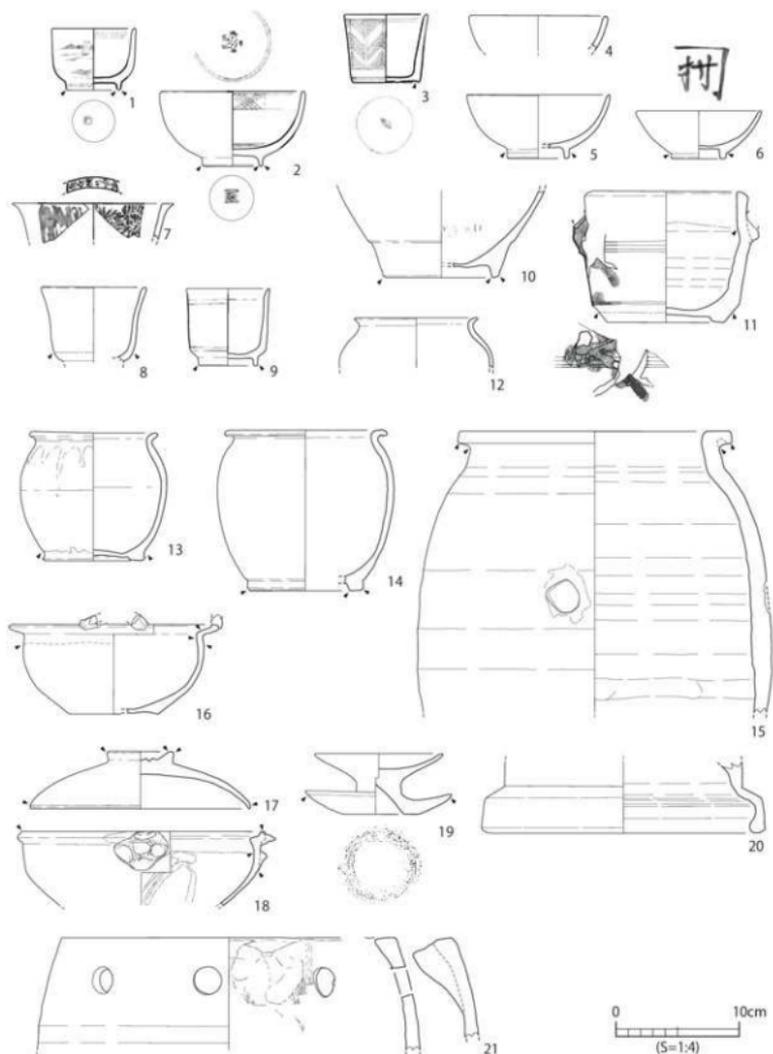
3.6 区包含層出土遺物

154-1～3は磁器である。154-1は筒丸形の染付椀である。呉須で山水文を描き、高台外面と口縁部内面に雷文を入れる。高台の内側には不明字の銘が入る。肥前系の湯呑椀、東大Ⅷc-dで1830～60年代と思われる。154-2は丸形の青磁染付椀である。青磁釉・呉須で内面に四方禪文を、見込みに五弁花文を描く。高台内側に二重角「満福」銘を入れる。肥前系で東大Ⅷa、1800-10年代とされる。154-3は染付猪口である。蛇の目凹型高台である。外面には呉須で矢羽文、岩波文を描く。天明様式で1780-1860年代(大橋2009)とされる。

154-4～6は陶器椀である。154-4・5は塙軸軸椀である。全面に瑠璃釉を施す。154-5は表土中から出土した。高い高台を持ち、体部は緩やかに内湾する。内面から外面底部まで瑠璃釉をかける。高台から底面は露体となる。154-6は長石軸の椀である。見込みにカネ「村」を鉄軸で記す。高台から底面は露体とする。

154-7は陶器呉須絵鉢である。呉須で外面に唐草文を口縁端面に瓔珞文を描く。外面の文様は不明である。154-8は無文の陶器椀である。体部の破片で全面に長石軸をかける。154-9は筒形の陶器椀で湯呑である。全面に長石軸をかけ、高台の下端部から高台内側が露体である。外面の上下にコバルトで圈線を描く。

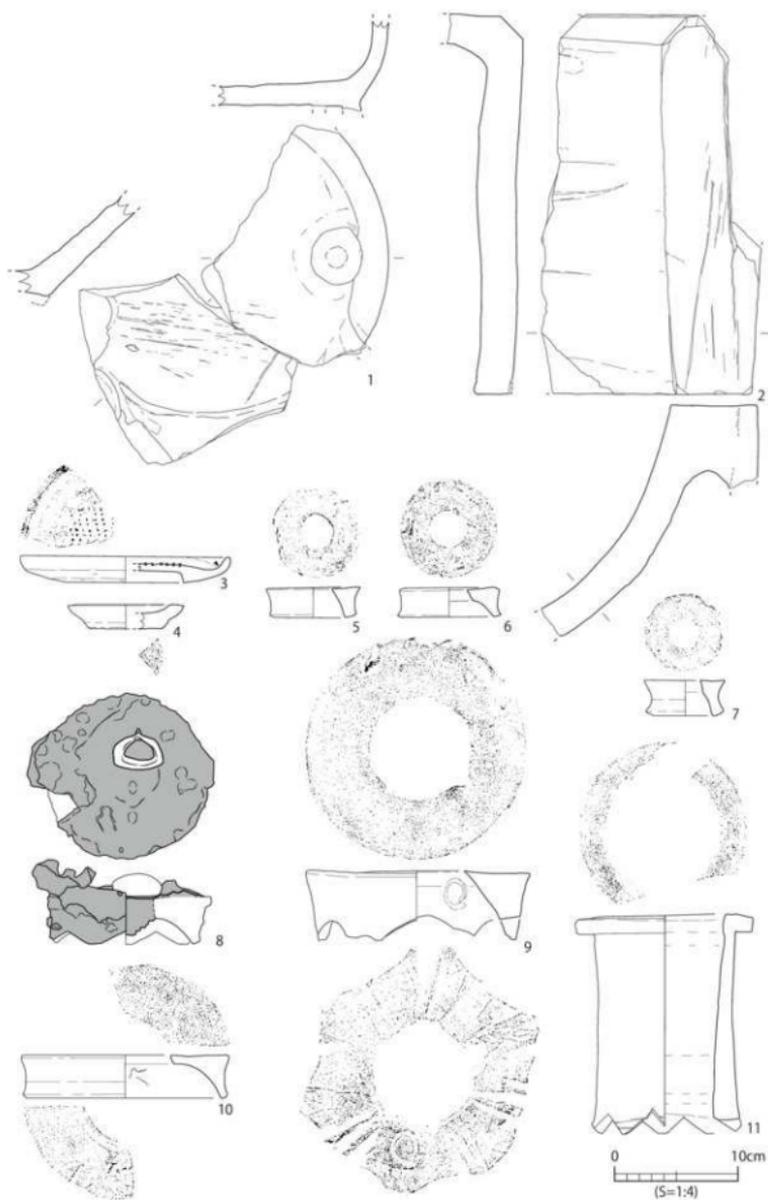
154-10は陶器鉢である。体部外面下方に段を付け、高くみえる高台を削り出す。全面に長石軸をかけ高台下端部は露体である。内面の見込み周辺に飛び甕上にヘラの先端が連続して当たった痕跡



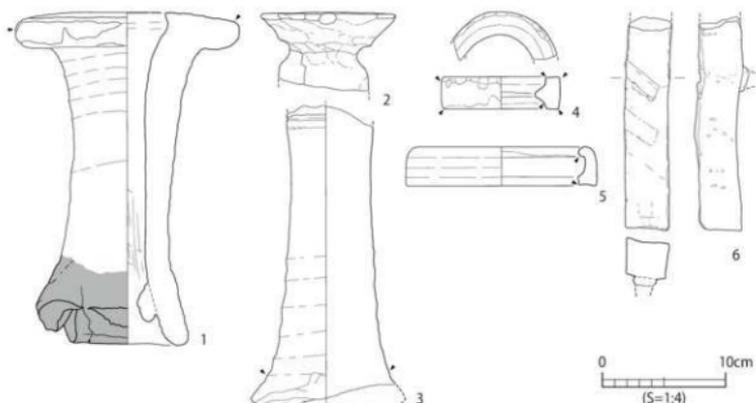
第154図 6区包含層出土遺物実測図(1)(1:4)

がある。

154-11は竹筒形の陶器把手付手焙である。外面と内面の口縁部近くに長石軸をかけ、コバルトでダミを描く。耳部分は貼り付けである。底面から高台は削り出す。竹枝文は貼付文様と沈線を組み合わせ。



第 155 图 6 区包含层出土物实测图(2)(1:4)



第156図 6区包含層出土遺物実測図(3)(1:4)

154-12・13は表土層から出土している。154-12は長石軸をかけた甕である。154-13は来待軸をかけた壺で、高台から底面は露体である。肩部には軸が流れ出し垂れて厚くたまった様子が見える。154-14も同様の陶器壺である。全面に来待軸を施すが、高台外面から先端は軸を拭き取る。

154-15は来待軸の陶器甕である。口縁部は角型で外面と頂面に面を作る。口縁下面は軸がかかっている。体部内面の下方に織目が見える。体部外面の中ほどには焼成時に気泡が破裂した痕が残る。

155-1は土師質土器で焔炉ないし七輪と思われる。平らな底面に足の剥離痕が残り、4足程度の足を張り付けるものか。足は直径4.5cmで厚さ1～1.5cmの中空となる。底面にみえる線は成形時のしわである。円筒形の体部は一面が大きく切り開かれる。底面以外は丁寧なナデ調整する。155-2は五徳ないし焔炉と思われる土製品で表土中から出土した。円筒を半截した本体の縁に板状の別材を張り付けて袖を作る。頂部は面取りされる。全面をナデ調整する。

155-3は鉦皿の未製品と思われる。無袖であるが内面に白化粧土を施しているか。底部外面はケズリで、口縁から内面はナデ調整する。底面は椀筒底である。

155-4は窯道具チャツの小片である。底面に回転糸切痕を残し頂面はヘラ切、体部は内外面ともナデ調整する。

155-5～7は円筒状の焼台である。いずれも頂面に回転糸切痕を残し、他はナデ調整する。155-5は断面台形を呈し内面側に稜がない。155-7の頂面にはわずかに褐色の釉が付着する。

155-8は多量に溶着物が付く焼台である。本体はハリと呼ばれる三角形に脚部を切り出す台である。中心の穴や内面側には剥離材(アルミナ粉)が多量に付着し、頂部に色見が倒れて溶着する。色見は兜中状につまみ出す形状となる。周囲に付着しているのは窯滓の少片である。

155-9は焼台(ハリ)である。6足をヘラで丸く削り出す。頂面には回転糸切痕を残すが、陶土や耐火砂が付着する。内面側には丸を描くようなヘラ記号がある。

155-10は円筒状の焼台である。頂面は回転糸切痕を残す。内面側にヘラ記号が入るが、判読できない。

155-11は高さのある焼台でハリの一種である。頂部の穴が大きく、体部内面の延長上になり回転ナデを施す。脚端部は8足を切り出す。脚端部に剥離痕があり、外面には白書の粘土が付着する。

156-1は表土中から出土した中空の焼台(ヌケ)である。強く被熱し外面はガラス化している。外面側は調整痕がみえにくい内面には絞りがみえる。脚部はひび割れ耐火砂が付着する。

156-2・3は中実の焼台(トチン)である。156-2は頂部の破片である。頂面はナデ調整する。外面は手づくね成形され指の痕跡を残す。頸部は強く絞られ指頭圧痕が顕著である。156-3は体部から基部の破片で頂部を欠く。底面には回転糸切痕を残し、体部は横方向のナデ調整する。基部周辺には高熱によるひび割れがみられる。

156-4・5はリング状の陶器で轆轤の軸受けである。156-5は内面側に鈎状の突起を廻らせる。頂面と下面は無軸で、外面と内面には灰釉をかける。外面の上側には小さな敲打痕があり、小さく剥離する。内面の鈎状に飛び出した部分は使用による摩滅がみられる。156-6は口縁部の内面側を玉縁状に丸く作る。内面を除いて鉄釉をかけ、内面は露体である。

156-6は表土中から出土した瓦用の焼台(モミツチ)である。一辺3.0~3.6cmの四角柱で残存長は17.2cmを測る。一面に瓦を載せた斜め方向の圧痕が残る、他面には瓦間に詰める詰め物(ハセ)の頭部が溶着する。

第157図には6区から出土した瓦類を示した。157-1はいぶし焼の瓦で棧瓦か。凸面側の端部に沿って深い沈線が引かれている。凹面側には型の板による圧痕が残る。157-2はいぶし焼の棧瓦凹面側に浅いくぼみがあり、布目圧痕が残る。型の縁部分か。棧を中心に縦線状の磨痕があり、ナデで調整される。157-3はいぶし焼の雁振瓦である。凹面側には板状の圧痕があり型によるものか。連結部は別材を接合して作っており、凹面側には滑り止めの刻みが入る。

157-4は来待油の棟止である。三つ巴の周囲に珠文を廻らす。文様の中心を線が走っており、型が割れている。157-5は軒棧瓦の瓦当面である。瓦当文様は輪軸を凸線で描く唐草文である。全面に来待軸を施し、最外の唐草が軸で潰れて上側の輪軸しかみえない。この瓦当の文様区は隅丸ではなく、側部上が花形に2カ所くぼむ。157-6は棧瓦である。来待軸を凹面から側部に非常に薄くかける。切り欠き部の端面に円形の刻印を浅く入れている。竹管によるものか。

157-7は来待軸の棧瓦2枚が溶着したもので、大きく焼歪んでいるが、わずかに両端部が残っており、全長25cmほどの小型の瓦だったことがわかる。端面に焼台(モミツチ)の剥離痕が残るほか、反対側の端部にも焼台の痕跡がある。棧の部分に気泡のふくらみがある。157-8来待軸の棧瓦である。上端部の重なる部分は無軸だが軸が垂れる。凸面は無軸とする。

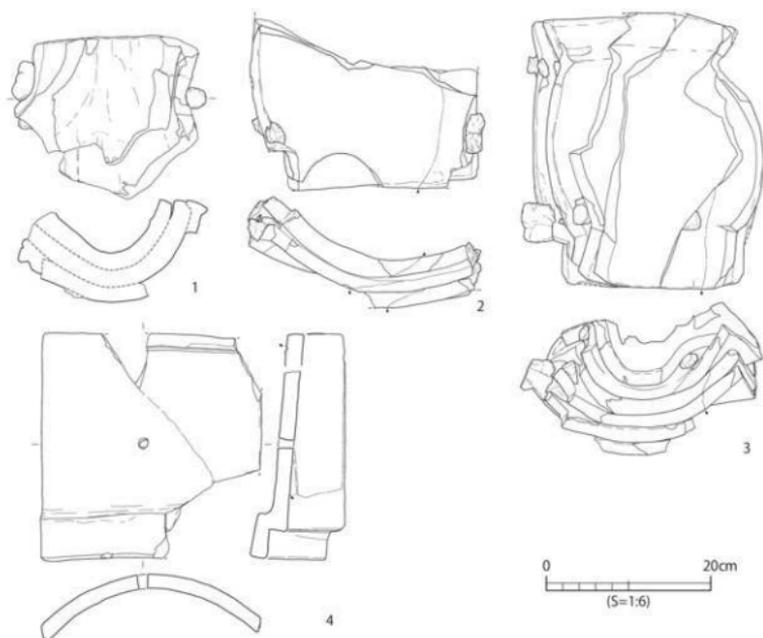
158-1は溶着した棧瓦である。3枚の瓦が溶着し、さらにもう1枚の剥離痕がある。石見焼でハセと呼ばれるピン状の窯道具や、モミツチと呼ばれる焼台も溶着し、大きく焼歪む。158-2は3枚が溶着した棧瓦である。図上下端に焼台(モミツチ)が溶着するが、上端側の粘土塊は詰め物の形状が判別できないほど溶けている。158-3は6枚の棧瓦が溶着した状態で、窯道具類も多く付着する。焼台、詰め物が原型をとどめたまま軸によって溶着する。大きく焼きゆがみ両端に剥離痕が多い。

158-4は来待軸のかかる雁振である。中央に大きな釘穴が開けられる。狭端部から凹面は無軸である。連結部にあたる狭端部凸面には断面V字形の沈線がいられ雨仕舞いとする。

159-1は無軸の土管である。図中下端部は連結用に面取りされる。反対側の端部は破損しているが、内面側が開き気味になっており、連結部が近い。内面は横方向のナデの痕跡を残すが、外面



第157図 6区包含層出土瓦実測図(1)(1:4)



第158図 6区包含層出土瓦実測図(2)(1:6)

は丁寧にナデられ、調整痕を残さない。器壁が厚く2.3cm前後ある。復元最大径は28cmで、連結部の内径は21.9cmである。

159-2は来待軸の土管である。水簾11の排水弁に使用された138-2と同じもので、図中下端部を欠く。内外面ともナデ調整され、内面側には絞り目を強く残す。全面に来待軸がかけられるが、大きく開く連結部の内面側は軸を拭き取られる。2カ所の継ぎ目がみえる。セメントは付着しておらず、連結して使用された形跡は残っていない。

160図は6区から出土した金属製品で、160-1は鉄釘である。断面方形の和釘で、残存長は12.2cmである。

160-2は銅製の火箸である。残存長は17.3cmで段面円形である。頂部に直径1cmの頭部が付き、その下に2条のくびれを廻らす。X線では頭部に影がみえることから円盤状の頭部に軸を捻じ込んでいるか。

160-3は馬の蹄鉄である。先端が薄く摩耗し小さく折れ曲がる。4対ある釘穴の右前の2穴、左前の1穴に釘が残る。全長が短くやや左に歪むことから右前肢用か。聞き取りによれば、本田窯跡では江津市浅利地区で産出する粘土を馬を使って運んだという。

第9節 小結

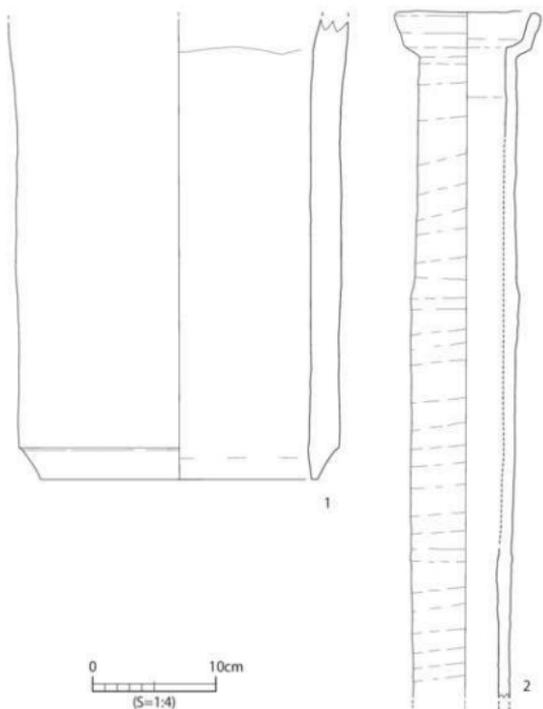
本田窯跡は石見焼窯跡の発掘調査として調査に着手したが、窯跡本体についてはその大半が調査区外に延び、わずか1室分しか調査することができなかった。この登窯は、聞き取りによって最終作業が瓦だったとされており、丸物用(石見焼で、壺壺等の陶磁器の呼び名)の窯を互用に改造した痕跡が見つかることが期待されていたが、丸物用の窯の痕跡はみられなかった。しかし、残存している焼成室の壁面にはモミツチの剥離痕が残っていることから、瓦を焼いていたことは間違いなく、レンガを置いて瓦用の段を作り、作業終了後にレンガを持ち出した

か。聞き取りでは、瓦を生産した際にはすべての焼成室を使用していないということであったが、確認できる焼成室にはすべてモミツチの痕跡がある。瓦生産は短期間だったと思われるが、その実態はわからない。

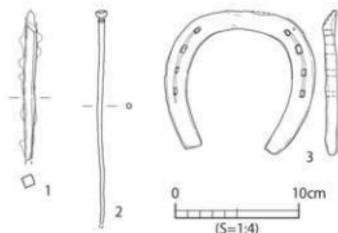
3区では川に向かって緩やかに傾斜する石垣を検出した。出土遺物から昭和期に機能したものの可能性が高いが、船着き場があったという聞き取りも得られていることからそれに関連するものか。一方で、調査以前に想定されていた物原はみられなかった。洪水砂の堆積が厚くみられたことから、江の川の洪水によって流出したか。

5区は極端に狭い範囲での調査となり、地山面に到達することすらできなかったが、登窯本体を壊してさらにその上に厚い造成土が重なっていることを確認した。これらは戦後の道路造成に関わる可能性が高く、国道261号建設にともなうものか。

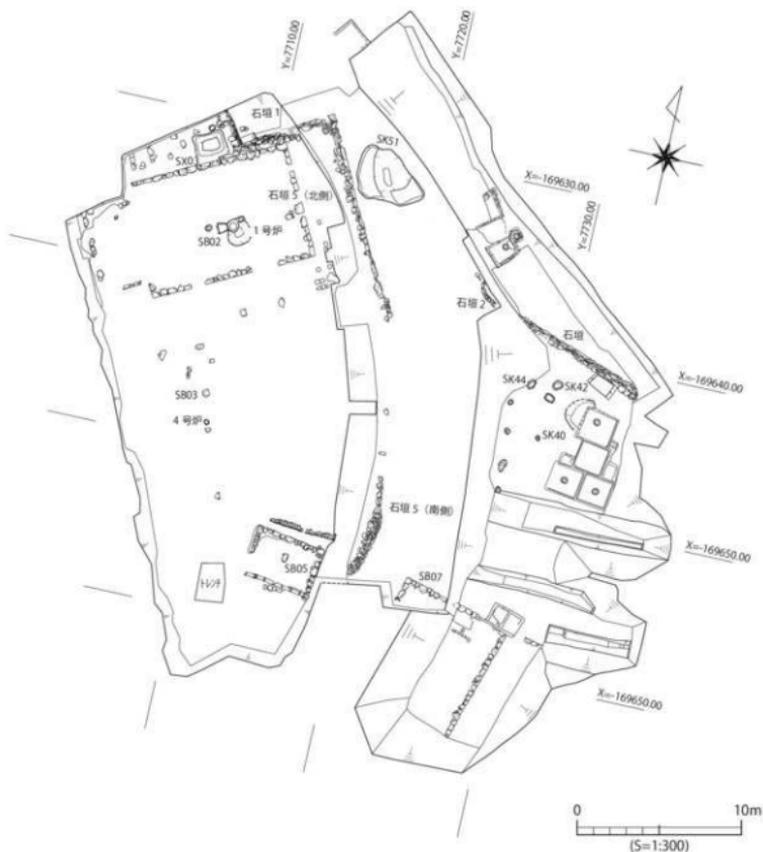
1・2・6区では石見焼を製造する作業場の跡を検出した。古い段階では地覆石を使用した建物が建ち、後にコンクリート製の基礎を使用した建物を中心に施



第159図 6区包含層出土土管実測図(1:4)



第160図 6区包含層出土金属器実測図(1:4)



第161図 1区・6区・2区2面連構配置図(1:300)

設群に作り替えられている。また、水廠施設も木製の升からレンガを積んでセメント張りしたもの、コンクリート製の升への変化が確認できた。遺跡北側から延びるコンクリート水路から用水を供給し、2区から6区にかけて3ヵ所も作られた水廠施設で多量の陶土を生産し、おそらく、2区水廠施設の周囲には一次脱水施設(オロ)が存在したはずである。また、2区中ほどから6区にかけてみられたコンクリート基礎など、簡易な構造物の周囲からは大量の盛鉢が出土しており、2次脱水施設(盛鉢棚)であろう。1区SB01にみられたSK03はその規模からロクロピットだった可能性もある。本田窯跡では陶土の精製から素地の成形までの工程を一連でおこなっていたことが確実で、そうした遺構群を発掘調査できらかにしたといえる。

【参考文献】大橋康二2009『年代別蕎麦猪口大事典』講談社

第4章 千本崎城跡の発掘調査

第1節 調査の方法

1. 発掘調査区の立地

調査対象地は、江の川右岸に向かって東から続く丘陵の北斜面を中心とした範囲である。調査区の最高所は標高約37mで、調査前は雑木林となっていた。工事計画にあわせ東西に長い調査区を設定した(第161図)。

遺跡南側では北流する江の川が大きく西に流路を変える。調査地と江の川の間を国道261号が横断し、丘陵の南斜面は国道261号によって削られた法面となっている。調査区東側は鞍部となっており、西側の谷から尾根上に通じる小道が伸びていた。この鞍部は墓地に利用されており、近世末から近代の墓石が集積されている。さらに東には尾根が伸び標高約70mの山頂へと続いている。尾根上は畑地として利用されていた形跡があり、緩やかに整地されている。調査区の西側は急斜面で落ち込み下の谷に続く。

調査区最高所からは周囲を見渡すことができる。南から西へは江の川を見下ろし、南東側には森原下ノ原遺跡などがある平地が広がる。東側は山塊となっている。北から西側には太田地区の集落や本田窯跡などがある谷を見下ろし、石田家(波積屋)跡の石垣を遠望する。

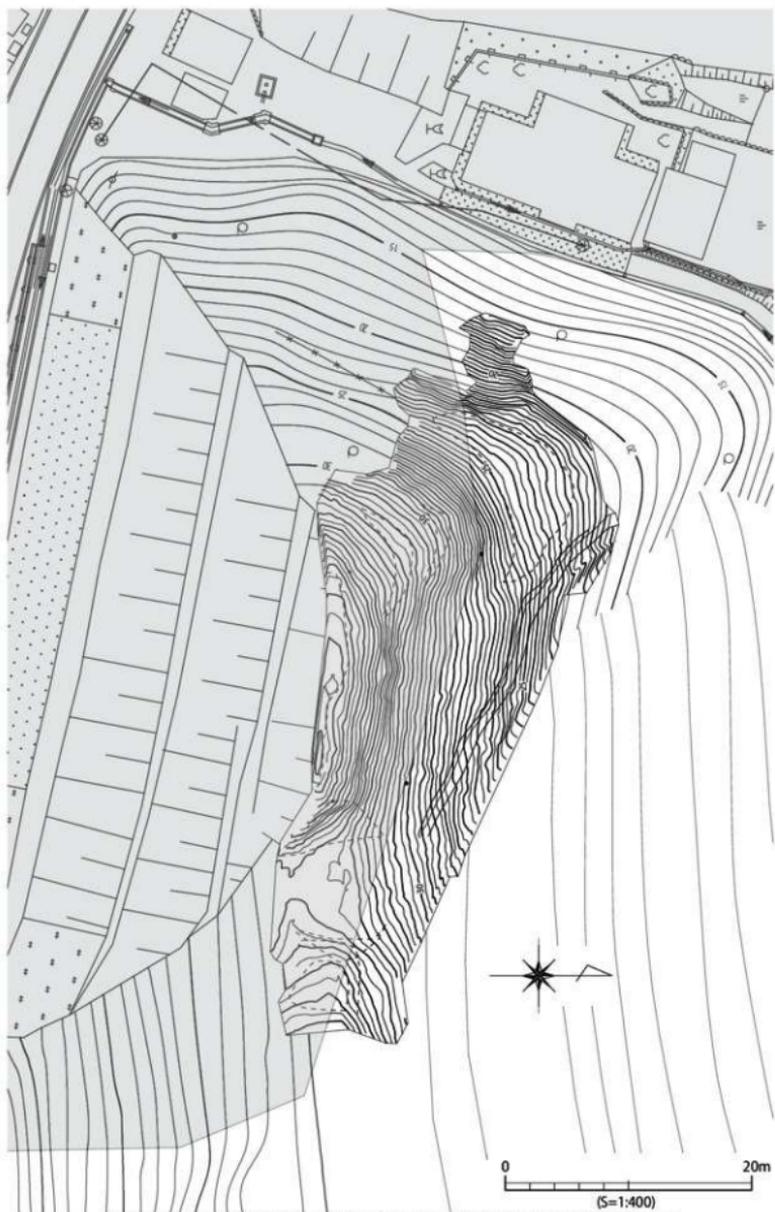
2. 調査の方法

調査対象地の南側は国道261号を見下ろす法面となっていることから、法面と調査区の間には幅2m程度の控えを設け、万が一にも国道法面に転石の崩落等がないよう対策をおこなった。また、調査区全体が北に向けて大きく傾斜し、北側下方が民地となっていることから、調査区北側の用地境界に沿って木杭を打ち、板を張って土留めとした。さらに調査によって発生した排土も土嚢袋に入れて土留め板の上側に積み、土砂の流出を防止した。

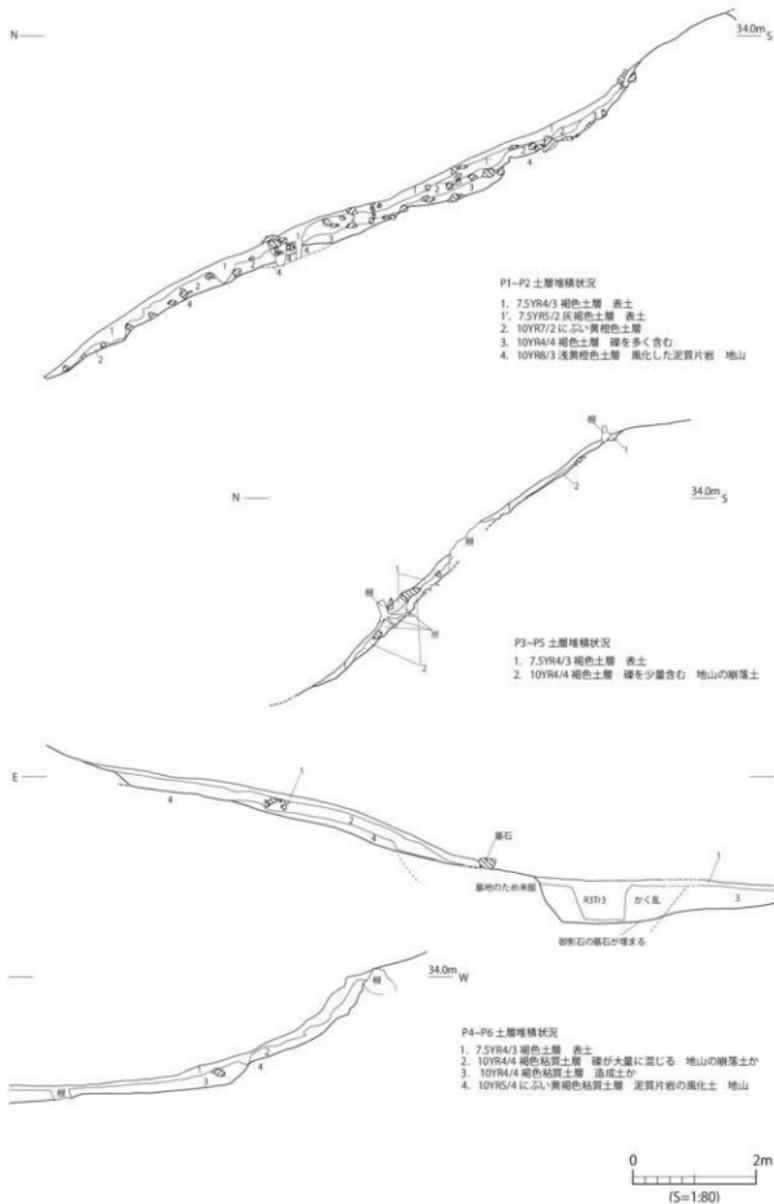
調査地への進入路が狭く、重機を搬入することが困難だったため、すべての掘削を人力によっておこなった。調査区のほぼ全域が急斜面だったことから、作業時の転落を防ぐため、調査区高所から約2m下の位置に杭を打ち、横板を這わせ、その上に土嚢を並べて土留めを作った。土留めより上方の掘削が終了した後、土留め施設をさらに下方に移設し下方部分の掘削をおこなった。表土・包含層の掘削は主に鍬・ツルハシを使用し、出土する遺物の粗密に応じて適宜草削り・移植ゴテを使用した。遺構検出は草削りを使用した。調査区の3ヵ所に土層観察用の群を設定し、土層観察をおこないつつ調査区全体を掘り下げた。

千本崎城跡は東西に長い調査区で南北方向に狭く、調査区全体が急斜面となっている。また、当初から遺構・遺物の検出は少ない事が予想されたためグリッドは設定しなかった。調査区は大きく西側の尾根先端、調査区の大半を占める北向きの斜面、東側の鞍部からなり、西側尾根先端にP1・P2杭、北向き斜面の中段にP3・P5杭、東側の鞍部にP4・P6杭を設定し、それぞれの間に土層観察用の群を設定した。遺構は半裁して土層の写真撮影をおこない、断面図を作成してから掘削した。なお、千本崎城跡では遺構から出土した遺物はなかった。

現地調査は令和4年11月30日から12月27日に実施した。当初、調査対象面積は690㎡とした



第 162 図 千本崎城跡調査前地形測量図(アミカケ部分が工事影響範囲)(1:400)

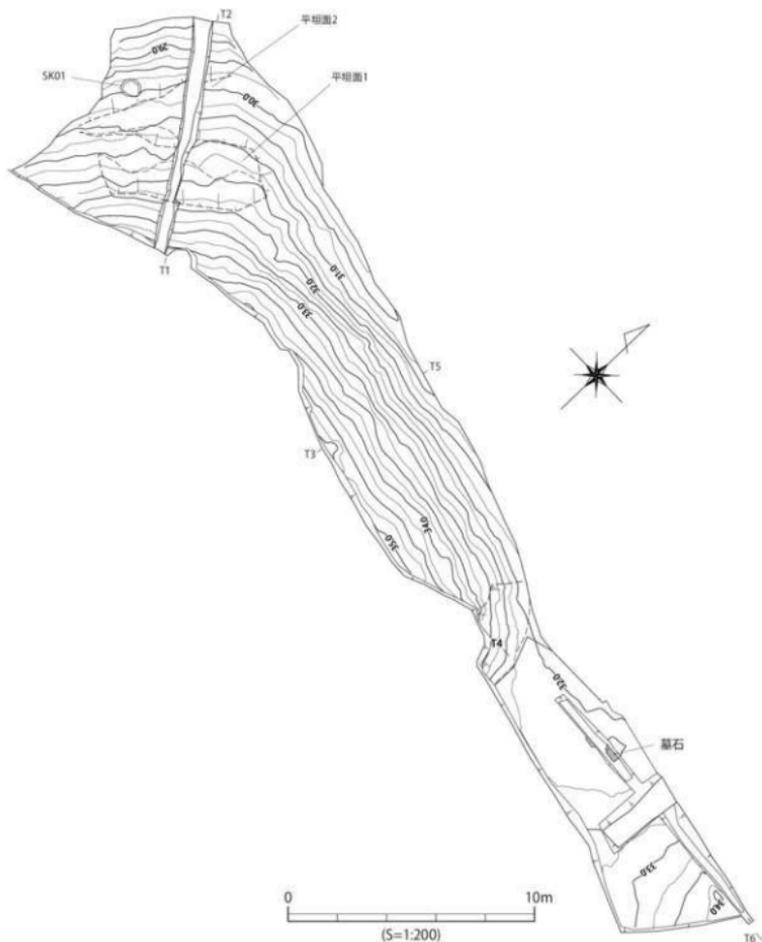


第 163 図 土層堆積状況 (1 : 80)

が、着手直前に工事の詳細設計が固まり工事影響範囲が狭まったうえ、法面の保護や排土の流出防止柵などを設置したことにより、北側を中心に調査対象範囲が縮小し、最終的な発掘面積は260㎡となった。

3. 記録の作成と整理作業

現地調査に際しては遺跡調査システムを用いて実測・測量をおこない、出力後補正をおこなった。写真撮影はデジタルカメラを使用し、必要に応じて6×7版フィルム(モノクロネガ・カラーポジ)カ



第164図 遺構配置図(1:200)

メラによる撮影をおこなった。また、調査終盤にはラジコンヘリによる空中写真撮影を実施した。空中写真撮影は6×6版フィルム(モノクロネガ・カラーポジ)カメラを使用した。出土遺物は一括して分類・整理をおこない実測をおこなった。

報告書作成はDTP方式を採用し、遺物・遺構の図面をデジタルトレースし、レイアウトをおこなった。遺構・遺物写真はデジタルカメラで撮影した後、階調、コントラストの調整をおこなった。また、空撮などフィルムによる画像はスキャンし、デジタルデータに変換して使用した。

第2節 過去の調査

千本崎城跡は、平成9年2月に国道261号道路災害防除工事(松川工区)にともなって、江津市教育委員会による発掘調査がおこなわれている。調査がおこなわれた場所は現在国道261号の法面となつて削られている部分で、令和4年度調査区のT1・T3付近から南側に続いていた部分だったと思われる。この調査は255㎡を対象におこなわれ詳細はわからないが、当時の調査日誌には「切り石状の石がある」という記述がみられ、何らかの人工物が存在した可能性がある。

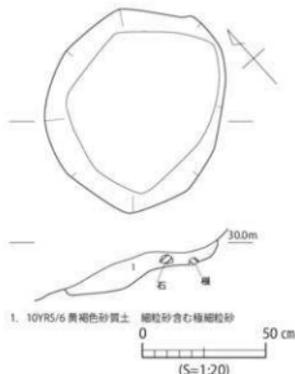
第3節 基本層序

千本崎城跡は調査区全体が急斜面だったため土壌の堆積は薄く、表土直下に地山の崩落土(礫を含む褐色土)が若干みられる程度である。遺物は主に礫を含む褐色土中から出土した。地山は風化した泥質片岩で、場所によっては岩盤となっている。調査区東側の鞍部(P4～P6)では、褐色土の厚い堆積がみられるが、近世以降の墓地造成にともなう可能性がある(第163図)。

第4節 調査の成果

1. 遺構

調査区東側の鞍部では、西側斜面を削り造成された平坦部がみられた。この平坦部には、改葬された残りの墓石が大量に積み、一部には墓地の基壇や花立を残していた。南側から東側にL字形に墓地为配されていたと思われる。前年の試掘(第4図R3Tr3)により平坦部は造成土によることが判明していたが、P4～P6ラインにそって、この鞍部中央を通るトレンチを入れ、下層を確認したところ、花崗岩の切り石による現代の墓石が出土した。このため、この造成が近世以降の墓地造成に関わるものであったことや、墓地移転にともなって墓石等を埋めた土であることが判明したため、この付近の掘削を停止した。東側鞍部に積み残されていた墓石は幕末から大正期のもので、いずれも石見銀山遺跡での石造物調査の分類で円頂方柱墓標と呼ばれる。また、この場所では花崗岩製の石塔部材(第166図4)が採取された。調査区北側の斜面には折れた電柱が放置されており、調査区内からは礎石2点(166-1・2)が出土した。国道261号開設以前はこの丘陵上を電線が通っていたことがわ



第165図 SK01実測図(1:20)

かる。

遺跡の大半を占める北向き斜面では遺構・遺物はみられなかった。

西側の尾根先端では、調査前から傾斜が緩やかになった部分が3段みられた(第163図)。このうち最下段の平坦部は調査区外となったが、上側2段を調査した。いずれも遺構は見られず、明確な平坦面とはならなかったが、平坦面1の東側を中心に陶器片・土師器小皿・銅銭(第167・168図)が出土している。

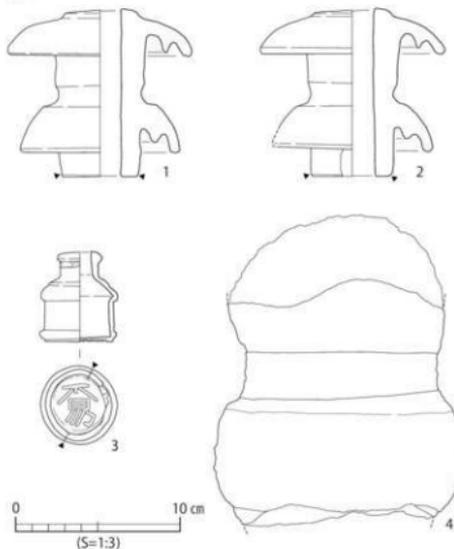
平坦面1は標高31m付近でみられた緩傾斜部分で長さ6.9m、奥行き0.6mである。溝等はみられなかった。標高30m付近には平坦面2がある。長さ6.1m、奥行き0.5mである。平坦面1と同様に溝等はなく、いずれも人為的な加工による平坦面とは考えられなかった。

平坦面2の下側で浅い土坑(SK01)を検出した。SK01は直径70cm、深さ10cmを測る。の円形の土坑で、内部には礫を含んだ黄褐色土が充滿していた。遺物はみられなかった。遺構の性格はわからない。

2. 遺物

第166図には東側鞍部で採取した遺物を図示した。

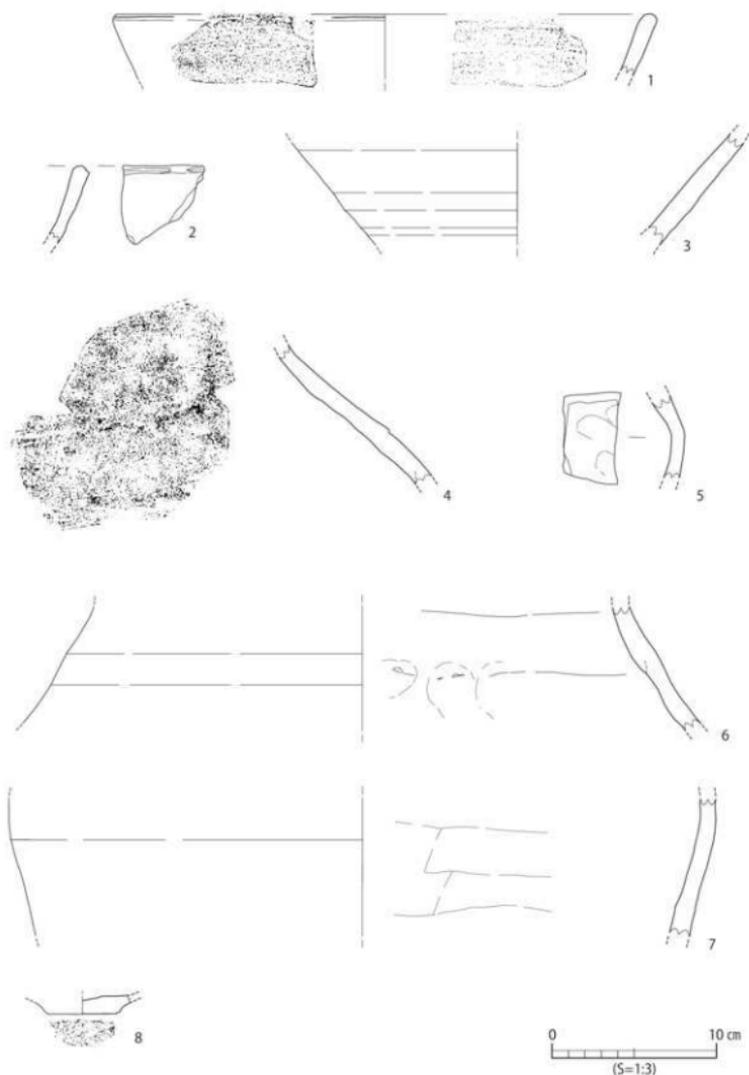
166-1・2は褐色の釉がかかる磁器製の碁子である。166-2の基部付近がわずかに欠けている。2点とも同形で高さ10.2cm、上側の笠部径11.2cmだが、基部径は166-1が4.4cm、166-2が4.6cmで若干の違いがある。軸部の内面も含め全面に釉がかかり、基部の底面のみ無釉である。高圧茶台碁子⁽¹⁾と呼ばれるものである。調査区北東側に電柱の廃材が放置されており関係する可能性がある。



第166図 出土遺物実測図(1)(1:3)

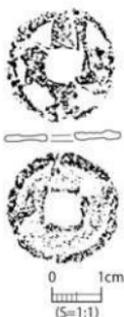
166-3は無色透明なガラス瓶である。底部に「不易」の陽刻がある。口径1.5cm、高さ5.5cm、底径4.1cmを測る。図中の▼印の位置に型の痕跡を残す。体部のガラスにはわずかに気泡を含んでいる。不易欄工業(株)の製品に使用された瓶とみられるが、口が小さく欄の容器ではない。不易欄工業(株)は昭和8年から昭和28年まで「不易インキ」を製造販売しており、インクの瓶だった可能性がある。墓地から出土しており花立に転用されたものと想像される。

166-4は東側鞍部で採取した花崗岩製の石塔部材である。白色を呈し、粒子が目立つことから御影石と思われる。球体2個を上下に連結し



第167図 出土遺物実測図(2)(1:3)

た形状だが、下端が欠損しているほか、全面的に風化が進み頂部も摩滅して欠損している。残存高18.9cmである。上下2段の球体を繋ぐ形状をしており、上側の球体の直径13.2cm、下側の球体の直径14.7cm、くびれ部の径11.7cmを測る。単独で出土していることから詳細はわからないが、石塔相輪の龍車・宝珠の可能性を考えている⁽²⁾。



第168図 古銭
実測図(1:1)

第167図は、調査区西側の斜面で出土した遺物である。

167-1～3は越前焼の片口鉢と思われるもの。167-1・2は口縁部破片で、口縁部に浅い沈線が入る。167-3は体部の破片で、内面は使用により摩滅している。いずれもⅡ-2期³⁾に含まれると考えられる。

167-4～7は越前焼甕の胴部である。口縁部や底部の破片は確認できない。片口鉢(167-1～3)よりも若干赤みを帯びて見える破片が多い。また、167-4の破片の一部は内面が黒変しており火を受けている可能性がある。167-4は肩部の破片で、肩より上位は灰被りがみられる。167-6・7は体部の破片で内面に輪積みの痕跡を残す。いずれも硬質に焼成されている。

167-8は土師器小皿である。底部の小片で復元直径4.9cmを測る。風化によって全面が摩滅し調整はみえにくい、底部に回転系切痕をわずかに残す。橙色を呈す。

第168図は、割れて3片となった銅銭である。直径22mmを測る。残存状態が悪く、銭面がつぶれて文字がみえにくい、X線画像により元・寶の2字が読めた。□元□寶か、□□元寶が考えられる。

3. 小結

千本崎城跡の発掘調査では山城の存在を示す資料は得られなかった。調査区西端で土坑(SK01)を検出しているが、その時期・機能はわからない。また、平坦面1・2についても確な加工の痕跡は確認できず、あきらかな遺構は存在しなかった。しかし、東側鞍部と調査区西側の平坦面1の東で遺物が出土している。

東側鞍部で出土した石材(166-4)は石塔部材の可能性はあるが、時期等はわからない。

西側平坦面の周囲では越前鉢・甕や銅銭が集中して出土している。越前焼はいずれも14世紀代の資料と考えられるもので、土師器小皿も同時期のものか。また、銅銭は摩耗が進んで完全には判読できないが、いずれにしろ中世の流通銭で近世以降の銅銭ではない。出土地点は斜面で、関係する遺構を確認できなかったが、直上は平成9年の江津市教育委員会調査区があった。当時の調査日記には大きな石があったという記載も残されていることから、近隣に14世紀の墓か経塚があった可能性がある。

1 母子の分類は以下の報告書を参考にした。

志免町教育委員会 2005『志免鉱業所遺跡』

2 石塔については佐藤亞聖氏(滋賀県立大学)の指導を得た。

3 越前焼の分類・年代観等については以下の論文を参考にした。

木村孝一郎 2011「越前焼の偏年の研究と生産地の動向」『第10回 山陰中世土器検討会資料集 山陰地方における越前・常滑系陶器』

【引用・参考文献】

平田正典 1992『佛教石造物 江津市』

今岡稔 2010「山陰の石塔二三について—16—」『島根考古学会誌 第27集』島根考古学会

志免町教育委員会 2005『志免鉱業所遺跡』

第5章 総括

第1節 本田窯跡と本多窯について

1. 本多窯の操業者について

本田窯跡は第1章で述べたとおり、遺跡地図上は同一場所に8遺跡が重なり「福富窯跡」も同位置にあったことが知られているほか、資料によっては別の窯跡と混同される場合もあった⁽¹⁾。これらの遺跡名等は江津市内の見焼窯跡について悉皆的な調査をおこなった平田正典氏の報告(平田1979)によるところが大きい。遺跡周辺で聞き取った経営者名等の情報は平田氏の調査とは必ずしも一致しない。また、明治初年頃とされる操業開始時期についても本田窯跡が操業を始める以前の桜谷鉦跡の操業期間に重なる可能性がありその年代にも疑問が生じている。本田窯跡の操業開始時期については桜谷鉦跡出土の遺物等によって再度検討する必要がある。桜谷鉦跡の報告が待たれる。

本田窯跡の現地調査に際しては、本多氏が経営する窯で働いた経験のある方を始め、地域の方々から様々な話をうかがった。本書は埋蔵文化財の発掘調査報告書であるため、本格的な聞き取り調査や証言内容の検証は実施しないが、遺跡の評価や遺構の検討に直接関連する点について列記しておく。

- 1 本田窯跡の経営者については、本田氏ではなく本多氏だった可能性が高い。

太田地区には本田姓・本多姓とも在住されるが、聞き取り結果では昭和20年代から昭和36年の経営者は本多氏だった可能性が高い。本多氏による経営は昭和36年に一旦廃業し、佐々木氏が窯の経営権を引き継いだとされる。佐々木氏が引き継いだ窯では短期間瓦を生産したとされる。

- 2 本多氏が経営した窯は昭和10年代には稼働しており、登り窯、母屋、工場、荷造り小屋などで構成されていた。この内、母屋と工場はL字形に配置され、作業場の道路に面した位置にロクロが4台設置されていたという。また、作業場の東側とその下を通る道路とは大きな高低差があった。道路は現在の市道に近い場所だったが、現在よりも直線的で、道路脇には水路が流れていた。焼成前の製品を収蔵するシラジ(白地?)小屋と呼ばれる建物があった。シラジ小屋は2階建てで、2階から窯のある丘陵の間は狭く、2階から窯に直接製品を運び込むことができた。
- 3 登窯は13室である。窯焚には薪を使用し石炭は使用しなかった。薪は松材を使用し、松の入手が困難になると雑木を混ぜた。
- 4 昭和20年代にはロクロが6台設置され、市内でも大きい規模となった。ロクロは蹴轆轤・曳き轆轤で、電動ではなかった。
- 5 現在の浅利トンネル付近に粘土の採掘場があり、粘土を馬車で運搬した。土練機は使用せず、レンガ製のフネという囲いに粘土を入れ、足踏みで練った。フネは作業場の西側(南側か)にあり、その周囲は広場になっていた。
- 6 本窯では耐火レンガは自作していた。
- 7 船着き場は「船津」と呼ばれ、石垣に船を横付けし、岸から歩み板を渡して積み下ろしをおこなった。
- 8 佐々木氏が引き継いだ窯では登窯全体は使用せず、前半部分のみを使用して瓦を生産した。

上記の聞き取り結果は、聞き間違いはもちろん細かい記憶違いも含まれる可能性があるが、遺跡の状況に一致する内容も多い。1区SBO2は2階建ての建物だった可能性があり、聞き取りによるシラジ小屋だろうか。また、1・2区の間の2m近い高低差や6区の石垣・道路の状況、3区の石垣などは聞き取り状況に完全に一致する。一方、ロクロが道路に面して設けられていたとするとロクロピットの可能性を推定した1区西側のSK03は山際にあり、聞き取りに一致しない。また、母屋と工場がL字に配置されていたという状況は遺構からはみえず、作業場全体が調査区南側の国道下まで広がっていた状況を示す可能性がある。瓦を生産した際には窯のすべての房は使用していなかったとされるが、確認できるすべての房で互用の焼台であるモミツチの痕跡がみられる。

【註】

1 島根県遺跡地図を始め遺跡地図上は8遺跡が重なる。その後、古代文化センターによる調査ではさらに福富窯跡も同位置に存在することがあきらかになった。遺跡名の問題は、同一の窯に対し経営者・業者ごとに遺跡名を与えたことによる。

一方、『石見陶 第十・十一号』には江津市内の地区ごとに窯跡の位置を示した地図が掲載されており、太田地区の地図には本田窯跡の位置に「このや窯跡」の表示があるが、このや窯跡は太田地区の東側にあったことがわかっている。

【引用・参考文献】

- 江津市文化財研究会 1986『石見陶 第十・十一号』
 島根県教育庁文化財課「島根県遺跡マップ」「マップ on しまね」島根県ホームページ
 島根県古代文化センター 2016『考古基礎資料調査にかかる生産遺跡調査報告書 在地陶磁器集成1（石見部 陶器編）』
 島根県古代文化センター 2017『近世・近代の石見焼の研究』
 平田正典 1979『石見粗陶器私考』石見地方史研究会

第2節 検出遺構からみる本田窯跡の変遷

本田窯跡は石見焼窯跡とその作業場からなる遺跡である。窯跡本体は一部しか調査できなかったが、建物跡のほかコンクリート製の水竈施設3基など石見焼製作に関わる様々な施設が存在したことが確認できた。

1. 本田窯跡の遺構変遷

本田窯跡でもっとも古い遺構と考えられるのは、6区SK51がある。この遺構は、6区水竈施設に先行する水竈施設だった可能性が高く、SK51に入っていた石見焼大甕は本田窯跡で出土した多くの甕に比べ重く、異なる特徴があることから本窯以外の産地だった可能性が高い。この甕は19世紀後葉頃のものと考えられる。桜谷鉦から本窯へ転換した年代は桜谷鉦跡の報告書の刊行を待たざるを得ないが、この甕の時点では本窯産の陶器はないと推定し、表中では明治20年代頃とした。SK51が水竈施設だったとすれば、窯跡もこの頃から稼働していた可能性が高いが、窯跡からは他の遺構との先後関係や時期を示す資料は得られなかった。

近接する時期の遺構としては1・6区の石垣と2区の廃棄土坑SK40・41・42がある。石垣が本田

	明治20年頃		昭和20年代		昭和36年頃	昭和47年頃
	開窯期	陶器窯前半段階	陶器窯後半段階	瓦窯段階	廃窯	
1区	SB02 SK03-04				SB01	
	SB03				SK02	
	SB05				SB06	
	5号炉	6号炉	SK46(S29) 1号炉	SX07(北)		SX07(南)
	石垣2	石垣1				
2区	SB07				SB04(コンクリート基礎)	
	北石垣		窯垣		2・3号炉	
	北水竈施設下層		北水竈施設(レンガ部分)	北水竈施設		
	SK40(廃棄土坑)		南水竈施設(レンガ部分)	南水竈施設	SX01	
甕(87-6, 96-1)						
3区	物原		石垣			
4区	登窯				(瓦生産)	
5区					道路建設	道路造成
6区	SB07				SB04(コンクリート基礎)	
	石垣2					
	石垣5					
	SK52		水竈12・13(レンガ部分)	水竈11~13		
甕(141-1)	輪花鉢(137-21)				バイアル(131-4)	瓦(153-16・17)

第2表 本田窯跡の遺構の消長

窯跡の敷地を少しづつ造成していった様子が見て取れる。なお、SK40・41・42は廃棄土坑であって使用痕のある窯道具などが廃棄されていることから、本田窯跡の操業開始より後となる。

続いて、2区の北側では北石垣を埋めて敷地が広げ、木製升による水簾施設(北水簾施設下層)が設置される。さらに、2区北水簾施設では木製の水簾升を壊してレンガ製の水簾施設に作り替えられる。2区北水簾施設と6区の水簾施設はほぼ同じ構造であることから同時期と思われる、2区南水簾施設の北升についても同様のものであった可能性がある。この段階の水簾施設は『石見潟』に記される構造と全く同じで、『石見潟』には昭和初め頃の構造と記される。本田窯跡ではこの時期以降活発に陶土の生産がおこなわれていたことになる。

この段階では確実に建物が存在している。1区SB2・3・5、2・6区SB07が該当し、地覆石を使用した建物が整然と立ち並ぶ。2・6区で粘土を精製し、2区では「オロ」を設置した可能性があるほか盛鉢棚が設けられ、脱水を終えた陶土は1区で製品に成形されるといった機能分担が明確になる。松川公民館が発行した『松川今昔物語』には昭和5年ころの本田窯跡を写したとされる写真が掲載されており、登窯の覆い屋を始めSB2・3・5・7と思われる建物や盛鉢棚とみられる施設が写る。

この後、多くの建物がコンクリート製の基礎を持つ建物に一新され、SB01・04・06が建てられる。また、レンガで作られていた水簾施設がコンクリート製に改築され、コンクリート水路が設置されている。水路等は聞き取りにも登場することから、建物よりも早くコンクリート化していたことも考えられる。SB01やSB01内の土坑・炉からは10円玉など遺構の上限が限られる資料が出土しており、建物がコンクリート化する年代は経営者の代わる昭和36年頃か。一方、水簾施設については、内部に残される遺物が陶器生産に関わるものが多いことから、昭和36年以前に改築されている可能性が高く昭和20年代か。

聞き取りによれば最終操業による瓦生産は短期間だったといい、事実、瓦に関わる窯道具類の出土も1・4区以外では少量に止まっている。登窯に隣接する場所以外で瓦関係遺物が少ないという点は、操業期間の短さを表すと思われる。

2区南水簾施設の南西升には粘土面の上に陶器蓋7枚以上が正並べられるように置かれていた。すべて完形品で、整然と正位で置かれているようにみえることから単なる廃棄とは思えない。操業を終えるにあたり意図的に置かれたものだろうか。2区の水簾施設からは瓦生産に関わる遺物の出土がなく、瓦を生産した時点ですでに機能していない可能性があり、昭和30年代前半には稼働停止したと思われる。一方、6区水簾施設には互用の焼台であるモミツチが入っており、瓦を生産した最終操業まで使われたものであろう。

昭和47年には江の川で大水害が発生し、本田窯跡周辺でも浸水したことがわかっている。本田窯跡では遺跡全体を洪水砂が覆っており、この洪水砂は昭和47年のものであろう。よって、本田窯跡での最後の遺構面はこの直前と思われる。最終面(2区第1面)の遺構として確実なものは2区2・3号炉がありSX01もこの前後か。いずれも洪水砂によって埋没する。3号炉からは大量の丸釘が出土しており、釘を残したままの廃材が燃やされていることがわかる。窯跡の廃業や洪水被害の片付けに関わるか。6区SB04からはバイアル(131-4)が出土しており、SB07はこの直前まで存続していた可能性が高い。一方、聞き取りによれば江の川の船着き場に下る石垣があったとされることから3区石垣は昭和47年まで機能していた可能性が高いがそれを示す遺物はなかった。本田窯跡の南側を通る国道261号は昭和38年に国道に川下江津線を国道に昇格した道路なので、この頃に登窯を

壊して道路を通したのであろう。その後、昭和47年の大水害を経て国道261号のかさ上げがおこなわれており、5区に見られる造成土はこの時のものか。

2. 陶土を精製する施設等

2区の北水箴施設は一部しか調査できなかったが、2区南水箴施設や6区水箴施設は施設の全体が判明した。また、その周辺では陶土の脱水に関係する遺構・遺物も出土している。それぞれの遺構・遺物の機能について『石見潟 第十三号』『伝統的工芸品石見焼き手引書』で紹介される工程⁽¹⁾と照らしあわせて検討する。

水箴施設 2区南水箴施設の中央升、6区水箴施設の水箴12は中央の一段高い柵となっており『石見潟』に記される「やまおけ」に該当する。この升には粘土と水を入れて攪拌し、泥水を「ためおけ」に流す。2区南水箴施設の中央升からはかなり高い位置に排水口が開いており、上層の泥水だけを流す構造が判る。「やまおけ」の底には砂が残ることになり、2区中央升、6区水箴12のいずれの升も斜面向下方向には他の升が設置されず不要な砂礫を排出するためか。

「やまおけ」から「ためおけ」に泥水を送水する間には「ふるい」が設置され砂礫や木片、木の根などを除去するという。この「ふるい」そのものは遺構としては確認できないが、2区南水箴の南西・南東升の内側には板をかけるためと推定した罫(第72・73図)が出ており、これが「ふるい」を設置するための構造だろう。

「ためおけ」は2区南水箴南西・南東升、北升、6区水箴施設の水箴11・13が該当する。「やまおけ」からの送水口があり、流れてきた泥水を「ためおけ」で数日～1ヵ月近く置くとされ、濃縮する。上澄みを「水溜め」に排水し、残った濃い泥を「大ひしゃく」や「桶」で採取する。いずれの升も中央に埋置があり、最後の泥水まで効率よく採取するための溜りであろう。「ためおけ」の容量は2区南水箴で「やまおけ」の約3.5倍、6区水箴施設では約10倍にもなる。長期間の放置を必要とするため、「ためおけ」側の容量を大きくする必要があったと思われる。「ためおけ」の上澄みは「水溜め」に排水されるが、2区南水箴施設では各排水升が、6区水箴施設では水箴施設13にともなう溜升やSK52が該当する。『石見潟』では「水溜め」に排水された水は「はねつるべ」で「やまおけ」に戻し再利用すると書かれているが、2区南水箴施設や6区水箴施設ではオーバーフローを排水する構造があり、水が豊富であれば必ずしも排水を再利用する必要はなかっただろう。事実2区にはコンクリート水路があり、聞き取りでも水路の情報があつた。

2区北水箴施設は部分的な調査となったため確実なことは言い難いが、中央床と南北の升の形状は6区水箴施設と同じであり、中央床が「やまおけ」、南・北升が「ためおけ」、排水升が「水溜め」に該当する。北水箴施設の排水升には排水口が設けられていないうえ、大きな埋置が設置されていることからひしゃく等で汲み上げ、水を再利用していた可能性が高い。

2区北水箴施設下層では断面だけの確認だったが、木製の升が存在したと考えられる。『石見潟』には「木材で作られた。」「ためおけなどは地中に作られた。」という記述があり、2区北水箴施設の木製升は「ためます」に該当する可能性がある。6区水箴13も底面に板が残っており、当初は木製で作られた施設をレンガとセメントで改築されたものだろうか。

この後、すべての水箴施設でコンクリートによる升到改築され、各水箴施設が出土時の形態になる。いずれも中央の高い升が「やまおけ」、周囲の升が「ためおけ」として陶土を精製したと思われる。

る。

県内の発掘調査で見見焼窯跡の水篭施設の全容を確認できた初めての例となった。

一次脱水施設 水篭施設で得られた濃い泥は多量の水分を含んでおり脱水をおこなう。一次脱水施設は石見焼では「オロ」と呼ばれ、平面長方形の木枠を組み、断面が逆三角形になる竹の骨組みに箆を張った構造という。2区では白色粘土が畔状に残される部分があり、これがオロの痕跡だったのでないだろうか。この遺構については調査時の不手際により記録がなく、白色粘土の堆積状況がわからないが、白色粘土が残る部分の直上に一次脱水施設があつて漏れ出した陶土が溜り、周囲は雨水により陶土が流出したというような状況が想像される。この白色粘土列は2区南水篭施設の南側に接する場所で、南水篭施設南西・南東升に近い。『石見湯』に記されるとおり「大ひしゃく」や「桶」で泥を移すのに適した場所と思われる。また、この周囲には陶器蓋や盛鉢などがた々と置かれており（第57図、図版23）、常に水が滴る場所で飛石のかわりに置かれていたのであろう。『石見湯』では、一次脱水施設は昭和10年前後からレンガで組んだ「あぜ」と呼ばれる脱水槽に移行したとされるが、脱水槽とみられる遺構は本田窯跡では確認できない。本田窯跡の水篭施設や脱水施設は昭和20年代までは確実に継続していた可能性が高く、6区水篭施設については昭和36年頃にも使用された可能性がある。本田窯跡ではフィルタープレスなどの機械設備よりも伝統的な方法による陶土の精製を継続していたと考えられる。なお、大田市温泉津町のやきもの里にはレンガとセメントによる水篭施設が残されている。やきもの里の水篭施設には埋め糞や導水施設はないが、陶土を脱水する盛鉢棚も復元されており、本田窯跡の水篭施設を理解する参考となる。

二次脱水施設 2区南水篭施設南側から西側ではコンクリート基礎などによる棚が簡易な建物の存在を想定しているほか、この周辺からは盛鉢が大量に出土している。盛鉢は本文中で説明したとおり素焼きの鉢で、『手引書』には幅30cm、高さ25cm程度と記され本田窯跡出土の盛鉢の大きさもほぼ一致する。『手引書』にみられるとおり見込みに穿孔する個体も多い。一次脱水を終えた陶土は盛鉢に盛られ、水分量が約25パーセント程度になるまで盛鉢棚に置かれて二次脱水される。盛鉢棚は屋根架けする壁のない簡易な建物と記され、2区コンクリート基礎1・2や水篭施設西側の掘立柱群、SB08などがこれらに該当するか。

こうして得られた陶土は1区の建物のいずれか（SB02か）で成形され、乾燥・施釉され登窯で焼成されるという工程に向かう。本田窯跡ではこの一連の工程を遺構から追えた点が大きな成果として挙げられる。しかし、ここに一つ大きな疑問点が残る。本田窯跡の堆積土には分厚い粘土層があり、その粘土は不純物が少なくきめの細かい白色の粘土で陶土そのものと思える。特に2区では遺構面を白色粘土が覆っており、膨大な量の陶土が本田窯跡のどこかに溜置かれていたと考えざるを得ない。本田窯跡は聞き取りでもロクロを6台使用する大きな規模の窯だったというが、それにしてもほぼ同時に水篭施設が3組みも必要なのだろうか。現在でも石見焼窯場の商品として石見焼の製品以外にも陶土の販売がおこなわれることがあると聞く。本田窯跡でもそれを目的の一つとして大量の陶土を精製し溜置していたのではなかっただろうか。

3. 登窯の構造・特徴

連房式登窯1基（以下、登窯）を部分的に調査した。登窯は江の川に臨む山裾を階段状に削平して築造される。現在は登窯の前半部分は国道261号の下に埋まっており、見かけ上で7室分が確

認できる。聞き取りでは10室ないし13室であったとするが詳細は不明である。陶器窯・瓦窯として中規模に位置づけられる⁽²⁾。焼成室は上に向かって奥行と横幅が広がる傾向を示しており、東側の辺を揃えて西側が延伸する。扇形連房式登窯の一種と思われる⁽³⁾、一辺を揃えて片側が延伸するタイプとしては長東坊師窯跡（鳥根県教委2001）に類例が認められる。残存する登窯の天井は前後左右に丸味を帯びたドーム状であり、排煙孔（ツユスキ）が二カ所ずつ開孔する。焼成室の床面には砂が敷かれ（砂床）、焼成室奥壁の上部には瓦用焼台（モミツチ）痕が付着する。作業用テラスから建物礎石がみつかり、登窯には屋根（覆屋）をともなっていたことが確認される。

調査をおこなった南端の焼成室は平面方形を呈し、室内は上下の二段構成となっている。上段は製品を窯詰するために砂が敷かれ、下段は追い焚きによる被熱でガラス化する（焚庭）。各焼成室を区切る前後壁の下端部に通焰孔（火格子）が開孔する。壁面側に通焰孔が開孔する横狭間構造⁽⁴⁾を呈しているが、火まわりは壁沿いに循環させる縦狭間構造⁽⁵⁾の要素を取り入れている。19世紀前半とされる相生遺跡（鳥根県1992）以降、石見焼の登窯に共通してみえる窯構造である⁽⁶⁾。

窯体は岩盤を切り崩した造成土の上に築造しており、本窯に先行する遺構は見あたらなかった。上段の敷き砂層からは瓦生産に関連する焼台、焼成室の整地土層からは陶器生産に関連する焼台や製品が出土している。調査した焼成室の傾斜角は28.2°（約5.4寸勾配）を計測し、5寸勾配とされる瓦窯の規格⁽⁷⁾と合致しているが、窯全体は必ずしも瓦窯規格をもって築造しておらず、前半3室に対して後半4室は地形に沿って緩やかな勾配になる。また各焼成室には陶器用とされる砂を敷いており、陶器窯としての要素もあわせ持っている。

- 1 石見焼窯場での施設・道具名、作業工程等は以下の文献を参考にした。
江津市文化財研究会1988『石見窯 第十三号』
石見陶器工業組合2000『伝統的工芸品石見焼手引書』
- 2 陶器窯3類（25～30m・12室前後）/瓦窯3類（22～28m・12室前後）
榑原博英2017『石見焼の窯道具と登窯について』『近世・近代の石見焼の研究』鳥根県古代文化センター
- 3 胴木間から上に行くほど横幅が扇状にひろがる連房式登窯。
大手前大学史学研究所2015『炭山窯』
- 4 壁の下際に通焰孔が開孔する構造を指す。九州地方の近世窯に多いとされる。
関西陶磁史研究会2005『窯構造・窯道具からみた窯業・関西窯場の技術的系譜をさぐる-』
- 5 床の前部に通焰孔が開孔する構造を指す。東海地方の近世窯に多いとされる。
関西陶磁史研究会2005『窯構造・窯道具からみた窯業・関西窯場の技術的系譜をさぐる-』
- 6 2におなじ。
- 7 焼成室の勾配が生産品によって異なっており、陶器（丸物）窯の場合は三寸勾配、瓦窯は五寸勾配とされる。
江津市文化財研究会1988『石見窯第十三号 石見焼（丸物と瓦）』

【参考文献】

- 鳥根県1992『石見空港建設予定地内遺跡埋蔵文化財発掘調査報告書』
鳥根県2001『石見焼関連遺跡調査報告1（飯田A遺跡・長東坊師窯跡）』

第3節 本窯跡の陶器について

本窯で生産された製品と窯道具を種類別に一覧表にまとめたのが第169図と第170図である。製品としての判断は、基本的に未使用状態であること、製作過程における損傷をともなうもの、出土の頻度、胎土や釉調の共通性、製作過程の未製品状態があるものなどを基準としている。

1. 本窯跡の陶器・土器

本窯の製品は材質的に陶器と土器に分類され、そのほとんどが陶器である。本窯の造成土(Ⅱ層)からはコバルトを用いた染付や型紙刷の製品は出土するが、銅版転写の製品はみられない。このことから本窯の造成は明治10年代におこなわれ、開窯は明治20年を前後する時期と思われる。また登窯は国道261号により分断されるので、道路工事が始まる昭和40年前後には廃窯している。よって本窯の稼働は19世紀末葉から20世紀中葉頃と思われ、約70年間にわたる操業期間が推定される。この間の生活様式は変化が激しく、近代から現代にかけての多くの器種を製作している。

本窯の主力製品として甕、壺(壺蓋)、搦鉢、片口鉢、椀があげられ、とくに甕の出土量がもっとも多く、下層面から上層面にかけて出土する。椀・鉢・皿などは下層面に多くの種類がみえることから初期段階に試行したものと思われる。壺(壺蓋)は下層面では少ないが、コンクリート製の施設に集中して見つかっており、後半にかけて生産量を増やした様子がうかがえる。

甕は大小のサイズを揃えており、口径⁽¹⁾と器高を基準にしておおよ7グループに分かれる(第3表)。口縁のみの出土事例を含めると、さらに細分化できるものと思われる。大型のグループ⑦は“四斗甕”と呼ばれる一群と思われるが、これより大型の甕は認められなかった。甕の年代観については後述するが、大型のグループ⑦の肩部には一条の波状文を施している。グループ⑥は肩部に波状文と直線の条線文が一条ずつ施文するものが多くみられ、この基準にあわないものも散見する。グループ⑦と⑥の底部は平底、グループ⑤と④の底部は蛇の目高台であり、それ以下は輪高台となる。甕は来待軸を内外面に施軸し、グループ④より大型のものには肩部から鉄軸を流し掛けるものが多い。わずかであるが長石軸を施軸した小型甕(154-12)も存在する。

壺は本体よりも蓋の出土数が多く、完形品も多数出土する。壺のサイズは3グループに分かれる(第4表)。グループ①や②などの小型サイズは肩部が最大径にあり肩が張った形状を呈し、底部の高台脇を面取りする。グループ③は最大径が胴部に下がり寸胴の印象をあたえ、底部は蛇の目高台となる。壺は長石軸を施軸するものと、来待軸を施軸するものに分かれ、長石軸の場合はコバルト釉、来待軸の場合は鉄軸を流し掛けるものがある。グループ③のうち、来待軸を施軸する65-16と長石軸を施軸する104-1は同一の形状を呈していることから、施軸段階で作り分けたとと思われる。25-4は壺の素地であり、小型壺は素焼焼成をおこなっていたことがわかる。

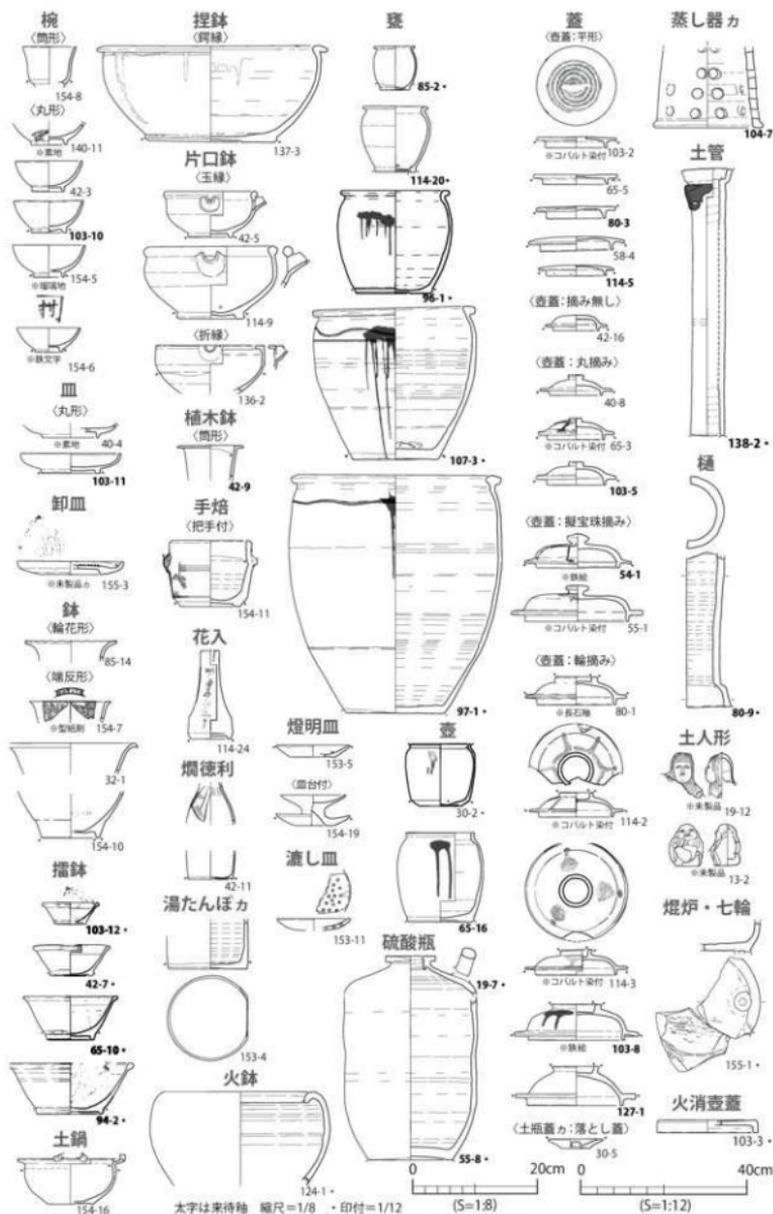
本窯では硫酸瓶を生産していることが確認できる。胴部の形状は寸胴を呈しており、頸部内部に螺子溝を切り、肩部が張って横位の把手を貼り付ける。器形は小野田皿山(山口県)で製瓶機を使用

グループ (中央値)	① (9.4)	② (12.2)	③ (14.1)	④ (16.6)	⑤ (24.0)	⑥ (34.3)	⑦ (46.2)
遺物番号	85-2	114-18	114-20	76-16	96-1	107-3	97-1
口径	9.0	11.7	14.0	17.2	24.7	33.6	46.2
器高	10.7	13.4	15.9	20.3	25.0	37.1	57.6
底径	6.9	8.4	9.4	14.8	17.6	20.8	23.6

第3表 甕寸法(単位はcm)

グループ (中央値)	① (8.0)	② (14.4)	③ (15.5)
遺物番号	86-5	30-2	65-16
口径	(8.0)	(14.0)	(15.6)
器高	9.1	14.4	21.6
底径	(8.0)	(10.0)	15.0

第4表 壺寸法(単位はcm)



第169図 本田窯跡製品一覧(種類別)

したものに類似するが¹⁰⁾、本窯の製品は紐(シノ)作りであり腰部と肩部の二カ所で胴継ぎをおこなっている。小野田皿山で生産した硫酸瓶の形状を模したものである。

蓋の器形は平形と中心が盛り上がった壺蓋と呼称するものが中心である。本窯製品では蓋をともなう器種が限られることから、内口縁に掛子をともなう蓋は壺用の可能性がある。平形には長石軸(103-1・2、65-5、58-4)と、来待軸(80-3、114-5)があり、長石軸を施軸するものには上面にコバルトで渦巻文を描くものがある(103-1・2)。壺蓋タイプには、摘みをともなうものともなわないもの(42-16)がある。摘みの形状には幾つかの種類があり、丸摘み、擬宝珠摘み、輪摘みがある。使われる軸葉には長石軸と来待軸があり、長石軸にはコバルト染付、来待軸には鉄絵を施すものがある。描かれる文様パターンは、20世紀前半から中頃に比定される上府八反原窯跡出土品と共通する。サイズにはばらつきがあり、外径は最小のものが7.2cm(42-16)、最大のものが21.1cm(55-1)を計測する。大型のものに擬宝珠摘みと輪摘み、小型のものに平形と丸摘みに分かれる傾向がある。壺蓋以外には、螺子式の硫酸瓶蓋(42-12)と落とし蓋(30-5)が出土している。

搦鉢は来待軸を施軸し、捺目は隙間を開けずに分割して入れ、捺目の上端を描いて削りて消している。口縁端部は折り返して玉縁とし、一方を押して片口とする。窯詰めには焼台を挟まずに内底に直に重ね焼きする。搦鉢のサイズはおおよそ5グループに分かれる(第5表)。大型のものは少なく、グループ④以下の小型のものが多い傾向がある。最小グループ①は側搦鉢になる可能性がある。

本窯で作られる片口鉢は玉縁であり、捏鉢は外折縁であることで識別できる。片口鉢と捏鉢のサイズはそれぞれ2グループに分かれる。捏鉢は口径が50cm前後のもの(137-3)と20cm前後(65-13・14)、片口鉢は口径が14cm前後(42-5)のものと20cm前後(114-9)のものに分かれる。片口鉢には口縁を内折れにしたもの(136-2)があるが、互用焼台と共存することから新しい器形と思われる。

碗は筒形(154-8)と丸形碗がある。筒形碗は湯呑碗として作られたものと思われる。使用する軸葉は長石軸(154-8、42-3、154-6)、コバルトによる瑠璃軸(154-4・5)、来待軸(103-10)がある。長石軸を用いるものには鉄文字で「カネに村」と記したものがあり、依頼主の屋号を記した注文品と思われる(154-6)。瑠璃地の碗は20世紀前半に比定される長東坊師窯に類似がある。また軸葉を施軸していない素地(140-11)があり、腰部に篋書きで草花文を施す。

皿には丸形(103-11)があり、来待軸を施軸する。皿類として、卸皿(155-3)と燈明皿(153-5、154-19)、澆し皿(153-11)があり、いずれも長石軸を施軸する。154-19の燈明皿は底部に皿台がつく。澆し皿は急須や土瓶などにともなっていた可能性がある。155-3は白化酎土を塗布するものの、軸葉を施軸していない未製品である。ほかに皿底部の素地(40-4)も見つかっている。こうした未製品の存在から碗や皿が本窯で生産していたことが確かめられる。

鉢は口縁が外反する端反形であり(85-14、154-7、32-1)、85-14の口縁端部は波状の輪花形となる。長石軸を施軸し、154-7はコバルトによる型紙刷で施文する。鉢類には植木鉢(42-9)、火鉢(124-1)、手焙(154-11)がある。42-9の植木鉢は罅縁の筒形で来待軸を施軸している。124-1の火鉢は丸形で胎軸を施軸する。154-11の手焙は竹を模した筒胴に把手を貼り付ける。把手の付け根には篋文を陽刻し、コバルトで彩色する。類形は布志名焼にもみられることから、明治30年代頃に製作したものである。

グループ (中央値)	① (13.3)	② (15.1)	③ (17.7)	④ (21.1)	⑤ (28.6)
遺物番号	103-12	114-7	42-7	65-10	94-2
口径	(13.0)	15.1	17.8	(20.4)	28.6
器高	5.2	7.0	7.5	10.5	12.0
底径	(7.8)	8.6	10.0	(11.0)	15.9

第5表 搦鉢寸法(単位はcm)

他に花入(114-24)、燗徳利(42-11)、土鍋(154-16)、土管(138-2)、樋(80-9)がある。114-24の花入はコバルト文字を記しており、文面から陶工による個人的な作品と思われる。42-11の燗徳利は白化粧の上にコバルトで笹文を描き、長石軸を施軸する。154-16の土鍋には双耳を貼り付け、内外面に来待軸を施軸する。153-4と104-7は不明とした。153-4は筒胴の一端を平らに成形しており、湯たんぼの可能性がある。104-7は器面に多数の開孔がみられ、蒸し器の可能性がある。

土器として土人形(19-12、13-2)、焜炉・七輪(155-1)、火消壺の蓋(103-3)がある。19-12は本来は彩色をとまなうものと思われるが、本窯では色絵に関連する資料(製品・未製品)が見つからないことから、土人形の生地製作を請け負っていたものと思われる。13-2は焼成にとまなう滓の飛沫が付着している。155-1は風口が開孔し、底部には足を貼り付ける。火消壺本体は碎片を確認している。

2. 本窯跡の窯道具

本窯の窯道具は製土工程、成形工程、施軸工程、焼成工程に関わる工具が出土している。そのなかでも、焼成工程における「窯詰め」につかわれた焼台が多数出土する。焼台にはサイズや種類が多いことから、製品ごとに細かく使い分けた様子がうかがえる。水箒が位置する2区からは盛鉢が大量に出土しており、これは水箒と製土工程の作業内容に関連することによる。

製土工程に関する窯道具として、素焼の盛鉢(96-2、83-5)があげられる。口縁端部を折り曲げて玉縁とし、底部は平底である。基本的な器形は変化しないものの、下層から出土した盛鉢(96-2)はやや深手で器壁は外反気味に立ち上がる。玉縁には厚みがなく三角形を呈するものがある。上層から出土した盛鉢(83-5)は若干浅手になり、器壁は直線的に立ち上がる。玉縁は厚く盛りあがり半円形を呈する。ほかに盛鉢の類型と思われるものに浅鉢(137-6)がある。盛鉢と同じ素焼鉢であるが、把手となる玉縁はみられない。

成形工程に関わる窯道具として、轆轤軸受け(30-10、153-7、156-5)、分銅(109-5)、湿台(19-6)、土型(135-14)があげられる。轆轤軸受けは、外面に長石軸を施軸した陶製である。外径が8cm前後(30-10、153-7)のもの、15cm前後(156-5)のものがある。ほかにも軸受けとして、42-20、156-4、115-5がある。42-20は手轆轤の軸芯の可能性がある。156-4は内径が摩耗しており、実際に回転する芯材を支えていたものと思われる。115-5は三方に小孔が開孔しており、釘か螺子で芯材と固定したものである。109-5の分銅は鉄製であり、大型甕を成形する際に、木製台(地板)から生地の底部(しき)が離れるのを防ぐための重しとされる。

19-6は生地を裏返しにする際に使われた湿台と思われる。小型の陶製であり、頂部は緩やかな球面となる。135-14は土型であり、中心に沈線を入れる。形状から注口部分と思われる。急須や土瓶などの袋物を生産した可能性が考えられる。

施軸工程に関する窯道具として、乳鉢(19-14、86-12)、ミル・ボール(42-22)、石臼(76-19、124-14)がある。何れも軸葉や顔料の原料を粉砕する道具である。42-22のミル・ボールは磁胎であり、表面は摩耗している。ポットミル回転機に入れて原料を粉砕するもので、石見焼では化粧土(白・銕)の粉砕に使用したとされる⁶⁵。石臼も原料の粉砕に使われたと思われるが、粉砕に使えなくなった石臼は支柱台として再利用することがある。

焼成工程に関わる窯道具として、焼台、火立て(30-9、127-12)、色見(124-6、115-8)がある。焼台には製品間に挟む重ね焼き用のものと砂床に据え置く基台に分かれる。石見焼では足付の焼台を「ハリ」、円柱状の焼台を「ヌケ」と呼称する。足付の焼台は、貼付足と切込足に分かれる。貼付足

が先行して古く、切込足は20世紀になって普及するタイプである。ほとんどの足付焼台の上面には糸切痕を残している。

貼付足の焼台は、粘土柱を糸切で板を切り離し、大きさにより4～8足を貼り付けるものである。焼台の外径サイズは6グループに分かれ(第6表)、器高は3cmを上限とする。基本的に焼台の中心を開孔するが、小径のグループ①には開孔しないものがある(115-4、124-7)。

切込足の焼台は数多く出土しており、貼付足の焼台より多い。円筒状に轆轤水挽き成形し、円筒の側面を切り出して足状に加工する。外径サイズはおおよそ7グループに分かれ(第7表)、それぞれのサイズで器高の低いもの(第7表上段)から高いもの(同下段)がみえる。大型グループ⑦は切込足だけにみられるサイズである。中間のサイズであるグループ④がもっとも多く出土しており、また器高の比高差ももっとも大きくなる(16cm差)。小径のグループ①と②と大径のグループ⑦は数が少なく、器高が高いものは作っていない。外径12cm前後の焼台を多用しており、数が多く器高のバリエーションも多い。切込足の切り出しには1方向から抉るものと、2方向から切込を入れるものがある。抉るものはグループ⑦とグループ⑥の器高が低いものに多くみえる。これらの切込足の焼台には裏面にヘラ書きをともなうものがあり、多くは記号や判読困難な文字であるが、43-3は「二升」、140-8は「三」、43-7は「四」と読めることから、一部はサイズを示しているようである。

切込足の焼台には、上面を罫線にするものがある(85-7、155-11)。外径は大きく器高は高い。紐作り成形しており、他の切込足とは成形が異なっている。とくに85-7は内側に曲げてから再び外側に折り曲げて縁を揃える。出荷を前提としない窯道具にも均質な仕上がりをみせており、石見陶工の技術力の高さが現れる。

轆轤水挽きで成形し、足を切り出さない輪状の焼台がある。小径のものはリング形(105-17)で、やや大径になるものは側壁の一方を半円形に抉る(19-18)。サイズは6～7cmのものと16cm前後のものがある。上層から出土しており、切込足より後出するようである。

重ね焼き用の焼台として、ほかにチャツタイプ(155-4)とハマタイプのものがある。チャツとは蛇の目高台(ないし蛇の目輪刺ぎ)の窯詰めなどに用いるが、本窯の壺や甕にみられる蛇の目高台とはサイズがあわないことから小型製品に用いたものと思われる。ハマタイプのものには小型の叩きハマと(30-6、83-4)、中心を穿孔した轆轤成形のものがある(137-5、106-1)。大田屋窯跡(吉沖屋窯跡)や

長東坊師窯跡では大型甕の重ね焼きの際に合わせ口小さな粘土塊を挟むが、本窯の甕口縁には重ね焼きの痕跡がなく、また30-6や83-4にも甕口縁の凹みは転写していない。小型の叩きハマタイプは焼台として使われたものと思われる。

砂床に据える基台には、胴部が空洞の円筒状(メケ)になるものと中実で棒状のもの(トチンタイプ、156-2、156-3、140-

グループ (中央値)	① (6.0)	② (8.1)	③ (10.7)	④ (13.7)	⑤ (15.2)	⑥ (18.0)
遺物番号	115-5	115-6	105-3	43-4	140-7	43-6
口径	5.8	8.1	10.5	13.7	15.2	18.1
器高	1.7	1.9	1.9	2.7	1.9	2.7

第6表 焼台(貼付足)寸法(単位はcm)

グループ (中央値)	① (6.9)	② (8.2)	③ (10.2)	④ (13.4)	⑤ (16.1)	⑥ (18.1)	⑦ (21.2)
遺物番号	81-7	105-6	40-11	86-18	105-13	105-14	140-8
口径	7.0	8.3	10.0	12.0	16.6	18.6	20.0
器高	1.9	2.9	2.0	3.0	4.5	4.5	3.7

遺物番号	19-15	-	19-17	81-4	54-4	127-7	67-5
口径	6.9	-	11.0	12.5	16.2	18.5	21.0
器高	4.2	-	6.3	19.2	9.7	8.1	5.2

第7表 焼台(切込足)寸法(単位はcm)

5)がある。出土数は棒状はわずかで、円筒状が多い。底部には砂床の砂が焼きつくものが多い。円筒状には寸胴形のもの(87-9、76-18、136-4)と、上面が鐮緑形(鉄アレイ形)となるもの(34-4、32-6、156-1)があり、いずれも紐作り成形する。寸胴形は上面中央と、側壁上部を穿孔する。上面の径は20～26cmを計測し、器高は4.5～36.9cmである。鐮緑形も中心が貫通しており、上面に溝をとこなうものがある(34-4)。上面の径は18cm前後で、器高は15.1～19.0cmである。鐮緑形はSB05などの下層面から集中して見つかったのに対し、寸胴形は下層面から上層面にかけて出土する。本窯では開窯後しばらくは鐮緑と寸胴の両タイプを併用するが、次第に寸胴形が残ったようである。ほかに瀬戸美濃地方で多用される棚板(86-20)がある。棒状の焼台などと組みあわせて使用したものである。

火立には二種類あり、下端が広がる断面台形になるもの(30-9)と、自立するように短辺を弧状に曲げるもの(127-12)がある。断面台形は下層面から出土し、短辺を曲げるものはコンクリート基礎建物にともなって出土している。断面台形の火立が先行するようである。

焼成工程に関わる窯道具として、ほかに栓(42-23)と色見(124-6、115-8)がある。栓は焼成室内の様子を観察する「色見穴」を塞ぐもので、先端部分に自然軸が付着している。色見は製品の焼き上がり具合を調べるテストピースであり、粘土紐をリング状に結んで長石軸を施軸する。「色見穴」の栓を開けて鉄竿に引っ掛けて取り出される。

3. 本田窯跡の甕について

本窯の主力製品は甕であり、開窯当初から瓦窯に移行するまで一貫して生産している。甕を主力製品とした理由として、後背に陶土産地を控えて原料の調達が比較的容易であること、前面に江の川の川湊に直結しており燃料となる薪などの調達に便利であり、かつ重量物である大型製品の出荷にも適した環境であったことが考えられる。陶器窯としての操業期間は約70年間にわたり、この間に甕の形状は変化している。主力製品である石見焼甕について、先行研究と本窯の遺構の消長(第8表)と照らしあわせて検討をおこなった(第4図)。基準として石見焼甕の編年研究があげられる⁽⁴⁾。4斗甕を対象として甕1類から甕3類にわけて年代観を与えており、甕1類は19世紀前半代、甕2類は19世紀後半代、甕3類は20世紀前半代である。本窯の変遷は、開窯期(登窯、石垣群、地覆石建物群、木製水廠枘)、陶器窯前半段階(SK40、レンガ製水廠枘)、陶器窯後半段階(コンクリート修築水廠枘、窯垣、造成土)、瓦窯段階(登窯改装、コンクリート基礎建物群、SX01)、廃窯期(国道、昭和47年洪水堆積層)に分けられる。先に記したように陶器窯の造成は明治10年代におこなわれ、開窯は明治20年頃になるものと思われる。元従業員の聞き取りから、瓦窯への変換を昭和36年頃におこない、国道建設で窯体が壊された昭和40年前後に廃窯している。

今回の調査で出土した甕には、本窯以外の石見焼窯で生産したと思われる製品も確認された。水簾の外付けや炉内に据えた141-1、138-1、30-11である。本窯が稼働する以前に設置したものであるとされ、いずれも大量に出土する甕片とは器形や胎土などが異なっている。141-1は他の大型甕と比べるとサイズが一回り大きい⁽⁵⁾。器壁はゆるやかに弧を描いて立ち上がり肩部が最大径となり、頸部は外開きでやや長くなる甕1類の特徴を示しており、年代観は開窯以前に遡る。肩部には波状文と直線状条線文を施し、内底に貼付足の焼台の目跡が残る。本窯で生産した大型甕は肩部に波状文のみを施しており、貼付足の焼台を置いた類例はみられない。本窯の製品には窯印を用いないが、30-11は「△」の刻印を捺し、138-1は墨書で「元」を記しており、いずれも他窯で作られた

ものと思われる。30-11は他の大型甕(4斗甕)と比べると二回り程度小さくなるが¹⁰⁾、本窯ではこのサイズの甕は生産していない。138-1は胎土が灰色を呈し、他の大型甕と比べてあきらかに重量が重い。器壁は丸味を帯びて立ち上がり頸部は短く内傾する。御崎谷遺跡出土の大型甕(明治31年前後)に類似しており、本窯が開窯する時点で甕2類が生産されていたことになる。これは明治20年前後に開窯したとする年代観とも一致する。

本窯における大型甕の特徴として、胎土は灰褐色を呈してやや粗目であり、厚く施釉した軸調には光沢があり若干赤味を帯びている。多くの場合、製作工程における損傷をともなっており、出荷が見送られて廃棄されたり転用される。

SK40は開窯当初の遺構面で検出した土坑であり、レンガ造りの南水箴北柵に切られる。本遺跡では古相の遺構として位置づけられる。この土坑から出土した大型甕(97-1)は、口縁を内折れの外帯にして上端を丸く仕上げ、肩部に鉄軸を流し掛ける。器壁は丸味を帯びて立ち上がり、頸部は短く内傾し、181-1と同様に甕2類にみえる特徴を持っている。同じSK40から取り上げた小型甕(96-1)や3区物原下層の甕口縁(114-22)も、頸部は内傾しながら立ち上がり、口縁上端を丸く仕上げている。3区物原下層から取り上げた小甕(114-18・20)は、最大径の肩部から底部にむけてすばまる器形を呈する。これらの甕は陶器窯の前半段階に位置づけられ、19世紀末葉以降に生産したものと推測される。

開窯以降に増設した窯垣やコンクリート水箴柵には本窯の製品を使用している。小河川(西川)に面した2区には大型甕を用いて窯垣1を築いており、この窯垣に使われた大型甕のひとつが107-5である。口縁外帯は角張って面をなし上端は水平に仕上げる。頸部は短く肩部から腰部にかけての丸味はなくなり直線的な器壁となる。肩部には鉄軸が流し掛ける。短い頸部など甕2類の様相を残しつつも、角張った口縁外帯や直線的な器壁に甕3類への変化がみえる。SK40を切る南水箴北柵の埋甕が107-1である。上端を水平に仕上げた角張った口縁外帯であり、器壁は直線的に立ち上がる。水箴柵の埋甕(136-10、107-2・3)は、いずれも同様な器形を呈しており、底面に掘られた小穴に据えて口縁の外周りをコンクリートで充填させる。これらの甕の年代観は、コンクリートを使用している状況から20世紀第2四半期前後と推定される。

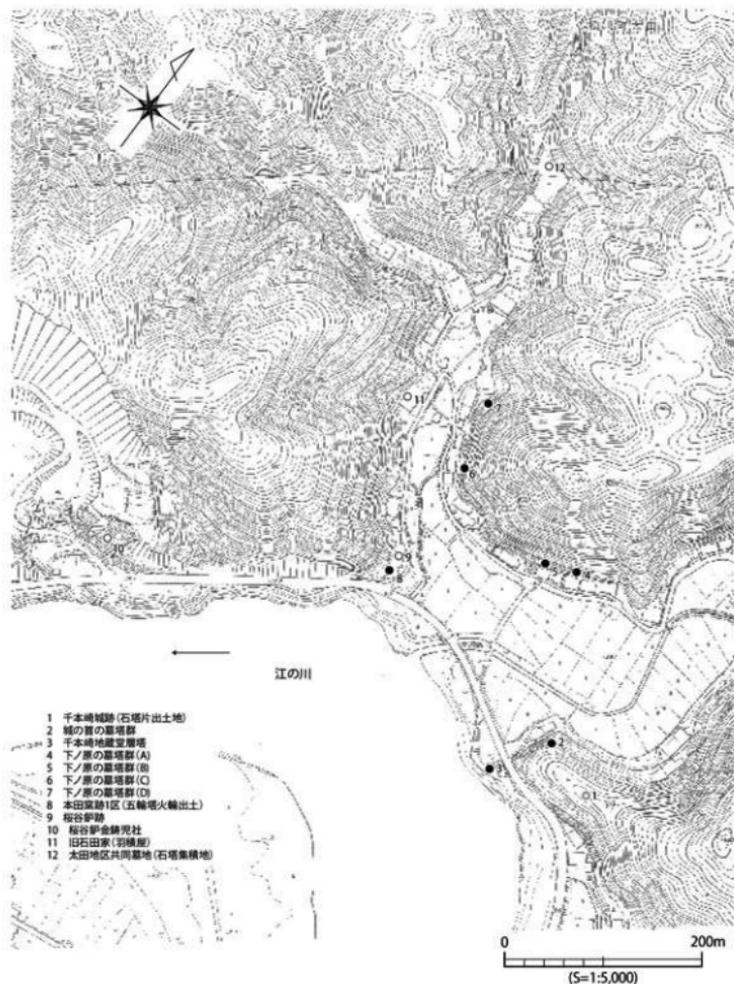
瓦窯に前後する時期の遺構はSX01である。SX01は洪水砂の直下からみつかった陶器や窯道具の集積であり、この遺構から出土した小型甕(65-17・18・21)は、最大径が胴部に下がる形状を呈している。大型甕で全体像を示すのは表土層(洪水砂)から出土した107-6である。107-6には頸部の括れはなく、角張った口縁外帯に寸胴の器壁が直結しており、上府八反原窯跡の甕3類に類似する。鉄軸の流し掛けはみられなくなる。洪水砂は昭和47年の洪水にともなうものと思われる。これらの甕の年代観は本窯最終段階の20世紀第3四半期頃と推測される。

今回の調査で出土した甕を整理すると、開窯時点では本窯以外の石見焼窯で作られた甕を使用しており、19世紀前半の甕1類と19世紀後半代とされる甕2類がみえる。本窯では当初は甕2類タイプを生産したが、70年間におよぶ操業期間のうちに器形は甕3類タイプに移行している。本窯で生産した甕2類は19世紀末葉から20世紀前葉頃と比定され、20世紀第2四半期頃には甕2類から3類へと漸移的に変化した、20世紀第3四半期頃には甕3類に移行したものと考えられる。

- 1 口縁の計測値は頂部で計測し、口径サイズは中央値を示している。
- 2 田畑直彦 2017「山口県の窯業と石見焼 - 佐野焼・堀越焼・末田焼・小野田皿山 -」『近世・近代の石見焼の研究』島根県古代文化センター研究論集 第 17 集
- 3 『伝統的工芸品 石見焼 手引書』石見陶器工業協同組合 2000 年
- 4 間野大丞 2017「石見焼の製品について」『近世・近代の石見焼の研究』島根県古代文化センター研究論集 第 17 集
- 5 口径および器高が 5cm 程度大きい。
- 6 口径は約 6cm、器高は 12cm 程度小さい。

第4節 千本崎城跡の調査成果

千本崎城跡の発掘調査では土師器皿、陶器鉢・甕、古銭が出土したが遺構は明瞭でなく、中世山城の存在を示す確実な遺構・遺物は見られなかった。一方、この場所については近世の地誌である『角郎経石見八重葎』に南北朝期の山城と読める、千本崎城の存在が記される上、遺跡の周囲には中世に遡る石塔類も分布している。これらの点から千本崎城跡の位置付けを検討する。



第172図 太田地区の石塔および関係遺跡位置図

1. 『角郷経石見八重葎』にみえる千本崎城跡と都野氏

石田初右衛門春律が文化十四年(1817)に記した『角郷経石見八重葎』⁽¹⁾には、「千本崎之城」と題された記事があり、それによれば千本崎の地名は風よけのために千本の松を植えた事によるとした上で、「新羅三良義光二代ノ後胤近江国浅井ノ郷之内角野村ニ初テ分家ス。依テ角野ヲ苗字トナシテ津野遠江守源義定○右馬助義康○右京大夫勝綱○権太良勝助○津野藤九良直光是迄近江国二住ス○津野三左エ門正隆此時石州那賀郡千金村月出ノ城主トナル。其子智許此弟太田千本崎へ分家仕リ津野左近将監将監源義智、足利尊氏公之時吉川駿河守討之儀ノ武官軍ニ加ル故討死ス。應安元年ナリ」と記す。また、『皇国地誌』に掲載された「太田村村誌」も「東西南国共凡老町、山上水アリ城ノ秘水タラン、古時観応ノ頃ナランカ、都野将監義智タル人住スト云フ」とされる。都野義智は応安元年(1368)に討死と記されることから、千本崎城は南北朝期の城だったと読める。現地には千本崎の字があるが、発掘調査では山城跡だったという痕跡は見あらず、山頂部の踏査でも確実に山城跡といえる遺構をみいだせなかった⁽²⁾。

都野氏に関わる遺跡の発掘調査としては、江津市二宮町の城主跡がある。この調査でも14世紀から城が利用されてきたという証拠を得ることはできなかったが、室町時代のもと考えられる土師質土器や備前焼が出土し何らかの利用がうかがわれる。都野氏は南北朝期から都野郷を拠点とし、戦国期に江の川に面した郷田亀山城に移ったと考えられているが、井上寛司氏は、都野津・二宮方面の発掘調査で室町期以前の遺物が目立つ一方戦国期の遺物が激減する点を指摘し、都野氏が郷田亀山城に移転したことに関係する可能性を指摘している。都野氏の系譜に関する文献はいくつか知られているが、いずれも当時の文書類にみえる実在の都野氏との共通点が少なく、『角郷経石見八重葎』に記される都野氏の系譜は信憑性が低い⁽³⁾という。

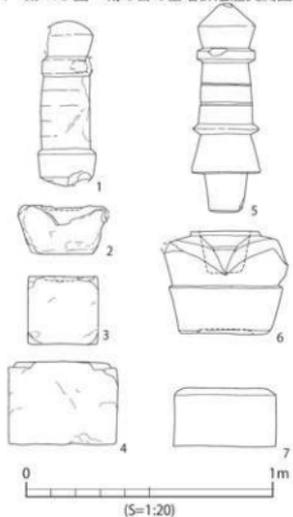
2. 太田地区の石塔について

第172図には江津市松川町太田地区の中近世の石塔類があった場所や関係遺跡等を示した。この地域には、非常に狭い範囲に多くの石塔が存在⁽⁴⁾したことがわかる。

城の首の墓塔群 千本崎城跡の西側の斜面には「城の首の墓塔群」と呼ばれる石造物の集積(172-2)があり、地元では「山伏の墓」と呼ばれていた(平田1992)という。現存するのは宝篋印塔の相輪2点、屋根2点、塔心1点、基礎2点以上の他、燈籠の部材がある。宝篋印塔の石材は流紋岩〜デイサイトである。宝篋印塔相輪のうち174-1は16世紀後半に遡る可能性があり、174-2・5は17世紀代のもと考えられる。



第173図 城の首の墓塔群燈籠実測図



第174図 城の首の墓塔群石塔類実測図

燈籠本体はバラバラに分解され破損している部分も多いが、竿石はほぼ原形を保っており「施主 櫻谷鉦 渡利氏」「御夜燈」「宝曆□ 十一月」と彫り込まれている。この銘により桜谷鉦を経営した渡利氏によって宝暦年間(1751～1764年)に寄進されたものであることがわかる。急斜面に燈籠が建てられた理由はわからないが、宝暦年間以前からこの場所にあった宝篋印塔に関係する可能性や、千本崎地藏堂周辺の石塔類が元はこの近辺にあった可能性、屋根上のどこかに堂があった可能性や、屋根を越える道との関りなどが想像される。

なお、平田氏によって紹介された文章中には一石五輪塔の存在が記されるが現地を確認できない。平田1992に掲載される写真と現地の状況はほとんど変わっていないことから、燈籠竿石を誤認した可能性が考えられる。

千本崎地藏堂層塔 令和5年までは千本崎城跡南側の江の川岸にあった民家の背後に地藏堂があり、その横に石製層塔(千本崎地藏堂層塔)が



写真1 城の首の墓塔群近景



写真2 城の首の墓塔群 宝篋印塔屋根・相輪



写真3 城の首の墓塔群 宝篋印塔相輪

立っていた。この場所は、江の川河川改修の事業地内に含まれることから、地藏堂の仏像等を含む周辺の石造物は令和5年に太田集落の東側に仮移転されている⁽⁵⁾。

千本崎地藏堂層塔は高さ約3mで、現状では七層となっている、御影石とみられる花崗岩製である。相輪の一部が別置されており、九輪の一部から水煙部までを残している。この層塔は、鎌倉時代後期から南北朝期と推定されている。移転前は基礎が2段目に入っていたが、仮移転地では積みなおされている。しかし、それでも通減は一定にならず、2層程度が抜けているように見え、九層だった可能性(今岡2010)も指摘されている。ただし、『角部経石見八重葎』にも七層と記されており、文化年間にはすでに現状に近い形状だった可能性が高い。

千本崎城跡の発掘調査で出土した石塔片(166-4)は、この層塔と石材がよく似ているため、現地であわせてみたが直接接合はしなかった⁽⁶⁾。もし、同一個体であれば、千本崎地藏堂層塔が千本崎城跡の丘陵上に置かれていた可能性もあるが確認できない。

県内の花崗岩製層塔は、益田市中須の福王寺層塔が知られ、14世紀後半代頃と推定されている。この層塔は港湾施設とみられる石敷き遺構や中世の遺物が大量に出土した中須西原・東原遺跡に隣接しており、福王寺は日本海交易

に関わる港湾に関係した寺院だったといわれている。

江の川を遡った川本町には木谷石塔がある。木谷石塔は凝灰岩製の層塔で現状は八層分が残っているが本来は九層か。基礎の四面に銘文が刻まれ、延文三年(1358)が読める。災害関連工事で解体調査がおこなわれ、初層屋根の奉籠孔や基礎の下に埋められていた埋納甕から近世の民間信仰に関わる遺物が発見されている。江の川に面して立てられており川湊に関わるか。現状では相輪部が残っておらず、五輪塔の空風輪が載せられている。

千本崎地藏堂 千本崎地藏堂内には石造阿弥陀如来立像が安置されていた。この阿弥陀像は1943年頃まで桜谷に置かれていたが、家屋の解体にともなって国道261号沿いの小堂に移され(松田1996)、その後2008年ごろに小堂が風害で倒壊したため、千本崎地藏堂に納められ(角田2018)、令和5年に太田集落東側に仮移転している。この阿弥陀像は光背の背面に銘文があり、「願主櫻谷鐘山中興人渡利一藏正郎 同重平治長忠 明和九年」がみえる。また、千本崎地藏の建立趣意書には、施主12名の中に櫻谷鐘師渡利一藏や石田権左衛門らがみえる。

千本崎地藏堂の周囲には、層塔以外にも井戸碑が立つほか、デイスイト製の五輪塔水輪が置かれていた。

下ノ原の墓塔群 太田地区北側の山裾には、宝篋印塔・五輪塔が点々と知られており、これらは下ノ原の墓塔群と呼ばれている。下ノ原の墓塔群(A)は福光石製の宝篋印塔の相輪、笠、白色凝灰岩か福光石製の基礎があるが組み合わせは不明である。下ノ原の墓塔群(B)は石塔部材の集積で、五輪塔の火輪5点以上のほか燈籠などを含む。下ノ原の墓塔群(C)も同様で五輪塔以外に燈籠が目立つが、流紋岩製の宝篋印塔相輪1点を含んでいる。下ノ原の墓塔群(D)は宝篋印塔相輪部の小片と五輪塔の水輪で、このうち宝篋印塔相輪部は若狭日引石製の可能性がある。九輪下の請花は覆輪付きの複弁を配し、16世紀代に遡る可能性がある。

下ノ原の墓塔群(B)(C)の状況から、これらの石塔類は石塔類を集めたもので、原位置はわからないが近隣のものであろう。なお、下ノ原の墓塔群は住宅背後の急傾斜地に置かれていたもので、地滑り対策工事にともなって太田地区共同墓地へ移設されている。当初の正確な位置はわからないが、城の首の墓塔群の状況から斜面中腹に置かれていたと想像される。

本田窯跡1区五輪塔火輪 本書で報告した本田窯跡1区のトレンチ(172-8)からはデイスイト製の五輪塔火輪(43-11)が出土した。出土層位は桜谷鉦跡の高殿検出面より下層であり、桜谷鉦以前のものと考えられるが、洪水砂層から出土しており現位置ではない。また、令和5年度の桜谷鉦跡発掘調査でも同様の砂層から凝灰岩製の宝篋印塔基礎、デイスイト製五輪塔風輪が出土しており⁽⁷⁾、本



写真4 千本崎地藏堂層塔(仮移転後の状況)

田窪跡・桜谷跡跡の近隣に石塔が複数あった可能性が高い。本田窪跡付近は大飯彦命神社などがある谷から江の川に注ぐ小河川沿いにあり、古くからの交通路に面していた可能性がある。

関連する遺跡等 千本崎城跡が位置する丘陵の南側にはある沖積地には森原遺跡群があり、これらの遺跡では中世後半の遺物が大量に出土している。森原下ノ原遺跡2区では甲冑を解体して修理用の小札を保管したと推定され、室町～戦国期のものとされている。このほか、建物に使用される飾り金具や鍛冶関連遺物、輸入陶磁器類など通常の集落では持ちえない遺物が出土し、川湊や渡河点に関わる館などの存在が推定されている。

大田地区の集落の北西には式内社大飯彦命神社が鎮座している。境内には、明治40年に石田信太郎等3人により桜谷から遷座された金屋児神社も祀られている。大飯彦命神社の南には石田家跡(波積屋:172-11)がある。旧石田家は太田村の庄屋だった。近世末頃に桜谷鉦を経営し、文化年間に『角部経石見八重律』や『金屋子録起抄』を記した石田初右衛門春律の居所である。建物は出雲市内へ移築されたが、現地には巨大な石を用いた石垣と墓地が残されている。

桜谷鉦跡(本田窪跡:172-9)から西へ約300mの位置には桜谷鉦金鑄児社(172-10)がある。桜谷鉦金鑄児社には石造金鑄児神社を中心に船魂社、山祇社と、愛宕社と思われる祠が祀られているほか、隣接して石垣があり阿弥陀堂だったと考えられる。この阿弥陀堂には千本崎地蔵堂(令和5年に仮移転中)に納められた石像阿弥陀如来立像が祀られていたと考えられる(角田2008)。桜谷鉦金鑄児社の石祠側面には銘があり、文化十三年、願主 石田初右衛門春律 石田権左衛門春胤の名がみえる。また、石祠の内部には祭神を記した立石があり宝暦十一年、願主 邑智郡川本村渡利一藏正郎がみえる。同様に船魂社・山祇社も宝暦年間に渡利氏によって建てられたことが銘からわかっている。山祇社の銘には「奉再建山口神社」とあることから、宝暦十三年以前に存在した祠を再建されたものと考えられている(角田2008)。

3. 千本崎城跡の調査成果

千本崎城跡の発掘調査では調査区西側から14世紀代の陶器片や土師器・古銭が出土し、古墓か経塚が存在した可能性が高い。これらの遺物が示す年代は近隣に建っていた千本崎地蔵堂層塔の年代に近く、この丘陵が南北朝期から使用されていたことが確かめられた。一方、山城跡だったことを示す遺構・遺物は確認できず、近隣を含め山城があったといえる確実な証拠を見出すことができなかった。そうした状況にも関わらず石田春律が津野氏の城と記したのは、どのような理由があるだろうか。千本崎城跡に古墓か経塚が営まれ、西斜面下方に戦国期にかかる宝篋印塔が現存し、南西側の江の川岸には南北朝期に遡る可能性のある千本崎地蔵堂層塔があるなど、確かに千本崎城跡周辺で南北朝～戦国期の活動の痕跡が残されているのは確かである。これらの石塔類には銘がないが、石田春立が活躍した江戸後期に都野氏の存在をうかがわせるような伝承があった可能性はないだろうか。

千本崎城跡のある江の川右岸は江戸時代には幕府領となる地域で、千本崎城跡の南側に広がる八神地区には灰被天目・小札を始め中世の遺物を大量に出土した森原下ノ原遺跡・森原神田川遺跡があり、江の川の渡河点や川湊・交通路の存在が推定されている。また千本崎地蔵堂層塔が立つことから近隣に寺院があった可能性も考えられる。こうしたことから千本崎城跡の周囲は、桜谷鉦や羽積屋が営まれる以前からも重要な場所だったことを示している。

【註】

- 『角郡経石見八重葎』は、石田初右衛門春立が文化十四年(1817)に作成した地誌である。石田初右衛門は太田村の出身で庄屋を勤めたこともある人物である。文化年間に農事指導書である『百姓稼穡元』を著している。また、天明頃に板谷たたらを経営し、『金屋子録抄』を著した。千本崎の顕徳碑には、石見の甘藷の三代恩人として井戸平左衛門等と並んで名を刻まれている人物である。『角郡経石見八重葎』に記される千本崎之城の住人は「津野」と記されるが、郡野氏か。石見地方未刊資料刊行会 1999『角郡経石見八重葎』
- 島根県立八雲立上風土記の丘所長高屋茂雄氏とともに山頂周辺を踏査したが、城跡の痕跡はみられなかった。
- 郡野氏の系譜を記す各文献を比較検討した井上氏によれば、『角郡経石見八重葎』の記す郡野氏の系譜は『石見誌』を下敷きで作成されたことがうかがえるが、実在した郡野氏歴代と合致するものがなく、郡野氏の系譜としてその価値をみいだせないという。そうであれば『皇国地誌』に残される「太田村村誌」の記述も『角郡経石見八重葎』などから引かれた内容と想像される。井上寛司 1987『中世の江津と郡野氏』『山陰地域研究』第3号、島根大学山陰地域研究総合センター
江津市誌編纂委員会 1982『太田村村誌』『江津市誌』別巻
- 太田地区の石塔類のほとんどは平田正剛氏によって紹介されており、各石塔の名称はこれにしたがった。平田正典 1992『佛教石造物 江津市』(有)黒潮社
- 江津市教育委員会によれば、千本崎地蔵堂層塔を含む千本崎地蔵堂の仏像・石塔・石碑などは江の川河川改修工事にかかるため、令和5年に太田集落東側に仮移転した。治水工事終了後に元の位置近くに戻される計画だという。
- 千本崎地蔵堂層塔については、現地で佐藤聖氏(滋賀県立大学)の指導を得た。古代の木造塔の相輪には宝珠と龍車が離れているものが多く、古いものであれば千本崎城跡出土品のような形状となる可能性もあるという指摘も得られたことから、2度にわたって現地へ遺物を持ち込み接合関係を確認したが、直接は接合しないと判断した。
- 令和5年度調査でたたら跡の下層から覆灰岩製の宝篋印塔基礎、デイスイト製の五輪塔片が出土している。五輪塔片は空風輪の空輪部分を欠いた破片である。

【引用・参考文献】

- 井上寛司 1987『中世の江津と郡野氏』『山陰地域研究(伝統文化)』第3号、島根大学山陰地域研究総合センター
今岡稔 2010『山陰の石塔二三について—16—』『島根考古学会誌』第27集、島根考古学会
- 石見地方未刊資料刊行会 1999『角郡経石見八重葎』
川本町教育委員会 1987『谷戸経塚・木谷石塔発掘調査報告書』
江津市誌編纂委員会 1982『太田村村誌』『江津市誌別巻』江津市
島根県教育委員会 2000『神主城跡・室崎商店裏遺跡・古八幡付近遺跡・横路古竈』
島根県教育委員会 2020『森原神田川遺跡大津地区』
島根県教育委員会 2021『森原神田川遺跡下ノ原地区』
島根県教育委員会 2022a『森原下ノ原遺跡1～3区1. 古代～近世編』
島根県教育委員会 2022b『森原下ノ原遺跡1～3区2. 縄文～古墳時代編』
島根県教育委員会 2023『森原下ノ原遺跡4区』
辻富美雄 2012『層塔』『日本石造物辞典』吉川弘文館
西田友広 2023『海の武士・郡野氏と江津・郡野津』『第二回 石見国巡回講座』資料、島根県古代文化センター
平田正典 1988『中世の城砦 江津市』(有)黒潮社
平田正典 1992『佛教石造物 江津市』(有)黒潮社
古川久雄 2003『石材から見た益田市の中世石造物』『市内遺跡発掘調査報告書1』益田市教育委員会
益田市教育委員会 1996『益田拠点工業団地造成工事に伴う発掘調査報告書』
益田市教育委員会 2013『中須東原遺跡』
関野大丞 2012『木谷石塔』『千本崎地蔵堂層塔』『福王寺層塔』『日本石造物辞典』吉川弘文館

第9表 試掘調査出土遺物観察表

探検 番号	遺物 番号	写真 図説	出土 地点	層位	種別	器種	測定寸法(縦×横×高)	胎土	成形	釉薬・顔料	文様・装飾	備考
5	1	2	第27r	3層	陶器	壺	口径:25.0 高さ:12.0	淡灰褐色	輪轆成形	素焼		本田窯製品
5	2	2	第27r	3層	陶器	壺	口径:12.0 高さ:12.6	灰白色	輪轆成形	素焼		本田窯製品
5	3	2	第27r	3層	陶器	蓋鉢(片口鉢)	口径:27.6 高さ:13.1	灰色	拍子り成形	長石釉		本田窯製品(蓋鉢、(7V7)底×5)
5	4	2	第17r	3層	陶器	壺	最大径:11.6 高さ:11.2	灰褐色(白色、黄色色粒子散在)	拍子り成形	素焼		本田窯製品
5	5	2	第27r	3層	陶器	横鉢(ハコ)	最大径:33.2 高さ:2.5	淡灰褐色	輪轆成形			本田窯製品。切込足×4
5	6	2	第17r	3層	鉄製品	釘	長さ:3.3					重量:332g

第10表 本田窯跡出土遺物観察表

探検 番号	遺物 番号	写真 図説	出土 地点	層位	種別	器種	測定寸法(縦×横×高)	胎土	成形	釉薬・顔料	文様・装飾	備考	
13	1	9	1区	S001	磁器	真鍮色染付箱	口径:18.7 高さ:2.7 底径:13.0	灰色	輪轆成形	透明釉・真鍮釉・真鍮	染付:四方障文・五羽蝶定章 底:1770年代(中心)	測定章付:肥前県渡佐屋 窯代製:1770年代(中心)	
13	2	9	1区	S001	土製品	布張人形	高さ:6.8 底径:3.7	薄褐色	型成形			測定章付:東洋軒製、素 製品	
13	3	9	1区	S401	陶器	壺	口径:(12.0)	灰色	輪轆成形	素焼			
13	4	9	1区	S401	鉛床	陶器	口径:(12.0) 高さ:1.8 底径:(13.4)	灰白色	輪轆成形	長石釉			
15	1	9	1区	S306	陶器	土管	長さ:38.4 最大径:(22.0) 口径:(9.4)	灰褐色	拍子り成形	塩			
17	1	9	1区	S404	陶器	横鉢(ハコ)	口径:4.5	淡褐色	輪轆成形			切込足×6	
17	2	9	1区	S404	陶器	蓋鉢(片口鉢)	口径:19.8	淡褐色	拍子り成形	素焼			
17	3	9	1区	S402	陶器	横鉢	口径:1.8	淡褐色	輪轆成形	素焼			
17	4	9	1区	S402	瓦	平瓦	長さ:1.8	淡褐色	拍子り成形	素焼			
19	1	9	1区	1面	漆塗	覆形有蓋染付箱	口径:3.2	黒・ 2/38r/灰白色	輪轆成形	透明釉・青磁釉・真鍮	染付:瓦片花	測定章付:肥前県、年不明 口径:1800、箱:覆形有蓋	
19	2	9	1区	1面	磁器	覆形有蓋染付箱	口径:(11.1) 高さ:(13.0) 底径:2.5	白色	輪轆成形	透明釉・コバルト	染付:富士山(若き重)	測定章付:瀬戸窯遺 物代製、箱付(蓋付代)	
19	3	9	1区	1面	磁器	覆形有蓋染付箱	口径:(11.2) 高さ:(13.2) 底径:1.95	白色	輪轆成形	透明釉・コバルト	御坂町写:山水文	測定章付:瀬戸窯遺 物代製:20c前半	
19	4	9	1区	1面	磁器	覆形有蓋染付箱	口径:6.5 高さ:10.9	白色	輪轆成形	青磁釉	測定章付:花障文・ 障文	測定章付:瀬戸窯遺 物代製:20c前半	
19	5	10	1区	1面	素土	丸形箱	口径:4.8 高さ:3.1	灰褐色	輪轆成形	素焼		箱蓋に彫刻	
19	6	9	1区	1面	素土	陶器	口径:(16.4) 高さ:4.5	淡褐色	輪轆成形	長石釉		箱蓋に灰滑ち	
19	7	10	1区	1面	2面平 物有蓋	陶器	口径:(15.0) 高さ:(5.0)	淡褐色	拍子り成形	素焼		口径:浅縁×3	
19	8	10	1区	1面	素土	陶器	把手(鉄製)	淡褐色	拍子り成形	素焼		口径:浅縁×3	
19	9	9	1区	1面	陶器	把手	口径:(11.0) 高さ:1.9	灰色	拍子り成形	素焼		箱蓋:灰し磨け	
19	10	9	1区	1面	陶器	平形壺	最大径:(14.9) 口径:(11.0) 高さ:5.6	灰色	輪轆成形	長石釉			
19	11	9	1区	1面	陶器	蓋蓋	最大径:(17.2) 口径:(6.6)	灰色	輪轆成形	長石釉・コバルト	染付:寛文高文	箱蓋のみ	
19	12	9	1区	1面	素土	土製品	人形	褐色	型成形		箱蓋:洋装の重文	素製品	
19	13	10	1区	1面	素土	土製品	把手	薄褐色	手捏		染付:丸文		
19	14	10	1区	1面	陶器	白磁鉢	口径:(26.0)	白色	輪轆成形	透明釉	白磁	測定章付:瀬戸窯遺	
19	15	10	1区	1面	惣盒類	陶器	最大径:6.9 高さ:4.2	淡褐色	輪轆成形			切込足×5	
19	16	10	1区	1面	漆塗	陶器	口径:(9.2) 高さ:5.7	薄褐色	輪轆成形			切込足×5、割陶	
19	17	10	1区	1面	漆塗	陶器	口径:(11.0) 高さ:5.3	薄褐色	輪轆成形			切込足×6、割陶	
19	18	10	1区	1面	漆塗	陶器	口径:(15.7) 高さ:7.4	灰色	輪轆成形			割傷:「二」 a	
19	19	10	1区	1面	素土	陶器	口径:(15.7) 高さ:4.0	細灰褐色	輪轆成形			切込足×2、割傷:不明	
19	20	10	1区	1面	陶器	横鉢(ハコ)	口径:(14.1) 高さ:3.25	薄褐色	輪轆成形			切込足×7、割傷:不明	
19	21	10	1区	1面	素土	陶器	口径:(17.5) 高さ:7.4	淡褐色	輪轆成形			切込足×7、底径底×2	
19	22	10	1区	1面	素土	陶器	口径:(21.4) 高さ:5.6	淡褐色	輪轆成形			切込足×10、底径底×4	
19	23	10	1区	1面	漆塗	陶器	口径:(4.1) 高さ:2.8	薄褐色	拍子り成形			瓦の縁×3	
19	24	10	1区	1面	素土	陶器	口径:(2.1)	灰・褐色	拍子り成形				
20	1	11	1区	1面	素土	陶器	口径:(39.0)	淡褐色	拍子り成形	素焼	箱蓋:波文		
20	2	11	1区	1面	素土	陶器	口径:(39.0)	淡褐色	拍子り成形	素焼	箱蓋:波文	底:3割傷	
20	3	10	1区	1面	陶器	土管	最大径:(14.4) 口径:(11.1)	細灰褐色	拍子り成形	素焼		ソケット:縦溝	
25	1	11	1区	S003	漆土	陶器	丸形箱	口径:(11.1)	灰白色	輪轆成形	長石釉		
25	2	11	1区	S003	漆土	陶器	(覆形)箱	口径:(4.4)	灰色	輪轆成形	長石釉		
25	3	11	1区	S003	漆土	陶器	片口鉢	口径:(19.2)	灰色	輪轆成形	長石釉		
25	4	11	1区	S003	漆土	菓子箱	口径:(7.0)	白色	輪轆成形			陶器菓子箱	
25	5	11	1区	S002	鉛床	陶器	横鉢(ハコ)	最大径:13.5 口径:18.8 高さ:3.51	淡褐色	拍子り成形			
30	1	12	1区	S002	鉛床	磁器	染付箱	口径:(9.3)	白色	輪轆成形・拍 子り成形	透明釉・コバルト	型製:豊後高文	測定章付:九州定窯一 部(高文、年不明)明治10 年代
30	2	12	1区	S002	鉛床	陶器	壺	口径:(14.0) 高さ:(10.0)	細灰褐色	輪轆成形	長石釉・コバルト	染付:三方唐文	
30	3	12	1区	S002	鉛床	陶器	行平	口径:(22.1) 高さ:(7.0)	淡褐色	輪轆成形	素焼	割傷	
30	4	11	1区	S002	鉛床	陶器	壺	口径:(9.3) 高さ:1.5 最大径:9.3	灰色	輪轆成形	長石釉		測定章付:石見高文、蓋 付

調査 番号	発見 年度	出土 状況	出土 地点	出土 層位	種別	名称	法量(内蔵元簿) の 備考	胎土	成形	胎質・顔料	文様・装飾	備考	
30	5	11	1区	S802	粘床	陶器 (土瓶)蓋	口径: 8.1 高さ: 1.5 底径: 4.5	灰色	輪轆成形、高 取足	灰石輪		丸蓋のみ	
30	6	12	1区	S802	粘床	甕蓋 掛付 (甲斐ハタ)	口径: 3.0 高さ: 4.3 底径: 1.45	褐色	手捏ね				
30	7	12	1区	S802	粘床	甕蓋具 掛付(ハタ)	最大径: 8.21 口径: 3.9 高さ: 4.7	灰色	輪轆成形			取付足×1→	
30	8	11	1区	S805	甕蓋具	掛付 (ヌクハ、ハタ)	最大径: 17.2 口径: 29.2 高さ: 11.8 底径: 16.4	褐色	ハタ: 輪轆成 形、ヌクハ: 手 捏り成形			取付足×1→	
30	9	11	1区	S802	粘床	甕蓋具	口径: 26.2 高さ: 7.2 底径: 2.4	褐色	タタラ成形			コビテ蓋	
30	10	11	1区	S802	粘床	甕蓋具 輪轆掛付	口径: 9.9 高さ: 1.40 底径: 45.0	灰褐色	輪轆成形	灰石輪			
30	11	12	1区	5号炉	陶器	蓋	口径: 11.2 高さ: 2.2 底径: 3.2	深褐色	挽作り成形	赤漆輪、鉄輪		蓋の裏に黒い、蓋の 縁に黄・赤・黒文 様状文・赤漆文	
30	12	12	1区	S646	粘床	陶器	口径: 113.5	灰色	挽作り成形	灰石輪			
30	13	12	1区	S646	粘床	陶器	口径: 23.2	灰褐色	挽作り成形	赤漆輪		蓋底により輪の発色不良	
30	14	12	1区	S646	粘床	土製品	磁鉢		深褐色	挽作り成形		内面: 二次焼成	
30	15	12	1区	S646	粘床	磁器	硝子ビン帽子 口径: 5.0	白リオ	プレス成形	透明輪	白磁	磁鉢	
32	1	13	1区	S805 956	陶器	燗瓶足跡	口径: 20.4	灰色	輪轆成形	灰石輪			
32	2	13	1区	S805 956	陶器	蓋	口径: 110.8	灰褐色	挽作り成形	灰石輪			
32	3	13	1区	S805 956	磁器	染付筒	口径: 11.6	白色	挽作り成形				
32	4	13	1区	S805 956	陶器	掛付(ハタ)	最大径: 21.2 口径: 3.4 高さ: 17.45	灰色	輪轆成形	灰石輪		鑑定書: 惣柄系、年代別 9C、第2四半期	
32	5	13	1区	S805	陶器	掛付(ヌクハ)	最大径: 15.35 口径: 10.2 高さ: 17.8	7.599/2 緑褐色	挽作り成形			内面: 土器の付加物 が多く付着	
32	6	13	1区	S805	陶器	掛付(ヌクハ)	最大径: 19.0 口径: 10.8 高さ: 15.6	灰褐色	挽作り成形			上面にアクリル塗布	
32	7	13	1区	S805	陶器	掛付(ヌクハ)	最大径: 22.2 口径: 12.8 高さ: 16.9	3.5mm以下の硝子茶 多き含む 7.205 灰褐色	挽作り成形			蓋の裏に黒い、縁付着	
32	8	13	1区	S805	陶器	掛付(ヌクハ)	最大径: 16.9 口径: 33.4 高さ: 10.5	1→3mmの硝子茶 多き含む 10.092/2 灰白色	挽作り成形			蓋の裏、蓋の裏面に硝子茶	
34	1	12	1区	S302	陶器	丸形瓶	口径: 111.0	灰色	輪轆成形	灰石輪			
34	2	12	1区	S302	陶器	甕蓋	口径: 17.2 高さ: 21.2	灰色	輪轆成形	灰石輪、コリド	染付: 洗し掛け		
34	3	12	1区	S302	陶器	掛付(ヌクハ)	最大径: 21.0	灰褐色	挽作り成形				
34	4	12	1区	S302	陶器	掛付(ヌクハ)	最大径: 17.5	灰石を多く含む 深褐色	挽作り成形			上面: 黄	
34	5	12	1区	S302	陶器	磁鉢	口径: 18.0	深褐色	挽作り成形				
34	6	12	1区	S302	瓦	軒瓦	口径: 17	0.9mm多き含む 1.0mm以上の硝子茶多 き含む 10.091/4 深褐色	型押し		いじり溝		
34	7	12	1区	S302	石瓦	軒瓦	口径: 17	0.9mm以上の硝子茶多 き含む 10.091/4 深褐色	型押し		赤漆輪		
35	1	14	1区	S302	陶器	平瓦	口径: 1.7	深褐色	タタラ作り	赤漆輪		自然発色がかる	
35	2	14	1区	S302	陶器	椀	口径: 29.8 高さ: 3.6 口径: 23.6	1→3mmの硝子茶 7.239/1 灰白色	タタラ作り	赤漆輪	縁丸×2	鑑定書: 石見焼	
35	3	14	1区	S302	陶器	椀	口径: 29.8 高さ: 3.6 口径: 23.6	2.398/7 灰白色	タタラ作り			鑑定書: 在地系	
35	4	14	1区	S302	陶器	椀	口径: 30.0 高さ: 1.7	1mmの硝子茶含む 緑/灰白色	タタラ作り			焼いた後で穿孔したか	
35	5	14	1区	S302	陶器	椀	口径: 27.8 高さ: 25.5 口径: 21.7	1mmの硝子茶含む 緑/灰白色	タタラ作り			鑑定書: 在地系	
35	6	14	1区	S302	陶器	椀	口径: 29.9 高さ: 28.8 口径: 1.8	1mmの硝子茶含む 2.398/1 灰白色	タタラ作り			焼いた後で穿孔したか	
35	7	14	1区	S302	陶器	椀	口径: 27.7 高さ: 25.8 口径: 1.8	1mmの硝子茶含む 緑/灰白色	タタラ作り			鑑定書: 在地系	
36	1	14	1区	S302	陶器	椀	口径: 28.1 高さ: 29.7 口径: 2.2	1mmの硝子茶含む 2.398/1 灰白色	タタラ作り			鑑定書: 石見焼	
36	2	15	1区	S302	陶器	椀	口径: 28.0 高さ: 28.0 口径: 1.7	1mmの硝子茶含む 2.398/3 深褐色	タタラ作り			鑑定書: 石見焼	
36	3	15	1区	S302	陶器	椀	口径: 27.8 高さ: 28.4 口径: 2.4	1mmの硝子茶含む 10.091/6 深褐色	タタラ作り			鑑定書: 石見焼	
36	4	15	1区	S302	陶器	椀	口径: 28.0 高さ: 27.9 口径: 1.7	1mmの硝子茶含む 10.091/3 に近い黄 褐色	タタラ作り			鑑定書: 石見焼	
40	1	15	1区	石瓦1 969	土器	磁器	口径: 17.0 高さ: 4.8 口径: 1.7	白色	輪轆成形	透明輪、コリド	染付: 鞍山水文	蓋の: 久保焼、年代別: 近 現代、製: 「丸谷」	
40	2	15	1区	石瓦1 969	土器	磁器	口径: 13.1 高さ: 2.7 口径: 16.6	白色	輪轆成形	透明輪、コリド	コリド: 都竹梅文、黄 漆文	鑑定書: 瀬戸、多治見の 年代別: 1920年代→	
40	3	15	1区	石瓦1 969	土器	陶器	口径: 44.2	灰色	輪轆成形	鉄輪			
40	4	15	1区	石瓦1 969	土器	陶器	口径: 16.7	灰白色	輪轆成形			土製品	
40	5	15	1区	石瓦1 969	土器	陶器	口径: 18.6	灰色	輪轆成形	灰石輪			
40	6	15	1区	石瓦1 969	土器	陶器	口径: 11.9 高さ: 16.6	灰色	輪轆成形	赤漆輪		蓋: 3懸柄当	
40	7	15	1区	石瓦1 969	土器	陶器	口径: 27.0	灰褐色	輪轆成形	赤漆輪、鉄輪	鉄輪: 洗し掛け		
40	8	15	1区	石瓦1 969	土器	陶器	口径: 11.6 高さ: 11.2 口径: 2.5	灰色	輪轆成形	灰石輪		丸蓋のみ	
40	9	15	1区	石瓦1 969	土器	陶器	口径: 4.35 高さ: 115.4 口径: 16.3	灰色	輪轆成形	灰石輪、コリド	染付: 洗し掛け	縁のみ	
40	10	15	1区	石瓦1 969	土器	陶器	口径: 13.0 高さ: 11.3 口径: 1.7	灰色	輪轆成形	鉄輪	縁の「肥」白文、灰/黄 漆文	鑑定書: 石見焼 年代別: 9C→	
40	11	16	1区	石瓦1 969	土器	陶器	口径: 15.0 高さ: 2.0	褐色	輪轆成形			口径×7	

探出 番号	発見 年月	発見 場所	出土 状況	部位	種別	名称	測定値(内径×高さ)	胎土	成形	胎質・原料	文様・装飾	備考
40	12	16	1区	石室1 内内	土器	深鉢具 横台(1V7)	最大径:120.0 高さ:12.6	薄褐色	拍子り			初込足×2~
40	13	15	1区	石室1 内内	陶磁器	横瓦	最大径:27.8 高さ:30.9 厚さ:1.6	1mm大の砂粒含む D70%黄褐色	タタラ作り	乗持輪		横足高台:石瓦焼
40	14	16	1区	石室1 内内	陶磁器	横瓦	最大径:27.8 高さ:30.9 厚さ:1.85	1mm以下の砂粒含む 灰白色	タタラ作り			
41	1	16	1区	石室2 内内		横瓦	厚さ:1.7	1mm大の砂粒含む D70%にCaO・黄褐色	タタラ作り	乗持輪		
41	2	16	1区	石室2 内内		横瓦	最大径:28.1 高さ:28.8	褐色	タタラ作り	乗持輪		
42	1	17	1区	2面	灰土中	磁器	品行磁器類	口径:10.0 高さ:3.15	白色	輪締成形	透明磁器:コバルト、 クロム	陶器転写:吉祥丸文様(横足高台)有目録、年代群 なし
42	2	18	1区	2面	1~II層	陶器	丸形網	口径:10.7	茶	D5Y8/U 灰白色		
42	3	17	1区	2面	陶器	丸形網	口径:11.1 高さ:4.85	薄褐色	輪締成形	長石焼		
42	4	17	1区	2面	包含層	陶器	丸形網	口径:15.1 高さ:10.8 厚さ:4.7	灰色	輪締成形	乗持輪	
42	5	17	1区	2面	包含層	陶器	片口鉢	口径:7.4 高さ:6.8	灰褐色	輪締成形	長石焼	
42	6	17	1区	2面	包含層	陶器	深鉢	口径:7.4 高さ:13.5	灰色	拍子り成形	乗持輪	
42	7	17	1区	2面	陶器	深鉢	口径:7.5 高さ:16.0	灰色	拍子り成形	乗持輪		
42	8	17	1区	2面	陶器	深鉢	口径:7.9 高さ:9.1	緑褐色含む D70%の灰褐色	拍子り成形	乗持輪		
42	9	18	1区	2面	陶器	新緑用鉢本鉢	口径:9.0	灰色	輪締成形	乗持輪		
42	10	17	1区	2面	1~II層	陶器	香炉	口径:14.0	赤持輪	拍子り成形	乗持輪	
42	11	18	1区	2面	1~II層	陶器	眞鍮鍍鍍銀製	口径:17.2 高さ:4.5	茶	D5Y7/U 薄黄色	白化粘土、長石焼、 二黄泥焼、管文、 シロト	
42	12	17	1区	2面	包含層	陶器	結縁瓶	最大径:11.0 口径:5.3	灰褐色	成形(左右 取り含む)	乗持輪	
42	13	17	1区	2面	包含層	陶器	結縁瓶	最大径:12.7 口径:5.8	1mm大の砂粒含む D5Y8/U 灰白色	乗持輪		
42	14	17	1区	2面	灰土中	陶器	平形蓋	口径:11.1 高さ:1.6	灰色	輪締成形	長石焼	
42	15	17	1区	2面	灰土中	陶器	平形蓋	口径:11.2 高さ:1.7	1mm大の砂粒含む 灰白色	輪締成形	長石焼	
42	16	17	1区	2面	陶器	香盤	口径:7.2 高さ:2.5	薄褐色	輪締成形	長石焼		
42	17	17	1区	2面	灰土中	陶器	香盤	最大径:4.2 高さ:4.65	灰色	輪締成形	乗持輪	
42	18	18	1区	2面	I層	深鉢具	口径:2.1	灰褐色	手捏ね			横足高台
42	19	18	1区	2面	灰土中	深鉢具	口径:2.2	灰色	手捏ね			
42	20	17	1区	2面	1~II層	陶器	輪型片	最大径:6.0	茶	D5Y8/U 灰白色		
42	21	18	1区	2面	I層	深鉢具	口径:3.3 高さ:1.9	灰色	手捏ね			長石焼
42	22	18	1区	2面	灰土中	深鉢具	口径:3.5 高さ:2.15	白色	手捏ね			高台:7段階
42	23	18	1区	2面	深鉢具	火鏡穴	口径:9.4 高さ:9.8	褐色	手捏ね			自然輪と拍子輪
42	24	17	1区	2面	西壁面中	漆	口径:23.2	1mm以下の砂粒を含む D76/U 灰色	輪締成形	乗持輪(赤褐色)		内面:白色粘土充填
43	1	18	1区	2面	包含層	深鉢具	口径:6.8 高さ:1.15	褐色	輪締成形			拍子足×4
43	2	18	1区	2面	包含層	深鉢具	口径:9.6 高さ:1.6	薄褐色	輪締成形			初込足×6
43	3	18	1区	2面	包含層	深鉢具	口径:11.2 高さ:2.0	褐色	輪締成形			初込足×6、前置:「F」
43	4	18	1区	2面	包含層	深鉢具	口径:13.7 高さ:2.7	灰褐色	輪締成形			拍子足×5、前置:不明
43	5	18	1区	2面	包含層	深鉢具	口径:14.3 高さ:4.5	緑灰褐色	輪締成形			初込足×2、前置:「F」
43	6	18	1区	2面	包含層	深鉢具	口径:18.1 高さ:2.7	薄褐色	輪締成形			拍子足×4~
43	7	18	1区	2面	包含層	深鉢具	口径:21.7 高さ:4.4	1~3mmの砂粒含む D70%の黄褐色	輪締成形			初込足×7、前置:前置 瓦
43	8	18	1区	2面	包含層	丸瓦	口径:6.2 高さ:11.2 厚さ:2.2	灰色(灰石含む)	拍子り			高台:1~5 黄灰褐色
43	9	19	1区	2面	1~II層	石製品	鏡	口径:11.2 高さ:2.2 厚さ:0.9 口径:25.8				
43	10	19	1区	2面	1~II層	石製品	鏡石	口径:12.1 高さ:4.8 厚さ:1.9 口径:35.3				
43	11	19	1区	2面	V層	五輪餅	火輪	口径:11.4 高さ:6.1 厚さ:1.05				
44	1	19	1区	S302	灰土中	銅製品	埋管	口径:16.5 高さ:18.9				
44	2	19	1区	中央	洋品	鉄製品	ボルト	口径:1.7 高さ:1.1 長さ:186.0				
44	3	19	1区	工場址	洋品	鉄製品	ヤットコ	口径:4.4 高さ:1.6 長さ:11.4				ボルトの横 欠損
44	4	19	1区	2面	灰土中	鉄製品	鎌	口径:18.7 刃幅:4.9 高さ:15.3 長さ:140.0 口径:4.3				鎌刃径 0.5m
52	1	31	2区	S804	粘土土 土層	陶器	平形蓋	口径:1.6 最大径:12.6	緑茶 D5Y7/U 灰白色	輪締成形		長石焼(薄・緑)

採出 番号	産出 回数	発見 回数	出土 地点	層位	種別	種類	産出量(内訳)	粘土	成形	胎土・原料	文様・装飾	備考
65	1	33	2区	SX01	陶器	香蓋	口径: 11.6 高さ: 5.1 底径: 12.2 寸法公差: 2.0	泥	輪轉成形	長石釉(黒・緑灰色)、 コ/60	発行: 三方流し	
65	2	33	2区	SX01	陶器	香蓋	口径: 11.2 高さ: 3.9 最大径: 14.6 寸法公差: 6.2 寸法公差: 9.1	わずかに小砂粒を含む 2.5Y7/2 黄褐色	輪轉成形	長石釉(黄灰色)		内面: 磨台痕
65	3	33	2区	SX01	陶器	香蓋	口径: 9.9 高さ: 3.6 最大径: 12.2 寸法公差: 2.1	緑褐色 10YR7/3 黄褐色	輪轉成形	長石釉(緑灰色)、コ 6/60	発行: 曜焼文様なし	
65	4	33	2区	SX01	陶器	平皿蓋	口径: 1.95 高さ: 12.7 寸法公差: 10.2	10YR7/2 に近い黄 褐色	輪轉成形	長石釉(緑灰色)		
65	5	33	2区	SX01	陶器	平皿蓋	口径: 1.6 高さ: 13.4 寸法公差: 11.8	2.5Y7/2 黄褐色	輪轉成形	長石釉(緑灰色)		
65	6	33	2区	SX01	陶器	丸形瓶	口径: 5.2 高さ: 6.0 寸法公差: 6.0	緑褐色 10YR8/4 黄褐色	輪轉成形	長石釉(黄褐色)		上縁~内縁の一部が古 色の釉が点々と見える。胎 作痕
65	7	33	2区	SX01	陶器	丸形瓶	口径: 5.3 高さ: 5.1 寸法公差: 5.1	緑褐色 10YR8/6 黄褐色	輪轉成形	長石釉(黄褐色)		上縁部分で釉が落ちる。 磨台痕
65	8	33	2区	SX01	陶器	丸形瓶	口径: 5.2 高さ: 5.1 寸法公差: 5.1	2.5Y7/2 黄褐色	輪轉成形	長石釉(緑灰色) 二重穴付		透光穴
65	9	33	2区	SX01	陶器	香蓋	寸法公差: 65.0)	白色の砂粒を石ず かに含む 2.5YR7/4 に近い、橙 褐色	輪轉成形	赤黄釉(赤褐色)		内面: 磨台(ハV)痕×2
65	10	33	2区	SX01	陶器	磁鉢	口径: 120.4) 高さ: 10.5 底径: 111.0)	10YR7/2 に近い黄 褐色	接作り成形	赤黄釉(赤褐色)		裏面磨き直。27 条単位
65	11	33	2区	SX01	陶器	磁鉢	口径: 33.5	緑褐色 2.5Y7/2 黄褐色	接作り成形	赤黄釉(赤褐色)		21 条単位
65	12	33	2区	SX01	陶器	磁鉢	口径: 29.6)	わずかに白色の砂 粒を含む 10Y7/3 に近い、黄 褐色	接作り成形	赤黄釉(赤褐色)		27 条単位
65	13	33	2区	SX01	陶器	磁鉢	口径: 22.6	黄褐色 2.5YR7/1 灰白色	接作り成形	長石釉(黒・緑灰色)		
65	14	33	2区	SX01	陶器	磁鉢	口径: 25.2)	黄褐色 2.5Y7/1 灰白色	接作り成形	長石釉(黒・緑灰色)		
65	15	33	2区	SX01	土師質土師	土師	口径: 115.0) 高さ: 21.6 底径: 115.0)	わずかに砂粒を含む 2.5YR8/3 黄褐色	輪轉成形			外面に磨台痕
65	16	33	2区	SX01	陶器	壺	口径: 115.0) 高さ: 21.6 底径: 115.0)	泥 10YR7/2 に近い黄 褐色	接作り成形	赤黄釉(赤褐色)、鉄 釉	発行: 三方流し	内面: 磨台(ハV)痕×4
65	17	33	2区	SX01	陶器	壺	口径: 116.0) 高さ: 19.45 底径: 113.5)	泥 2.5Y7/1 灰白色	接作り成形	赤黄釉(赤褐色)		内面: 磨台(ハV)痕×7、 溝3 数箇所
65	18	33	2区	SX01	陶器	壺	口径: 14.2 高さ: 16.4 底径: 10.0)	泥 2.5Y7/2 灰白色	接作り成形	赤黄釉(赤褐色)		溝3 数箇所
65	19	33	2区	SX01	陶器	壺	口径: 16.2	緑褐色 10YR7/1 灰白色	接作り成形	長石釉(黒・緑灰色)、 コ/60	発行: 三方流し	裏面磨き直
65	20	33	2区	SX01	陶器	壺	口径: 15.4	泥 10YR7/2 に近い黄 褐色	接作り成形	長石釉(黒・緑灰色)、 コ/60	発行: 灰し、磨台	内面: 白色粘土付着
65	21	33	2区	SX01	陶器	壺	口径: 20.6)	緑褐色 2.5Y7/2 黄褐色	接作り成形	赤黄釉(赤褐色)		磨台部分に灰 土層が外面に部分的に残 存
65	22	33	2区	SX01	陶器	壺	口径: 14.2)	緑褐色 10YR7/3 に近い黄 褐色	接作り成形	赤黄釉(赤褐色)		磨台部分に灰土 層が残り、磨台
65	23	33	2区	SX01	土師質土師	内耳 (五重穴蓋付)		黄褐色	手捏ね			
66	1	34	2区	SX01	陶器	磁鉢	口径: 105.4) 高さ: 14.3 底径: 100.2)	砂粒を含む 2.5YR8/3 黄褐色	接作り成形			磨台を削り た丸状に直。わずかに磨 台位置
66	2	34	2区	SX01	陶器	磁鉢	口径: 131.0) 高さ: 13.5 底径: 115.4)	少量の白色の砂 粒を含む 2.5YR8/6 黄褐色	輪轉成形			磨台を削 りた丸状の狭い寸法
66	3	34	2区	SX01	陶器	磁鉢	口径: 13.9 高さ: 17.0)	少量の砂粒を含む 2.5YR8/4 黄褐色	接作り成形			磨台を削り 磨台の内縁から水後さ穴
66	4	34	2区	SX01	陶器	磁鉢	口径: 12.4 高さ: 16.6)	砂粒を含む 10YR8/4 黄褐色	接作り成形			磨台を削り 磨台の内縁から水後さ穴
66	5	34	2区	SX01	陶器	浅形鉢	口径: 45.0)	砂粒を含む 黄褐色	接作り成形			
66	6	34	2区	SX01	陶器	浅形鉢	口径: 45.0)	砂粒を含む 2.5YR7/4 に近い黄 褐色	接作り成形			
67	1	34	2区	SX01	陶器	樽台(ハV)	最大径: 100.2) 高さ: 2.1 底径: 75.8)	黄褐色	輪轉成形			発行痕×5、磨台を削り
67	2	34	2区	SX01	陶器	樽台(ハV)	最大径: 100.2) 高さ: 4.0 底径: 75.8)	黄褐色	輪轉成形			発行痕×5、磨台を削り
67	3	34	2区	SX01	陶器	樽台(ハV)	最大径: 9.2 高さ: 3.2	黄褐色	輪轉成形			発行痕×4、磨台を削り、磨 台に溝痕
67	4	34	2区	SX01	陶器	樽台(ハV)	最大径: 114.3) 高さ: 4.2	1~2mmの砂粒、鉄 質土を含む白色の砂 粒を多く含む 2.5YR8/1 黄褐色	輪轉成形			発行痕×3、磨台を削り、磨 台に溝痕
67	5	34	2区	SX01	陶器	樽台(ハV)	最大径: 213.0) 高さ: 5.2 底径: 171.2)	黄褐色	輪轉成形			発行痕×2、磨台 を削り
67	6	34	2区	SX01	陶器	樽台(内耳状)	口径: 2.1 高さ: 2.1	黄褐色	輪轉成形			裏面磨き直
69	1	35	2区	水原北	陶器	香蓋	口径: 14.8) 高さ: 5.1 最大径: 19.8) 寸法公差: 65.0)	白色の砂粒を含む 2.5Y6/2 灰黄色	輪轉成形	赤黄釉(赤褐色)		磨台: 「五」二十土、輪轉 跡
69	2	35	2区	水原北	陶器	磁鉢	口径: 13.6) 高さ: 5.6 底径: 17.0)	わずかに砂粒を含む 2.5YR7/1 黄褐色	接作り成形	赤黄釉(赤褐色)		34 条単位。磨台に磨台の 残存。磁鉢跡
69	3	35	2区	水原北	陶器	磁鉢	口径: 10.5) 高さ: 5.6 底径: 10.5)	わずかに砂粒を含む 2.5YR7/1 黄褐色	接作り成形	赤黄釉(赤褐色)		32 条単位。磁鉢跡
69	4	35	2区	水原北	陶器	壺	口径: 85.0)	黄褐色 2.5YR8/3 黄褐色	接作り成形		発行: 本明	
69	5	35	2区	水原北	陶器	片口鉢	口径: 122.4)	黄褐色 2.5YR8/3 黄褐色	接作り成形			
69	6	35	2区	水原北	陶器	磁鉢	口径: 106.6)	黄褐色 2.5YR8/3 黄褐色	接作り成形			
69	7	35	2区	水原北	陶器	磁鉢	口径: 129.2)	黄褐色 2.5YR8/3 黄褐色	接作り成形			

調査 番号	測点 番号	発見 回数	出土 地点	層位	種別	名称	法量口内実元 径(φ)	胎土	成形	釉薬・顔料	文様・装飾	備考
69	8	35	2区	水路北	灰皿類	盛鉢	上径：14.6 高さ：12.6 口径：119.0	1mm2の凸状の筋 を少し含む 2/350/4 淡黄褐色	挽作り成形			基部：板子足
69	9	35	2区	水路北	灰皿類	盛鉢	上径：20.0	1mm2の凸状の筋を 少し含む 2/350/3 淡黄褐色	挽作り成形			静止糸切 基部：粘土付着
69	10	35	2区	水路北	灰皿類	焼鉢(タケ)	口径：17.4	3mmの凸状を多く含む 10/95/4 に近い黄 褐色	挽作り成形	赤褐色(赤褐色)		下部：割れ付着 被熱して赤褐色にガラス 化
69	11	35	2区	水路北	灰皿類	焼鉢(タケ)	最大径：29.0	1～3mmの凸状を 含む 10/98/2 灰白色	挽作り成形			ガラス化(赤褐色)。基部 割れ付着。基部：穿孔
69	12	35	2区	水路南 方	灰皿類	焼鉢(ハツ)	最大径：17.8 高さ：7.8	割れを多く含む 2/350/3 淡黄褐色	縦線成形			割れ足×7。全体に割れ 付着
69	13	36	2区	水路北	土製品	土管	最大径：15.2 口径：13.4	1～3mmの凸状を 含む 10/98/2 灰白色	挽作り成形			外周：割れ目露出。基部： 割れ付
76	1	36	2区	水路東	黄色粘土 器	香盤	上径：13.8 高さ：9.7 最大径：18.0 つみみ径：2.9	胎土	縦線成形	赤褐色(赤褐色)。鉄 釉	染付：三方流し	規定焼込み。底面付着
76	2	36	2区	水路東	黄色粘土 器	香盤	高さ：5.6 最大径：17.5 つみみ径：1.5	胎土	縦線成形	灰石輪(灰色)。コ ロ付	染付：三方流し	割込み
76	3	36	2区	水路東	黄色粘土 器	香盤	上径：13.4 高さ：5.6 最大径：17.4 つみみ径：1.7	胎土	縦線成形	灰石輪(薄い緑色)。 コロ付	染付：三方流し	焼付(ハツ)痕×5。割 れ目
76	4	36	2区	水路東	黄色粘土 器	香盤	高さ：5.5 最大径：17.8 つみみ径：1.7	胎土	縦線成形	灰石輪(淡緑色)。コ ロ付	染付：三方流し	割込み
76	5	36	2区	水路東	黄色粘土 器	香盤	上径：14.0 高さ：5.5 最大径：17.9 つみみ径：1.7	胎土	縦線成形	灰石輪(薄い緑色)。 コロ付	染付：三方流し	割込み
76	6	36	2区	水路東	黄色粘土 器	香盤	高さ：5.5 最大径：18.6 つみみ径：1.9	胎土	縦線成形	赤褐色(赤褐色)。鉄 釉	染付：三方流し	割込み
76	7	36	2区	水路東	黄色粘土 器	香盤	上径：13.9 高さ：5.5 最大径：17.9 つみみ径：1.7	胎土	縦線成形	赤褐色(暗黄褐色)。鉄 釉	染付：三方流し	焼付の痕(径：7.4)残る。 割込み
76	8	36	2区	水路東	黄色粘土 器	香盤	高さ：5.4 最大径：17.7 つみみ径：1.7	胎土	縦線成形	赤褐色(黄褐色)。鉄 釉	染付：三方流し	焼付の痕(径：7.3)弱く 残る。割込み
76	9	36	2区	水路東	黄色粘土 器	香盤	上径：11.1 高さ：5.2 最大径：16.9 つみみ径：1.6	胎土	縦線成形	赤褐色(赤褐色)		焼付の痕(径：6.8)残る。 割込み
76	10	36	2区	水路東	粘土器	香盤	高さ：5.4 最大径：18.1 つみみ径：1.7	わすかに研粒を含む 2/37/2 灰黄色	縦線成形	灰石輪(薄い緑色)。 コロ付	染付：三方流し	割込み
76	11	36	2区	水路東	陶器	香盤	高さ：5.1 最大径：17.9 つみみ径：1.5	胎土	縦線成形	灰石輪(薄い緑色)。 コロ付	染付：三方流し	割込み
76	12	36	2区	水路東	陶器	香盤	上径：14.2 高さ：5.1 最大径：18.2 つみみ径：1.7	胎土	縦線成形	灰石輪(薄い緑色)。 コロ付	染付：三方流し	白色粘土付着。割込み
76	13	36	2区	水路東	陶器	香盤	高さ：5.2 最大径：17.4 つみみ径：1.7	胎土	縦線成形	灰石輪(薄い緑色)。 コロ付	染付：三方流し	割込み
76	14	36	2区	水路東	陶器	香盤	上径：9.5 高さ：5.2 最大径：19.8 つみみ径：1.8	胎土	縦線成形	灰石輪(薄い灰色)。 コロ付	染付：三方流し	つまみ付近にゆがみ。割 込み
76	15	36	2区	水路東	陶器	九角瓶	高さ：4.7 口径：4.9 口径：19.2	胎土	縦線成形	灰石輪(薄い緑色)		内面に割れ目。酸化欠
76	16	36	2区	水路東	粘土器	篋	高さ：20.3 口径：18.8 口径：15.0	胎土	挽作り成形	赤褐色(赤褐色)		内面：溝痕(ハツ)し。基部 溝痕(トナリ)痕。基部： 灰濁り。裏3箇所割
76	17	36	2区	南天箱 北井 跡赤庭	土製品	埋戻カ	口径：22.0 口径：15.6	研粒を含む 5/8/4 淡褐色	挽作り成形			
76	18	36	2区	水路東	粘土器	灰皿(タケ)	口径：22.0 口径：15.6	1～3mmの凸状を 多く含む 10/95/1 灰白色	縦線成形	赤褐色(赤褐色)		口の中心に木材が存在し ていたが、乾燥して抜け 落ちた。表面が浅色
80	1	37	2区	南	陶器	香盤	上径：12.0 高さ：4.6 最大径：16.2 つみみ径：1.8	胎土	縦線成形	灰石輪(薄い緑色)		基部にハツむけ跡。割込み
80	2	37	2区	土1	陶器	平形蓋	直径：6.8 高さ：1.3 最大径：8.9	白色の研粒をわず かに含む 2/37/2 灰黄色	縦線成形	灰石輪(薄い緑色)		
80	3	37	2区	南	惣巻	平形蓋	口径：4.4 高さ：2.0 最大径：12.7	胎土	縦線成形	赤褐色(赤褐色)		
80	4	36	2区	南	陶器	片口鉢	口径：21.3	胎土	挽作り成形	灰石輪(薄い緑色)		
80	5	37	2区	南	陶器	片口鉢	口径：17.5 口径：7.4	胎土	挽作り成形	灰石輪(薄い緑色)		内底：溝痕(ハツ)痕×6
80	6	37	2区	南	陶器	片口鉢	口径：13.2 高さ：7.2 口径：6.4	胎土	挽作り成形	灰石輪(薄い緑色)		内底：溝痕(ハツ)痕×5
80	7	36	2区	1区	2層	陶器	控鉢	口径：13.2	胎土	挽作り成形	灰石輪(薄い緑色)	口縁部に歪む焼きの痕
80	8	36	2区	南	陶器	控鉢	口径：17.0	胎土	挽作り成形	灰石輪(薄い緑色)		内面にハツの溝 痕と割れ目付着
80	9	37	2区	南	惣巻	篋	口径：17.4	研粒を含む 2/37/2 灰黄色	タタラ作り	赤褐色(赤褐色)		外からの分割片露出を疑 う。
81	1	38	2区	T-1	粘土器	灰皿類	口径：11.3 口径：13.0	わすかに研粒を含む 2/350/5 淡黄褐色	挽作り成形			内周から穿孔 静止糸切

調査 番号	遺物 番号	発見 時期	出土 状況	部位	種別	素材	加工・内装・元 装飾	地土	成形	地層・地質	文様・装飾	備考	
81	2	38	2区	1・1	粘土層	盛鉢	口径：29.6 高さ：14.2 底径：19.8	1～2mmの白色砂粒を 少し含む 07907/3 灰黄色 底径：1～2mmの白 色砂粒を多く含む 25797/4 に近い橙 色	胎作り成形			跡止木切痕ナシ	
81	3	38	2区		包含層	家道具	最大径：6.1 高さ：2.0	07907/3 灰黄色 胎部：黄赤 色57/2 灰白色	輪縮成形			短足型（陶製土器）×4、 回転糸切	
81	4	38	2区		包含層	家道具	最大径：12.5 高さ：19.2	14号層を含む 07907/2 に近い黄 褐色	半環状成形			上部面端 ガラシ化し褐色 を呈す	
81	5	38	2区		包含層	家道具	最大径：8.1 高さ：2.7	1～2mmの白色砂粒 を多く含む 25777/3 灰白色	輪縮成形			短足型×7、回転糸切、射 火跡付	
81	6	38	2区		面	家道具	最大径：7.0 高さ：1.9	07907/2 の白色砂粒 を多く含む 0776/6 褐色	輪縮成形			短足型×7、回転糸切	
81	7	38	2区		包含層	家道具	最大径：6.2 高さ：3.1	07907/3 灰白色 胎部：黄赤 色57/2 灰白色	輪縮成形			短足型×5、回転糸切	
81	8	38	2区		包含層	家道具	最大径：15.7 高さ：4.1	07907/2 の白色砂粒 を多く含む 25797/2 灰白色	輪縮成形			短足型×7、回転糸切、ア ルミナ跡付	
81	9	38	2区		面	家道具	最大径：14.8 高さ：4.5	1～2mmの白色砂粒 を含む 07971/1 灰白色	輪縮成形			短足型×6、回転糸切、射 火跡付	
81	10	38	2区		包含層	家道具	最大径：(17.2) 高さ：5.3	07907/2 の白色砂粒 を含む 25777/2 灰黄色	輪縮成形			短足型×7、内面に傷の 染み有り	
81	11	38	2区		面	家道具	最大径：13.8 高さ：3.5	黄褐色	輪縮成形			短足型×4、回転糸切	
81	12	38	2区		包含層	家道具	最大径：16.4 高さ：4.2	白色の砂粒を少 量含む 07982/3 黄褐色	輪縮成形			短足型×6、回転糸切 内面に傷の染み	
81	13	38	2区		包含層	盛鉢	最大径：6.6 高さ：3.1	黄褐色	輪縮成形			回転糸切、長石輪付	
81	14	38	2区		面	包含層	家道具	最大径：5.9 高さ：2.6	07907/2 の白色砂粒 を多く含む 25777/3 黄褐色	輪縮成形			上面に黄褐色の赤味輪に 赤褐色の点がつく
83	1	38	2区	5807	陶器	平形蓋	口径：7.0 高さ：1.4	胎部 25797/2 灰黄色	胎作り成形	長石輪（緑灰色）		外面端に射火跡付 内面に傷の染み（3.0cm） 残る	
83	2	38	2区	5K34	陶器	蓋	口径：13.0	胎部 25797/2 灰黄色	胎作り成形	赤味輪（赤褐色）		胎部外面 縁にタタキ	
83	3	38	2区	5K36	陶器	蓋	胎部 25796/2 灰褐色	胎作り成形	赤味輪（赤褐色）			深み凹ひで、外面に赤 褐色の点状付着。外面に 少量の自然付着痕あり、 焼成時に凝縮したか？	
83	4	38	2区	5807	家道具	盛鉢	口径：5.3 短足：5.0 高さ：1.3	胎部 25797/3 黄褐色	胎作り成形			短足型×4～7、ひび割れ 深い	
83	5	38	2区	5K36	家道具	盛鉢	口径：12.5 高さ：19.0 底径：11.9	胎部 25796/4 赤褐色	胎作り成形			内面に赤味輪が飛び散 っている	
83	6	38	2区	5K34	家道具	レンガ	幅：6.3以上 高さ：5.9	胎部を多く含む 25797/3 に近い橙 色	型作り			1面に10ナシを打す ワ・サビ付き	
85	1	39	2区	二次遺 成	砂層	陶器	胎部 最大径：16.6 口径：27.7	胎部 25797/3 黄褐色	輪縮成形	長石輪（黄褐色） コシバト	短足：三方差し	短足跡付着、中央厚し、 縁狭み	
85	2	39	2区	二次遺 成	陶器	蓋	口径：9.0 高さ：10.7 底径：6.9	胎部 2577/2 灰黄色	輪縮成形	赤味輪（赤褐色）			
85	3	39	2区	家道具 成土	陶器	盛鉢	口径：(35.3)	胎部 07982/3 黄褐色 赤褐色の砂粒を多く 含む	胎作り成形	赤味輪（赤褐色）		26 番号付	
85	4	39	2区	家道具 成土	陶器	蓋	口径：(42.6)	胎部 25797/3 黄褐色 底径 1～2mmの白 色砂粒を多く含む 07966/2 灰黄色 胎部：黄赤 色57/2 灰白色	胎作り成形	赤味輪（赤褐色）	胎部：波文	溝2～3 箇所付	
85	5	39	2区	家道具 成土	家道具	盛鉢	最大径：8.0 高さ：1.9	胎部 07966/2 灰黄色 胎部：黄赤 色57/2 灰白色 胎部の地土に含む 赤褐色の砂粒を 多く含む	輪縮成形			赤味輪付着、短足型×5、 回転糸切	
85	6	39	2区	二次遺 成	家道具	盛鉢	最大径：9.9 高さ：5.5	胎部 25796/3 に近い黄 褐色	輪縮成形			短足型×6、回転糸切、 くぼみあり	
85	7	39	2区	家道具 成土	家道具	盛鉢	最大径：18.7 高さ：12.6	1～2mmの白色砂粒 を含む 25797/4 に近い橙 色	輪縮成形			短足型×6	
85	8	39	2区	二次遺 成	砂層	家道具	最大径：121.9 高さ：5.8	胎部 25797/2 灰白色 1～2mmの白色砂粒 を含む	輪縮成形			短足型×7～8	
85	9	39	2区	家道具 成土	家道具	盛鉢	最大径：14.8 高さ：3.2	胎部 07982/3 黄褐色 赤褐色の砂粒を 多く含む	輪縮成形			短足型×6、回転糸切	
85	10	39	2区	家道具 成土	家道具	盛鉢	最大径：24.5 高さ：11.2	胎部 07907/4 に近い黄 褐色	輪縮成形			上面 アロミナ粒木蓋に 付着、内面射火跡付、1 部内面に穴	
85	11	39	2区	家道具 成土	家道具	盛鉢	口径：(20.6)	胎部 25797/3 灰白色	輪縮成形			胎部に射火跡が深く付着	
85	12	39	2区	二次遺 成	土製品	埴輪a	最大径：(17.0)	胎部 少量の砂粒を含む 25797/3 褐色	輪縮成形			内面に黄褐色に剥離し ている	
85	13	39	2区	二次遺 成	土製品	埴輪a	最大径：(13.8)	胎部 少量の砂粒を含む 07982/2 灰白色	輪縮成形			胎部剥離して剥離し ている	
85	14	39	2区	家道具 成土	磁器	転花用白磁鉢	口径：(14.6)	胎部 07982/1 灰白色	輪縮成形	透明釉	白磁	端正前期～有田焼、平片 足付	
85	15	39	2区	家道具 成土	磁器	轉子	口径：(5.8)	胎部 25797/1 灰白色	型作り	黄赤 一部施釉			
86	1	40	2区	一次遺 成	陶器	平形蓋	口径：16.9 高さ：1.4 底径：(9.2)	胎部 07982/1 灰白色	胎作り成形				
86	2	40	2区	5K39	陶器	平形蓋	口径：1.4 高さ：1.4 底径：(9.2)	胎部 0772/2 灰白色	輪縮成形			長石輪（黄灰色）	
86	3	40	2区	5K39	陶器	蓋	口径：(11.9) 高さ：4.1 最大径：(15.6)	胎部 25787/1 灰白色	輪縮成形			長石輪（黄・緑灰色）	
86	4	40	2区	5K39	陶器	蓋	口径：(11.0) 高さ：3.8 最大径：(13.6)	胎部 25777/3 黄褐色	輪縮成形			内面に回転糸切のスタン プ、縁狭み	

機軸 番号	発注 番号	発注 図紙	加工 地点	組立 形式	種別	仕様	注量(円)内径(mm)	軸土	成形	軸差・材料	文種・裝飾	備考	
86	5	40	2	一次 造成	陶器	器	上径：8.1 軸差：9.1 器厚：6.0 最大径：10.0	素焼 2.378(1) 灰白色	縦軸成形	灰石軸(赤褐色)			
86	6	40	2	一次 造成	陶器	器	上径：12.6 軸差：11.55 器厚：8.2	素焼 2.577(2) 灰黄色	縦軸成形	灰石軸(赤褐色)			
86	7	40	2	一次 造成	陶器	器	上径：(11.3) 軸差：7.576(1) 灰白色	素焼 2.577(2) 灰黄色	縦軸成形	灰石軸(赤褐色)			
86	8	40	2	一次 造成	陶器	器	器厚：6.8	素焼 2.376(1) 灰白色	縦軸成形	灰石軸(赤褐色)			
86	9	40	2	一次 造成	陶器	器	器厚：(7.2)	素焼 2.576(2) に近い黄褐色	縦軸成形	灰石軸(赤褐色)		器底に内径の溝状の痕	
86	10	40	2	一次 造成	陶器	器台付押印型	下径：12.2 上径：15.2 器厚：9.4	素焼 2.577(2) 灰黄色	縦軸成形	灰石軸(赤褐色)		器底み切り	
86	11	40	2	一次 造成	陶器	器鉢	上径：15.2 器厚：11.5	素焼 5.972(2) 灰白色	旋作り成形	灰石軸(赤褐色)		器底中央、内面に器底部 体の痕跡を残す	
86	12	40	2	一次 造成	窯道具	器鉢	上径：(12.4) 器厚：3.1	素焼 2.376(1) 灰白色	縦軸成形	器鉢軸	白磁		
86	13	40	2	一次 造成	窯道具	縦軸受け (カンモ)	上径：128.0 器厚：3.1 器底径：114.8	素焼 2.376(1) 灰白色	縦軸成形	器鉢(黒褐色)			
86	14	40	2	一次 造成	ガラス製品	瓶	上径：11.7 軸差：4.8 器厚：2.9		型?			対角線に型の痕 内側に白色付着物	
86	15	40	2	一次 造成	ガラス製品	瓶	上径：2.5 軸差：21.0 器厚：8.0 器底径：5.4		型			器底にスタンプ	
86	16	40	2	一次 造成	窯道具	器台(ハリ)	最大径：10.2 軸差：2.7	1～2mmの白色結核を 含む 2.378(2) 灰白色	縦軸成形			短足×6、回転軸、 器底「1」に凸	
86	17	40	2	一次 造成	窯道具	器台(ハリ)	最大径：10.8 軸差：4.95	1～2mmの白色結核を 含む 2.378(2) 灰白色	縦軸成形			短足×6 器底み切り	
86	18	40	2	一次 造成	窯道具	器台(ハリ)	最大径：12.0 軸差：2.05	1mm以下の粉粒を 多く含む 2.378(2) 灰白色	縦軸成形			短足×3、足金部に比喩 してゐる	
86	19	40	2	一次 造成	窯道具	器台(メケ)	最大径：24.0 軸差：7.2	1mm以下の粉粒を 多く含む 2.378(2) 灰白色	旋作り成形	灰石軸(赤褐色)		上部に切込み、表面、穿孔、 器底、ガラス化	
86	20	40	2	一次 造成	窯道具	器鉢	上径：7.2	素焼 2.376(1) 灰白色	タタラ作り	自然物		丸アリ	
86	21	40	2	一次 造成	土製品	耐火レンガ	縦：11.6 厚さ：6.2	φ=10mmの円形結核を 含む 褐色	押型成形				
86	22	39	2	一次 造成	窯材	窯券	縦：23.5 厚さ：6.4						
87	1	41	2	一次 造成	陶器	器	上径：23.1 軸差：25.0 器厚：20.8	1～2mmの白色結核を 多く含む 2.577(2) 灰黄色	旋作り成形	灰石軸(赤褐色)、鉄軸	器鉢：三方洗し、 器底：三方洗し、磨 減文		器台：三方洗し、 器底：三方洗し、 器2～3磨減
87	2	41	2	一次 造成	陶器	器	上径：(27.2)	10mm以下の白色結核を 含む 2.577(2) 灰黄色	旋作り成形	灰石軸(赤褐色)、鉄軸	器鉢：三方洗し、磨 減文		器底に溝状の痕(ハリ)重 アリ
87	3	41	2	一次 造成	陶器	器	器厚：(20.0)	1mm以下の白色結核を 多く含む 2.577(2) 灰黄色	旋作り成形	灰石軸(赤褐色)			
87	4	41	2	一次 造成	陶器	器	上径：32.7 軸差：34.4 器厚：21.9	1mm以下の白色結核を 多く含む 2.577(2) 灰黄色	旋作り成形	灰石軸(赤褐色)、鉄軸	器鉢：三方洗し、磨 減文		器2～3磨
87	5	41	2	一次 造成	陶器	器	器厚：23.8	1～2mmの白色結核を 含む 2.577(2) 灰黄色	旋作り成形	灰石軸(赤褐色)			
87	6	41	2	一次 造成	陶器	器	上径：46.4 軸差：54.6 器厚：23.4	1～2mmの白色結核を 含む 2.577(2) 灰黄色	旋作り成形	灰石軸(赤褐色)	器鉢：三方洗し		器台(ハリ)縦×長、器2 ～3磨減
87	7	41	2	一次 造成	陶器	器	上径：23.0 軸差：23.0	1mm以下の白色結核を 含む 2.576(1) 灰白色	旋作り成形	灰石軸(赤褐色)、鉄軸	器鉢：三方洗し、磨 減文		大きく含む
87	8	41	2	一次 造成	陶器	器	上径：23.0 軸差：23.0	1mm以下の白色結核を 含む 2.576(1) 灰白色	旋作り成形	灰石軸(赤褐色)	器鉢：三方洗し、磨 減文		器台に再使用していないか?
87	9	41	2	一次 造成	窯道具	器台(メケ)	器厚：20.6 軸差：36.9	1～2mmの白色結核を 含む 2.576(1) 灰白色	旋作り成形	灰石軸(赤褐色)	器鉢：三方洗し、磨 減文		器底に再使用していないか?
94	1	42	2	北石 研	陶器	器鉢	上径：21.7 軸差：9.5 器厚：10.1	1mm以下の白色結核を 多く含む 2.578(2) 灰白色	旋作り成形	灰石軸(赤褐色)			器底に再使用していないか?
94	2	42	2	北石 研	陶器	器鉢	上径：28.6 軸差：11.5 器厚：13.9	1mm以下の白色結核を 多く含む 2.577(2) 灰黄色	旋作り成形	灰石軸(赤褐色)			29番車、重ね焼き器ア?
94	3	42	2	北石 研	陶器	器鉢	上径：23.7 軸差：13.6 器厚：6.5	1mm以下の白色結核を 多く含む 2.578(2) 灰白色	旋作り成形	灰石軸(赤褐色)			31番車、重ね焼き器多 数、口径が小さい
94	4	42	2	北石 研	窯道具	器鉢	上径：15.4 軸差：13.65 器厚：19.2	1mm以下の白色結核を 含む 2.578(2) 灰白色	旋作り成形	灰石軸(赤褐色)			器底に再使用していないか?
96	1	42	2	北石 研	陶器	器	上径：24.7 軸差：25.0 器厚：17.0	1mm以下の白色結核を 含む 2.578(2) 灰白色	旋作り成形	灰石軸(赤褐色)、鉄軸	器鉢：三方洗し、 器底：三方洗し、磨 減文		器台(ハリ)縦×長、器2 ～3磨減
96	2	42	2	北石 研	窯道具	器鉢	上径：31.4 軸差：14.4 器厚：17.0	1mm以下の白色結核を 含む 2.578(2) 灰白色	縦軸成形				二次造成、器片割面にも 痕跡、重ね焼き器、器 底み切り
97	1	43	2	北石 研	陶器	器	上径：46.2 軸差：57.6 器厚：23.6	1mm以下の白色結核を 含む 2.577(2) 灰黄色	旋作り成形	灰石軸(赤褐色)、鉄軸	器鉢：三方洗し、磨 減文		器台の痕、器2磨減
97	2	43	2	北石 研	窯道具	器台(メケ)	最大径：20.6	1mm以下の白色結核を 含む 2.578(2) 灰白色	旋作り成形	ガラス化			3ヵ所に切込みアリ 穿孔アリ断面にも焼 結
97	3	43	2	北石 研	窯道具	器台(メケ)	最大径：24.2	1～2mmの白色結核を 含む 2.578(2) 灰白色	旋作り成形	ガラス化			断面も焼結し、一部ガラ ス化、穿孔アリ
97	4	43	2	北石 研	土製品	レンガ	縦：21.4 厚さ：14.0 厚さ：12.4	1～2mmの白色結核を 含む 2.578(2) 灰白色	タタラ作り				一部ガラス化
97	5	43	2	北石 研	土製品	レンガ	縦：15.3 厚さ：9.6	1～2mmの白色結核を 含む 2.578(2) 灰白色	タタラ作り				他のレンガより小形、軸 の重れアリ
97	6	43	2	北石 研	土製品	レンガ	縦：21.4 厚さ：14.0 厚さ：12.4	1～2mmの白色結核を 含む 2.578(2) 灰白色	タタラ作り				ガラス化した部分が多い
97	7	43	2	北石 研	窯道具	火立	縦：22.4 厚さ：4.0	φ=6mmの円形結核を 含む 褐色	タタラ作り				コヒキ、表面目立

所属 番号	建物 番号	写真 図号	出土 階位	出土 地点	種別	素材	数量(口内)	出土 状況	形状	材質・原料	文様・装飾	備考	
97	8	43	2区	SK40	楽道具	火立	129 横:22.4 縦:18.25 上面:(12.1) 底面:7.3 底径:6.5	表面がガラス化に より不明 0.5%の黄褐色 0.04%の黒色 0.04%の赤褐色	タタラ作り			ガラス化	
100	1	43	2区	SK41	陶器	片口鉢	1 横:11.2 縦:7.3 底径:6.5	0.04%の黒色 0.04%の赤褐色	輪転成形	長石釉(緑灰色)			
100	2	43	2区	SK42	陶器	香炉	1 口径:(13.9) 底径:(11.3)	0.04%の黒色 0.04%の赤褐色	輪転成形	長石釉(赤褐色)、鉄 釉	鉄絵:黒し、緑し	焼付の面アリ	
100	3	43	2区	SK42	楽道具	舞台(メケ)	最大径:24.7	0.5%の黒褐色 0.04%の赤褐色	輪転成形	長石釉(赤褐色)	一部ガラス化		
100	4	43	2区	SK42	楽道具	舞台(メケ)	最大径:18.2	0.5%の黒褐色 0.04%の赤褐色	輪転成形	長石釉(赤褐色)		頂面に黒褐色の赤土層付 着	
100	5	44	2区	SK42	楽道具	鐘鉢	口径:(40.0) 底径:(36.0)	0.04%の黒褐色 0.04%の赤褐色	輪転成形	長石釉(赤褐色)			
100	6	44	2区	SK42	楽道具	鐘鉢	口径:(36.0) 底径:(32.0)	0.04%の黒褐色 0.04%の赤褐色	輪転成形	長石釉(赤褐色)			黄泥が塗しいので、かなり 使用されたか?
100	7	44	2区	SK45	楽道具	鐘鉢	口径:(32.0) 底径:(28.0)	0.5%の黒褐色 0.04%の赤褐色	輪転成形	長石釉(赤褐色)			
101	1	44	2区	SK41	土製品	レンガ	縦:20.2 横:19.0 高さ:19.0	10%の赤褐色を含む 0.04%の黒褐色	タタラ作り				一部赤褐色にガラス 化
101	2	44	2区	SK42	土製品	レンガ	縦:17.9 横:16.5 高さ:16.5	5%の赤褐色を含む 0.04%の黒褐色	タタラ作り				一部赤褐色にガラス 化
103	1	45	2区	Ⅱ	陶器	平形蓋	口径:1.75 最大径:11.4	0.04%の赤褐色を 含む	輪転成形	長石釉(灰色)、コ パルト	金付:調書文		
103	2	45	2区	1区	陶器	平形蓋	口径:9.8 最大径:7.7	0.04%の赤褐色 0.04%の黒褐色	輪転成形	長石釉(緑灰色)、コ パルト	金付:調書文		
103	3	45	2区	Ⅱ	陶器	香蓋	口径:7.5 最大径:4.0 高さ:11.2 寸法みね:2.5	0.04%の赤褐色を 含む	輪転成形	長石釉(緑褐色)			丸堀み
103	4	45	2区	Ⅱ	陶器	香蓋	口径:4.4 最大径:12.4 寸法みね:4.4	0.04%の赤褐色を 含む	輪転成形	長石釉(赤褐色)			丸堀み
103	5	45	2区	Ⅱ	陶器	香蓋	口径:3.8 最大径:12.8 寸法みね:2.3	0.5%の黒褐色 0.04%の赤褐色	輪転成形	長石釉(赤褐色)			丸堀み
103	6	45	2区	Ⅱ	陶器	香蓋	寸法みね:16.8	0.5%の黒褐色 0.04%の赤褐色	輪転成形	長石釉(赤褐色)			丸堀み
103	7	45	2区	Ⅱ	陶器	香蓋	口径:12.7 最大径:5.8 最大径:9.9 寸法みね:1.2	0.04%の赤褐色 0.04%の黒褐色	輪転成形	長石釉(緑褐色)			丸堀み
103	8	45	2区	Ⅱ	陶器	香蓋	口径:5.8 最大径:20.0 寸法みね:8.0	0.04%の赤褐色 0.04%の黒褐色	輪転成形	長石釉(赤褐色)、鉄 釉	鉄絵:三方立		丸堀み
103	9	45	2区	Ⅱ	陶器	香蓋	口径:11.0 最大径:4.8 高さ:5.25	0.04%の赤褐色 0.04%の黒褐色	輪転成形	長石釉(黄緑灰色)			
103	10	45	2区	Ⅱ	陶器	香蓋	口径:(10.0) 最大径:5.3 高さ:5.5	0.04%の赤褐色 0.04%の黒褐色	輪転成形	長石釉(赤褐色)			
103	11	45	2区	Ⅱ	陶器	香蓋	口径:(16.0) 最大径:3.2 高さ:3.9	0.04%の赤褐色 0.04%の黒褐色	輪転成形	長石釉(赤褐色)			窪み部分に灰かぶり多 く、少量の赤土
103	12	46	2区	Ⅱ	陶器	香蓋	口径:(13.0) 最大径:5.2 高さ:5.0	0.04%の赤褐色 0.04%の黒褐色	輪転成形	長石釉(赤褐色)			24番単位、片口鉢不明 舞台:彫刻の痕跡
103	13	45	2区	Ⅱ	陶器	香蓋	口径:(11.0) 最大径:11.6 高さ:8.0	0.04%の赤褐色 0.04%の黒褐色	輪転成形	長石釉(赤褐色)			
103	14	45	2区	Ⅱ	陶器	香蓋	口径:10.6	0.04%の赤褐色 0.04%の黒褐色	輪転成形	長石釉(赤褐色)			内面に灰泥による粗ら み多数。窪み部分に黒 色の灰かぶり?
103	15	45	2区	Ⅱ	陶器	香蓋	口径:(13.8)	0.04%の赤褐色 0.04%の黒褐色	輪転成形	長石釉(赤褐色)、鉄 釉	鉄絵:黒し、緑し		
103	16	46	2区	Ⅱ	陶器	香蓋	口径:(16.2)	0.04%の赤褐色 0.04%の黒褐色	輪転成形	長石釉(赤褐色)、鉄 釉	鉄絵:黒し、緑し		
103	17	46	2区	Ⅱ	陶器	香蓋	口径:14.0	0.04%の赤褐色 0.04%の黒褐色	輪転成形	長石釉(赤褐色)、鉄 釉	鉄絵:黒し、緑し		
103	18	45	2区	Ⅱ	陶器	香蓋	口径:11.0	0.04%の赤褐色 0.04%の黒褐色	輪転成形	長石釉(赤褐色)			
103	19	46	2区	Ⅱ	陶器	香蓋	口径:(11.0)	0.04%の赤褐色 0.04%の黒褐色	輪転成形	長石釉(赤褐色)			全体に灰泥
103	20	45	2区	Ⅱ	陶器	香蓋	口径:(15.0)	0.04%の赤褐色 0.04%の黒褐色	輪転成形	長石釉(赤褐色)			
103	21	45	2区	Ⅱ	陶器	香蓋	口径:13.8	0.04%の赤褐色 0.04%の黒褐色	輪転成形	長石釉(赤褐色)			焼付(17.1) 横×6
103	22	46	2区	Ⅱ	陶器	香蓋	口径:(34.8)	0.04%の赤褐色 0.04%の黒褐色	輪転成形	長石釉(赤褐色)			
103	23	46	2区	Ⅱ	陶器	香蓋	口径:(11.4)	0.04%の赤褐色 0.04%の黒褐色	輪転成形	長石釉(赤褐色)			内面に陶片(骨?)緑色の 灰石(1)が遺着
104	1	45	2区	Ⅱ	陶器	香蓋	口径:(15.4) 最大径:21.7 高さ:(16.5)	0.04%の赤褐色 0.04%の黒褐色	輪転成形	長石釉(黄緑灰色)、コ パルト	金付:黒し、緑し		
104	2	46	2区	Ⅱ	陶器	香蓋	口径:(25.0)	0.04%の赤褐色 0.04%の黒褐色	輪転成形	長石釉(赤褐色)			
104	3	45	2区	Ⅱ	陶器	香蓋	口径:(17.2)	0.04%の赤褐色 0.04%の黒褐色	輪転成形	長石釉(赤褐色)、鉄 釉	鉄絵:黒し、緑し		黄泥が塗しいので、かなり 使用されたか?
104	4	45	2区	Ⅱ	陶器	香蓋	口径:(19.1)	0.04%の赤褐色 0.04%の黒褐色	輪転成形	長石釉(赤褐色)			焼付(17.1) 横×8 焼付(17.1)
104	5	46	2区	Ⅱ	陶器	香蓋	口径:(41.4)	0.04%の赤褐色 0.04%の黒褐色	輪転成形	長石釉(赤褐色)			窪2〜3 磨耗面
104	6	46	2区	Ⅱ	陶器	香蓋	口径:(21.0)	0.04%の赤褐色 0.04%の黒褐色	輪転成形	長石釉(赤褐色)			
104	7	48	2区	Ⅱ	陶器	香蓋	口径:(26.0)	0.04%の赤褐色 0.04%の黒褐色	輪転成形	長石釉(赤褐色)			穿孔多数

調査番号	発見時期	出土地点	出土品	種別	特徴	法量(1)内蔵内容	胎土	成形	釉薬・顔料	文様・装飾	備考	
105	1	47	2区	瓦土	窯道具	焼付(ハタ)	最大径: 2.9 高さ: 1.9	10m2下の印模を写した 2.9/19.1 灰白色			焼付足×4 凹輪糸切	
105	2	47	2区	瓦土	窯道具	焼付(ハタ)	最大径: 10.8 高さ: 2.6	灰色			焼付足×6 凹輪糸切	
105	3	47	2区	瓦土	窯道具	焼付(ハタ)	最大径: 10.5 高さ: 1.9	10m2下の印模を写した 2.9/19.2 灰白色			焼付足×5 凹輪糸切	
105	4	47	2区	瓦土	窯道具	焼付(ハタ)	最大径: 12.9 高さ: 5.3	白色の印模を写した 10/19.1 灰白色			凹輪足×7、凹輪糸切 糸切: 不明	
105	5	47	2区	瓦土	窯道具	焼付(ハタ)	最大径: 10.2 高さ: 3.2	灰色			凹輪足×5、凹輪糸切、窪 底に磨耗している	
105	6	47	2区	瓦土	窯道具	焼付(ハタ)	最大径: 8.3 高さ: 2.9	灰白色			凹輪足×7、凹輪糸切、窪 底に磨耗している	
105	7	47	2区	瓦土	窯道具	焼付(ハタ)	最大径: 10.7 高さ: 9.1	10m2下の印模を写した 10/19.2 に近い黄 褐色			凹輪足×7、凹輪糸切	
105	8	47	2区	瓦土	窯道具	焼付(ハタ)	最大径: 13.0 高さ: 8.4	同褐色			凹輪足×5、凹輪糸切	
105	9	47	2区	瓦土	窯道具	焼付(ハタ)	最大径: 10.4 高さ: 2.9	灰褐色			凹輪足×6、凹輪糸切	
105	10	47	2区	瓦土	窯道具	焼付(ハタ)	最大径: 11.1 高さ: 5.5	褐色			凹輪足×6、凹輪糸切	
105	11	47	2区	瓦土	窯道具	焼付(ハタ)	最大径: 16.3 高さ: 4.3	淡黄色			凹輪足×7、凹輪糸切 糸切: 大(コ)×2	
105	12	47	2区	瓦土	窯道具	焼付(ハタ)	最大径: 16.9 高さ: 5.1	10m2下の印模を写した 10/19.4 成黄褐色			凹輪足×7、凹輪糸切 糸切: 1(七)	
105	13	47	2区	瓦土	窯道具	焼付(ハタ)	最大径: 16.6 高さ: 4.5	10m2下の印模を写した 10/19.4 灰白色			凹輪足×7、凹輪糸切 糸切: 1(七)	
105	14	47	2区	瓦土	窯道具	焼付(ハタ)	最大径: 13.6 高さ: 4.5	灰褐色			凹輪足×7、凹輪糸切	
105	15	47	2区	瓦土	窯道具	焼付(内陶装)	最大径: 7.85 高さ: 2.1	黄褐色			凹輪糸切	
105	16	47	2区	瓦土	窯道具	焼付(内陶装)	最大径: 7.3 高さ: 2.7	灰色			凹輪糸切	
105	17	47	2区	瓦土	窯道具	焼付(内陶装)	最大径: 6.8 高さ: 2.5				凹輪糸切、窪底に2箇所 黄褐色の焼付痕	
105	18	47	2区	瓦土	窯道具	焼付(内陶装)	最大径: 6.8 高さ: 2.5	右字が印模を写した 2.9/17.2 灰白色			凹輪糸切	
106	1	47	2区	北側	瓦土	窯道具	焼付(ハタ)	最大径: 19.8 高さ: 1.1	褐色			凹輪糸切
106	2	47	2区	南側	粘土層	窯道具	焼付(ハタ)	最大径: 26.9 高さ: 1.8	10m2下の印模を写した 多く含む 2.9/19.8 褐色			糸切跡ナシ
106	3	47	2区	南側	瓦土	土師製土	火筒器	最大径: 24.3 高さ: 2.1	褐色			ナシ
106	4	47	2区	瓦土	窯道具	焼付(ハタ)	高さ: 3.1 高さ: 5.1	10/19.4 に近い黄 褐色			糸切跡付	
106	5	47	2区	瓦土	窯道具	焼付(タテ)	最大径: 24.4 高さ: 10.1	10m2下の印模を写した 多く含む 2.9/19.8 褐色			焼付り成形 糸切跡(赤褐色)	
106	6	47	2区	瓦土	窯道具	焼付(タテ)	最大径: 17.6	褐色			焼付り成形	
106	7	47	2区	瓦土	窯道具	焼付(タテ)	最大径: 20.7	3m2下の印模を写した 多く含む 10/19.3 黄褐色			焼付り成形 糸切跡(褐色)	
107	1	47	73	水堀橋 東行	埴方メ	陶器	土師 上段: 35.9 中段: 13.4 下段: 19.7	1～4m2の白色砂粒を 多く含む 2.9/19.6 黄褐色			焼付り成形 糸切跡(赤褐色)、鉄 線: 三方流し、縦線 波状文・蓮文	
107	2	47	73	水堀橋 東行	埴方メ	陶器	土師 上段: 34.4 中段: 17.0 下段: 20.3	1～3m2の白色砂粒を 多く含む 10/19.7 に近い黄 褐色			焼付り成形 糸切跡(赤褐色)、鉄 線: 三方流し、縦線 波状文×2	
107	3	47	73	北水堀	埴方メ	陶器	土師 上段: 33.6 中段: 37.1 下段: 20.8	白色の小砂粒を少 量含む 5/19.5 明赤褐色			焼付り成形 糸切跡(赤褐色)、鉄 線: 三方流し、縦線 波状文・蓮文	
107	4	47	73	中央1区 東側	陶器	土師	上段: 44.1 中段: 53.8 下段: 20.8	小砂粒を多く 含む 10/19.4 に近い黄 褐色			焼付り成形 糸切跡(赤褐色)、鉄 線	
107	5	47	73	中央2区 東側	陶器	土師	上段: 42.2 中段: 54.1 下段: 20.8	白色の砂粒を多く 含む 2.9/19.3 黄褐色			焼付り成形 糸切跡(赤褐色)、鉄 線	
107	6	47	73	北	瓦土	陶器	土師 上段: 148.0 中段: 60.0 下段: 13.6	1～3m2の白色砂粒を 多く含む 2.9/17.1 黄褐色			焼付り成形 糸切跡(赤褐色)	
107	7	47	73	北	瓦土	陶器	土師 上段: 150.2 中段: 61.5 下段: 13.6	10m2の白色砂粒を 多く含む 2.9/17.4 黄褐色			焼付り成形 糸切跡(赤褐色)	
108	1	48	2区	二次造成	砂埴器	瓦	瓦 全長: 27.1 厚さ: 2.0	10m2の白色砂粒を 多く含む 2.9/17.2 灰白色			タタラ作り 糸切跡(同褐色)	
108	2	48	2区	P no1	瓦	薄瓦	全長: 24.8 厚さ: 1.8	1～3m2の砂粒を 多く含む 10/19.3 黄褐色			タタラ作り 糸切跡	
108	3	48	2区	北區区2	瓦土	瓦	瓦 全長: 28.2 厚さ: 1.8	白色の 10/19.3 灰白色			タタラ作り 糸切跡(同褐色)	
108	4	48	2区	南側 東明道 土	瓦	瓦	瓦 全長: 30.5 厚さ: 2.1	10m2下の印模を写した 多く含む 10/19.3 黄褐色			タタラ作り 糸切跡	
108	5	48	2区	瓦土	薄瓦	瓦	全長: 4.2 高さ: 0.5 厚さ: 0.6	10m2下の印模を写した 多く含む 2.9/17.2 灰白色			タタラ作り 糸切跡(褐色)	
109	1	48	2区	SK60	鉄製品	和釘	全長: 4.6 高さ: 0.6					
109	2	48	2区	二次造成	砂埴器	鉄製品	長さ: 1.1 厚さ: 1.5 高さ: 12.0					
109	3	48	2区	一次造成	砂埴器	鉄製品	長さ: 1.4 厚さ: 1.5 高さ: 12.0					
109	4	48	2区	北	瓦土	鉄製品	長さ: 1.4 厚さ: 0.4 高さ: 33.8 高さ: 18.8					
109	5	49	2区	P no26	鉄製品	鎌	長さ: 13.8 厚さ: 9.5mm					

国名	遺物 番号	発見 年月	発見 地区	出土 地帯	層位	種別	種類	注目(内径・高さ 単位)	胎土	成形	胎土・顔料	文様・装飾	備考
109	7	49	2	佐賀	新石器	土器	土器	口径:15.9 高さ:1.9	白	手捏			下関の近郊出土
114	1	52	3	佐賀	新石器	土器	胎土:5.1 最大径:15.9 高さ:1.65 口径:11.6 胎土:4.0 最大径:15.05 口径:10.2	1〜3mmの砂粒を含む 2.5Y7/3 黄褐色	輪転成形	赤味輪(茶色)			編み
114	2	52	3	佐賀	新石器	土器	胎土:4.1 最大径:16.4 口径:10.9	1mm以下の砂粒を含む 2.5Y8/1 灰白色	輪転成形	長石輪、コバルト	染付:三方向立		編み
114	3	52	3	佐賀	新石器	土器	胎土:13.0 口径:11.6	1〜2mmの砂粒を含む 2.5Y7/3 黄褐色	輪転成形	長石輪			
114	4	52	3	佐賀	新石器	土器	胎土:9.4 口径:11.2	1mm以下の砂粒を含む 2.5Y7/3 黄褐色	輪転成形	長石輪			
114	5	52	3	佐賀	新石器	土器	胎土:1.7 最大径:12.0	1mm以下の砂粒を含む 2.5Y8/1 灰白色	輪転成形	長石輪			
114	6	52	3	佐賀	新石器	土器	胎土:(7.1)	1mm以下の砂粒を含む 2.5Y8/1 灰白色	輪転成形	長石輪			溝付(ハリ)痕×4
114	7	52	3	佐賀	新石器	土器	胎土:15.1 口径:10.0 高さ:8.6	1mm以下の砂粒を含む 2.5Y7/1 灰白色	輪転成形	赤味輪(茶色)			20条単位
114	8	52	3	佐賀	新石器	土器	胎土:(10.0)	1mm以下の砂粒を含む 2.5Y8/1 灰白色	輪作り成形	長石輪			溝底
114	9	52	3	佐賀	新石器	土器	口径:11.7 高さ:11.7	灰色	輪作り成形	長石輪			内面に溝付(ハリ)痕×5
114	10	52	3	佐賀	新石器	土器	口径:10.2 高さ:7.7 口径:11.6	1mm以下の砂粒を含む N2 灰白色	輪転成形	長石輪			溝付(ハリ)痕×4 平縁した溝底
114	11	52	3	佐賀	新石器	土器	口径:(11.2)	1mm以下の砂粒を含む 2.5Y8/2 灰白色	輪転成形	長石輪			溝付(ハリ)痕×6
114	12	52	3	佐賀	新石器	土器	口径:(17.4)	1mm以下の砂粒を含む 2.5Y8/1 灰白色	輪作り成形	長石輪			
114	13	52	3	佐賀	新石器	土器	口径:20.6 高さ:11.0 口径:18.0	1mm以下の砂粒を含む 2.5Y7/2 灰白色	輪作り成形	長石輪			溝付(ハリ)痕×4
114	14	53	3	佐賀	新石器	土器	口径:(9.6)	1mm以下の砂粒を含む 2.5Y8/4 黄褐色	輪転成形	長石輪			器面に線状の 溝付(ハリ)痕×3
114	15	53	3	佐賀	新石器	土器	口径:(12.4)	1mm以下の砂粒を含む 2.5Y8/1 灰白色	輪作り成形	長石輪			
114	16	52	3	佐賀	新石器	土器	口径:9.5	1mm以下の砂粒を含む 2.5Y8/1 灰白色	輪転成形	赤味輪(赤褐色)			溝付(ハリ)痕×5 器底×5
114	17	52	3	佐賀	新石器	土器	口径:12.4 高さ:11.8 口径:8.4	茶褐色	輪転成形	赤味輪			溝2線相当
114	18	52	3	佐賀	新石器	土器	口径:11.7 高さ:11.4 口径:8.4	1mm以下の砂粒を含む 2.5Y8/1 灰白色	輪転成形	赤味輪			溝2線相当
114	19	52	3	佐賀	新石器	土器	口径:11.3 高さ:12.9 口径:14.0	1mm以下の砂粒を含む 2.5Y5/1 黄褐色	輪転成形	赤味輪	施刻痕		溝2線相当
114	20	52	3	佐賀	新石器	土器	口径:15.9 高さ:10.9 口径:25.3	2.5Y7/3 黄褐色	輪転成形	赤味輪	足縁×4		溝2線相当
114	21	53	3	佐賀	新石器	土器	口径:(32.0)	1mm以下の砂粒を含む 2.5Y8/1 灰白色	輪作り成形	赤味輪(茶色)			溝底・器縁文
114	22	53	3	佐賀	新石器	土器	口径:(32.0)	1mm以下の砂粒を含む 2.5Y8/1 灰白色	輪作り成形	赤味輪(茶色)			器底・器縁文
114	23	53	3	佐賀	新石器	土器	口径:(41.0)	1mm以下の砂粒を含む 2.5Y8/1 灰白色	輪作り成形	赤味輪(茶色)、線刻	器底:黒い線状 器縁:器縁文		溝2線相当
114	24	52	3	佐賀	新石器	土器	口径:2.4 高さ:14.3 口径:6.2	2.5Y7/1 灰白色	輪転成形	長石輪、コバルト	染付:文字		年代別:朝鮮20年代~
115	1	53	3	佐賀	新石器	土器	口径:(31.0)	1mm以下の砂粒を含む 2.5Y8/2 灰白色	輪作り成形	赤味輪			
115	2	53	3	佐賀	新石器	土器	口径:(32.0)	1mm以下の砂粒を 多く含む 2.5Y8/2 灰白色	輪作り成形	赤味輪			
115	3	53	3	佐賀	新石器	土器	口径:10.3 高さ:2.4	1mm以下の砂粒を含む 2.5Y8/1 灰白色	輪転成形	赤味輪			初込足×6、初唐「三」
115	4	53	3	佐賀	新石器	土器	口径:6.1 高さ:1.8	1mm以下の砂粒を含む 2.5Y8/1 灰白色	輪転成形	赤味輪			初込足×4、器底欠
115	5	53	3	佐賀	新石器	土器	口径:5.7 高さ:1.7	1mm以下の砂粒を含む 2.5Y8/1 灰白色	輪転成形	赤味輪			初込足×4、器底欠
115	6	53	3	佐賀	新石器	土器	口径:8.1 高さ:1.9	1mm以下の砂粒を多く 含む 2.5Y8/1 灰白色	輪転成形	赤味輪			初込足×5、器底欠
115	7	53	3	佐賀	新石器	土器	口径:15.4 高さ:5.4 口径:4.9	1mm以下の砂粒を含む 2.5Y8/2 灰白色	輪転成形	赤味輪			初込足×6、器底:不明 器底欠初唐底
115	8	53	3	佐賀	新石器	土器	口径:4.4 高さ:1.8	2.5Y7/2 黄褐色	手捏	長石輪			
115	9	53	3	佐賀	新石器	土器	最大径:25.2 高さ:11.6	1〜3mmの砂粒を含む 2.5Y8/1 灰白色と 2.5Y8/5 黄褐色	輪作り成形	長石輪、コバルト	染付:文字		器底にアルミナ粒散布 3方向に1條 厚孔アリ
115	10	53	3	佐賀	新石器	土器	口径:31.6 高さ:20.7	1〜3mmの砂粒を含む 2.5Y8/1 灰白色	輪作り成形	赤味輪	溝:赤味輪		器底の器縁で器底
116	1	54	3	佐賀	新石器	土器	口径:10.0 高さ:6.2	黄褐色 白色	輪転成形	透明輪、色絵(赤)	刷付文		器底部:瀬戸産 年代別:19C、本朝~
116	2	54	3	佐賀	新石器	土器	口径:0.9	黄褐色 白色	輪転成形	透明輪、色絵(青、黄、赤)	刷付文、文様、器底		器底部:瀬戸産 年代別:19C、本朝~
116	3	54	3	佐賀	新石器	土器	口径:1.8 高さ:4.1	透明	輪転	透明			器底部:瀬戸産 年代別:19C、本朝~
116	4	53	3	佐賀	新石器	土器	口径:2.5 高さ:5.9	黄緑色	輪転	透明			器底部:瀬戸産 年代別:19C、本朝~
116	5	54	3	佐賀	新石器	土器	口径:8.95 高さ:5.4	1mm以下の砂粒を多く 含む 2.5Y8/2 灰白色	輪転成形	赤味輪			内面、(溝)口、側面3 方向に線状。黄褐色 溝
116	6	54	3	佐賀	新石器	土器	口径:1.6	1〜2mmの砂粒を含む 2.5Y8/2 灰白色	輪転成形	赤味輪(赤褐色~黄褐色)			器底文
116	7	54	3	佐賀	新石器	土器	口径:12.8	1mm以下の砂粒を多く 含む 2.5Y8/4 灰白色	輪転成形	赤味輪(黄褐色)			器底文

調査 番号	発見 年度	発見 回数	出土 地点	出土 層位	種別	名称	測量口内実寸 （mm）	胎土	成形	釉薬・顔料	文様・装飾	備考	
123	1	54	4区	東縁下部	鉄製品	釘	長さ：11.1 頭径：1.3 太さ：0.8 重量：18.11g 底径：15.0 幅：0.5 太さ：0.2 重量：4.0g						
123	2	54	4区		鉄製品	簪	長さ：10.5 幅：0.5 太さ：0.2 重量：4.0g						
124	1	57	4区	表土	陶器	丸形火鉢	最大径：41.6	灰褐色	旋作り成形	滑焼			
124	2	57	4区	表土	陶器	磁碗	口径：11.8	灰褐色の胎土を白く 2.5YR/1 灰白色	旋作り成形	滑焼		焼跡に黒い痕跡有り、口 縁周縁に3.5の浅窪	
124	3	57	4区	東縁下部	陶器	盥・壺		灰褐色	旋作り成形	滑焼	磨蝕	洗し掛け	
124	4	57	4区	東縁下部	陶器	片口鉢		灰色	旋作り成形	灰石焼			
124	5	57	4区	東縁下部	陶器	色鉢	口径：(5.5) 幅：4.2 高さ：3.5	100%の砂粒を白く 2.5YR/1 黄灰色	輪轆成形	滑焼(赤褐色)			
124	6	57	4区	東縁下部	陶器	色鉢	口径：5.9 幅：4.7 高さ：3.8	灰色	手捏り成形	灰石焼			
124	8	57	4区	東縁下部	陶器	樽(ハツ)	最大径：(19.0) 口径：10.3 高さ：10.3	黄褐色	輪轆成形			取付足×4、回転糸切 粘土付	
124	9	57	4区	東縁下部	陶器	モミツク	口径：3.6 高さ：3.6	褐色	タタラ作り			取付足×2、ハセ横×1	
124	10	57	4区	表土	陶器	モミツク	口径：3.6 高さ：3.6	褐色	タタラ作り			東縁面にコヒテ痕	
124	11	57	4区	表土	陶器	モミツク	口径：19.7 高さ：3.6 厚さ：2.9	1～3mmの砂粒を 多く含む 2.5YR/4 褐色	タタラ作り			外周面にコヒテ痕 取付足×5	
124	12	57	4区	東内 新 大砂土層	陶器	粘土板	幅：3.5～3.7 長さ：1.0～2.3	褐色	磨り土			一面に砂粒を 散り掛けた、レンガ面	
124	13	57	4区	東内 新 大砂土層	陶器	粘土板	幅：3.2～4.5 長さ：1.6	褐色	磨り土			取付レンガ面に充満	
124	14	54	4区	東土中	石製品	石(上白)	長さ：14.4 口径：15.0 幅：4.3 最大径：19.3 つらみ径：7.4					溝は深さ1.9、9分刻	
127	1	59	5区	4層	陶器	香壺	口径：19.3 最大径：19.3 つらみ径：7.4	灰褐色	輪轆成形	滑焼(灰色)		輪轆跡	
127	2	59	5区	表土	陶器	香壺	口径：6.9 最大径：24.1 つらみ径：7.4	灰色	輪轆成形	灰石焼、コバルト	染付：洗し掛け	輪轆跡	
127	3	59	5区	4層	陶器	壺	口径：12.6	灰色	輪轆成形	滑焼(灰色)			
127	4	59	5区	4層	陶器	惣かき	口径：(16.9)	灰褐色	輪轆成形	滑焼(灰色)		定輪×2	
127	5	57	5区	5層	瓦	聚瓦瓦		黄褐色	タタラ作り	滑焼(灰色)			
127	6	59	5区	4層	陶器	樽(ハツ)	最大径：13.7 口径：5.2	褐色	輪轆成形			取付足×8、回転糸切、刺 突痕×2	
127	7	59	5区	1	表土	陶器	樽(ハツ)	最大径：18.5 口径：8.1	灰褐色	輪轆成形		取付足×5、回転糸切、刺 突痕	
127	8	57	5区	4層	陶器	樽(マク)	口径：21.9	褐色、褐色	旋作り成形	滑焼(灰色)		外周 火傷面 底面に砂付痕	
127	9	57	5区	4層	陶器	樽(マク)	口径：27.0	黄褐色	旋作り成形				
127	10	57	5区	4層	陶器	樽(トタン)	口径：27.0	黄褐色	手捏り成形			一面に有指痕	
127	11	57	5区	4層	陶器	モミツク	口径：3.0 高さ：3.0	黄褐色	タタラ作り			ハセ横×3	
127	12	59	5区	4層	陶器	火立	実径中：26.5× 4.7、径上：20.4	褐色、 黒い、黒石多く含 む、褐色	タタラ作り	自然焼かか			
131	1	59	6区	5804	陶器	火立	口径：28.7 径中：26.5× 4.7、径上：20.4	1～3mmの砂粒を 多く含む 2.5YR/1 灰白色	タタラ作り			少量ガラス化 ヒミアクシの灰アリ	
131	2	59	6区	5804	陶器	樽(ハツ)	口径：19.0 最大径：11.6	褐色	輪轆成形			取付足×8、回転糸切	
131	3	59	6区	5804	陶器	取付カ	口径：4.8 高さ：1.4	褐色	取作り	灰石焼		取付カ付き	
131	4	59	6区	5804	ガラス製品	バイアル	口径：5.0 口径：2.2		取作り			ガラスのボコボコが付 いていて、14枚彩色塗 料を投入していた	
133	1	59	6区	カゴツ リート 基礎	コンクリート	基礎	幅：35.3 高さ：25.8					溝・釘が残っていた	
136	1	67	6区	水層11	磁器	磁子 (高庄ヒツ)	口径：7.6 口径：3.9	褐色 白色	焼成成形	597焼	白磁		磁子に「マツト」No. DK、磨蝕、磨蝕付着
136	2	67	6区	水層11	陶器	片口鉢	口径：17.0	黄	旋作り成形	灰石焼		半焼した注ぎ口	
136	3	67	6区	水層11	漆塗	樽(ハツ)	最大径：(17.4) 口径：5.5	100%の砂粒を白く 10YR/8 黄白色	輪轆成形			取付足×7、取付「Z」、 取付に粘土付	
136	4	67	6区	水層11	漆塗	樽(マク)	最大径：23.8 口径：9.2	1～3mmの砂粒を 含む 10YR/1 灰白色	旋作り成形			取付、アリ 3ヶ所付込み	
136	5	67	6区	水層11	漆塗	モミツク	口径：4.7 高さ：4.1	褐色 10YR/2 灰白色	タタラ作り			樽(ハセ) 直径×5	
136	6	67	6区	水層11	漆塗	モミツク	口径：4.6 高さ：4.0	褐色 1～3mmの砂粒を 含む 10YR/1 灰白色	タタラ作り			ハセ横×2	
136	7	65	6区	水層11	金具類	かすがい	長さ：19.2 厚さ：1.2 上面 外径 (48.0) 内径 (38.0) 高さ：18.1 下面 外径 (41.8) 内径 (34.8)	褐色 白色					ノミ痕をわずかに残す
136	9	67	6区	水層11	漆塗	陶器	香壺	口径：15.4 口径：6.1 最大径：19.9 つらみ径：7.2	かすがい白色の砂 粒を含む 2.5YR/1 黄白色	輪轆成形	滑焼(赤褐色)		内面に赤褐色の付着物、輪 轆跡
136	10	65	6区	水層11	漆塗	壺	口径：35.4 口径：15.2 口径：19.6	100%の砂粒を白く 2.5YR/6 黄白色	輪轆成形	滑焼(赤褐色)	鉄、鉄 漆状文・磨蝕文	外周 下半分(2) 施に埋 まる。重さ：2～3 割程度	
137	1	65	6区	水層13	磁器	磁器用取付弁	口径：5.6 口径：3.1 口径：(2.2)	褐色 白色	輪轆成形	透明焼、コバルト	染付：「仁風月」	取付痕：取付痕8条、取 付穴：近代以降、取付足8条	
137	2	65	6区	水層13	磁器	輪花形取付弁	口径：(18.2) 口径：(10.0)	褐色 白色	型成形	透明焼、コバルト、磨蝕	染付：磨蝕文	取付：磨蝕痕跡・山岳 浴盆、取付穴：幅約14～ 21.5mm、磨蝕1.4mm、13.5%	
137	3	65	6区	水層13	陶器	鉢鉢	口径：23.8 口径：15.4 口径：19.9	黄 2.5YR/1 灰白色	旋作り成形	灰石焼			ハリの痕×8、磨蝕「Z」

探出 番号	発見 年月	発見 場所	出土 時期	層位	種別	器種	器口内径(高 さ)	胎土	成形	胎土・原料	文様・装飾	備考	
137	4	65	6区	水層13	陶器	瓶	器口内径: 65.0 器高: 16.0	赤 25YR7/1 灰白色 20YR7/1 赤褐色 5YR7/1 赤褐色	輪転成形	長石釉			
137	5	65	6区	水層13	陶道具	撻台(ハシ)	最大径: 15.6 器高: 7.4	赤褐色 10YR5/3 黄褐色 5YR7/1 赤褐色	輪転成形			同出品切	
137	6	65	6区	水層13	陶道具	撻台b	上径: 40.0 器高: 6.0 器口内径: 10.0	10YR5/3 黄褐色 赤褐色 5YR7/1 赤褐色	撻作り成形			内面底部に黒ねり塗布。 内面→外側付	
137	7	65	6区	水層13	陶道具	撻台	最大径: 13.1 器高: 11.1 器口内径: 4.5	10YR5/3 黄褐色 赤褐色 5YR7/1 赤褐色	撻作り成形			禁止品切	
137	8	65	6区	水層13	陶器	縁筒(ハセ)	最大径: 4.5 器高: 2.0	10YR5/3 灰白色 赤褐色 5YR7/1 赤褐色	手捏ね			対象の位置に特付者	
137	9	65	6区	水層13	石瓦	軒先瓦	器高: 11.0 器口内径: 11.0	赤褐色 10YR5/3 黄褐色 赤褐色	製	赤待輪(赤褐色)			
138	1	66	6区	水層13	陶器	撻	器高: 54.0 器口内径: 12.2 器高: 8.0	赤褐色 10YR5/3 黄褐色 赤褐色	撻作り成形	赤待輪(赤褐色)、鉄 胎土: 赤褐色、黄褐色			
138	2	65	6区	水層13	陶器	土甕	最大径: 17.0 器高: 8.0	10YR5/3 灰白色 赤褐色	撻作り成形	赤待輪			
140	1	66	6区	S40	陶道具	撻台(ハシ)	最大径: 12.9 器高: 3.3	10YR5/3 灰白色 赤褐色	輪転成形			切込足×6、凹貼糸切、黒 ねり塗布。胎土: 赤褐色	
140	2	66	6区	S40	石瓦	椀瓦	器高: 1.9	10YR5/3 灰白色 赤褐色	タタラ作り	赤待輪(赤褐色)		モミツツの痕アリ	
140	3	66	6区	S41	磁器	染付樽	器高: 2.5	黄褐色 赤褐色	輪転成形	透明釉、黄濁	染付: 黒文		
140	4	66	6区	S41	陶器と 陶道具	撻土撻台 (ハシ)	器高: 17.3	10YR5/3 灰白色砂粒 赤褐色 5YR7/1 赤褐色	撻作り成形	赤待輪(赤褐色)		鑑定書明: 濁り黄濁系。胎 土割: 明白初期。胎土 黄褐色	
140	5	66	6区	S41	陶道具	撻台(トナシ)	上径: 8.5	10YR5/3 灰白色砂粒 赤褐色 5YR7/1 赤褐色	撻作り成形			器内面に黒ねり塗布。撻台: 切込足×6	
140	6	66	6区	S41	陶道具	撻台(ハシ)	最大径: 10.6 器高: 2.4	10YR5/3 灰白色 赤褐色	輪転成形			撻台もろ割明したか。上 部黄濁系。下部: 射火付 系	
140	7	66	6区	S41	陶道具	撻台(ハシ)	最大径: (15.2)	10YR5/3 灰白色 赤褐色	輪転成形			切込足×6、凹貼糸切、黒 ねり塗布。胎土: (二)	
140	8	66	6区	S41	陶道具	撻台(ハシ)	最大径: 20.0 器高: 3.7	10YR5/3 灰白色 赤褐色	輪転成形			切込足×7、側面にて注 入。器内面に黒ねり塗 布。胎土: (二)。器口内 面に黒ねり塗布。一部ガ ラシ化	
140	9	66	6区	S41	陶道具	撻台(ハシ)	最大径: 22.4 器高: 5.8	10YR5/3 灰白色 赤褐色	輪転成形			切込足×7、側面にて注 入。胎土: (二)。胎土割 面粗孔切	
140	10	66	6区	S41	陶道具	撻台(ハシ)	最大径: 14.8 器高: 5.8	10YR5/3 灰白色 赤褐色	輪転成形			切込足×6、側面にくぼ み粗孔切	
140	11	66	6区	S42	漆地	丸形樽	器高: 17.0	黄褐色 赤褐色	輪転成形		胎土: 黄褐色		
140	12	66	6区	S43	陶器	撻台(フタ)	最大径: 25.0 器高: 4.5 上径: 25.0 器口内径: 6.4 器高: 25.0	10YR5/3 灰白色 赤褐色	撻作り成形			胎土に付着 黒ねり塗布。胎土割	
141	1	69	6区	S42	陶器	撻	最大径: 6.0 器高: 6.4 器口内径: 2.0	赤褐色 10YR5/3 黄褐色 赤褐色	撻作り成形	赤待輪、縁輪		胎土割: 黒文、黄濁文 赤褐色・黄褐色	
141	2	66	6区	S42	陶道具	撻台(ハシ)	最大径: 6.0 器高: 1.9	10YR5/3 灰白色 赤褐色	輪転成形			胎土割×4、側面に粗孔切 粗孔切	
144	1	67	6区	土層別	土製品	土甕	上径: 12.0 器高: 12.6 器口内径: 2.4	10YR5/3 灰白色 赤褐色	撻作り成形	赤待輪		144-2と連続	
144	2	67	6区	土層別	土製品	土甕	上径: 21.9 器高: 25.3 器口内径: 16.2 器口内径: 30.0 器高: 11.4	10YR5/3 灰白色 赤褐色	撻作り成形	赤待輪(赤褐色)		144-3が土入れになってい る。胎土: 黄褐色 144-2と連続	
144	3	67	6区	土層別	土製品	土甕	上径: 16.2 器高: 30.0	10YR5/3 灰白色 赤褐色	撻作り成形	赤待輪		144-2の内面に黒ねり塗 布がある。外底、腹で 黒ねり塗布	
153	1	67	6区	石層5	磁器	透写形染付 椀	器高: 5.0 器口内径: 3.6	黄褐色 赤褐色	輪転成形	透明釉、コバルト	染付: 区別文	鑑定書明: 有田焼 切込足、透写形	
153	2	68	6区	石層5	瓦	輪瓦	器高: 1.8	赤褐色 25YR7/1 赤褐色	タタラ作り	黄土瓦		土力半	
153	3	67	6区	石層6	陶器	撻形形撻台	器高: 2.3	10YR5/3 灰白色	輪転成形			胎土割: 火澤、黄濁、 赤	
153	4	68	6区	石層6	陶器	平明瓶	器高: 13.9	黄褐色 赤褐色	輪転成形	長石釉(明緑色)		胎土人器	
153	5	67	6区	石層7	陶器	撻明瓶	器高: 1.9	黄褐色 赤褐色	輪転成形	長石釉		同出品切	
153	6	68	6区	石層7	陶器	撻瓶	器高: 17.0 器口内径: 4.0 器高: 3.0	黄褐色 赤褐色	輪転成形	長石釉(透明)			
153	7	68	6区	石層7	陶器	縁筒(縁)	器高: 2.9 器口内径: 1.0 器高: 2.9	黄褐色 赤褐色	輪転成形	長石釉			
153	8	67	6区	石層7	陶器	撻瓶	最大径: 18.0 器高: 2.9 上径: 7.6 器口内径: 1.5 器高: 3.6	黄褐色 赤褐色	輪転成形	長石釉(緑灰色)		内面にコバルト(茶色原料) が付着。胎土割	
153	9	68	6区	A3	道路下層	陶器	撻と土甕	器高: 1.5 器高: 3.6	黄褐色 赤褐色	輪転成形	長石釉		土力割
153	10	68	6区	A3	道路下層	陶器	撻	器高: 1.5 器高: 1.6	黄褐色 赤褐色	輪転成形	長石釉		
153	11	67	6区	B3	道路下層	陶器	撻土甕	器高: 27.6 器高: 26.9 器高: 5.3, 5.0	黄褐色 赤褐色	輪転成形	長石釉		胎土入り割込で厚孔
153	12	59	6区	B3	道路下層	陶道具	火立	最大径: 17.8 器高: 2.7	10YR5/3 灰白色 赤褐色	タタラ作り			火立: 若干ガラス化。上面 コビシ目。胎土割
153	13	67	6区	B3	道路下層	陶道具	撻台(ハシ)	最大径: 17.8 器高: 3.4	10YR5/3 灰白色 赤褐色	撻作り成形			胎土割×2、凹貼糸切、 黒ねり塗布アリ
153	14	67	6区	B3	道路下層	土製品	土甕(注口)	最大径: 6.1 器高: 4.5	黄褐色 赤褐色	手捏ねり成形			中に凹貼糸。土層の注口 跡
153	15	68	6区	B3	石層外側	瓦	椀瓦	器高: 1.5 器高: 4.5	10YR5/3 灰白色 赤褐色	製	縁輪		年代割: 昭和60年以降で はないか?
153	16	68	6区	B3	瓦	軒先瓦	器高: 11.0 器口内径: 11.0	10YR5/3 灰白色 赤褐色	製	縁輪		石川内にある中心部より 付定	
153	17	68	6区	B3	瓦	軒先瓦	器高: 11.0 器口内径: 11.0	10YR5/3 灰白色 赤褐色	製	縁輪			
153	18	68	6区	B3	石層外側	瓦	椀瓦?	器高: 1.5 器高: 4.5	10YR5/3 灰白色 赤褐色	製	縁輪		しり目

調査 番号	発見 年月	発見 回数	出土 地点	出土 層位	種別	名称	法量(1)内径(元)	胎土	成形	釉薬・顔料	文様・装飾	備考	
153	19	66	6区	A3	石州瓦	瓦瓦	厚さ:1.7	1~2mmの赤土質 赤少し含む 10YR7/6黄褐色		染付軸(赤褐色)			
154	1	70	6区	A3	磁器	丸丸形染付軸	口径:16.0 高さ:5.1 厚さ:14.1	黄赤 白色	縦線成形	透明釉、黄濁	染付:山水文、雲文	特定遺物:肥前系、年代群 1830-60年代、瓦、不明手	
154	2	69	6区		磁器	丸丸形青磁染付軸	口径:11.6 高さ:4.2 厚さ:4.9	黄赤 白色	縦線成形	透明釉、黄濁、青磁	染付:四方模文、五片 文文	特定遺物:肥前系、年代 群:1800-1810年代、瓦 、青磁系(青磁)	
154	3	70	6区	D4	磁器	楕円形染付軸	口径:16.7 高さ:5.6 厚さ:15.2	黄赤 白色	縦線成形	透明釉、黄濁	染付:矢羽文、雲文	特定遺物:肥前系 年代群:1780-1860、板の 切取品	
154	4	69	6区	D4	陶器	丸丸形磁器軸	口径:11.0	灰褐色	縦線成形	コライト	磁器軸		
154	5	69	6区		表土	陶器	丸丸形磁器軸	口径:11.6 高さ:5.2 厚さ:4.8	黄赤 7.5YR6/1灰白色	縦線成形	コライト	磁器軸	
154	6	70	6区	B3	陶器	丸丸形	口径:10.2 高さ:3.9	灰色	縦線成形	灰石軸、鉄軸	漢文字:カネ(付)	特定遺物	
154	7	69	6区	D4	陶器	長筒磁器軸	口径:13.0	灰色	縦線成形	黄濁釉、黄濁	漢文:漢草文、竜文		
154	8	69	6区	B3	陶器	丸丸形軸	口径:16.3 高さ:5.7	黄赤 10YR5/3灰白色	縦線成形	灰石軸			
154	9	70	6区	B3	陶器	筒形染付軸	口径:6.7 高さ:6.3 厚さ:4.6	黄赤 10YR5/3黄褐色	縦線成形	灰石軸、コライト	染付:雲龍	磁軸、磁蓋に付軸、薄 磁蓋軸:石州系	
154	10	70	6区	R2	陶器	鉢	口径:18.6	黄赤 10YR5/2灰白色	縦線成形	灰石軸		特定遺物:コライト質の薄 丸くたよみ瓦	
154	11	70	6区	C3	陶器	把手付竹筒 手筒	口径:13.2 高さ:19.6	灰色	縦線成形	灰石軸、コライト	染付:竹文、流石 、雲龍	20C.前葉遺	
154	12	69	6区		表土	磁器	口径:19.8	黄赤 10YR5/3灰白色	縦線成形	灰石軸			
154	13	70	6区		南	表土	口径:10.0 高さ:11.6 厚さ:7.7	1mm以下の砂粒を 含む 10YR5/3灰白色	縦線成形	染付軸		細部の釉が剥れ出す	
154	14	70	6区	A4-A4	陶器	煎	口径:12.5 高さ:13.1	黄赤 7.5YR6/3黄褐色	縦線成形	染付軸		焼成不良	
154	15	69	6区	B3	陶器	煎	口径:12.4	黄褐色	粘作り成形	染付軸		ほぼ丸蓋あり	
154	16	69	6区	A4-A4	陶器	把手付土鍋	口径:13.8 高さ:7.3 厚さ:7.2	1mmの砂粒を含む 10YR6/1灰白色	縦線成形	染付軸			
154	17	69	6区	C4	陶器	土鍋蓋	口径:17.0 高さ:4.7 厚さ:15.6	1~3mmの砂粒を含む N7/2灰白色	縦線成形	灰石軸		特定遺物:石州系、154- 18とセット、内径は湯煎 の深	
154	18	69	6区	B3-A4	陶器	筒形土鍋	口径:18.5	1mmの砂粒を含む 色付 2.0Y7/1灰白色	縦線成形	灰石軸		黄濁釉、石州系、154- 17とセット、蓋部に染付 あり	
154	19	69	6区		表土	陶器	口径:18.3 高さ:4.9 厚さ:6.2	黄赤 10YR5/3灰白色	縦線成形	灰石軸		磁器軸切	
154	20	69	6区	B3	瓦葺土器	火鉢	口径:21.6	1mm以上の砂粒を 含む 7.5YR5/3灰色	粘作り成形	黄濁	文様:いぶし	磁器	
154	21	69	6区	A4	瓦葺土器	燈篵	口径:26.8	1~3mmの砂粒を 含む 10YR5/3灰白色	粘作り成形	黄濁		約筒、八角筒にコトク 部分粘り付けた、穴アリ	
155	1	70	6区	不明	土師製土器	燈篵カ七輪	口径:26.8	1~3mmの砂粒を 含む 7.5YR5/3灰白色	粘作り成形	黄濁		筒口開孔、足付	
155	2	70	6区	不明	土師製品	五徳か伊	高さ:31.2	1mmの砂粒を含む 10YR6/2灰白色	粘作り成形	黄濁			
155	3	71	6区		農地	印籠	口径:(17.0) 高さ:2.1 厚さ:19.4	黄褐色	縦線成形	化粧土		幕瓦蓋	
155	4	70	6区	C4	家庭具	チャブ	最大径:14.4 高さ:2.0 厚さ:4.9	黄赤 10YR6/1灰白色	縦線成形			磁器軸切	
155	5	70	6区	B3	家庭具	湯台(内筒状)	最大径:7.6 高さ:2.5	灰褐色	縦線成形			磁器軸切	
155	6	70	6区	B3	家庭具	湯台(内筒状)	最大径:8.1 高さ:2.4	1mmの砂粒を含む 10YR7/3比ふい黄 褐色	縦線成形			磁器軸切	
155	7	70	6区	B3	家庭具	湯台(内筒状)	最大径:6.5 高さ:2.8	1mmの砂粒を含む 10YR7/3比ふい黄 褐色	縦線成形			磁器軸切	
155	8	70	6区	D3	家庭具	湯台(ハタ)	最大径:12.2 高さ:4.0	黄赤 10YR6/2灰白色	湯台:黄濁釉 色付、色付;手 柄は黄濁	色付:灰石軸		湯台:切込足×7、蓋部の 中央、7.5mm×砂粒	
155	9	70	6区		家庭具	湯台(ハタ)	最大径:18.1 高さ:5.7	1mmの砂粒を含む 10YR6/2灰白色	縦線成形			切込足×6、約筒:「O」、 磁器軸切	
155	10	70	6区		家庭具	湯台(内筒状)	最大径:16.8 高さ:3.5	1~3mmの砂粒を 含む 10YR7/3比ふい黄 褐色	縦線成形			約筒:不明 磁器軸切、粘付筒	
155	11	70	6区		家庭具	湯台(ハタ)	最大径:14.5 高さ:18.0	1mmの砂粒を含む 10YR6/1灰白色	粘作り成形			切込足×8、磁器軸切、外 筒は泥に付けた「粘土付筒	
156	1	71	6区	南	表土	家庭具	湯台(タテ)	最大径:18.1 高さ:26.8	1~3mmの砂粒を 含む 10YR6/1灰白色	縦線成形	染付軸		内筒は粘り目 陶器、約タテ文(褐色に黄 色)
156	2	71	6区	南	表土	家庭具	湯台(トチン)	最大径:10.9	1~3mmの砂粒を 含む 10YR5/3黄褐色	縦線成形			湯部:磁器軸切?
156	3	71	6区		家庭具	湯台(トチン)	最大径:10.9	1~3mmの砂粒を 含む 10YR5/3灰白色	縦線成形				
156	4	71	6区	B3	家庭具	湯受け	最大径:16.0 高さ:2.6	灰色	縦線成形	灰石軸		内法遺物	
156	5	71	6区	B3	家庭具	湯受け	最大径:13.5 高さ:31.5	灰色	縦線成形	鉄軸			
156	6	71	6区		表土	家庭具	モミツバ	幅:3.6 厚さ:3.0	1~3mmの砂粒を 含む 10YR5/3黄褐色	手摺ね			ハセ付筒 筒の底アリ
157	1	71	6区		表土	いぶし瓦	瓦瓦	1mm以下の砂粒を 含む 10YR5/3灰白色	タタラ作り	いぶし			
157	2	71	6区	D3	Tr	いぶし瓦	瓦瓦	長さ:(27.2) 幅:(16.3) 厚さ:1.6	1mm以下の砂粒を 含む 10YR/1灰白色	タタラ作り	いぶし		湯部は泥に付けた瓦 筒の間に瓦は瓦 とヤシイ
157	3	71	6区	D3	Tr	いぶし瓦	瓦瓦	1mm以下の砂粒を 含む 10YR/1灰白色	タタラ作り	いぶし			

調査番号	遺物番号	発見時期	出土地点	層位	種別	種類	法量(内径×高さ cm)	胎土	成形	胎土・顔料	文様・装飾	備考
157	4	71	6区	表土	瓦	軒止瓦		白～黄褐色を帯び、 2.5YR7-8 灰白色 0.5YR7-2の白色帯緑 を帯び、 5.0YR7/4の胎土 2.5YR8/4 黄褐色 0.5YR7-2の白色帯緑 を帯び、 5.0YR7/4に近い黄 褐色 白～黄褐色を帯 び、 2.5YR8/4 黄褐色	タタラ作り	赤待輪(赤褐色)	透孔三巴文	
157	5	71	6区	C4	瓦	軒止瓦		白～黄褐色を帯 び、 2.5YR7-8 灰白色 0.5YR7-2の白色帯 緑を帯び、 5.0YR7/4の胎土 2.5YR8/4 黄褐色 0.5YR7-2の白色帯 緑を帯び、 5.0YR7/4に近い黄 褐色	タタラ作り	赤待輪(赤褐色)	文様間に透孔あり	
157	6	72	6区	B3	石州瓦	椀瓦	高さ: 1.9	白～黄褐色を帯 び、 2.5YR7-8 灰白色 0.5YR7-2の白色帯 緑を帯び、 5.0YR7/4の胎土 2.5YR8/4 黄褐色 0.5YR7-2の白色帯 緑を帯び、 5.0YR7/4に近い黄 褐色	タタラ作り	赤待輪(赤褐色) 斜交 に染み		
157	7	72	6区	表土	瓦	椀瓦		白～黄褐色を帯 び、 2.5YR7-8 灰白色 0.5YR7-2の白色帯 緑を帯び、 5.0YR7/4の胎土 2.5YR8/4 黄褐色 0.5YR7-2の白色帯 緑を帯び、 5.0YR7/4に近い黄 褐色	タタラ作り	赤待輪(黄褐色)		
157	8	72	6区	表土	瓦	椀瓦	高さ: 1.6	白～黄褐色を帯 び、 2.5YR7-8 灰白色 0.5YR7-2の白色帯 緑を帯び、 5.0YR7/4の胎土 2.5YR8/4 黄褐色 0.5YR7-2の白色帯 緑を帯び、 5.0YR7/4に近い黄 褐色	タタラ作り	赤待輪(黄褐色)		
158	1	72	6区	表土	瓦	椀瓦×3～4 モエツチ ハヒ		白～黄褐色を帯 び、 2.5YR7-8 灰白色 0.5YR7-2の白色帯 緑を帯び、 5.0YR7/4の胎土 2.5YR8/4 黄褐色 0.5YR7-2の白色帯 緑を帯び、 5.0YR7/4に近い黄 褐色	タタラ作り	赤待輪(黄褐色)		
158	2	72	6区	南	表土	瓦	椀瓦×3 モエツチ	白～黄褐色を帯 び、 2.5YR7-8 灰白色 0.5YR7-2の白色帯 緑を帯び、 5.0YR7/4の胎土 2.5YR8/4 黄褐色 0.5YR7-2の白色帯 緑を帯び、 5.0YR7/4に近い黄 褐色	タタラ作り	赤待輪(黄褐色)		
158	3	72	6区	表土	瓦	椀瓦×6 ハヒ×5 モエツチ		白～黄褐色を帯 び、 2.5YR7-8 灰白色 0.5YR7-2の白色帯 緑を帯び、 5.0YR7/4の胎土 2.5YR8/4 黄褐色 0.5YR7-2の白色帯 緑を帯び、 5.0YR7/4に近い黄 褐色	タタラ作り	赤待輪(黄褐色)		
158	4	71	6区		瓦	椀瓦	高さ: 2.74 幅: 2.66 厚さ: 1.9	白～黄褐色を帯 び、 2.5YR7-8 灰白色 0.5YR7-2の白色帯 緑を帯び、 5.0YR7/4の胎土 2.5YR8/4 黄褐色 0.5YR7-2の白色帯 緑を帯び、 5.0YR7/4に近い黄 褐色	タタラ作り	赤待輪(赤褐色)		
159	1	73	6区	C4	土製品	土管	最大径: 28.0 透孔部径: 21.2 高さ: 11.3	黄褐色 0.5YR7-8 黄褐色 0.5YR7-2の白色帯 緑を帯び、 5.0YR7/4の胎土 2.5YR8/4 黄褐色 0.5YR7-2の白色帯 緑を帯び、 5.0YR7/4に近い黄 褐色	筒造り		裏面ナ	
159	2	73	6区	B3	陶器	土管	最大径: 11.3 透孔部径: 8.0 高さ: 8.6 厚さ: 1.1	黄褐色 0.5YR7-8 黄褐色 0.5YR7-2の白色帯 緑を帯び、 5.0YR7/4の胎土 2.5YR8/4 黄褐色 0.5YR7-2の白色帯 緑を帯び、 5.0YR7/4に近い黄 褐色	筒造り		赤待輪(赤褐色)	
160	1	73	6区		漆器	釘						
160	2	73	6区		漆器	銅製火箸	透孔径: 0.9					内径の狭い銅製火箸 かと思われるか?
160	3	73	6区		漆器	漆器 (右利足用)	高さ: 11.5 幅: 12.2 厚さ: 0.8					内径が深く、大きく 幅が3cm程度

第 11 表 千本崎城跡出土土師器・陶磁器・ガラス・石材観察表

調査番号	遺物番号	発見時期	出土地点	層位	種別	種類	分類	法量(内径×高さ×厚さ cm)	胎土	色調	文様・装飾その他	備考
166	1	78	東側	表探	磁器	磁子	高圧平台磁子 高さ 16.0cm 最大径 11.2cm 透孔径 4.6cm	黄褐色 白色	黄褐色 白色	無色透明	製作	近代
166	2	78	東側	表探	磁器	磁子	高圧平台磁子 高さ 16.0cm 最大径 11.2cm 透孔径 4.6cm 口径 1.5cm	黄褐色 白色	黄褐色 白色	無色透明	製作	近代
166	3	78	東側	表土	ガラス	インク瓶	高さ 5.5cm 口径 4.5cm 透孔径 1.8cm	ガラス	無色透明			
166	4	78	東側	表探	石器	石錐	高さ 18.9cm 口径 1.5cm	花崗岩 花崗岩	黄褐色 黄褐色			
167	1	79	平塚面1	表土	陶器	片口鉢	B-3 口径 22.40cm	灰白色	外面: 2.5YR5/2 黄褐色 内面: 2.5YR7/1 黄褐色	口縁部に染み状痕 口の痕跡あり	口縁部に染み状痕 口の痕跡あり	推定産地: 越前焼 近代「フエキンキ」か?
167	2	79	平塚面1	表土	陶器	片口鉢	B-3 小片	灰白色	外面: 2.5YR5/2 黄褐色 内面: 2.5YR7/1 黄褐色	口縁部に染み状痕 口の痕跡あり	口縁部に染み状痕 口の痕跡あり	推定産地: 越前焼
167	3	79	T1～T2 ベルト編	褐色土	陶器	片口鉢	B-3 小片	黄褐色 3mm以下の砂粒 を多く含む	外面: 2.5YR6/6 橙 内面: 2.5YR6/2 灰褐色	外面ナナ	推定産地: 越前焼、内面 は使用により摩滅	
167	4	79	T1～T2 ベルト編	褐色土	陶器	釜	小片	黄褐色 3mm以下の砂粒 を多く含む	外面: 2.5YR6/4 近い橙 内面: 2.5YR6/3 近い黄 褐色	粘土粘着き上げ、ナ ナ、外面に染み	推定産地: 越前焼、内面 に黒色付着物	
167	5	79	平塚面1	褐色土	陶器	釜	小片	黄褐色 3mm以下の砂粒 を多く含む	外面: 5YR6/2 黄褐色 内面: 5YR5/2 黄褐色	粘土粘着き上げ、ナ ナ、外面に染み	推定産地: 越前焼	
167	6	79	平塚面1	表土	陶器	釜	鉢部	黄褐色 3mm以下の砂粒 を多く含む	外面: 5YR5/3 近い黄 褐色 内面: 5YR5/3 近い黄 褐色	粘土粘着き上げ、ナ ナ、内面に粘土粘着、表面注意	推定産地: 越前焼	
167	7	79	北西側	褐色土	陶器	釜	鉢部	黄褐色 3mm以下の砂粒 を多く含む	外面: 5YR5/3 近い黄 褐色 内面: 2.5YR5/3 近い黄 褐色	ナナ	推定産地: 越前焼	
167	8	78	西より	褐色土	土師器	皿	口径 14.9cm	黄褐色 3mm以下の砂粒 を多く含む	外面: 2.5YR6/6 橙 内面: 2.5YR6/6 橙	表面に黒色付着物を 多く含む	推定産地: 越前焼	

第 12 表 千本崎城跡出土古銭観察表

調査番号	遺物番号	発見時期	出土地点	層位	種別	種類	分類	法量(直径×厚さ cm)	重量(g)	備考
168	1	78	北西側	褐色土	銅銭	古銭	天保通宝 1781-1844	直径 23.3、厚さ 0.54 厚さ 0.2	1.63	

写真図版

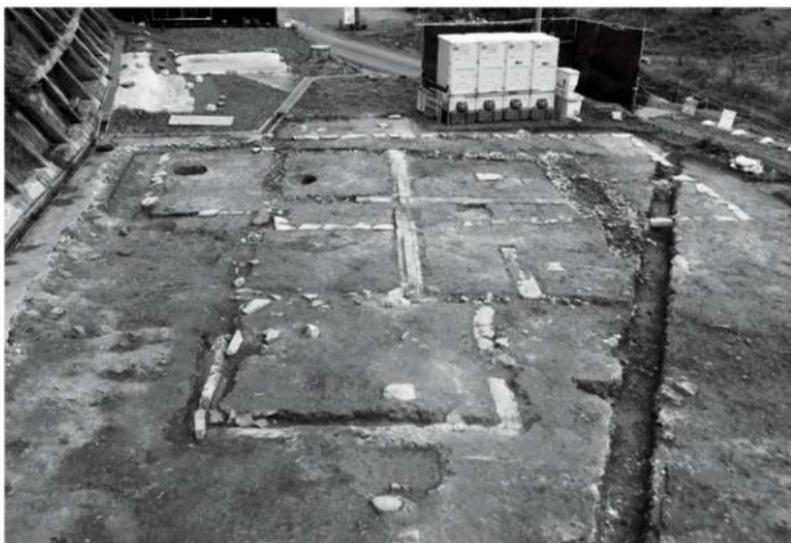


本田窯跡全景（空撮）

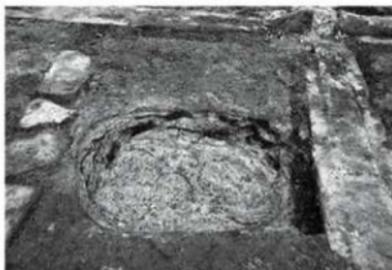
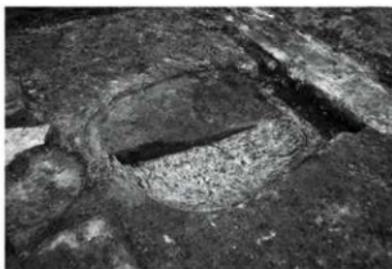


本田窯跡全景（空撮 北から）





1区 1面 SB01 全景(南から)



1区 SB01-i'土層(北から)、b-b'土層(北から)

SK01 半截(南東から)、完掘状況(東から)



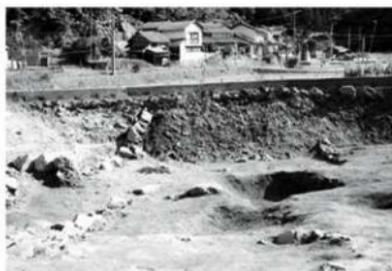
1区 SK02 土層断面・完掘状況(北東から)

SK03 半截状況(東から)、SK04 完掘状況(東から)



1区 SX07 土層断面(東から)、SB06 近景(北から)

SB06 全景(北西から)、SB06 東側(北西から)



1区 東壁土層堆積状況(西から)、S803 全景(南西から) 北壁土層堆積状況(南から)、S802 土層状況(南東から)

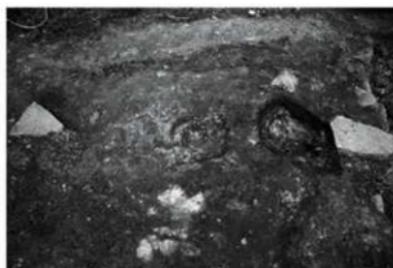
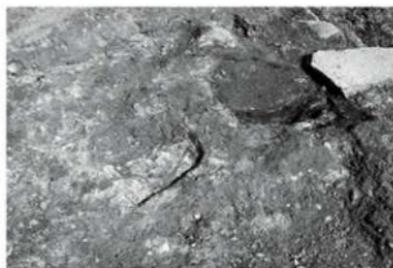


1区 2面遺構全景(南から)



1区 S802 完掘状況(南から)、SX03(北東から)

1号炉検出状況(南から)、1号炉土層断面(南から)



1区 P1・2 半載状況・完掘状況(南から)

S805 完掘状況(南から・西から)



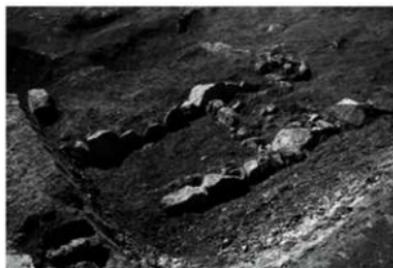
1区 SB05 焼台(北西から)、SX02 検出状況(北から)

SX02 瓦出土状況(北から)



1区 2面石垣完掘状況(東から)

2面石垣土層堆積状況(南から)、完掘状況(北から)

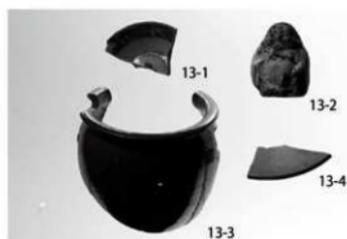


1区 2面下石垣完掘状況(西から・南から)

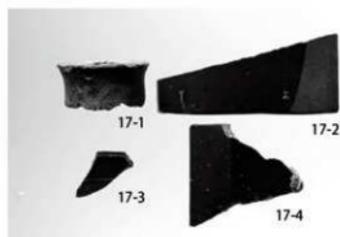
2面下石垣完掘状況(南東から)



1区 2面完掘状況(西から)



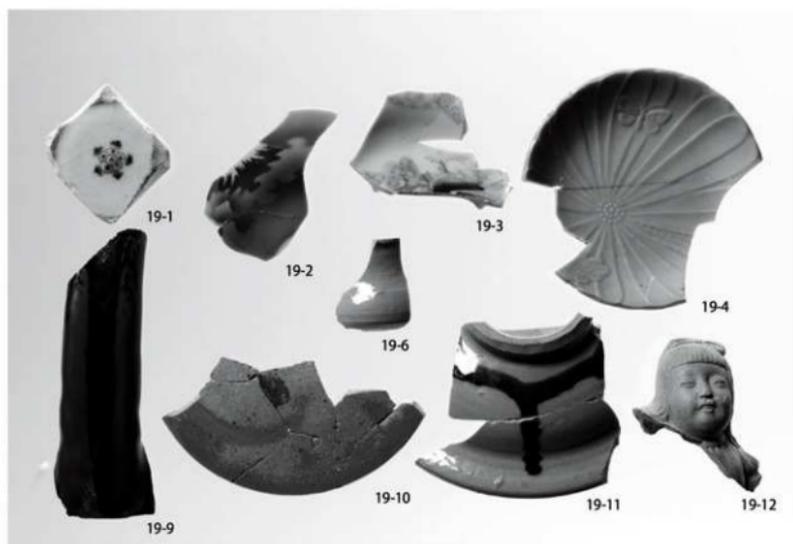
1区 SB01・SK01 出土遺物



1区 SK02・04 出土遺物



1区 SB06 出土土管



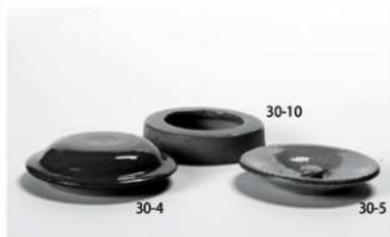
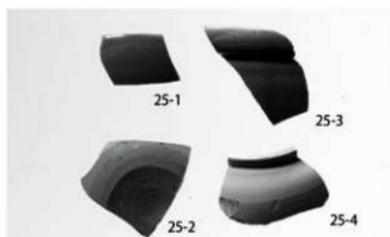
1区 1面出土磁器・陶器・土製品



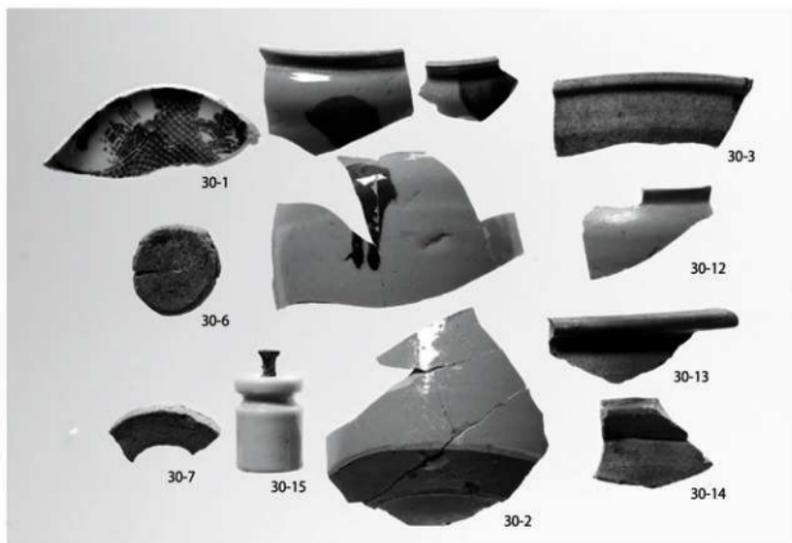
1区 1面出土陶器・窯道具・土管等



1区 陶器甕



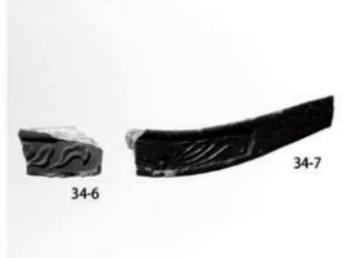
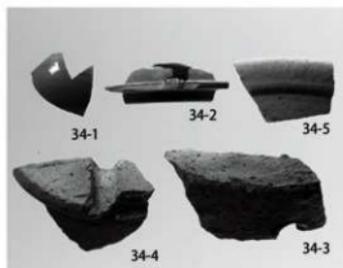
1区 陶器・窯道具



1区 SB02 出土遺物



1区 SB02 出土遺物



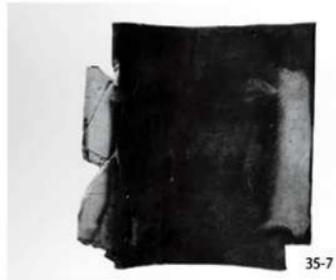
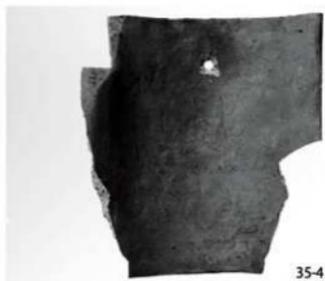
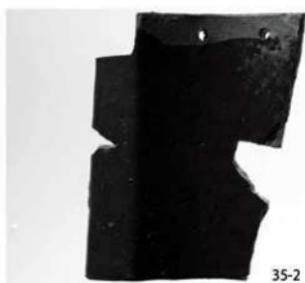
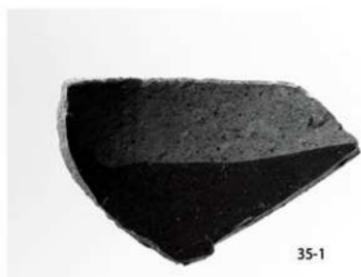
1区 SX02 出土遺物

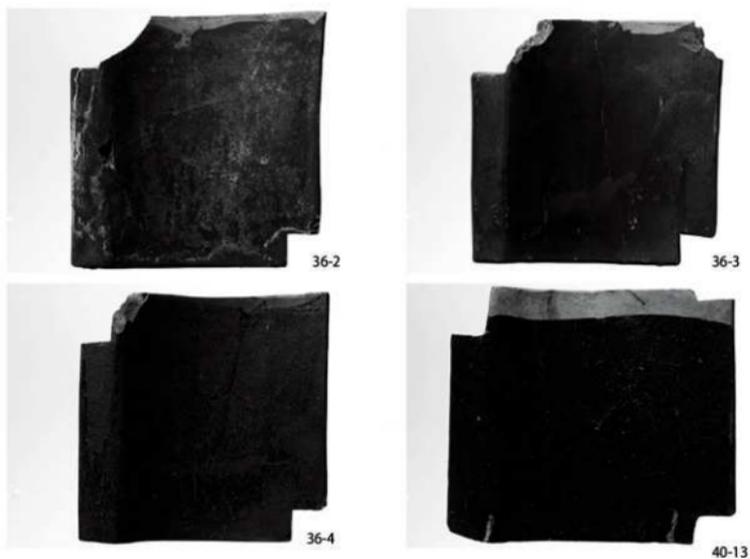


1区 SB05 出土遺物



1区 SB05 出土遺物

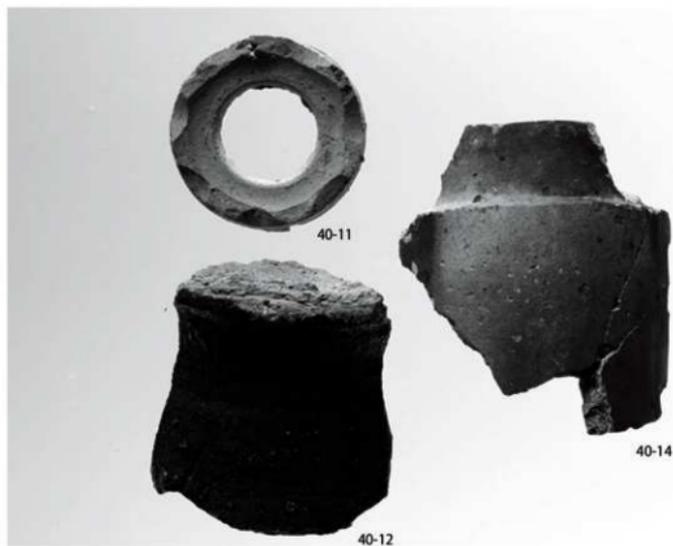




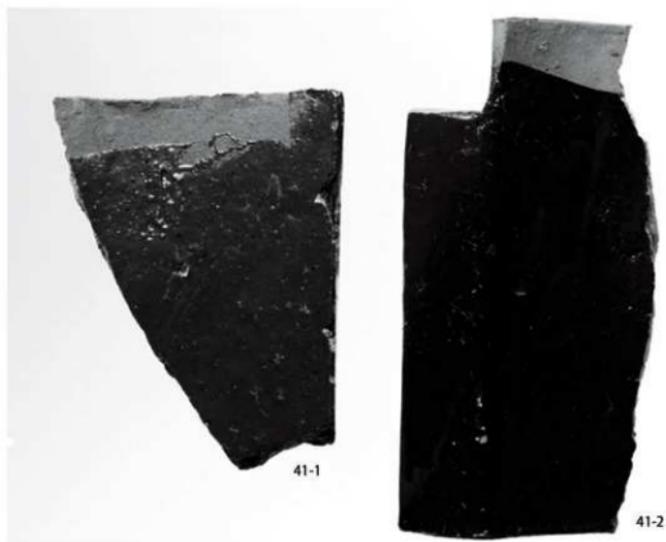
1区 SX02出土瓦(2)



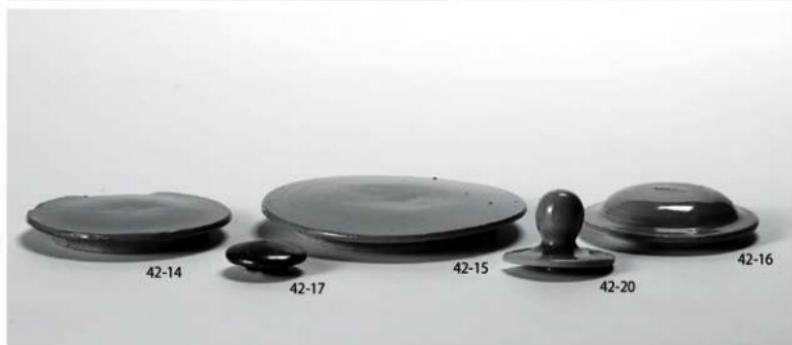
1区 石垣1外周出土磁器・陶器

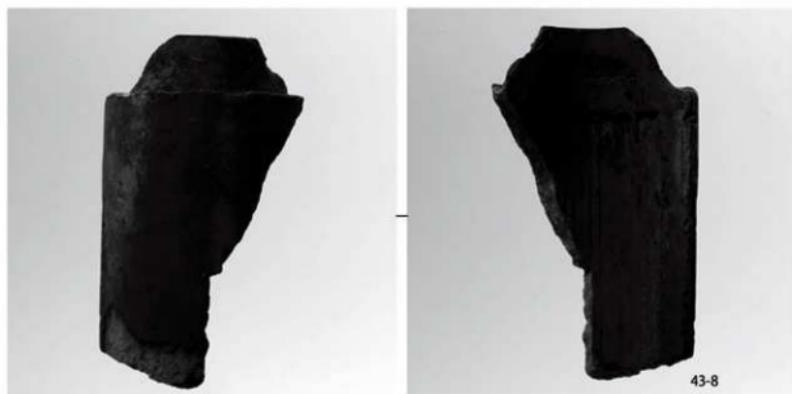
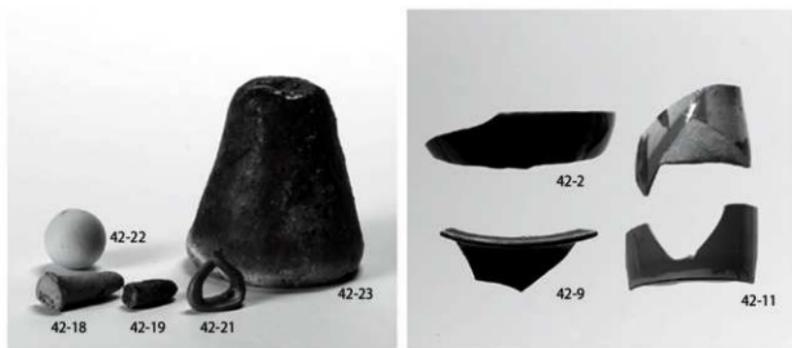


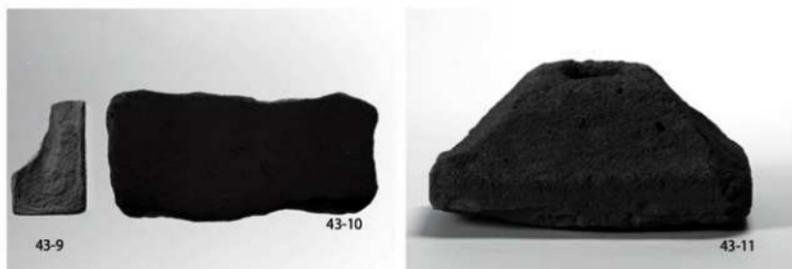
1区 石垣1外周出土窯道具・瓦(1)



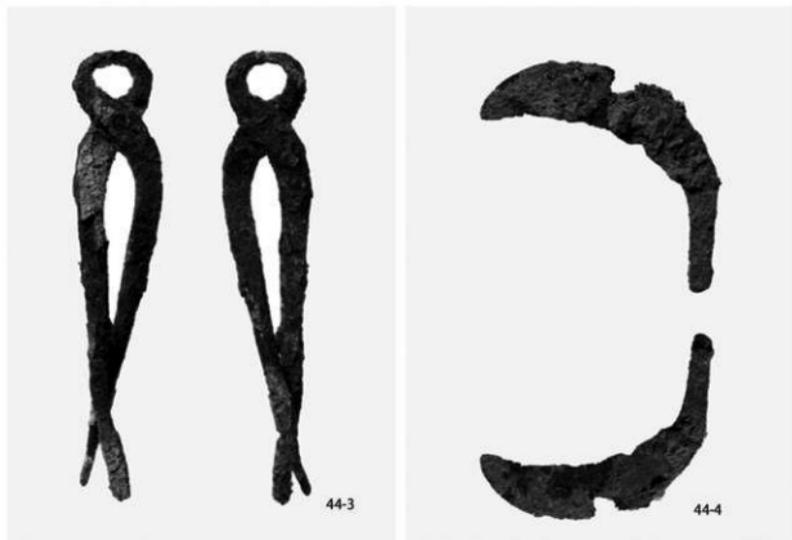
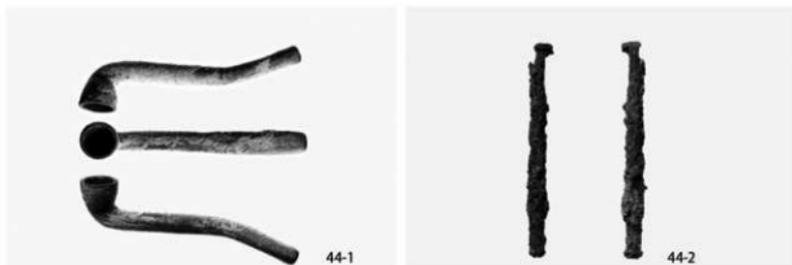
1区 石垣2外周出土瓦(2)







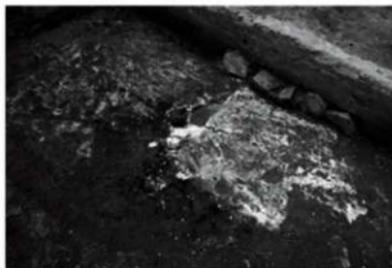
1区 石製品・五輪塔火輪



1区 金属製品



2区 調査前近景(南から)、中央トレンチ(南から) 中央トレンチ拡張1(南から)、SB04 完掘状況(南から)



SB04 土層断面・外側の遺構(北西から)

2号炉土層断面(東から)、2号炉完掘状況(南東から)



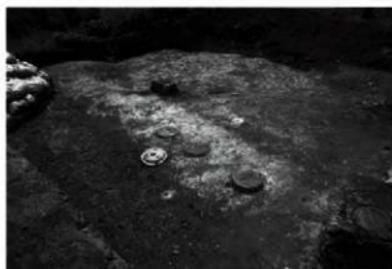
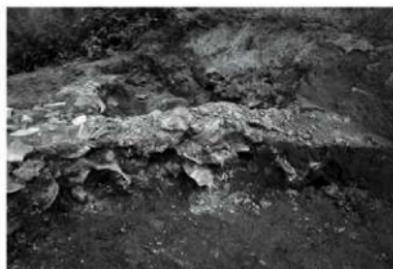
2区 3号炉検出状況(南から)、完掘状況(北から)

南水廠施設西側P3・P5土層断面(東から)



2区 コンクリート基礎1土層断面(南西から・東から)

コンクリート基礎1 検出状況(北から)



2区 SX01 土層断面(西から)、SX01 全景(北西から)

拡張 2 白色粘土列(北西から)



2区 コンクリート水路(南から)、土層(東から)

南水箱施設土層断面中央升(東から)・北升(西から)



2区 南水箴南東升土層(南から)
北升排水樹土層(北から)

南西升埋壘土層断面(南から)、北升埋壘完掘(西から)



2区 南水箴施設近景(南東から)、北升完掘状況(西から)

南水箴施設南側土層断面(西から)



2区 南水箒施設完掘状況(西から)



2区 拡張2コンクリート基礎2(南東から・東から)



拡張1コンクリート基礎検出状況(北から)



2区 SB07 近景(南西から)、SB07とSX04(東から)



SB07 完掘状況(南から)



2区 SB07 地覆石近景・土層断面(南から)



SB07 雨落ち溝土層(南から)、SK47 土層断面(東から)



2区 一次造成窯垣(北西から・南東から)



二次造成窯垣(拡張1)(東から)、窯垣裏込め(西から)



2区 二次造成窯垣(拡張2)(東から・北東から)



2面完掘状況(南から)



2区 北水庵施設南升、北升土層断面(東から)

北水庵施設排水升土層断面(東から)、北升完掘(西から)



2区 北水庵施設下層土層断面(東から)



2区 北水廠施設南升完掘、排水升検出状況(北から)



北水廠施設南升付近完掘状況(南から・南東から)



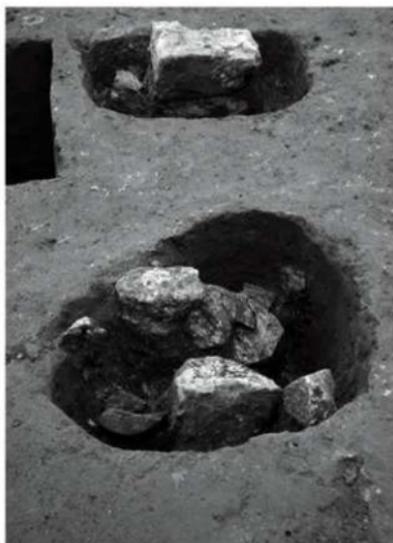
2区 北石垣遺物出土状況(北から)、土層断面(西から)



北石垣近景(東から)



2区 SB08 完掘状況(南から)



SK41・42 検出状況(北から)



2区 SK40 遺物出土状況(北から)



SK40 遺物出土状況(西から)、完掘状況(西から)



2区 拡張1南壁(北から)、拡張2南壁(北東から)

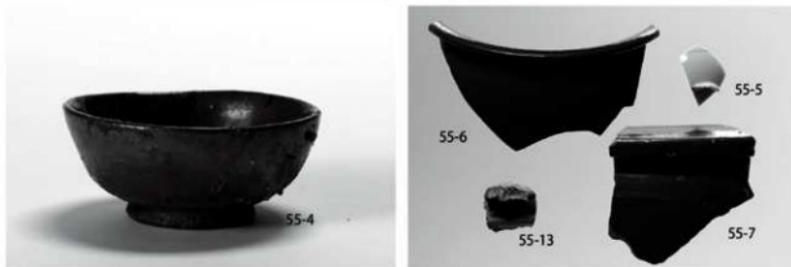
北水蔵施設設作業風景(北西から)



2区 完掘状況近景(南から)



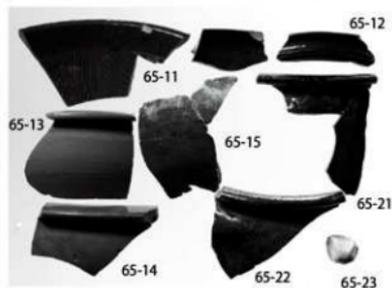
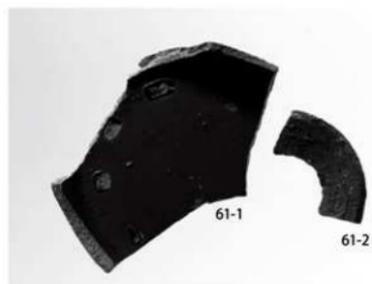
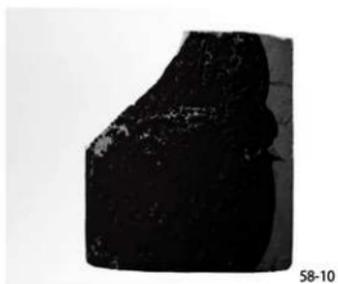
2区 SB04 出土陶器・ガラス瓶



2区 拡張1・2 出土陶器・窯道具



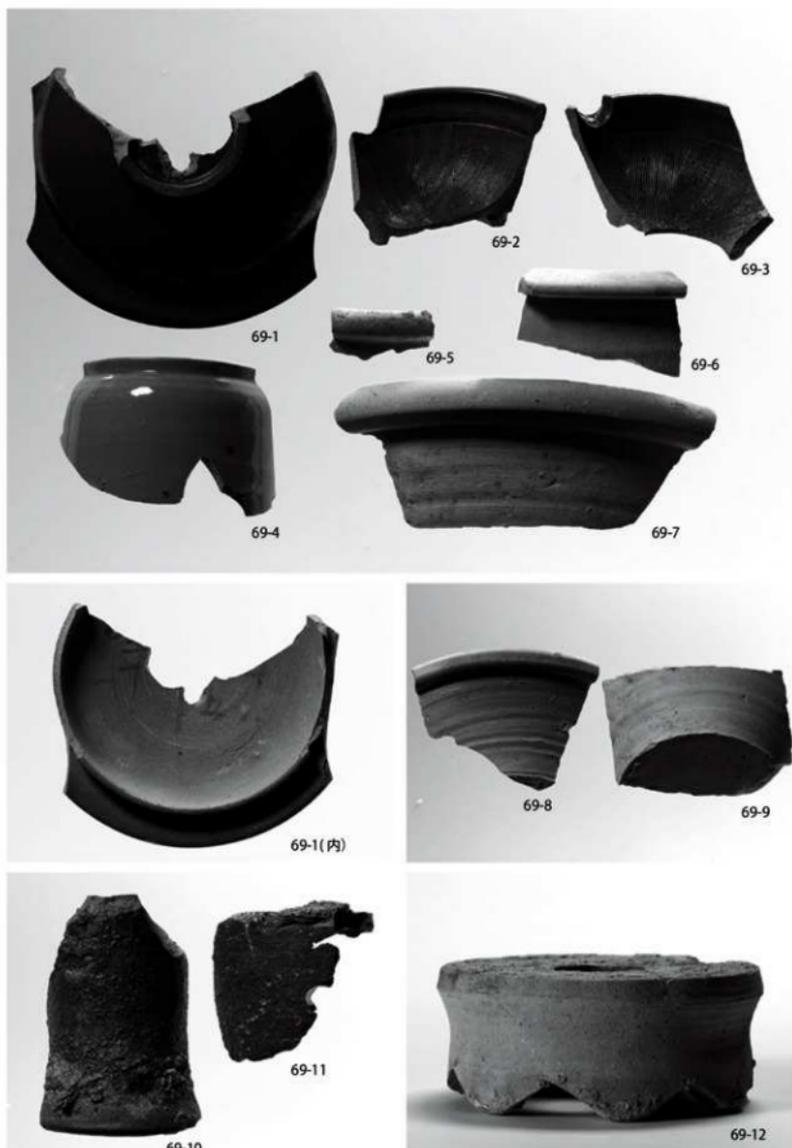
2区 拡張 2 出土盛鉢、白色粘土列出土陶器・盛鉢



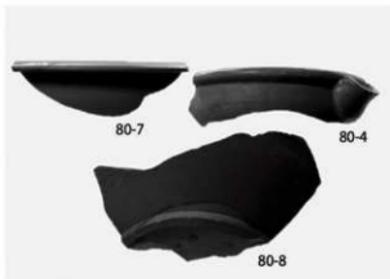
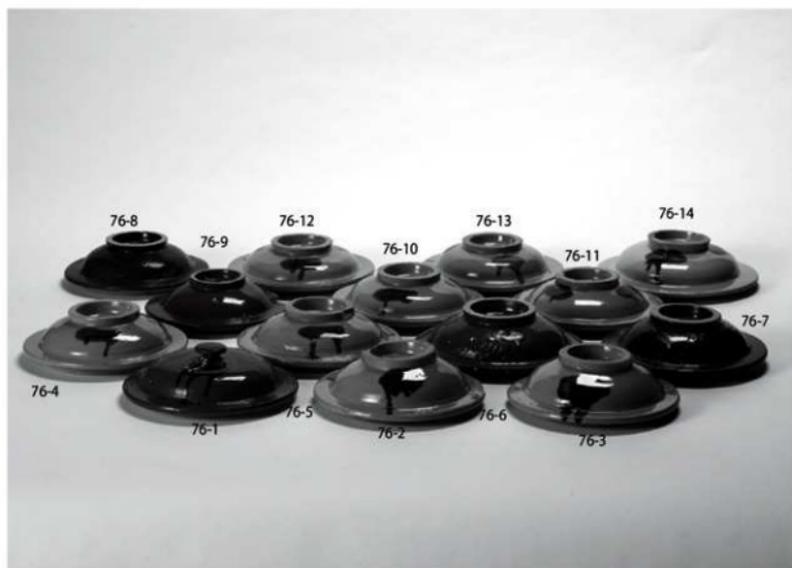
2区 白色粘土列出土瓦、P8 出土陶器・窯道具、コンクリート基礎、SX01 出土陶器



2区 SX01 出土盛鉢・窯道具



2区 コンクリート水路出土陶器・窯道具



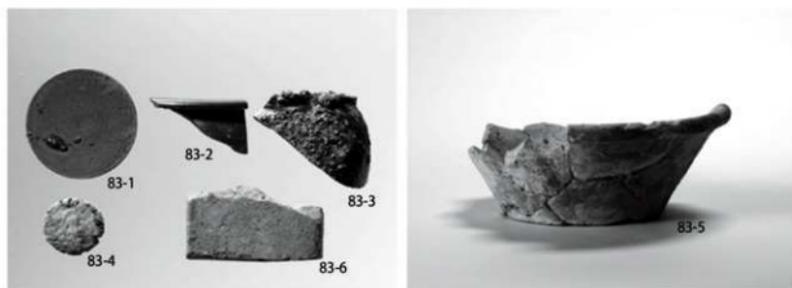
2区 南水箴施設出土陶器・窯道具・石臼、コンクリート水路出土土管、2面下包含層出土陶器(1)



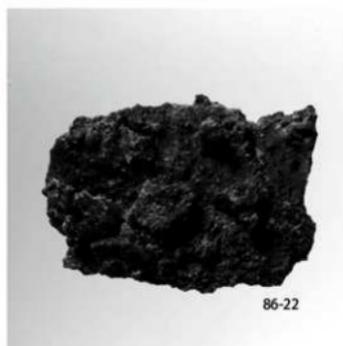
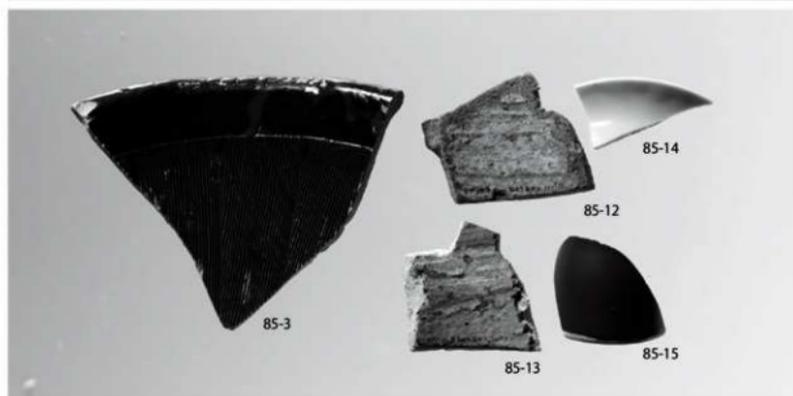
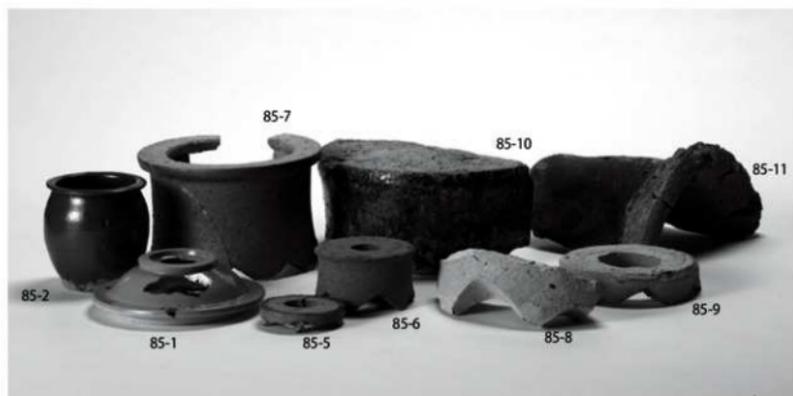
2区 2面下包含層出土陶器(2)



2区 2面下包含層出土窯道具



2区 S807 出土陶器・窯道具・レンガ



2区 二次造成土出土陶器・窯道具、一次造成土出土窯滓



2区 一次造成土出陶器・窯道具(1)・ガラス瓶



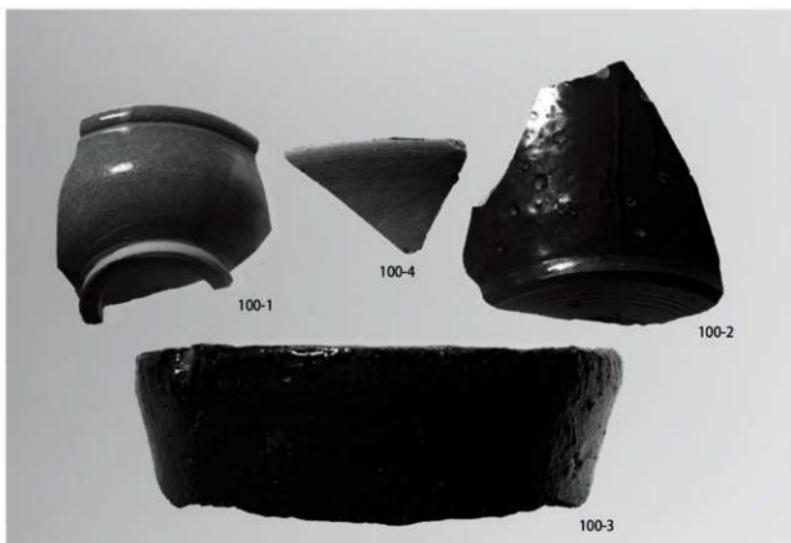
2区 一次造成土出土陶器・窯道具(2)



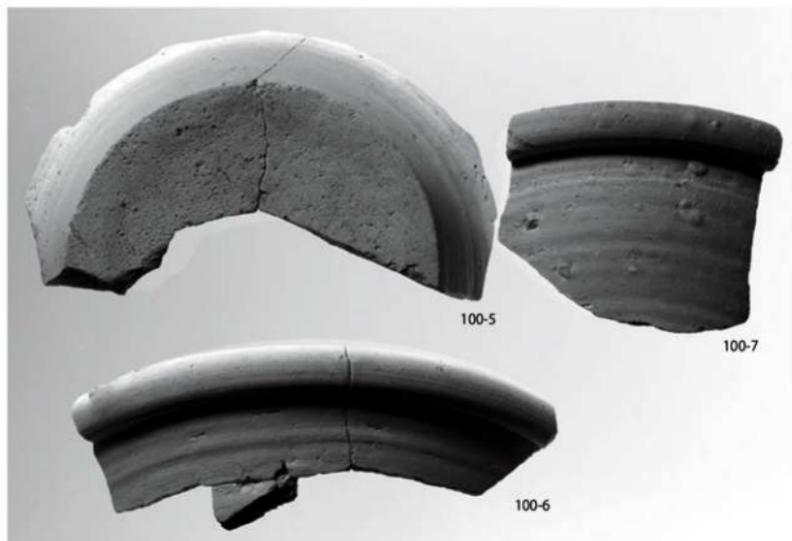
2区 石垣下出土陶器・盛鉢、SK40出土陶器(1)・盛鉢



2区 SK40 出土陶器(2)・窯道具・レンガ



2区 SD13・SK41・42 出土陶器・窯道具(1)



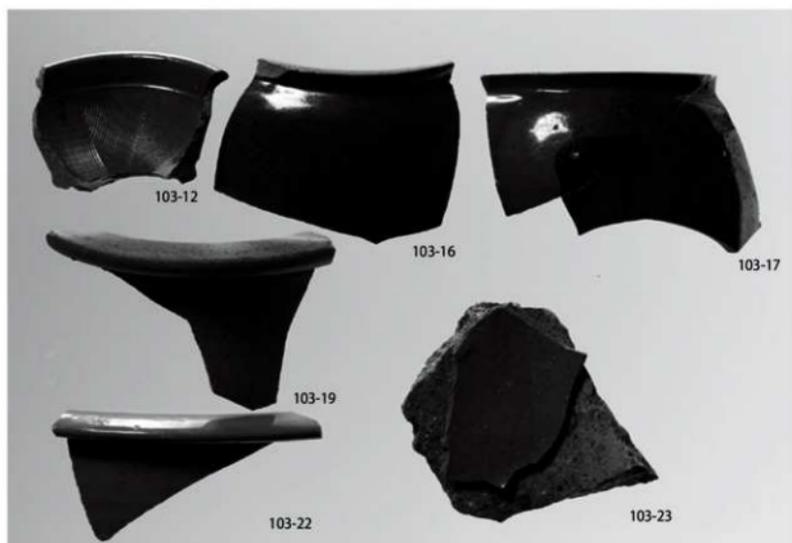
2区 SK42 出土窯道具 (2)



2区 SK41・42 出土レンガ



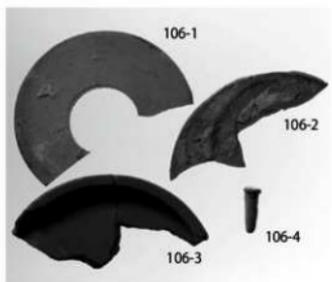
2区 陶器(1)



2区 陶器(2)



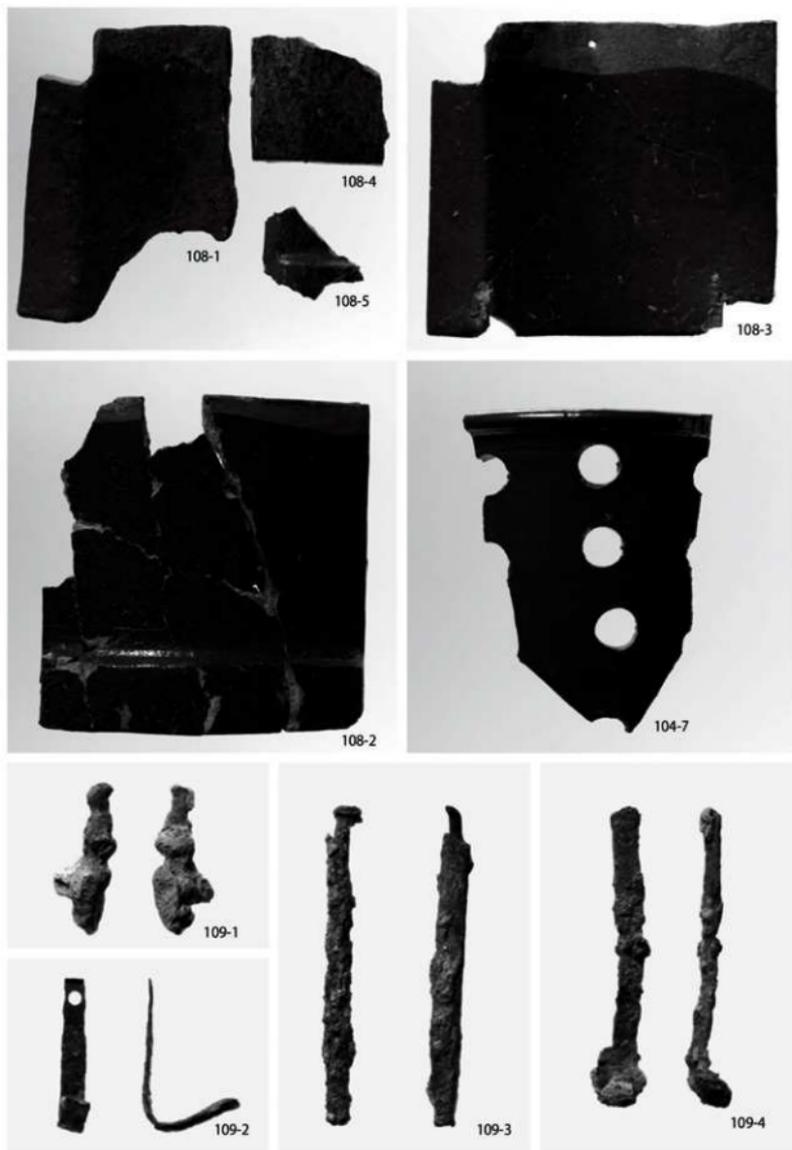
2区 陶器(3)



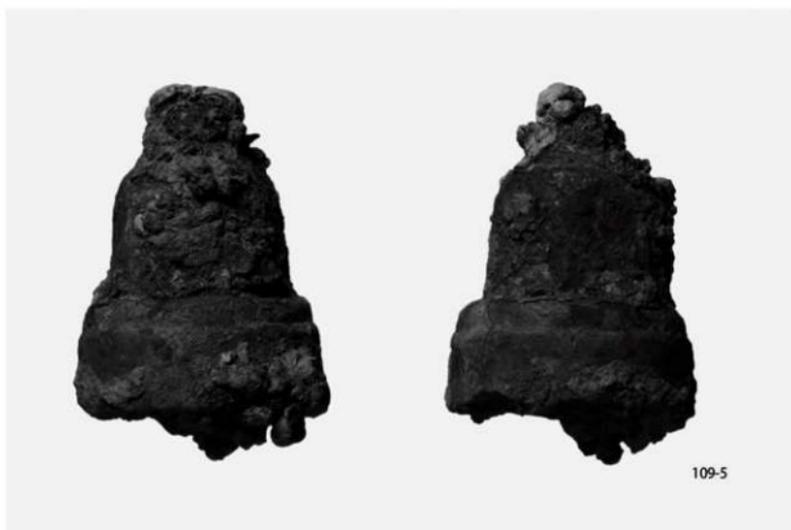
2区 窯道具



2区 大甕



2区 瓦・陶器(4)・金属器



2区 SB04 出土分銅



2区 木製品



3区 調査前景(東から・南東から)



3区 西壁土層堆積状況(東から)



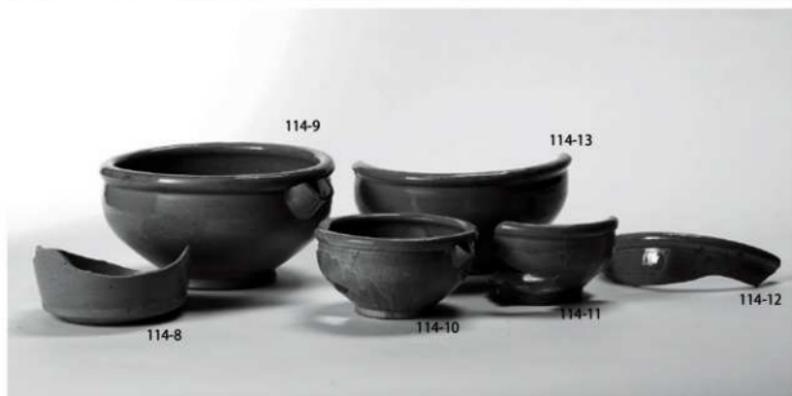
3区 石垣土層断面(西から)



石垣に付着する粘土(南西から)、石垣(北列:南から)

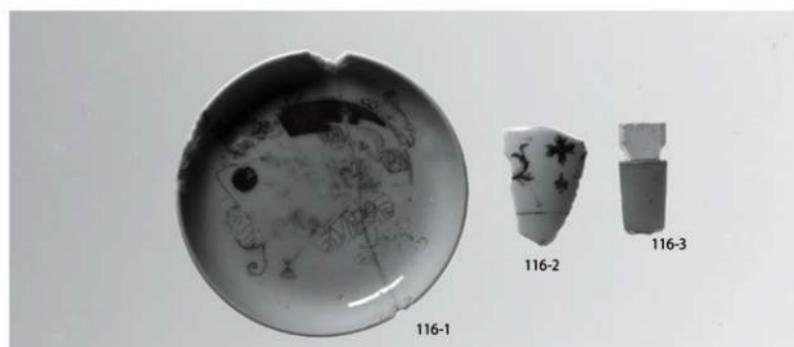


3区 石垣完掘状況(南東から)

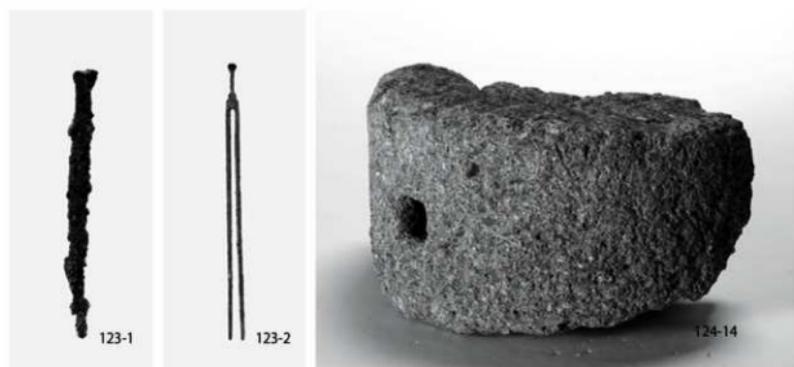




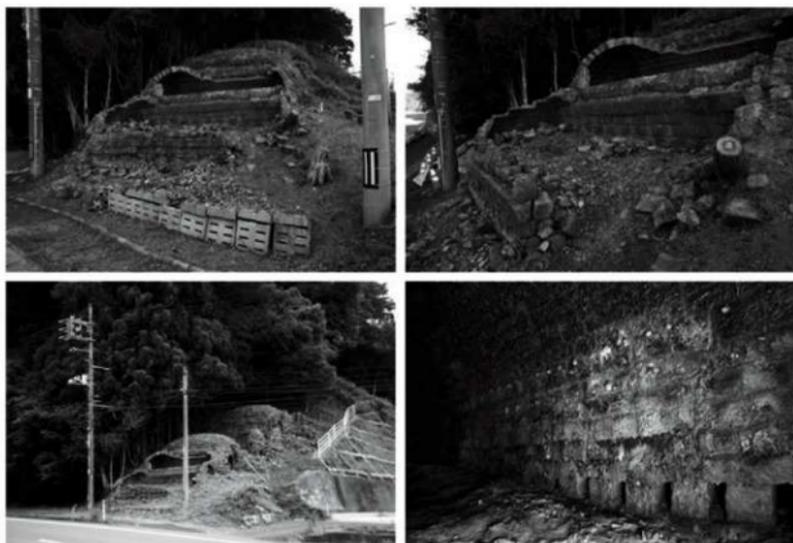
3区 陶器、窯道具、溶着した陶器と焼台、ガラス瓶



3区 磁器、ガラス製品、瓦、不明陶製品



4区 鉄釘、かんざし、石臼



4区 登窯調査前前景(南東から)、近景(南東から) 登窯調査前近景(東から)、焼成室内部(第6室、東から)



4区 登窯完掘状況(南から)



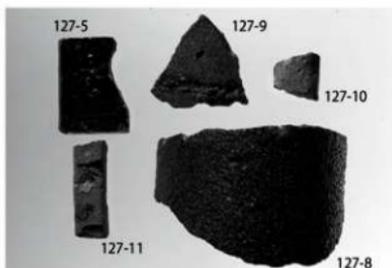
4区 登窯下層土層堆積状況(東から)



4区 完掘状況(南西から)



4区 陶器・窯道具(1)



4区 瓦・窯道具(2)

5区 瓦・窯道具



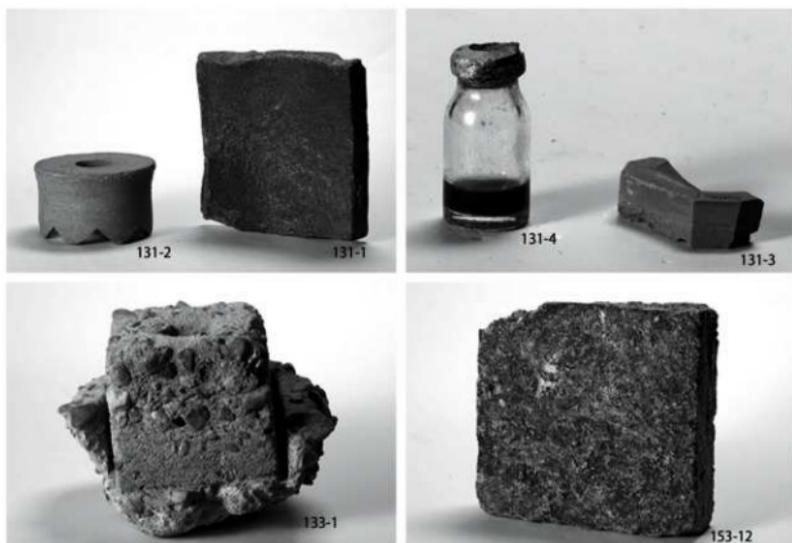
5区 調査前近景(東・西から)・調査を断念した東半部の状況(東から)・土層堆積状況(西から)



5区 最深部の状況・完掘状況(西から)



5区 陶器・窯道具



6区 SB04 出土窯道具・バイアル他、コンクリート基礎、道路下出土火立



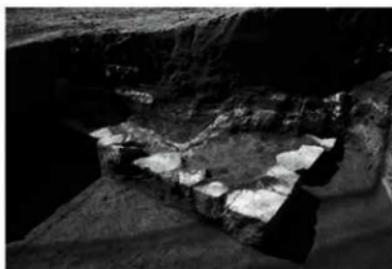
6 区 市道除去状況 (北から)、SB07 検出状況 (北から)

土層堆積状況 (南から)、石垣 7 (東から)



6 区 石垣 6 検出状況 (東から)

SB04 検出状況 (南から、北東から)



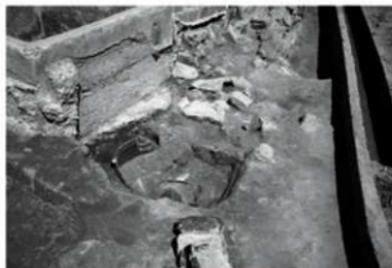
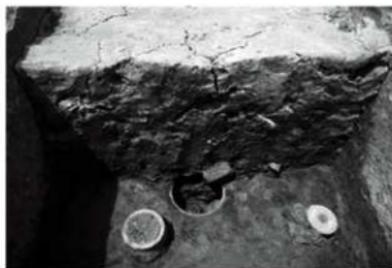
6区 SB04 北施設（北から）、SB07 土層断面（北から） SB07 検出状況（北西から）、SB07 完掘状況（北東から）



6区 コンクリート基礎（東から）、SK50 半掘（北東から） コンクリート基礎（南から）、SK50 完掘状況（北東から）



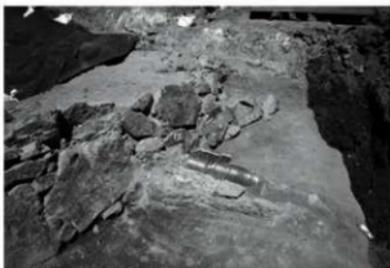
6区 水箒施設断面(東から、左より水箒11・12・13)



6区 水箒13半裁(東から)、水箒13溜餅(北東から) 水箒11半裁状況(東から)、SK52検出状況(南東から)



6区 SK51 半截・完掘状況(東から)



6区 石垣5南側(東から)、土管列半截状況(南東から)



6区最終遺構面(北東から)



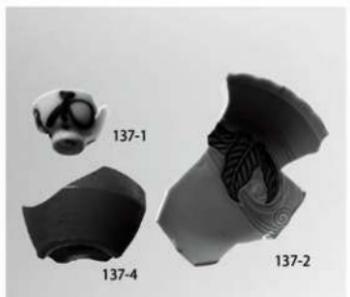
6区 SK51 土層断面(東から)、SK53 半載状況(東から)

SK51 完掘状況(東から)、SK53 完掘状況(東から)

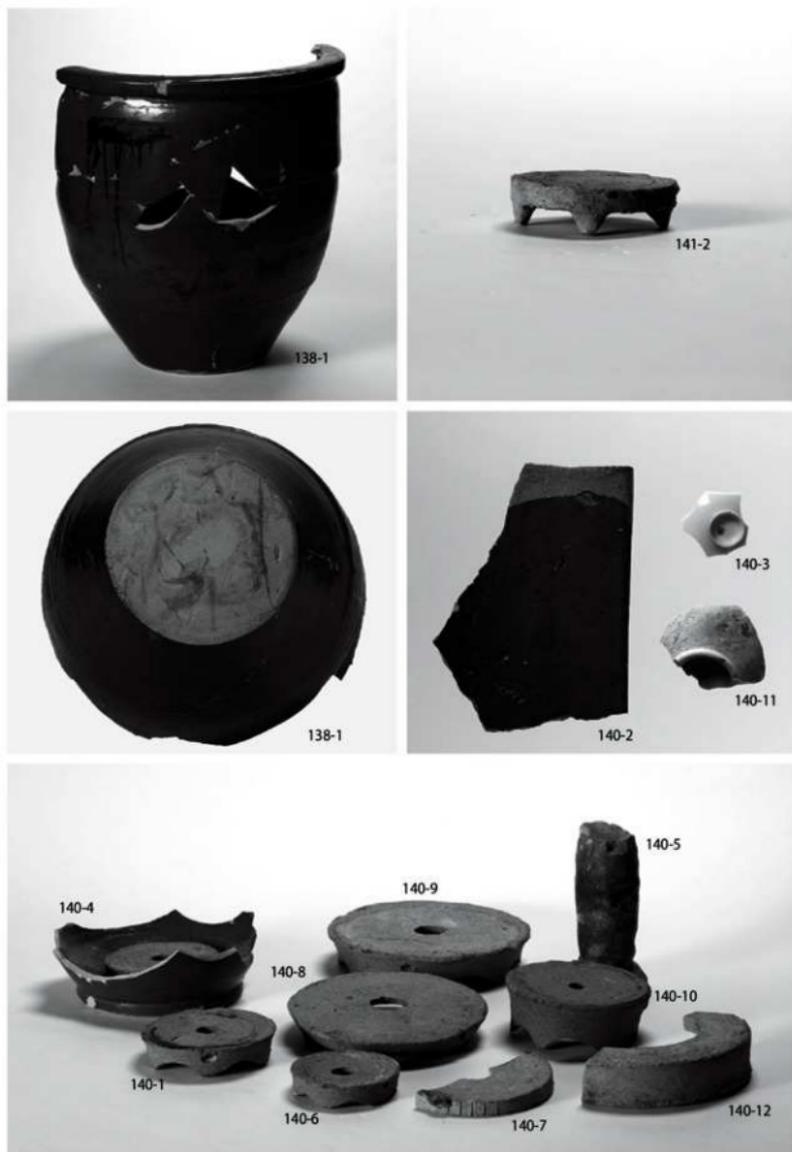


6区 SK53 半載・完掘状況(東から)

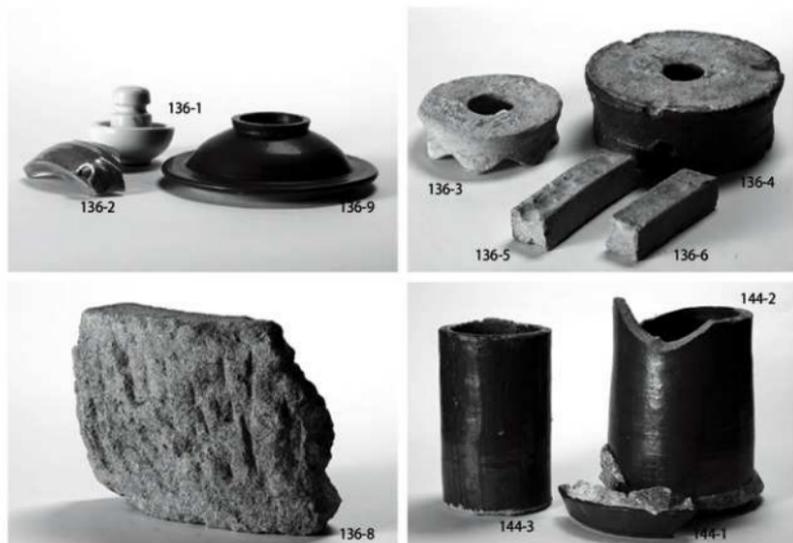
水箆 13 検出状況(東から)、水箆 11 検出状況(北西から)



6区 水塚 11・13 出土磁器・陶器・瓦・窯道具・土管・金属器



6区 SK50～52出土磁器・陶器・瓦・窯道具



6区 水庵11出土埴子・陶器・竈道具・石製品・土管列出土土管



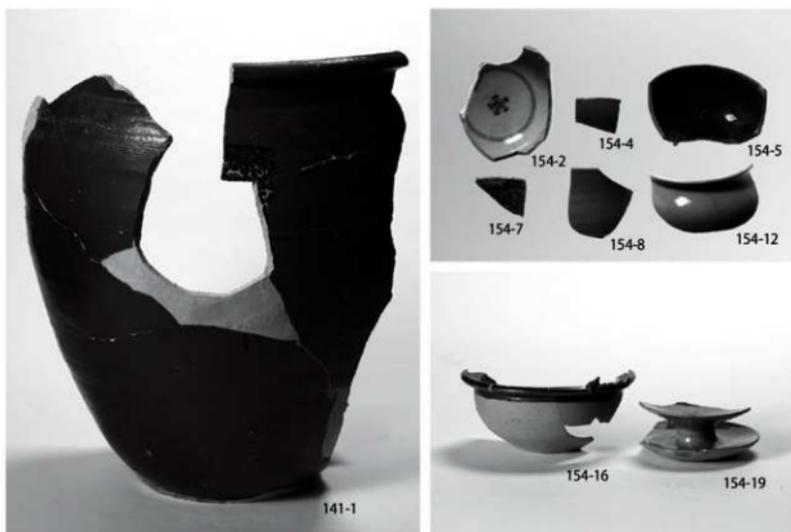
6区 石垣5～7道路及びその下層出土陶器・竈道具



6区 石垣5道路その下層出土瓦類



6区 石垣6・7道路その下層出土陶器



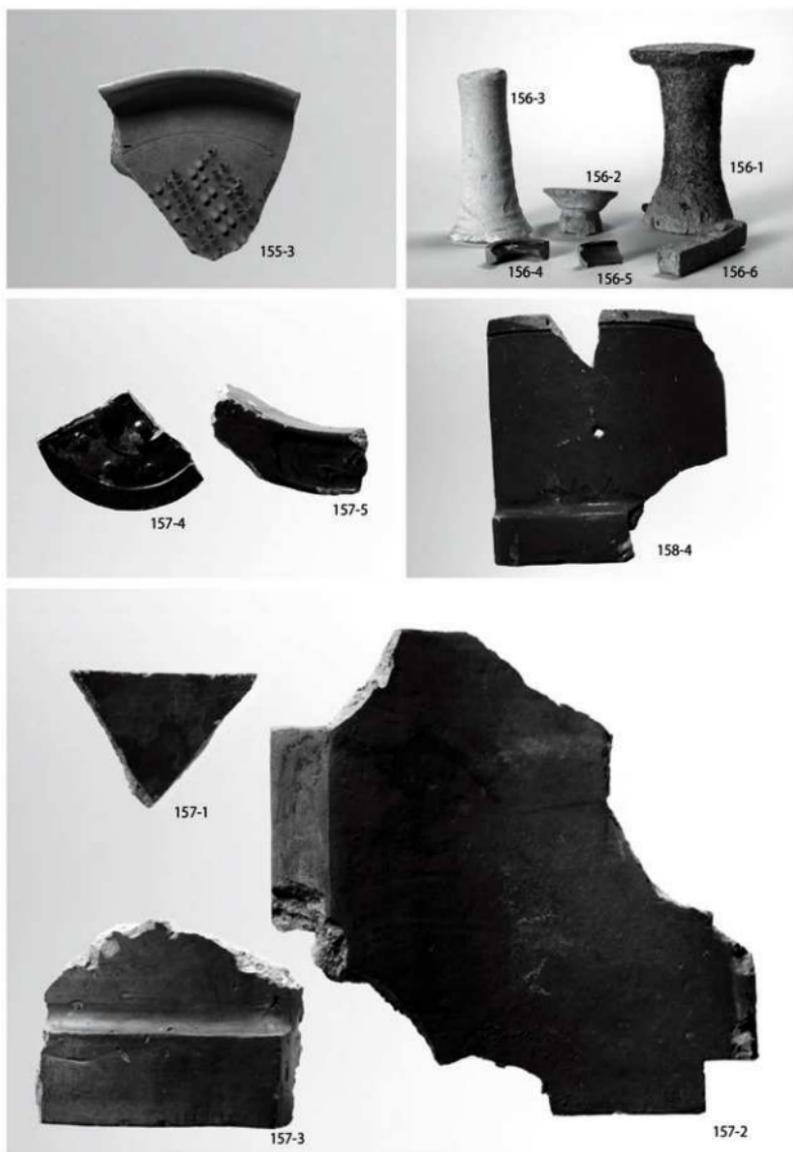
6区 包含層出土陶器(1)



6区 包含層出土陶器(2)



6区 包含層出土陶器(3)・窯道具(1)・瓦(1)



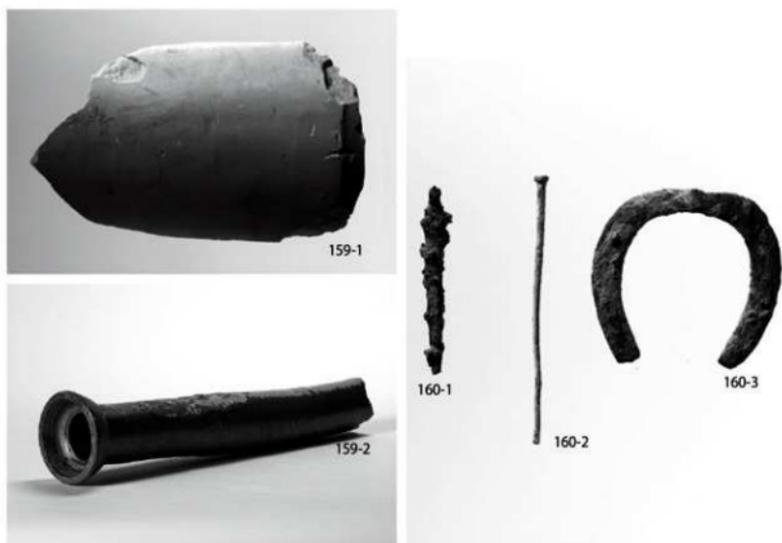
6区 包含層出土陶器(4)・窯道具(2)・瓦(2)



6区 包含層出土瓦(3)



6区 包含層出土溶着瓦



6区 包含層出土土管・金属器



2区 出土大甕



千本崎城跡調査前近景(東から)



T4～T6間セクション土層堆積状況(北西から)



T3～T5 間セクション土層堆積状況 (西から)



T1～T2 間セクション土層堆積状況 (南西から)



SK01 土層堆積状況 (南西から)



SK01 完掘状況面 (南西から)



千本崎城跡調査後近景 (東から)



調査区西側完掘状況 (北東から)



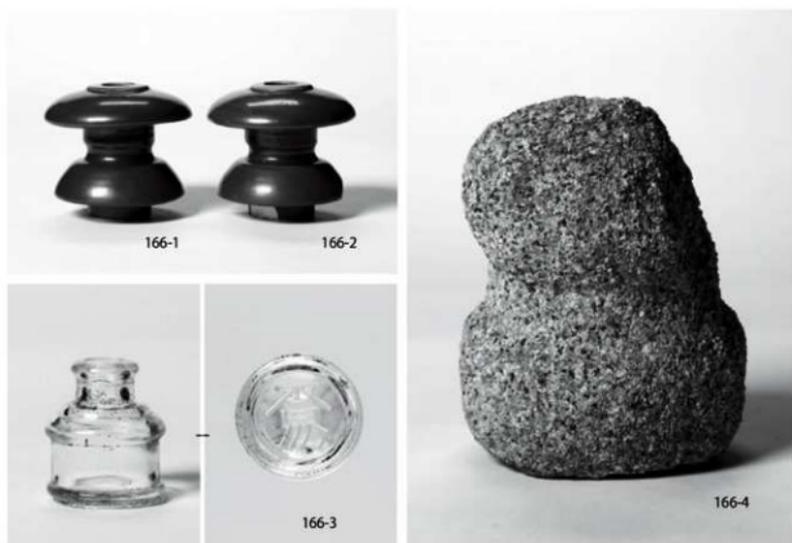
調査区西側完掘状況 (南西から)



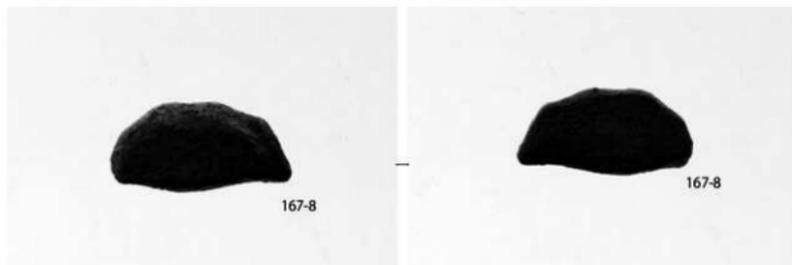
千本崎城跡全景（西から）



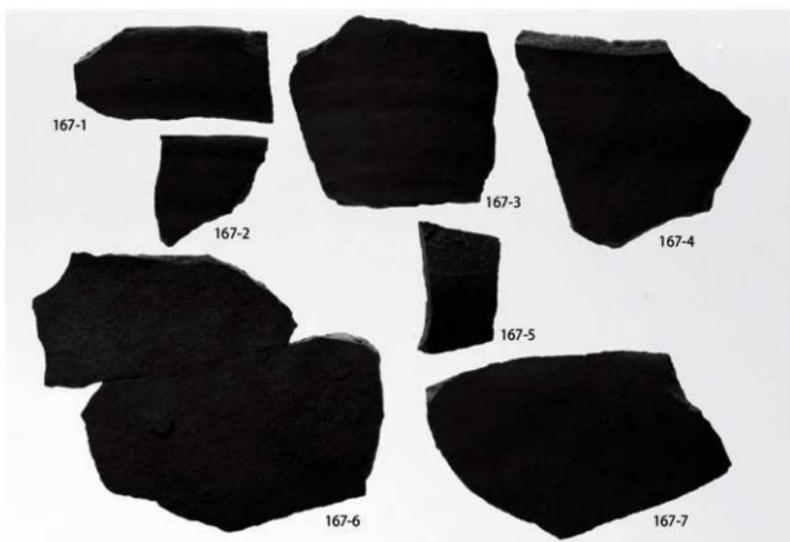
千本崎城跡空撮（北西から：中程下方が調査区。森原遺跡群を見る）



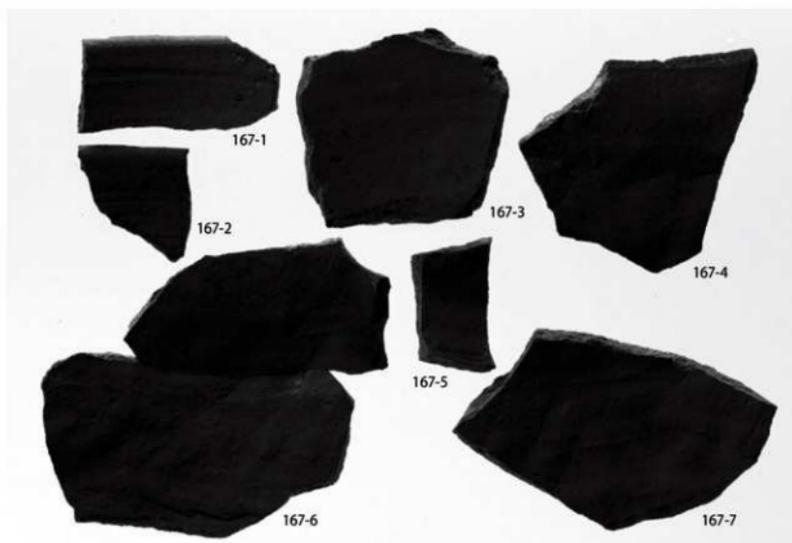
調査区東側出土遺物(碓子・ガラス瓶・石塔)



調査区西側出土遺物(土師器小皿・古銭・古銭X線画像)



調査区西側出土越前焼片口鉢・甕(1)



調査区西側出土越前焼片口鉢・甕(2)

報告書抄録

ふりがな	ほんだかまあと・せんぼんぎきじょうあと							
書名	本田窯跡・千本崎城跡							
副書名								
巻次								
シリーズ名	一級河川江の川直轄河川改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号	7							
編著者名	林 健亮・阿部賢治							
編集機関	島根県教育庁埋蔵文化財調査センター							
所在地	〒690-0131 島根県松江市打出町33番地 TEL：0852-36-8608 FAX：0852-36-8025 E-mail：maibun@pref.shimane.lg.jp https://www.pref.shimane.lg.jp/maizobunkazai/							
発行年月日	令和6年3月							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
ほんだかまあと 本田窯跡	しまねけんどうつしまつかわらやうあむな 島根県江津市松川町太田	32202	D118	35° 01' 16"	132° 25' 11"	20220502 ～ 20221101 20230612 ～ 20230825	1.140	記録保存調査 (河川改修)
	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項		
	生産遺跡	近代	石見焼窯跡・作業場跡		陶器、窯道具、瓦類、石製品、金属製品	石見焼に使用する陶土を得るための水筒施設を複数検出した。		
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
せんぼんぎきじょうあと 千本崎城跡	しまねけんどうつしまつかわらやうあむな 島根県江津市松川町太田	32202	D71	35° 01' 10"	132° 25' 41"	20221001 ～ 20221226	260	記録保存調査 (河川改修)
	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項		
	城館跡	中世	土坑		土器・陶器、石製品、銅銭	中世の古墓があった可能性がある。		
要約	<p>本田窯跡は、江の川右岸に位置する明治20年頃から昭和30年代まで稼働した石見焼窯跡。連房式登窯の1房分と周囲に展開する作業場について発掘調査を実施した。登窯は主に陶器を生産し、昭和30年代の最終作業が瓦だったことが判明している。しかし、瓦を焼成するための焼台が残されていないことから、瓦の生産は短期間だったと思われる。</p> <p>登窯の東側に展開する作業場では4棟以上の建物跡を始め、コンクリート製の水筒施設・水路などを検出した。水筒施設は粘土を水でさらして陶土を精製するための施設で、石見焼窯跡の複雑な水筒施設の全体を発掘調査で明らかにした。また、水筒施設に近接して陶土を脱水するための容器が大量に出土し、作業場の一端を垣間見ることができた。</p> <p>作業場の造成や製品の出荷にも関係する川辺へのアプローチには数条にわたる石垣が設けられたほか、石見焼産に土を充満して積み、石垣の代わりとした窯垣などを検出した。</p> <p>千本崎城跡は南北朝期の山城跡という伝承が残る丘陵だったが、発掘調査では山城跡を示す遺構は確認されなかった。一方、14世紀代の土器・陶器が出土し、南北朝期の墓が存在した可能性が高まっている。近世には幕府領となる江の川右岸の歴史を考えるうえで貴重な資料を提供した。</p>							

本田窯跡・千本崎城跡

一級河川江の川直轄河川改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 7

発行 2024（令和6）年3月

発行者 島根県教育委員会

編集 島根県教育庁埋蔵文化財調査センター

〒690-0131 島根県松江市打出町33番地

電話 0852-36-8608

印刷 有限会社 松本印刷

〒690-2101 島根県松江市八雲町日吉258番地1

電話 0852-54-1208